
俺、ツインテールになります。20
ツインテール大戦
水沢夢
[イラスト]
春日歩
bun150
GAGAGA

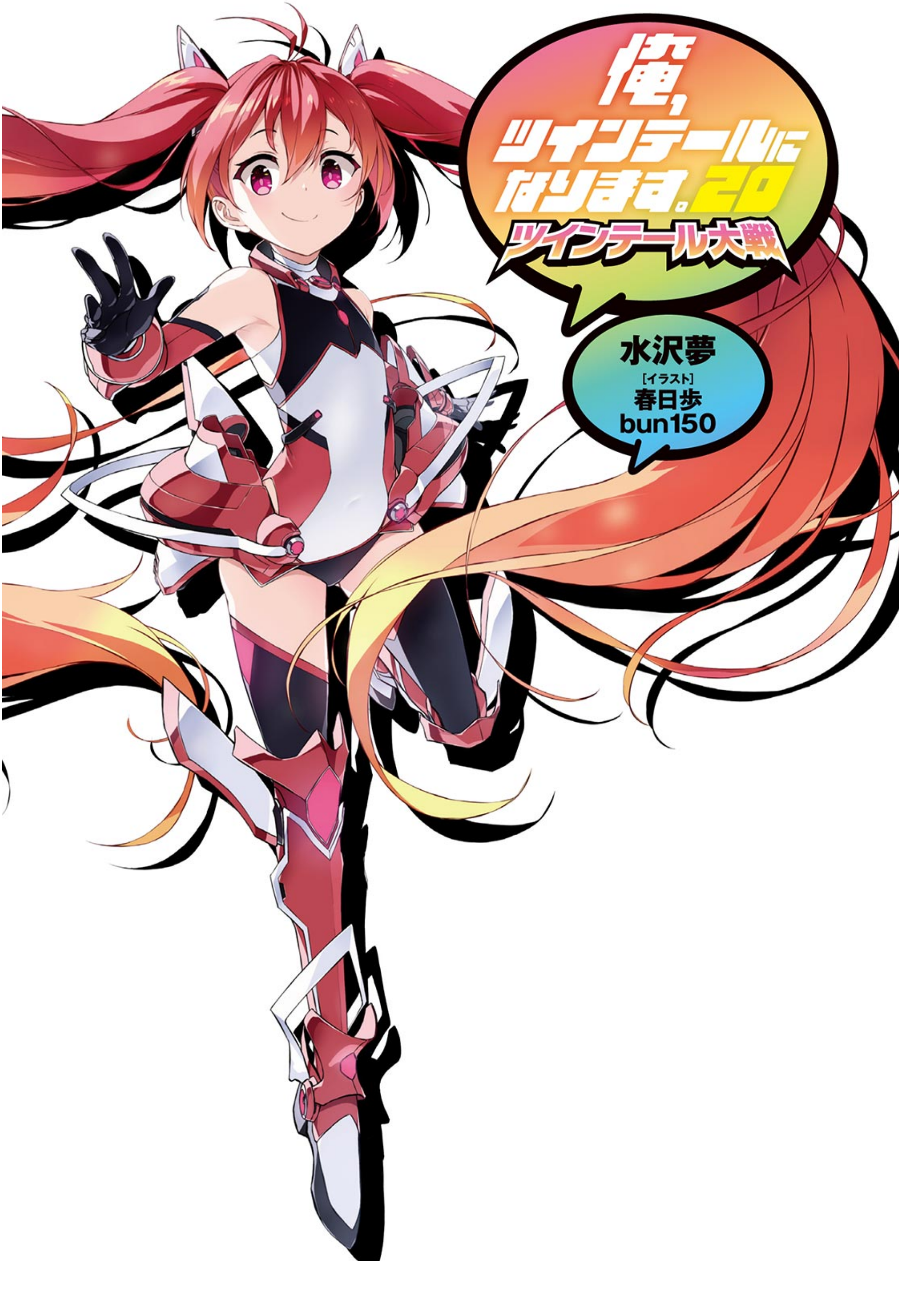
小学館ｅＢｏｏｋｓ

俺、ツインテールになります。20

～ツインテール大戦～

水沢　夢

イラスト　春日　歩・ｂｕｎ１５０


俺、ツインテールになります。20
ツインテール大戦
水沢夢
[イラスト]
春日歩
bun150


観束総二
今年は山とかよくない?
トゥアール
第二回ツインテール部
合宿計画
神堂慧理那
それなら水着にならなくてもいいですからねー
津辺愛香
イースナ





CONTENTS

デザイン／新井隼也＋ベイブリッジ・スタジオ

目次

水沢夢
［イラスト］
春日歩
bun150

俺、ツインテールになります。20



人物紹介

観束総二
主人公。
ツインテールを世界一愛する高校一年生。
テイルレッドに変身しエレメリアンと戦う。

津辺愛香
総二の幼馴染。テイルブルーに変身する。
貧乳を気にしており、
ネタにされると激しく怒る。

トゥアール
異世界からやってきた美少女科学者。
総二たちにテイルギアを託す。
痴女。

神堂慧理那
総二たちの通う高校の生徒会長。
テイルイエローに変身。
ドMで総二をご主人様と慕う。

イースナ
善沙闇子の名で活動するアイドル。
テイルブラックに変身。
普段はストーカーで引きこもり。

桜川 尊
慧理那の専属メイド兼ボディガード。
婚期を焦っており、
必死に婚姻届を配っている。

観束未春
総二の母親で、自宅で喫茶店を経営する。
現役中二病患者で、
常連客に慕われている。

結翼唯乃
フェニックスギルディが
ポニーテールの少女となった姿。
圧倒的な戦闘力を誇る。

プロローグ　その後のツインテールな俺。

　異世界。それは、無数に連なる並行世界。

　俺たちが住む世界は、地球は、宇宙は──無限に升目がある方眼紙の中の一つに過ぎない。

　尺度の極限であったはずの宇宙が一個という単位で消費され、並行して無数に存在する。

　それが異世界という概念だ。

　異なる世界の数だけ人間は存在し、人間が持つ心の輝きも同じ数だけ存在する。

　そして、その人間の心の輝きを糧かてとして生きる、怪人たちも。

　俺の名は、観み束つか総そう二じ。

　ツインテールという髪型が大好きな、ごく普通の男子高校生だ。

　そのツインテール好きが高じて、人間の心を狙ねらい異世界から襲来する怪人・エレメリアンと戦う力を得た俺は、ツインテールの戦士・テイルレッドに変身。

　仲間を集め、激化していく戦いを乗り越え──そしてついに、エレメリアンたちの中枢組織・アルティメギルを壊滅させた。それが、数か月前のことだ。

　けれど、人間の心がある限り……もっと言えば、人間が存在する限り、エレメリアンは生まれ続ける。

　平和が訪れた俺たちの世界にも、エレメリアンは異世界から襲来し続ける。

　俺たちツインテイルズの戦いは──今も続いているのだ。

「モブっぽい人ー！　いませんかーっ！　森に隠さなくても埋もれがちな木の方はいませんかーっ!!」

　繁華街の只ただ中なかに、怪人の野太い声が響いている。

　転送ゲートで現場近くに移動した俺は、トゥアールのオペレートに従い走った。

　俺の存在に気づいた人たちは素早く左右に割れ、その笑顔がどんどん拡ひろがっていく。

「フフフ……ナイスモブ顔。引き続き、胸を張ってモブキャラとして生きてゆくがよい!!」

「ひどい────────────────っ!!」

　平常運転で奇妙なことを口走っているのは、丸々としたフォルムのエレメリアンだった。

　群衆の中から一人の女性を指名し、満足げにしている。

「そこまでだ、エレメリアン!!」

　そんなエレメリアンの前に俺は立ちはだかり、勢いよく指を突きつけた。

「ん……どうした、勇ましい声の少年！　君は……うん、全然モブっぽくないから回れ右して帰ってくれ!!」

　少年。そう──俺は学生服を着たまま……男の姿のままで、現場に駆けつけた。

　駆けつけ早々、エレメリアンに勝手に採点されて退散を促うながされる。

「おお、待っていたぞ、観束君！」

「総そう二じく～～～～～～～～ん♡」

　エレメリアンと相対する俺に、周囲の人たちも声援を送ってくる。テイルレッドに送るものと変わらない、全幅の信頼を寄せた声

援を。

　これが、少しだけ変わった日常の一つ。ほんの数か月前には想像もできなかった光景だ。

　俺は真紅のテイルブレスを可視化させ、胸の前で構える。

「テイルオン!!」

　赤い光が身体からだに張り付き、爆裂する。

　人の心の力が生み出す装そう甲こう・テイルギアが全身を包む。

　そして俺は、ツインテールになる。

　ツインテールの戦士──テイルレッドに。

『タイミングバッチリです総二様、ギャラリーのボルテージも最高潮ですよ！』

　どうしてわざわざ変身前の姿を敵に晒さらすのかというと……今、通信で嬉うれしそうにしているトゥアールの提案したとある作戦の一環だからだ。

　戦いの規模が緩やかになったので、ツインテイルズの活動にも様々な実験を織り交ぜている。そう理解してはいても、やっぱりちょっと恥ずかしい。

「何いいいいいいいいいいいいい!?　テイルレッドの正体が……男だと!?」

　こうしてエレメリアンに大おお仰ぎように驚かれるのも、いまやルーチンワークだ。

　正体を知られることに一喜一憂していた頃ころが、遠い昔のように思える。

「まあ、そういうことだから……お前こそ、おとなしく帰れ!!」

「………………。……………………。……………………」

　丸っこいエレメリアンは、俺をしげしげと観察し、納得したように首しゅ肯こうする。

　首肯と言っても、頭から手足が生えているような見た目だが……。

「フッ、何を悩むことがあろうか！　テイルレッド、お前は確かにとてつもなく可か愛わいい！　だが悲しいかな……それ故ゆえに俺の属性とは決して相あい容いれぬ存在！　戦いは避けられぬものなのだからな!!」

「相容れぬ存在……？」

「俺は端役顔属性モブフエイスのエッグギルディ！　飾らぬ容姿、目立たぬ気配でお馴な染じみのモブを愛する戦士だ!!」

　エッグ……卵!?　どうりで白くて丸いと思ったら、卵のエレメリアンだったのか。

『卵もギリギリ動物の範はん疇ちゆうに入る、ということなんでしょうか……』

　通信を繋つなげているトゥアールが、呆あきれつつも興味深そうに呟つぶやく。

　それにしたって、マジで白い楕だ円えんから棒状の手足が飛び出ただけみたいな、極限までシンプルな見た目だ。

「テイルレッド。お前は映画やアニメを観る時、背景にただいるだけの書き割りに等しき人に目を向けることはないか。そして、心を奪われることはないか!!」

「いや……ツインテールがいないか探したりはするけど……」

「は────っ！　そうかそうですか！　変身前は童顔のイケメン、変身後は天上天下に可か愛わいさを轟とどろかせるツインテールの幼女！　すごいね！　偉いね!!」

　控え目に否定したつもりなのだが、エッグギルディはあっという間に怒りの熱を沸点まで上昇させてしまった。卵が、茹ゆで上がっ

ていく……。

「モブの対極に位置する貴様に、俺の気持ちなどわかるはずがなかった！　俺は引き続き、輝かないモブを探し続ける！　決して主役になれぬ、端役たちをな!!」

「お前の主観で、他人を勝手に端役扱いするな！　全ての人が、その人の人生の主役だ!!」

　わっと歓声が上がり、エッグギルディは狼狽うろたえながら周囲を見渡す。

「くうぅっ……そういうかっこいい台詞せりふがスラスラと出てくるのが、世界の主役なのか!!」

　エッグギルディが合図をするように腕を振ると、黒ずくめの怪人が奴やつの背後から現れ、俺目掛けてにじり寄って来た。

「モケ――――――――――――」

　俺はフォースリヴォンを叩たたき、炎の剣ブレイザーブレイドを握り締める。

　数体の戦闘員アルテイロイドを斬きり倒しながら疾しつ駆くし、エッグギルディの胴体を横一文字に斬りつけた。

　ところがエッグギルディは卵の殻のように脆もろく割れるどころか、ゴム鞠まりのようにたわんで攻撃を受け流した。その勢いのままに、道路やビルの壁を使って縦横無尽に跳ね始める。

　あの弾力じゃ卵というより、卵を落下させても割れないというパフォーマンスを見せるスポンジ製品の方だな。

　エッグギルディはバウンドを繰り返し、空中から自分の好みの人を探そうと試みている。

「プログレスバレッター!!」

　俺は進化装備エヴォルブアームズ・プログレスバレッターを手にし、ツインテールを下結びに結び直す。

　超速形態フォーラーチェインに変化し、バウンドするエッグギル

ディを追撃する。

「ぐううっ……何という気迫……！　アルティメギルとの戦いが終結し、気が緩んでいるから今が狙ねらい目だという情報はガセであったか!!」

　最近この世界に現れるエレメリアンは、よくこういう勘違いをしている。

　アルティメギルとの戦いが終結したから、俺たちが腑ふ抜ぬけているなどと油断しているんだ。

　とんだ誤解だ。泰平の世だからこそより一層、大切なものを守りたい気持ちは強まる。

　テイルレッドの力の源は、ツインテールへの愛だ。

　この世にツインテールがある限り──俺が弱くなることは決してない。

「完全解放ブレイクレリーズ!!」

　高速飛ひ翔しようの軌跡が炎の結界となって、エッグギルディを拘束バインドする。

　勢いを維持したまま上結びのツインテールに結び直した俺は、ブレイザーブレイドツインを両手に装備。

　強攻形態ライザーチェインの背に加積されたバックパックを最終噴射フアイナルブーストし、エッグギルディに突撃した。

　俺たちツインテイルズの戦いは──今も続いている。

　けれど俺は、終わりのない戦いに心くじけることはない。

　夜空に輝く星々のような、遍あまねくツインテールを守るため……俺は戦い続ける!!

　八の字に振り下ろされた二刀の炎えん刃じんが、人の心を狙ねら

う怪人にツインテールの斬ざん痕こんを刻む———!!

「ライジングブレイザ——————————————ッ!!」

俺、ツインテールになります。
ツインテール大戦

第一章　その後のツインテールたち。

　赤に変わった制服のネクタイの色にもすっかり慣れた、清すが々すがしい初夏の朝。

　自宅を出た俺は、愛あい香か、トゥアールと一緒に通学路を歩く。

「昨日きのうはお疲れ様でした、総そう二じ様ぁぁぁぁ～～～～～～～～～～～ん♡♡♡♡♡」

　プルバック式のおもちゃのように一旦後退して助走をつけたトゥアールが、俺に向かってダイブしてきた。

　一方、運動エネルギーを蓄える必要なく巨大な力を引き出せる愛香が、滞空中のトゥアールの顔面を鷲わし掴づかみにして放り投げ返す。

「朝から鬱うつ陶とうしいわねどんだけそこら中にハート撒まき散らせば気が済むのよ!!」

「は!?　女子力つよつよなイマドキＪＫなら、ＳＮＳだけじゃなくて日常会話でもハートマークを出せて当然なんですが!?　喋しゃべった端からセリフが文字化けしそうな原始人はスマホじゃなくて石版をスワイプしていてもらえませんかばんっ!?」

　戦闘力がつよつよなイマドキＪＫの手によって、歩道のアスファルトに顔面から埋まるトゥアール。

　二年生に進級して変わったことも多いが、全く変わらないものの一つが、二人のじゃれ合いだな。

　昨日のエッグギルディとの戦いを労ねぎらわれたのはちょうどいい。俺はかねてからの懸念を口にした。

「なあ、トゥアール。人前で変身する作戦だけど……やっぱりやめた方がいいって。愛香たちはともかく、俺がテイルレッドに変身するところなんて誰だれも見たくないだろ……」

　アルティメギルとの最終決戦では世界中の応援を受けて戦ったとはいえ、人々にテイルレッドの全てを受け容いれてもらったとまでは考えていない。そこはもう少し謙虚にするべきではないだろうか。

　テイルレッドの正体が全人類に知られてしまったのは仕方がないとして、俺が変身するところを引き続きわざわざ見せつけるのはどうかと思う。

「ふむ……総二様はそうお考えですか」

　己が顔面でアスファルトを砕いておきながら、その白磁の肌には傷一つなく。

　涼しい顔で歩みを再開したトゥアールは、どうしたものか、と考えこむ。

「今一度確認しておきますが……私が提案した作戦には、二つの意図があります」

　やがて俺を追い越して後ろ歩きをし始めると、オーバー気味に人差し指を立てた。

「一つは、これまで徹底的に正体が秘ひ匿とくされていたツインテイルズを、この機にある程度オープンにしておくこと。正体が露見した以上、世界にとってより身近な存在になった方が今後の活動がしやすくなるからです」

　トゥアールは続けて中指も立て、より真剣味を帯おびた瞳ひとみで俺を見つめてきた。

「それと出撃するのが総そう二じ様の場合に限って、もう一つ確かめたいことがあるんです。テイルレッドの正体が男だという情報が、野良エレメリアンにどのぐらい周知されているか──ということです。昨日きのうの奴やつは、『正体は』知らない様子でしたが……」

　確かに、エッグギルディが変身した俺を見て驚いていたのは、演技じゃなさそうだったな。

　その一方、テイルレッドが油断してるんじゃないか、ぐらいの噂は聞いているようだった。

「アルティメギルに所属していない野良エレメリアンに、どのぐらいの速度や規模で情報が共有されていくのか……そういったデータが、これからの戦いで有用となります」

「そうだな……」

　喩たとえが適切かは置いておくとして。これからの戦いは、天災とどう付き合っていくか──ということに近いのかもしれない。

　地震や台風は終わりなく訪れる。その上、人間の力で止めることはできないが……予測し、対策を立てることで適切に対処することができる。

　俺たちツインテイルズも、これから未知のエレメリアンの数々にどう立ち向かっていくか、それが課題だ。

　アルティメギルとの戦いの終結後すぐにやって来たメカギルディってエレメリアンも、全身を機械で強化改造したとか大層なことを吹いてはいたが……拍子抜けするほどの弱さだった。

　ちょうど去年の同じ時分、ドラグギルディとの激戦の後で奴のライバルを名乗り現れたタイガギルディが、案外しょぼかったことを思い出したほどだ。

　メカギルディは新たな組織・スーパーアルティメギルの設立を宣言していたが、その実、構成員はたったの三体。

「部員が規定数に足りてなくて廃部寸前の部活動を見ているような侘わびしさを感じますね」とは、トゥアールの談だ。

　案の定、スーパーアルティメギルは僅わずか数日で壊滅し、そこからはややのんびりめの新たな戦いの日々が始まり、今日に至る。

　そもそも、スーパーアルティメギルは一つだけではない。

　様々な異世界にいる野良エレメリアンが、ろくに連携も取らず好き勝手に新組織を旗揚げしているらしく、同じ名前の組織を今日までに三回は潰つぶした記憶がある。

「ある程度情報が共有されているとわかれば、それを逆に利用することもできますからね。ツインテイルズの強さをあえて詳細に伝えることで、野良エレメリアンができるだけこの世界に来なくなるよ

うにできるかもしれません」

「そうそう。野良の獣けもの相手には、人間が怖いって教え込むのが大切なのよ」

　年齢一桁けた台から野生の熊くまを倒していた狩人が言うと、重みが違うな……。愛あい香かは相変わらず、怪人に恐怖を植え付けて侵略を抑止しようとしている。

　うーん。あらためて聞いても、理解はできるんだが……わざわざ変身するところを見せて、あえて人の記憶に残るような行動を取るのは、やっぱり気が引けるな。

　俺も何か他にいいアイディアがないか、考えてみるか。

　そうして通学路を歩いていると、通りすがりの人たちがちらりと視線を送ってくる。

　俺はそれに対して、特に反応することはない。

　そしてこの街に住む人たちも、テイルレッドの正体だとわかった後でも俺を見かけるたび駆け寄ってくるようなことはない。

　例えば道ゆく人の全てが俺に声をかけ、手を振ってきたとしたら、その全てに手を振り返しながら登校するのは大変だ。みんな、あえて反応しないでいてくれているのだ。

　それは俺たちの周りには純粋にいい人が多いのもあるだろうし、首領との決戦において激励をくれた各国の重鎮たちが陰で手を尽くしてくれているのかもしれない。ツインテイルズが、これからもできるだけ普通の学生として過ごせるようにと。

　全てこれまでどおりにはいかないが、今のところ俺たちの日常は平穏を保たれている。

　逆に、これまでどおりにいかなくなったことの一つが……俺の体調だ。

　貧血のように俺の身体からだを襲おそう寒気。それは言い変えれば──不安だ。

「大丈夫ですか総そう二じ様、はい、おっぱいです」

　不調を見抜いたトゥアールが両手で俺の手を包み込み、そのまま自分の胸に押し当てた。

　温かな水の中に沈み込むような感覚に戸惑う間もなく、愛香がトゥアールをバックドロップで大地に沈めた。

　これが、今の俺の懸念。

　アルティメギル首領との戦いでゴールドチェインに最終進化し、あらゆる異世界のツインテールとリンクした俺は、極限の力を手にした。

　しかし、後遺症と言うべきなのか……その戦いが終わって普通のテイルレッドに戻った後も、たまに何かと繋つながっていないと無性に不安になる……誰だれかに触れたいという衝動が起きるようになってしまった。

　まるで結ばれたツインテールが、解ほどかれるのを拒否するかのように。

　それを愛香たちも知っているので、手を繋いだりして落ち着かせようとしてくれる。

　さすがに、胸は恥ずかしいので勘弁して欲しいのだが……。

「何も気にしなくていいのよそーじ。全ての世界を守った代償がこのぐらいで済んで、むしろよかったって思わなきゃ」

　愛あい香かは俺の手を取り、優しく握る。気のせいか、愛香の体温がぐんぐん上昇している。

「ああ、俺もそう思う。ただ、そろそろ愛香たちに迷惑をかけない方法を模索しないと……」

「め、迷惑じゃないし！　……そうだ、あたしもそういえば何か最近手を繋つなぎたいなってよく思ったりするし……多分そーじと同じ症状！　うん、二人で協力し合おうよ!!」

「いえ愛香さんは生来のド淫いん乱らんが隠しきれなくなってきているだけでみゃああああああああああああ繋いだ手を離して永遠

に!!」

　愛香に握手をされ、その万力めいた握力を白魚のような指で受け止めるトゥアール。

　バラードの歌詞めいた詩的な苦く悶もんの声を上げている。おそらく、標準的な歌詞と真逆だが。

「いい加減争うのはやめにしませんか、愛香さん。平和になったこの世界で、平和を取り戻した一員である私たちが争いを続けるのは滑こつ稽けいです」

「好きで争ってんじゃないわよあたしだって!!」

　指をふーふーしながら、視界に入ってきた学校の裏山を指差すトゥアール。

「見てください、平和の象徴トゥアールオーを。鳥たちが止まって優しく囀さえずり、ボディには花が咲き誇っていますよ」

「花が咲いてんのはあんたの頭よとっととあれ撤去しろあああああああああああああああ!!」

「ずおああああああああああああああああああああああああああああ脳に筋肉が満開の女!!」

　愛香のアッパーで、トゥアールが空高く打ち上げられる。そのまま青空に弧を描き、トゥアールオーの眠る学校の裏山の方へと落下していった。

　戦いが終結して平和になっても、二人のじゃれ合いは終わりそうにないな。

　──と、苦笑しながら横を向くと、トゥアールがいた。

　…………………………え!?

　人体の可能性について熟考しながら歩き、校門が近くなった辺りで、慧え理り那なと桜さくら川がわ先生と合流する。

「おはようございますわ、皆さん！　よい朝ですわね!!」

二人の後ろには、慧理那お付きのメイドさんたちの姿も。彼女たちはこれまでどおり、俺に手を振ったり声をかけてきたりする。

今日も、穏やかな一日になりそうだ。

そういえば昨日きのう戦ったエレメリアンに、人一人それぞれが、その人の人生の主役だと言ったのを思い出した。

俺たちは濃密な一年間を過ごし、一つの大きな区切りを迎えた。

けどそれは人生という物語のほんの一ページに過ぎないし、ましてピリオドが打たれたわけでもない。

これからも、たくさんのストーリーが紡つむがれていくんだ──。

ａｆｔｅｒ１　クラスメイトはテイルレッドたん。

　世界中に、俺たちツインテイルズの正体がバレた。

　十二分に認識した上でも、たまに実感が湧わかなくなる一番の原因は……学校にあると思う。

　二年に進級しても、クラスの顔ぶれは変わらない。そして何より──

「はぁぁ……テイルレッドちゃんは可か愛わいいなあ……」

　教室内の光景が──変わらなさ過ぎて怖い。

　俺のクラスメイトたちは、けっこう前からテイルレッドの正体が俺だと気づいていたらしい。

　認識攪乱装置イマジンチヤフによって、周囲の人間はツインテイルズとその正体である俺たちの姿が結びつかないよう、認識を書き換えられる。だが、俺を見る人間が自発的に俺がテイルレッドなのでは──というような疑惑を持ってしまうと、その効力が弱まってしまうのだ。

　俺の近くにずっといたクラスメイトたちだからこそ、本来ならば想像すら及ばないはずのその疑惑に至ってしまったのだろう。

　クラスメイトたちは、今日もゲームのＮＰＣのように変わらずテイルレッドを愛めでている。ある者は、タブレットに表示されたレッドを。ある者はあえて写真に印刷したレッドを。

「よし、決めた！　やっぱり俺が、テイルレッドたんのお兄ちゃんだ!!」

「うへへ、相変わらず剣持ってて可愛い……俺も斬きって欲しいなあ」

　そのテイルレッドちゃんの中身が真横にいるのにそこまでとろけた顔、弛し緩かんしきった声を出せる胆たん力りよく……さすが、アルティメギル首領に啖たん呵かを切った奴やつらだ。

首領との最後の戦いにおいて、敗色濃厚だった俺たちを起たち上がらせたのは、誰だれあろうこのクラスメイトたちのような、力無き普通の人々からの激励だった。

それは本当にツインテールから感謝している。しているのだが……。

一年経たっても、こうして致死性の世迷い言が鼓膜に突っ込んでくる。

別の男子たちは、スマホを見せ合って和わ気き藹あい々あいとしていた。

「『進級テイルレッドたん』ガチャ！　天井まで回して何とかゲットしたぜ……」

「俺、今回は重ねるぜ。まあ、性能は『卒業式参加テイルレッドたん』が人権キャラ過ぎるけど……見た目はこっちの方が好みだ!!」

世間で流行はやっているソシャゲ、『いつでもテイルレッドたん』だ。

何だよ進級テイルレッドたんって、外見のどこで見分けがつくんだ!?

気になって画面をそっと覗のぞき込むと、テイルレッドがランドセルを背負っている。そういえば昔、ランドセルの属性のエレメリアンの攻撃で強引に背負わされたことがあったような、なかったような……。

あと、しれっと話に出ていた卒業式参加テイルレッドの方が、もっと意味不明だった。かなりの低確率だろうそれらを引くのに、けっこうなお金を使ったのではあるまいか。

「あの……余計なお世話かもしれないけど、目の前で俺に課金されても困るっていうか……いたたまれないっていうか……」

俺は自分でも何を言っているんだろうと思いながら、クラスの男子に忠告した。

「お前に課金してんじゃねえ、テイルレッドちゃんに課金してんだよ!!」

　サムズアップをしながら俺に進級テイルレッドたんを見せつけてくる男子。

「そ、そうか……頑張れ……」

　一点の曇りもない清らかな目でそう断じられては、もう何も言えない。

「最近妙にメンテが多いのが困りものだよなあ」

「それだけプレイヤーが増えてるってことだろ？」

　別の男子たちは、ゲームの動作の重さについてぼやいていた。かなり前から相当な人気だと聞いていたが、まだアクティブユーザーが増える余地があるということなのだろうか。

　すっごいおかしなことを考えているのはわかっている。だけど、あえて言いたい。

　本物のテイルレッドがクラスにいるのに、ゲームのテイルレッドに散財する理由って、何だ……!?

　俺本人に散財してくれとかでは全然なくて……どういう心理でそうなるのかと。

「俺の正体を知っている」ことを隠していたのが俺にバレた以上、クラスメイトたちは開き直って何か頼んでくるんじゃないかと思っていたわけだ。

　一人一人記念写真を撮るとか。握手をするとか。

　自意識過剰と思われるかもしれないが、当然そのくらいは望んでくるだろうと覚悟はしていた。そして、快こころよく引き受けるつもりでいた。

　世界中の人全てにするのは無理だが、そこは、同じクラスのよしみってもんだしな。

ところが……何も言われなかった。

ビフォー最終決戦、アフター最終決戦で、俺に対する態度がーいっっっ切さい変わらないのだ。

いや、全然残念とかじゃなくて。むしろ心遣いはありがたいんだけど！

何か……ちょっと怖いんだよ！　誰だれかわかってくれ、俺のこの気持ちを!!

黒板の上にある壁時計に目をやる。ホームルームが始まるまで、あと五分──。

「…………テイルオン」

俺は何を考えたか、教室の最後部に立って変身してしまった。

「そーじ!?」

「総そう二じ様!?」

ぎょっとして、真っ先にこちらを振り向く愛あい香かとトゥアール。

まあ、変身してしまったものは仕方がない。

３Ｄ素材ではない、本物のツインテールが、教室でたなびいてしまうぜ。

「ど、どうもー……」

ぎこちないあいさつ。テイルレッドの幼い声が、教室に木霊こだました瞬間。

クラスメイトが男女関係なく、真剣な表情で振り返った。

「観み束つか……いや、レッドたん……」

「えっ……どうしたの!?　エレメリアンが出たの!?」

　好奇の視線はただの一つもなく。

　戦いに赴くであろう俺の身を案じるその眼まな差ざしに……いたたまれなくなった。

「いや、戦いじゃないんだ。みんなには世話になったし、お礼にテイルレッドの姿で握手でも、と思ったんだけど……迷惑、だったかな……？」

　俺は唐突に我われに返り、しどろもどろに説明しながらすっかり語気を萎しぼませていく。

「ぬおおおおお駄目です総そう二じ様、そのサービス精神は薄い本のかっこうの餌え食じきです!!」

「レッドのそういう本とかが出ないように、世界中で取り決めがあるんじゃなかった……？」

　高名な絵画のような顔で叫んでいるトゥアールと、愛香を除いて、クラスメイトたちの表情に変化はない。

　いや……むしろ俺の思惑を知ってほっとしたように、口くち許もとをほころばせていった。

「気持ちだけ受け取っておくわ……テイルレッドたん!!」

「ああ！　正体が観束だって世間に知れわたっても、レッドたんが不可侵の神聖な存在であることに変わりはないからな!!」

「そうだそうだ！　もしどうしてもテイルレッドちゃんに触れたくなったら、ぐっと堪こらえて観束を触るぜ!!」

「えへへ……観束君の飲みさしのペットボトル、こっそり持って帰っちゃった！　ごめん愛香!!」

「何だそのくらい、俺なんて最近はソシャゲしてる時申し訳なさそうにこっちを見てくる観束の顔を見る方がむしろ楽しみだぜ!!」

　どっと笑いが溢あふれ、教室が温かな空気に包まれる。

　その笑みを自らの口許にも移し、何度も頷うなずく。

俺は、こんなにいい奴やつらをクラスメイトに持って幸せだ――。

……。

…………。

………………本当にいい奴らか……!?

ａｆｔｅｒ２　放課後ツインテール。

「はー……そーじといちゃいちゃしたい……」

　愛あい香かがうっかり口にした甘ったるい猫ねこ撫なで声に、廊下を一緒に歩いていたトゥアールは白目になる。

　最近の愛香はテイルブルーの正体が世間に知られたことで多少吹っ切れ、総そう二じが一緒ではない時はこういうことをわざと人に聞こえるように言ったりしていた。

　今のように、放課後、部活動に向かう生徒などで賑わっている廊下では特にその傾向が強い。

「いちゃいちゃってのは両思いだからこそ冠していい言葉でしょう……」

　トゥアールのツッコミに元気がない。彼女の目下の悩みは、その吹っ切れた妄もう言げんをまめに聞かされることだ。

　そんな愛香の元に、遠えん慮りよがちに駆け寄ってくる女生徒がいた。

　制服の青いリボン……一年生だ。やや上結びのツインテールを見て、愛香は多少警戒する。

　基本的にツインテールの女の子は全て、自分のライバルになる可能性が高いからだ。

　しかし、その女生徒は目を潤うるませながら、嬉うれしそうに胸の前で手を組んだ。

「あ、あの……津つ辺べ先輩って、観み束つか先輩とお付き合いしてるんですか？」

「えっ……やっぱりそう見える？」

「はい！　お似合いだと思います！　応援してますから!!」

　きゃっ言っちゃった、とばかりに頰ほおを両手で押さえ、走り

去っていく女生徒。

　呆あつ気けに取られる愛香とトゥアールだが、次第に愛香は口くち端はをにじり上げていく。

「や━━━━━━━まいったわね━━━━━━━━━━━━━っ!!」

「今日は張りますね声！　横おう隔かく膜まくも常人の三〇〇倍は筋力ありそうですもんね愛香さん!!」

　愛香は少女漫画の登場人物のようなきらきらした目でトゥアールを振り返り、肩にそっと優しく手を置いた。

「あたしとそーじが結婚しても、あんたはずっと友達よ、トゥアール」

「神がいたずらにその辺のゴリラに知恵の実を与えたがために、こんな自意識のモンスターが誕生してしまった……!!」

　力が無いことが口惜しい。トゥアールは爪つめが食い込み血が滴したたるほど拳こぶしを握り締める。

　この愛香モンスターを滅ぼすことができるなら、悪魔にでも魂たましいを売るというのに……。

　しかし浮かれ笑いしすぎていい感じに腹筋を鍛きたえている愛香が、不意に大きく目を見開いた。

　廊下の先で、総二と━慧え理り那なが、連れだって歩いているのを見つけたからだ。

　トゥアールを伴い、慌あわてて後を尾つける愛香。忙しいアフタースクールだ。

　総二と慧理那は、楽しそうに談笑している。そして、そんな二人を周囲の生徒たちが微ほほ笑えましく見守っているではないか。

　テイルブルーがツインテイルズ最恐と名高ければ、テイルイエローはツインテイルズ一のドM。悪しき称号ではひけを取らない。

　だが正体が世間に広く知れ渡った後も、慧え理り那なの歩みに気後れはいささかもなく。これまでどおりピンと背せ筋すじを伸ば

し、優雅にツインテールを揺らして歩いている。

「ご覧になって、会長と観み束つか君が並んで歩いていますわ！」

「なんて仲なか睦むつまじい……お似合いですわ」

「美しいですわ」（野太い声）

　しかも、それを見守る生徒たちが慧理那の聖なる波動にあてられて口調が移ってしまっていた。男女関係ないところに、慧理那の影響力が窺うかがえる。

「何でそーじと会長の公認カップル扱いが加速してんのよ……！」

　愛あい香かは離れた場所からそれを恨めしげに見ていた。

　去年の体育祭における学園理事長・神しん堂どう慧え夢むの策略により、全校生徒の多くは総そう二じと慧理那を親公認カップルと認識しており、陰ながら応援する者もいた。

　その扱いが今、さらに強固なものとなり始めているのだ。

「ああっ……神堂先輩と観束先輩、お似合いですっ……！」

　さっき愛香に話しかけた夢見る女の子が、今度は慧理那と総二を見てときめいている。ただ『お似合いと思う人たちを祝福する私』に酔っている可能性が大だった。

　彼女の激励を真に受けて喜んでいた愛香は、目め眩まいに襲おそわれる。

「そーじ、あんなに楽しそうにして……何なのよその空気、普段あたしと歩いてる時そんなんじゃないでしょ!?」

「おじさんも交ぜてよって言いながら間に挟まってくればいいじゃないですか」

「誰だれがおじさんよ!!」

　先ほどとは打って変わって地じ団だん駄だを踏む愛香を見て、トゥアールも多少溜りゅう飲いんを下げる。

　自意識のモンスターは、聖女によって討伐されたのだと。

だが──この状況はひとえに、慧理那の地道な努力の賜たまものでもある。彼女もまた、ちょっとずつ総二との仲を進展させるべく頑張っていた。

近頃ごろの慧理那は、尊みことの手を借りるなどして愛香やトゥアールを足止めし、こうやって総二と二人で校舎内を歩く時間を意図的に作り出すようにしていた。

公認カップルという「誤解」をむしろ積極的に喧けん伝でんしているといっていい。

全校生徒は……ひいては世界中の人たちは慧理那の人となりを知れば知るほど、ギャップにやられているフシがある。

「あの」テイルイエローの正体が、こんなにも清楚なお嬢様なのかと。

突き抜けたドＭっぷりは本当は苦手な戦いをするために自分を鼓こ舞ぶしている結果で、本人は良識ある心優しい少女なのだろうと──。

そんな期待の視線に応こたえるように優雅に振る舞う慧え理り那なだが、実のところ今も顔が紅潮し息が荒くなるのを懸命に押さえ込んでいるだけだ。心拍数は危うい感じに上昇している。

「この前わたくしが戦ったエレメリアンですが、膝ひざの裏が好きだという不思議な属性で……」

「何で表じゃなくて裏なんだろうな」

ロマンスの欠片かけらもない戦いの話題を振って擬装しているが、慧理那は、隣を歩く総そう二じが自分のツインテールに釘くぎ付づけなのを察している。

何な故ぜなら自分は、神しん堂どう家の奥義であるツインテール催眠を応用し、彼に魅惑的に映るよう動きを調整してツインテールを揺らして歩いているからだ。

「はぁ、はぁ、は……んんっ」

　息が荒くなりかけ、咳せき払いをして誤ご魔ま化かす慧理那。

　総二が自分のツインテールを凝視しているのを感じると、まるで身体からだの全てを視みられているような錯さつ覚かくに陥おちいる。

　慧理那は、その倒錯した感覚の虜とりことなっていた。

　一緒に歩いていて、信頼の眼まな差ざしを寄せてくれている総二。しかし自分が他の生徒たちに見せつけるように歩くことに悦よろこびを感じていると知ったら、彼はどんな顔をするのだろう。

　純真な慧理那は、罪悪感を覚えていた。そしてそれがまた、彼女を昂たかぶらせる。

　そこそこヤバい領域に突入し始めているのだが、基本的に総二の周りの女子はみんなヤバいので、結局は問題ない。

「――見事。貴女あなたに伝えることが日ごとに少なくなっていくこと……母は嬉うれしくもあり、寂しくもあり……」

　廊下の柱の陰に隠れ、娘の成長を頼もしく見守るのは、学園理事長の慧え夢む。そして彼女のそばには尊みことも控えている。

　本来お墨付きをもらってはいけない人に、慧理那は着実に認められていた。

「尊。これからはあなたにも、神堂家のツインテールの奥義を授けていこうと思います」

「しかし……私はツインテールに目覚めて日の浅い未熟者、お嬢様のようには……」

「永き神堂家のツインテールの歴史の中には、もちろん結婚運を上げるツインテール技もありますわ」

「慎つつしんでお受け致します、奥様」

　尊もさらにツインテールに磨きをかけ、慧理那と切せつ磋さ琢たく磨まして欲しい。それが、二人の母である慧夢の願いだった。

「後はやはり、わたくしが直接あなたたち三人を指南しなければな

りませんわ……尊も頑張るのですよ」

「は、はあ……」

　責任感の強い母が娘と将来の婿むこに意地でも何かを指南したがっていることを、慧え理り那なは知らない。尊みことも、基本何をするのかよくわかっていない。

　総そう二じと慧理那が微ほほ笑えましく並んで歩き、それを愛あい香かとトゥアールが見張り、それを慧え夢むと尊が見守り──そのさらに後ろ、総二監視網堂々の最後尾には、イースナがストーカーの先輩として君臨していた。

「み、みんな……気配の消し方が、下手……ばればれ……。でも、楽しい……」

　陽よう月げつ学園の制服を着こなし、引きつった笑いを浮かべながら全てを見通すイースナ。

　しかし、そんな彼女ですら、自分をさらに見守る存在に気づいていなかった。

　校舎内の廊下を一望できる窓の外でメガ・ネプチューン＝Ｍｋ．IIがホバリングし、授業参観をするようにイースナを見守っている。

「イースナちゃん、楽しそうでよかったなあ～」

　総二たちは誰だれも知らない。

　鋼鉄のおかんこそが、放課後ツインテール繋つなぎの頂点覇者であるということを──。

ａｆｔｅｒ３　その後の女子会議。

　エレメリアンの出現もなく、平和に終わったとある日の放課後。

　ツインテール部部室では、久々の女子会議が開催されていた。

　メンバーは、愛香、トゥアール、慧理那、制服姿のイースナ、尊にメガ・ネ。

　これは総二を除いたツインテイルズの女子メンバーで集まり、総二本人の前では話せない恋バナなどを語り合う場だ。

　もっと明け透けに言うと、「で、最近総二とどうよ？」という話題を共有して牽けん制せい……もとい親睦を深めるための場である。

　ただし、総二を一人フリーにすることは、別のリスクを伴う。

　まず総二に寂しい思いをさせてしまうし、何より総二が一人で出歩いていると次から次に女性が声をかけてくるからだ。

　そのためこの会議は頻ひん繁ぱんには開かれず、一回一回を無駄にしないよう、濃密な内容となる。進行も巻きめだ。

「早速ですが、今日の議題は――これです‼」

　存分に胸を揺らして、手の平に握り締めたトゥアルフォンを突き出すトゥアール議長。

　日常の一コマ一コマで愛あい香かを煽あおることを大切にしているトゥアールらしい、真心溢あふれるアクションだった。

　代償として、愛香の殺意がこんこんと溢れてゆく。

「あっ、ツインテイルズ公式アカウントですわね」

　トゥアルフォンの画面に表示されているのがＳＮＳのツインテイルズ公式アカウントだとわかり、にっこり微ほほ笑えむ慧え理り那な。

「そう！　アルティメギルとの戦いが終結した記念に、私が軽い気持ちで開設したこのアカウント。当初はなりすましを疑われてニュースにまで取り上げられ、最終的にレッドちゃん本人の声明動画を投稿することで何とか世界の信用を得たのは記憶に新しいですね……」

　トゥアールはより見やすいように、トゥアルフォンの画面をホワイトボードのスクリーン機能に同期。プロフィール欄が拡大表示される。

「も、もう、フォロワー数が……世界一になって、しまっています……。善いい沙すな闇あん子こが、抜かれました……」

「しゃあないやん、その善沙闇子ちゃんも呟つぶやく時があるお得なアカウントなんやから、そりゃそうなるて」

　椅い子すの上で体育座りをし、少し悔くやしそうにしているイースナをさりげなくフォローするメガ・ネ。

　世界有数のフォロワーを誇るアイドル・善沙闇子がメンバーに入っているのは効果抜群で、まさに「お得」なアカウントなのだ。

「わたくしも使わせていただいていますが、購入した特撮おもちゃの写真を投稿するぐらいで、ツインテイルズのアカウントとしてはどうなのでしょうと……」

「謙虚ですね慧理那さんは……普通はおもちゃは添え物で、自分の顔を大写しに撮って投稿するものなのに……」

「そうなのですか？　ですがわたくしはやはり、おもちゃを大きく見せたいので……」

　慧理那は謙けん遜そんしているが、ツインテイルズの一員がただ何かを買うだけで、強力なインフルエンサーとなってしまう。慧理那の与あずかり知しらぬところで、彼女の紹介したおもちゃは飛ぶように売れていた。

「この公式アカウント。今のところ心無いコメントなどもなく、穏やかに運用できている……と思っていたのですが、ここに来て問題が発生しました」

　トゥアールの発言に、怪け訝げんな表情を浮かべる一同。

「――最近の愛香さんの投稿が、目に余ります。このままでは炎上を招きかねません」

「はぁ!?　あたし!?」

　まさか自分がやり玉に挙げられるとは予想もしていなかったのだろう。会議が始まってからこっち、気け怠だるそうに頬ほお杖づえをついていた愛あい香かは、ぎょっとして身を跳ねさせる。

　トゥアールはホワイトボードに映った画面をスクロールし、最新の投稿を拡大表示した。

　写真付きの投稿で、最後に（愛香）と書いてある。

　このアカウントは複数人で運用しているため、誰だれが投稿したかわかるように本文の最後に名前を書く取り決めだ。

「では早速、この愛香さんの投稿を検証してみましょう」

「別にいいわよ検証なんてしなくて!!」

　投稿に添付されているのは、総そう二じの部屋にいる愛香と総二の写真だ。


戦いで忙しくて勉強が遅れ気味だったか
ら二人でしっかり遅れを取り戻していか
なくっちゃ！（愛香）
8:15

愛香が腕を伸ばしているのは、自撮りをしているからだろう。その文面は――

▼　今日は幼馴染おさななじみのそーじの部屋で、小テストに備えて一緒に勉強！

　　　アルティメギルの戦いで忙しくて勉強が遅れ気味だったから

　　　二人でしっかり遅れを取り戻していかなくっちゃ！　（愛香）

愛香の声真ま似ねをしながら投稿を読み上げるトゥアール。けっこう似ているのが余計にイラッとするのか、愛香は頰をひくつかせている。

「あの、この投稿のどこがよくないのでしょうか……？」

「よ、よく見て、慧え理り那な。壁の時計がフレームインするように、角度を計算して、撮ってる……。時間は、二二時過ぎ……。年とし頃ごろの女の子が、こんな時間に男の家に、いますって……じ、邪推させようと、企たくらんでる……」

「それでいて、実際の投稿時間は朝の八時……。撮影してから一晩経たってもまだ部屋にいますよ、と深読みできる小細工も弄ろうしているわけです」

さすが世界を超えてきた女子力。イースナとトゥアールは、僅わずか一〇〇文字程度の文字と一枚だけの写真に込められた邪悪な思惑を、完かん璧ぺきなまでに看かん破ぱしていた。

「ぐっ……！」

さしもの愛あい香かも、これには歯は嚙がみせざるを得ない。

「『一緒に』とか『二人で』とか、わざわざ強調して書く必要あるか？　津つ辺べ……」

「トゥアールちゃん的には『いかなくっちゃ』のところ、あえて小さい『つ』を入れてるのが非常にイラッとしますね」

　問い詰めるというより純粋な疑問を口にする尊みことと、すかさずそれに乗っかるトゥアール。

「何なのよみんな寄ってたかって────っ！　日常の些さ細さいな投稿にいちいちそこまで目くじら立てないでよ!!」

「日常の些細な投稿……!?　世界の人々に悪夢のような記憶を押しつけておいてですか!?」

　トゥアールが次に示したのは、さらに以前の投稿。やはり愛香と総そう二じのツーショット写真だ。

　どこか閑かん寂じやくな郊外で撮られた写真だが、総二は「何な故ぜこんなところに連れてこられたのだろう」とでも言うように不思議そうにしている。

　▼　今日は、あたしがテイルブルーになってレッドと一緒に戦い始めてから一周年！

　　　これからも色んな記念日、二人でたくさん作っていきたいなっ☆　（愛香）

「何が記念日ですか！　この世界で初めてテイルブルーがエレメリエンを倒した呪のろいの日でしょうが！　フォクスギルディに哀悼の意を表してください!!」

　スクリーンをぺしぺしと叩たたきながら、血迷った文面を糾きゆう弾だんするトゥアール。

　しかし愛香は記憶がおぼろげなのか、首を傾かしげるばかりだった。

「フォクス……ギルディ……？　えーと……」

「あかん、フォクスギルディくん忘れ去られかけとる……」

「津辺は倒した相手の属性玉エレメーラオーブが使えるか使えないかでしか、エレメリアンを記憶しないらしいからな……私も人のことは言えんが……。っていうかまた『一緒に』と『二人で』が入ってるぞ」

　保護者組の二人がリアクションに困っているが、つまり写真が撮られたのはフォクスギルディと戦った場所だ。愛あい香かはこの投稿のために、わざわざそこまで総そう二じを引っ張っていったのだろう。

　そこは、戦いの後に駆けつけたマスコミによってテイルブルーが人類史上初めて観測された地でもあるので、確かにメモリアルな場所と呼べなくもない。

「続けてこちらを見てください、皆さん！　これ、この写真の量を!!」

　写真付きの投稿にだけ絞って表示すると、トゥアールの危き惧ぐがより顕けん著ちよになる。

　ツインテイルズ公式アカウントに投稿された写真の大半が、愛香と総二のツーショット。

　スクロールしていくと、たまに見切れるぐらいの頻ひん度どで慧え理り那なの買ったおもちゃや善いい沙すな闇あん子この仕事の合間に撮られた写真が表示される程度だ。

　スクリーンに注がれていた皆の視線が、愛香へと集まる。

「おかしいと思ったんですよ！　公式アカウントの更新を当番制にした当初は面倒がってたくせに、今では愛香さんの更新頻度が一番多くなってます！　さては途中で気づきましたね、『これは使える』って!!」

「ち、違うわよ！　あたしがそーじと一緒に撮った写真ばっかアップしてるのは、テイルブルーが本当は心優しくて、テイルレッドとすっごく仲がいいってことを世界の人たちに知ってもらうためなんだってば！　未いまだに誤解している人多そうだし!!」

「目的がそれなら運営会社に違反報告しなければなりません！　間違った情報の流布は根絶されるべきです!!」

「事実でしょうが!!」

　管理者の一人がうっかり自らアカウントを凍結させかけているが、追いつめられた愛香は逆ギレという必殺技を発動して反撃を試みる。

「だいたいトゥアールのくせに投稿が大人しすぎんのよ！　あんたがＳＮＳやったら、承認欲求で暴走して投稿する写真の露出度がどんどん上がってくはずでしょ!?」

「私は総二様以外の殿方に肌を晒さらすつもりはありません!!」

　確かにトゥアールは、愛香に吹き飛ばされる時も周囲に総二以外の男子がいる時は絶対にパンツが見えないように体勢を調整して吹き飛ぶ。そういうところはちゃんと乙おと女めなのだ。

　そもそも、調整して吹き飛ぶ原理が不明なのだが。

「それに、卑ひ猥わいな写真なら総二様本人の網もう膜まくに直接ダイレクトメールしてますから、まったく問題ありません！　それも、かなりの廃人な投稿頻度で!!」

「それが駄目だっつってんのよ!!」

　愛香は視線を彷徨さまよわせ、やがて一点で止めた。据すわった目で見られ、ぎょっとする慧理那。

「会長は、そーじの部屋の犬小屋に入ってる時の写真とかアップしないの？」

「わ、わたくしは家の決まりもあって、むやみにネット上に顔写真をアップしたりはしないようにしていますので……」

「さすが慧え理り那なさんは、ネットリテラシーがしっかりしていますね」

　愛あい香かは慧理那が部屋の犬小屋から出て総そう二じに首輪の鎖を差し出した瞬間の写真を撮り、『今からご主人様とお散歩なうですわ』などと投稿するのではないかと予想していたようだ。

　しかしさすがにマンモス校の生徒会長を二年務めた才女にして、世界有数の富豪の娘。ネット上での危機管理がきちんとできてい

る。

　現実の総二の部屋では、その危機管理能力がバグるのだが。

「……桜さくら川がわ先生は!?　自分の名前だけ記入した婚こん姻いん届とどけを画像投稿して、『ご自由にダウンロードしてください』とか書かないんですか!?」

「いや、一応教師でもある私が、ネット上でそんな非常識なことをやっちゃ駄目だろう」

「ちょっと前まで学校中の男子みんなに婚姻届配ってたじゃないですか!?」

　尊みことにド正論で返されるも、納得のいかない様子の愛香。

「じゃあイースナ！　そーじの部屋のクローゼットから侵入するとことか自撮りすればいいじゃない!?」

「ひ、貧乳さんは、匂わせが、下手……。アイドルは、そういうの、もっと上う手まく……やる……」

「にににに匂わせって何よ、人聞き悪いわね!!」

「わ、私なら、総二さんを、あえてカメラのフレームに、収めない……。自分の部屋で、私だけの写真を撮って……め、眼鏡めがねのレンズに、総二さんが、うっすら反射して……映るように、するの……」

　神眼鏡ゴッドめがねのフレームに指で触れながら、控え目なドヤ顔をするイースナ。匂わせという行為を否定こそしないが、愛香のやり方の稚拙さを指摘していた。

「へ、へー……なるほどね……じゃなくて！　あたしは匂わせてるんじゃないってば!!」

　往生際の悪い愛香に引いん導どうを渡すべく、トゥアールはさらなる証拠をモニターに提示した。

『彼氏　匂わせ　やり方』

「これは愛香さんのトゥアルフォンのブラウザでの検索履歴です！　何ですかこの見ただけで膝ひざの皿が割れて崩れ落ちそうになる検索ワードは!?」

「またあんたは勝手に人の検索履歴盗み見てっ!!」

「愛香さんはトゥアルフォンというテクノロジーを享受する！　その提供者である私はビッグデータを得てさらなる研究に活いかす！　これが情報化社会のサイクルです！　大した個人情報も無いのにガタガタ言わないでください!!」

「思いっきり日常生活に支障が出る個人情報抜かれてんじゃないアホオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

「ホゴホ――――――――――――――――ウ!!」

　意味不明な叫びを上げながら部室の天井に突き刺さるトゥアール。

　自分に非があることを自覚していたのか、ここまで（肉体的に）おとなしかった愛あい香かだが、とうとう普段通りに拳こぶしが動いてしまった。

「いや、しかしだな……どんな検索をしているのか把は握あくされるのはいい気はしないぞ。ネットの履歴がわかるということは、通販で何を買ったかもバレるんだろう？」

　尊みことも水色のトゥアルフォンをもらっているが、トゥアールの話を聞いて不安になったようだ。

　ちなみに彼女の検索ワードのトップは、「結婚」のみのストロングスタイル。

　ＡＮＤ検索などという軟弱な保険は、そこには存在しなかった。

「私も別に皆さんのプライバシーを侵害しようとは考えていません。ただ愛香さんの投稿があんまりなので、今回は涙を呑のんで証拠を開示したまでです」

　天井から秒でリカバリーしてホワイトボード前に戻るトゥアー

ル。引き続き無意味におっぱいを揺らし、愛香に自白を促うながす。

「～～～～～ッ……いいでしょ別に!?　どうせ世界の人たちはみんな、あたしとそーじが付き合ってるんだろうなって思ってるわよ！　でも確証がなくてやきもきしてるだろうから、こっちの厚意でＳＮＳ通して匂わせてんのよ!!」

　ヤケクソ気味に吐はき捨てる愛香。自白はしたが、想像以上に居直っていた。

　反論が矢のように飛んでくるだろうと覚悟していたようだったが、女子会メンバーは全員沈黙してしまった。

　愛香はあれ、と目をしばたたかせる。

「…………」

「優しく苦笑しないでよ会長、悲しくなるでしょ!?　せめて何か言って!?」

「これからこの世界でもＳＮＳはさらに発展していくでしょうが、そんな中で愛香さんは生きづらいでしょうね……」

　愛香は大きく息を落とすと、真剣な面おも持もちで椅い子すから立ち上がった。

「……逆にみんなは……今のままでいいの？」

　いつもの愛香なら、ここまで糾きゅう弾だんされてはいじけてしまっていただろう。

　しかし今の彼女には、揺るぎない信念があった。

「そーじは世界中にテイルレッドだって知られて、それでも受け容いれてもらえた。今はもう、そーじのことがテイルレッドと同じくらい好きって女子もどんどん増えてきてる」

　この気心の知れた仲間同士だけで争うならいい。

　しかし、エレメリアンとの戦いがまだ続いているように……総そう二じを巡る戦いもまた続いている。そしてその戦いには、世界中

の女性という未知の戦力も参入し始めたのだ。

　彼氏の匂わせ方を検索することを、誰だれが責められようか。

「多少はしゃいでる自覚はあるけど……それでもあたしは、そーじへの想いで世界中の人たちに負けたくないの。滑こつ稽けいだって構わない！　これからも、どんどんいちゃいちゃして、どんどん二人で撮った写真をアップしていくわ！　来月あたりちゅーした写真とか上げたい」

　その場にいる面々は愛あい香かの演説に心打たれ、口くち許もとを引き締めていった。

「……わかりました。そうですね……確かに私は、我わが身可か愛わいさに自分の役目を見失っていました……。私も他の女性を牽けん制せいします！」

　トゥアールの宣言に賛同してイースナや尊みことも頷うなずき、何となくで慧え理り那なも頷く。

「写真で肌を見せるのは事務所ＮＧですが、文章なら何を書いてもトゥアールちゃん的にＯＫです！　早速『今日は総そう二じ様と五発やりました（トゥアール）』って投稿しますね!!」

「それはあたしが削除するわ、投稿主もろとも」

「何をやったかは書いてないのに!?」

　当たり障さわりのない投稿から炎上まで突破し社会問題になりかねない暴言は、津つ辺べ愛香が食い止める。

　ＡＩ検閲全盛の時代でも、最後にものをいうのは人力、つまり腕力なのだ。

「そうだな……私もそろそろ身を固める時だ。私の名前だけ書いた婚こん姻いん届とどけはみだりにアップできんが、観み束つかと私双方の名前を書いた婚姻届なら、世界中に見せることができるからな」

　常識があると見せかけてギリギリのところでヤバい尊も、凛り々りしい微ほほ笑えみと共に宣言する。

「わ、私も……善いい沙すな闇あん子こ公式アカウントと、同時投稿で、総二さんとお付き合いしてるって、発表する……」

　アイドルでありながら、爆弾投下も辞さない覚悟のイースナ。

「投稿は『ファンの皆様に大切なお知らせ』てシンプルにしといて、入籍の発表は添付画像に文章でしっかり書こうな、イースナちゃん」

　しかもサポート役のメガ・ネがさりげなく投稿内容を飛躍させまくっていた。

「わたくしも、買ってきたおもちゃだけではなく、観束君との思い出の品をアップしていきますわ！　犬小屋、首輪……アイマスクに手て錠じよう……写真と共に思い出を綴つづれば、世界中の方々も微笑ましく思ってくれるはずですわ!!」

　自分の顔を出さなければＯＫというマイルールに到達してしまった常識人の才女が、ナチュラルに一番ブッ飛んだことになりそうになっていた。

「だから極端すぎんのよみんな！　あたしの絶妙なラインの投稿を見習いなさい!!」

　手本を示そうと、トゥアルフォンを取り出す愛香。

「……あれ、ちょうど今、誰だれか投稿したみたい」

　スクリーンに映りっぱなしになっていたＳＮＳの画面に、全員の視線が集中する。

　投稿時間は、三〇秒前。つまり、ほぼリアルタイムだ。

　この場に全員揃そろった女子メンバーが誰もトゥアルフォンを操作していない以上、総二だろうか。彼は、滅多に投稿しないのだが。

　少しだけスクロールして写真の全容を表示する。

　そこには、弾はじけるような笑顔で総そう二じと腕を組んでいる女子が映っていた。

▼　久々に総二とデートだ！　宿命のライバルにしてダチ同士、今日は

　　思いっきりツインテールとポニーテールを伸ばすぜ!!（ゆのゆの）

　着崩した制服の女子が、困惑顔の男子を引っ張りながらＶサインをしている。場所は、河川敷。

　青春映画のキービジュアルのように様になっているベストショットを投稿したのは──結いわ翼ばね唯ゆ乃のだった。

「「「「「…………………………………」」」」」

　本日の女子会議は、唐突に終わりを迎えた。

　そして女子メンバーは、部室の転送ロッカーを通って基地へと駆け込む。メガ・ネもあらあらまあまあと遅れてついていく。

　叛はん逆ぎやくの不死鳥めを追いかけるために──。

◇　◇

　ここのところは戦いも起きず、平和だなあとしみじみ思っていた、その日の放課後。

　そういう時に限って、狙ねらい澄ましたかのようなタイミングでエレメリアンが出現する。

　ローテーションではイエローが出撃だったのだが、生徒会の急な仕事ができたということで、桜さくら川がわ先生が交代した。そしてアナザーブルーのように出撃に不慣れなメンバーの場合、誰だれかが援護するのが暗黙の了解になっているため、今回は俺がついて

行く。

　野良エレメリアンの対処は、このぐらいフレキシブルで問題ない。

　トゥアールによると、美容品のＣＭ撮影をしているスタジオに乱入してきたということだ。

　現場に到着した俺とアナザーブルーが見たのは、でっぷりとした腹に、細長い手──いわゆるミジンコな見た目のエレメリアンだ。

「お手を拝借……いや、実に美しい……」

「や────やめて───手には傷つけないで────っ!!」

「つけるものか！　むしろ愛する!!」

「それもいや─────!!」

　エレメリアンは、舞踏会でパートナーの手を取るかのように恭しくうやうやしく女性の手を取っている。

　傷つけないと言ってはいるが、彼女には恐怖でしかないだろう。

「その人から離れろっ！」

　走りながら変身し、エレメリアンに蹴けりを入れて女性から引き離す。

「ありがとう、テイルレッドちゃん！　よかったらこれ、使って!!」

　ＣＭ撮影のモデルと思おぼしきお姉さんは、俺に何かチューブ状のものを渡して走り去っていく。

　何だろうとよく見てみると、ハンドクリームだった。

「……むむっ……布に覆おおわれていてもわかる、その美しき細指……さすがはテイルレッド、実際に見るとやはりキュートなお手々をしている!!」

　確かにテイルギアは、五指を丸々アンダースーツで覆ってはいるが……その下の指がどうなっているかを、こいつは見切ったってい

うのか。

「俺は手属性ハンドのダーフィニアギルディ！　この日を待ち望んでいたぞ、テイルレッド!!」

　手の属性か。というかこいつ今、気になることを口にしなかったか。

　実際に見るとか、待ち望んでいたとか。もちろん、ツインテイルズの資料は色んなエレメリアンに出回ってるんだろうけど……何かが引っかかるな。

「テイルレッド……俺専用の手タレになってくれい!!」

「わ────────何だこいつ──────っ!!」

　そんな疑問も、声を上ずらせながらにじり寄ってくるダーフィニアギルディの気持ち悪さによって霧む散さんさせられた。

「ツインテールを結ぶためにもっとも大切なもの……それが手だ！　さすがは全異世界一美しきツインテールを結び続けてきた少女、指の美しさも格が違う!!」

　まあ、そう言われれば悪い気はしないけど。

　……って、駄目だ！　こいつのペースに乗せられるな!!

「そちらの妙齢のお主は…………ふむ。仕事熱心な女性の手……忙しさを宿した手だ。されど手入れも怠おこたっておらず、荒れているわけではない。なかなか素晴らしいではないか」

「な、なんだこのエレメリアン、めっちゃ褒ほめてくる」

　アナザーブルーはストレートな褒め言葉に照れてしまっている。手にしていたウェイブメイスを床にめり込ませ、構えを解く。

「握手をしよう！　ハンド！　トゥ！　ハンド！　戦う者同士であれ、まずは握手からだ!!」

　それを好機とばかりに、ダーフィニアギルディは変な液剤をつけてぬめった手を突き出し、執しつ拗ようように俺を追いかけてくる。

「お前今、手の平に接着剤つけたな!?」

「心配するな、これは肌にいい特殊な素材を使用している!!」

「肌荒れを心配してるんじゃねーよ!!」

　横合いから伸びてきた別の手が、俺に迫るダーフィニアギルディの手首をむんずと摑つかみ、勢いのままに捻ひねって奴やつの顔に押しつける。

「ぐおおおおおおおおおおおおフェイストゥーハンドオオオオオオ!!」

「ったく。気になって来てみたら、久々に自己主張の強い変態ね」

　俺の危機を救ったのは、駆けつけたブルーだった。登場早々眉み間けんに皺しわを寄せている。

「じ、時間差で現れるとは卑ひ怯きような！　お前が来るとわかっていたらすぐに退却したものを!!」

　ダーフィニアギルディが不意に漏もらした弱音。ブルーはそれを聞き流したようにも見えたが、どこか引っかかっている感じだった。

「すまない津つ辺べ、私がついていながら……」

「気にしないでくださいアナザーブルー、あともう全世界に正体バレてるけど、名前呼びは控えて……」

　アナザーブルーの、戦闘中に本名を呼んでしまう癖くせは今もなかなか直らないようだ。

「あんたみたいにどっかカラダの部位を好む属性のエレメリアンは、特に変態が多い……経験でわかってんのよ。そういう奴やつはレッドに代わって、あたしが倒すことにしてるの」

「テイルブルーよ。お前の手も美しいのは認める。しかしそれ以上に、お前の拳こぶしは血で汚れすぎている！　返り血をハンドクリームとして美貌を保ってきたか、この現代の吸血鬼め!!」

　罪を糾きゆう弾だんすべく、顔からようやく剝はがした指をビシ

リと突きつけるダーフィニアギルディ。

「平べったいから『手の平』と呼ぶ……ならば貴様の胸は、『胸の平』と呼ぶべきでは!?」

　おまけにまた余計な追撃をする。通信越しにトゥアールが爆笑しているのが聞こえる。

「倒すなんてお行儀いい言葉は撤回するわ。ミジンコらしく、擂すり潰つぶしてあげる」

「怖っ！　女学生が物騒な脅迫を事もなげに吐き散らすとは!?　学校教育の限界を感じるぞ!!」

　相も変わらずドスの利いた脅しだが、ブルーは全く悪びれていない。

「お生あい憎にく様さま、テイルブルーが怖いっていう誤解は、すっかり解けたのよ。今じゃこの世界の人たちは、レッドと同じくらい純粋にあたしを応援してくれるわ!!」

「えっ」

　撮影スタッフが避難せずに残っていたのだろう……背後のギャラリーから素すで驚きよう愕がくするような声が聞こえたが、ブルーは気にせずダーフィニアギルディへと歩みを進める。

　そうして綺き麗れいな弧を描いたビンタが、ダーフィニアギルディの顔面に死の紅葉もみじをスタンプしていく。

「ほら、あんたの大好きな手よ……嬉うれしいでしょう？　お礼を言いなさい」

「ぐあああああああ！　ありがとうございます！　ありがとうございます!!」

　すっげーデジャブなんだが……。いや、ブルーとエレメリアンの戦いって九割方デジャブに感じるぐらい、いつも展開が同じなんだけどな。

　俺とアナザーブルーは、直視するのも躊躇ためらわれ、互いを見合う。

「サービスは終わりよ。とっとと片付けてやるわ」

　かったるそうにウェイブランスを抜き、最速で突き込むブルー。

　しかし、先ほどまで甘んじてビンタを受けていた時とは見違えるような反応速度で、ダーフィニアギルディは刺し突とつを躱かわした。

　たった一度槍やりを回避されただけで、ブルーの目の色が変わる。

「……今。躱したってーか……見切ったわね」

　凍いてついた声こわ音ねで、ダーフィニアギルディを詰問する。そして、逡しゅん巡じゅんに要する時間はほんの一瞬だった。

「――あんたさては、アルティメギルの生き残りね？」

　それは今までのような脅しではなく、純然たる確認の言葉だった。だがダーフィニアギルディは、かつてないほど恐怖を感じただろう。

　アルティメギルにとってテイルブルーは世界侵攻にとっての大きな障害の一つだったため、多くの対策が講じられてきたという。たとえば、ブルーのイラストをたくさん描くことで、攻撃を完かん璧ぺきに見切れるようになった連中もいた。原理はまったくわからないが……。

　たった一太た刀ち。ブルーは先ほどのダーフィニアギルディの動きが、かつて特訓の成果と称して自分の攻撃を見切っていたエレメリアンたちに通じるものがあると看かん破ぱしたのだ。

「でも、おかしいわね……あの基地にいた奴やつは一匹残らず倒したはずなのに」

　ウェイブランスで空を薙なぎ、じわじわと威圧するように歩み寄るブルー。

「ま、いっか」

「あ、あ…………」

　その言語を絶する威圧感に耐えきれず、へたり込んでしまうダーフィニアギルディ。

　ブルーが無表情でランスを振り上げた、その時だった。

〈ツインテール……〉

　地獄の亡者が発したと錯さつ覚かくしそうなぞっとする声が周囲に響き、俺とブルー、アナザーブルーは思わず辺りを見渡した。

「！　観み束つかっ!!」

　声に反応した俺が振り返るより一瞬早く、黒い影が飛びかかってきた。

　その急襲をいち早く察知したアナザーブルーが超重武器・ウェイブメイスを振り回し、影を横あいから打ち据すえて床に叩たたきつける。

「なんだ、こいつ……」

　ゆらりと立ち上がった影を見て、俺はさらにぞっとしてしまった。

　人型で黒ずくめだが、戦闘員アルテイロイドではない。愛あい嬌きようの欠片かけらもない、おぞましい存在感。

　かつて戦ったホロウエレメリアンという影の戦士に雰囲気が似ているが、こちらはさらに輪郭が淡く揺らいでおり、ひどく不確かに見える。まるで亡霊そのものだ。

　そして奴の背後には、奇妙なものが浮かんでいた。

　様々な色がマーブルに渦うず巻く、転送ゲートの極彩色をさらにカオスにしたような光。

　それが一瞬、巨大な亀き裂れつのように空に拡ひろがり──消えた。

「はああっ!!」

　アナザーブルーが追撃で振り下ろしたメイスをまともに受け、影

はあえなく爆散した。

　俺たちが謎なぞの影に気を取られている間に、ダーフィニアギルディは背面に極彩色のゲートを展開。転げるように慌あわてふためきながら、その中へと飛び込んだ。

「退却……したのか!?」

『そのようですね、周囲から完全に反応が消えました……。脅しすぎですよ、ブルー！』

「何か企たくらんでると思ったのよ！　あいつが怪しいのは事実でしょ!?」

　トゥアールとブルーの通信を聞いていた俺だが、横にいるアナザーブルーのギアが小さく放電していることに気づいた。そのことを指摘しようとした瞬間、

「……あ、あれ？　何もしてないのに変身が解けてしまった」

　アナザーテイルブルーの変身が解け、桜さくら川がわ先生の姿に戻る。不思議そうに手の平やブレスを見ているが、原因はわからないようだ。

　アナザーブルーのブレスは連動しているブルーの影響をモロに受けるので、ブルーが不調だと変身を維持できなくなったりするのだが──

「そういえばトゥアール、さっきあのミジンコの言ったことで爆笑してたでしょ。連帯責任ってことで、帰ったらあんたも擂すり潰つぶそっと」

『いやあああああああああ無駄だとわかってて言いますが帰って来ないでええええええええ!!』

　このとおり、ブルーはめっちゃ元気だ。

「うーん、ごくたまにしか出撃しないから、かえって調子が悪くなるのかな。後でトゥアールに診てもらうか……」

「その方がいいですね」

桜川先生がメンテの必要を感じたようなので、俺も勧めておく。元々アナザーブルーのブレスも、ホワイトほどではないにしてもかなり不安定だからな。

俺は帰投する前に、もう一度あの黒い影が現れた空間に目をやった。

ブルーが懸念するように、ダーフィニアギルディはここ最近現れていた野良エレメリアンとは俺たちに対する予備知識がまるで違う。アルティメギルの生き残りの可能性がある。

しかしそれより気がかりなのは、奴やつを助けるように現れた黒い影、そして──その時に聞こえた、『ツインテール』という声だ。

ツインテールという言葉なら聞こえるだけで嬉うれしくなる俺が、怖おぞ気けを感じてしまうほどの声……あれは一体、何だったんだ。

◇

邪神テイルブルーの魔の手を辛からくも逃のがれたダーフィニアギルディ。

彼が向かったのは、総そう二じたちが住む街から遥はるか遠く離れた郊外にある廃工場だった。

「はぁ……はぁ……」

荒らげた息で工場内に舞う埃ほこりを散らしながら、ふらつき歩く。

無造作に置かれていた空のドラム缶にぶつかり、倒れるように座り込んだ。

「ダーフィニアギルディ！」

「大丈夫か、しっかりしろ!!」

工場の奥から、二体のエレメリアンが駆け寄ってくる。ダーフィニアギルディが言葉なく頷うなずいて無事を伝えると、他のエレメリアンはそれ以上何も聞こうとはしなかった。

今、この世界には数体のエレメリアンが潜伏している。組織を脱退した時期はまちまちだが、いずれも、アルティメギルを出しゆつ奔ぽんした者たちだ。

アルティメギルにおいては、組織を抜けることがすでに反逆とされている。

しかし、ダーフィニアギルディを反逆者という物々しい言葉で呼ぶのは滑こつ稽けいだろう。

何のことはない──ダーフィニアギルディは、アルティメギル基地へツインテイルズが乗り込んでくる前に、怖くて逃げだしたのだ。

多くの同胞が自らの死地と定め、最後まで守り抜こうとした基地に背を向けて。

されど別の異世界に逃げる術すべはなく、彼はこの世界に身を潜めるよりほかなかった。

（……違う……！　俺は……俺は卑ひ怯きよう者の謗そしりを受けてでも生き残り、ツインテイルズを倒す道を選んだのだ！）

まるで自分に言い聞かせるように心中で叫び、頭かぶりを振るダーフィニアギルディ。

アルティメギル基地決戦の前には、その時点で組織Ｎｏ．２と言える大幹部のアポロギルディが、基地の残存戦士たちへと向けて去就を一任していた。

好きにしろと言われて本当に好きにしてしまったのは結果的にダーフィニアギルディただ一体だったのだが──その決断の果てに、彼は今こうして生き延びている。

だが完全に組織から切り離されてしまったダーフィニアギルディは、知らない。

今この時も、本当の意味でのアルティメギル最後の生き残り・スパロウギルディが、異世界を巡って組織再建に向けて尽力している

ことを……。

　ツインテイルズは、エレメリアンが属性力エレメーラを鎮めている限りは探知できない。これは、アルティメギルに属しているお陰で知り得ることができた情報だ。

　アルティメギルを脱退したダーフィニアギルディは、皮肉にもアルティメギルが蓄積した対ツインテイルズのデータのお陰で今も生き残っている。そのデータを、自分より前にアルティメギルを抜けていた〝同志〟たちと共有した。

　そうして細々と集まったのが、いまこの廃墟に身を寄せるエレメリアンたちだ。

「おのれ……何なのだ、あのテイルブルーという生き物は！　あまりにも人外すぎる!!」

　しばらく無言だったダーフィニアギルディも、激情を吐き出さずにはいられなかった。

　実物のテイルレッドの可か愛わいさは、想像を絶するものだった。それまでモニター越しにしか見たことのない天使を目まの当たりにし、天にも昇る気持ちだった。

　しかしその嬉うれしさを帳消しにして余りある悪魔が隣に陣取っていて、あやうく天に召されるところだった。

　テイルブルーの実物の恐ろしさは、千言万語を費やしても表し得ないものだったのだ。

「アルティメギルという組織にエレメリアンがどれだけ守られていたか……痛感している」

　離れて立っていたエレメリアンが、精根尽きた弱音を絞り出す。

　前線基地と呼ぶにはみすぼらしい廃墟。

　そこに身を寄せ、絶望的な現状を何とか打開しようと苦慮している彼らは、もはや終末世界のレジスタンスといった風ふ情ぜいだった。

　ダーフィニアギルディはのろりと立ち上がり、資材箱を積み上げ

て作った机の上に置いてある写真を手に取った。そこには、笑顔のテイルレッドが映っている。

　粗大ゴミ捨て場で拾ったインクジェットプリンターで印刷した、画質の微妙な写真。

　今はこれが、彼らがここでテイルレッドを愛めでることのできる唯一のメディアだ。

　アルティメギル基地の荘そう厳ごんなホールに設置された巨大なモニターで、テイルレッドの愛らしさを見て仲間たちと喜んでいた頃ころに比べ……あまりにもみじめだった。

　写真を持つダーフィニアギルディの指が、悔くやしさで震ふるえる。

「…………テイルレッド……」

　けれどどれだけ解像度が粗くても……テイルレッドの笑顔は色褪せない。

　このプリティーなツインテールが、侵略者の怪人に勇気を与える。

　指の震えは止まり、ダーフィニアギルディは覚悟を決めた。

「――まだ、死ねんな……もう少し意地を見せなければ。何のためにも組織を抜けてなお、ツインテイルズに立ち向かおうとしているのかわからん」

「ああ」

「そうとも」

　廃墟の同盟たちが深く静かに決意を新たにした、その時。

　工場の最奥が光輝き、巨大な亀き裂れつが空間に出現した。

　まさかテイルブルーが何らかの方法でこの居場所を突き止め、急襲をかけてきた……!?

　泡を食って戦闘準備をするエレメリアンたち。

〈……ツインテールが、憎いか……〉

　亀裂の中から、禍まが々まがしい声が漏もれ出てくる。突然の闖ちん入にゅう者は、テイルブルーではなかった。

「何なに奴やつ!?」

　語気を荒らげて問い質ただすダーフィニアギルディ。

〈ツインテールが、憎いか〉

　声はどんどんと大きくなり、廃工場全体を反響する。

「憎いものか！　俺たちはツインテールが好きだ！　憎いのは、テイルブルーだ!!」

〈だが……テイルブルーとやらは、ツインテールだ……ツインテールが、憎いか……〉

「テイルレッドのツインテールはとてつもなく可か愛わいい！　憎いはずがなかろう！　誰だれだ貴様は！　姿を現せ!!」

〈ツインテールが、憎いか……〉

「憎い……ツインテール……」

「ツインテールさえなければ、こんなことには……」

　後ろにいた二体の同志が瞳ひとみ虚うつろとなり、謎なぞの声に言われるがままに呪じゅ詛そをこぼす。

「!?　お、お前たち!?」

　恐怖に駆られながら、ダーフィニアギルディは目の前の亀き裂れつに視線を戻した。

　様々な色がマーブルに輝く光を放つその亀裂は、最初よりもさらに拡大していた。

　震ふるえるダーフィニアギルディに、謎の声は今一度囁ささやきかける。

〈ツインテールが──憎いか〉

第二章　その後の世界。

　神しん堂どう家の広大な私室の一角で、慧え理り那なはパソコンの画面とにらめっこをしていた。

　習い事をこなし、家族と夕食をとり、入浴の後に宿題も終えた少しばかりの夜の自由時間。

　先日の女子会議で議題に上がったツインテイルズ公式アカウントに自分も貢献すべく、他の人のＳＮＳを参考に見るのがここ最近の彼女の日課になっているのだ。

　ヒーロー番組好きな慧理那は、それらの番組の関係者や、あるいはおもちゃメーカーの公式アカウントなどを見ることからとりあえず始めた。

　そんな時慧理那は、一人のおもちゃレビュアーのアカウントを見つけた。

　小学生ぐらいの女の子の写真がアイコンのアカウントで、最新の投稿には動画が添付されている。何か既視感を覚えた慧理那だったが、動画を再生してそれが確信に変わった。

「あの子の動画ですわ!!」

　以前、偶然発見してお気に入りになったおもちゃレビュー動画の投稿主だ。総そう二じたちにもおすすめしたのを覚えている。

「お嬢様、失礼致します」

　ちょうどその時、尊みことがお茶を持って入室してきた。

「尊！　見てみてください！　テイルブレスのおもちゃをレビューしている子がいますわ!!」

　嬉うれしそうに尊を手招きする慧え理り那な。

　やって来た尊と一緒に画面に向き直った時、ページは遷せん移い

しており、先ほどまで見ていたアカウントではなくなっていた。

「変ですわね……戻るボタンを押してもさっきのページが表示されませんわ……」

「そういえばお嬢様は、以前にも仰おつしやっていましたね。素敵な動画をアップしている女の子がいたのに、後から見たら動画が消えていたと……」

　そう、以前総そう二じたちにおすすめした時も、いざ動画を見せようと思ったら動画が見られなくなっていたのだ。しかも、削除されたのではなく何な故ぜか履歴のページごと消えて。

「もしかしたらこの方は、一定時間が経たつと消してしまわれるのでしょうか……」

　残念そうに肩を落とす慧理那。

　時限式で書き込みが消えるのが特徴のＳＮＳもあると聞いたことがあるし、同じようなことをしているのかもしれない。慧理那は、そう納得することにした。

　しかし彼女の体験した不思議な出来事は、さらなる不思議な事件の始まりに過ぎなかった──。

ａｆｔｅｒ４　ファンクラブが、欲しい……。

　放課後、ツインテール部部室に向かおうと廊下を歩いていた俺は、突き当たりに立つ唯ゆ乃のの姿を見つけて思わず足を止めた。

　夏服に衣替えしても制服を着崩しているのは相変わらずで、ちょっとギャルっぽい雰囲気を漂わせている。

　ジャージを着た運動部の女子たちに囲まれ、何やら話をしているようだ。

「ゆのゆのー、対抗戦の助っ人お願ーい！」

「おう、いいぜ！　ただし俺様が入ったチームはぜってー勝っちまうけどな！」

　どうやら助っ人を頼まれているようだ。多分、助っ人を頼むのは建前にすぎず、唯乃と遊びたいのだろう。相変わらず、女子に大人気だな……。

　気分で学校に来たり来なかったりするけど、出席日数は大丈夫なのだろうか。

　そこへ、大おお仰ぎような一眼レフカメラを首から提げた男子が唯乃へと近付いていった。

「唯乃さん！　今月のファンクラブ会報の表紙の写真！　お願いいたしますっ!!」

「会報ー？　ほれ、横ピース。これでいいのか？」

「ありがとうございましゅうううううううううううううううう!!」

　怠だるそうにしながらも写真撮影に応じたりと、サービス精神も旺盛だ。

「ねーねーゆのゆの、今度一緒に下着買いに行かない？」

　別の女子は、にこにこしながら唐突にそう提案している。

いきなり距離詰めすぎじゃないかと思うけど、女子同士ってそういうもんなんだろうか。

「下着かー。別に何でもいいけどな、どーせ総そう二じは下着とか気にしねえし」

周囲の女子からきゃ――――、と黄色い声が上がる。

周囲の男子からもきゃ――――、と悲鳴が上がる。

あいつが学校で楽しそうにしている姿をまた見られるようになって、本当によかった。

何か、恐ろしいことを言われているような気がするが……。

「――ゆ、許せない……」

背後から霊的な冷気を感じて振り返ると、イースナが柳のように揺らめきながら立っていた。陽よう月げつ学園高等部の制服もすっかり着慣れて見えるが、雰囲気は以前と変わっていない。

「うわびっくりした！　ど、どうしたイースナ……何が許せないって？」

「ゆ、唯ゆ乃のには、ファンクラブが、ある……。総二さんにも、ファンクラブが、ある……」

「俺のファンクラブっていうか、ソーラちゃんファンクラ部だぞ……」

しかもテイルレッドの正体がバレた今でも、最初にこの学校にやって来たソーラが俺だとは知られていないから、その時にできたソーラちゃんファンクラ部とその類似部は今も残っているらしい。まあ、ゆのゆのファンクラ部と兼任してる奴やつも多いって話だが……。

「な、なのに、私の校内ファンクラブが……いつまで経たっても、できない……。わ、私……トップアイドルなのに……」

最終決戦において、ブラックもまたその正体が世界的アイドルの善いい沙すな闇あん子こであることを衆目に晒さらしてしまった。

しかし幸いなことに、その後もアイドル活動は問題なく続けられている。

そしてイースナはさらに善沙闇子の素すが根暗（と自分で思っているらしい）な女の子であることも公表したのだが、やはりそれも受け容いれてもらえた。

素の自分がアイドル善沙闇子と同じ人気を獲得できるわけがない、それは高望みをし過ぎなことは、他ならぬ彼女自身が一番わかっているだろうが……それでも歯は痒がゆいのだろう。

イースナにとってライバルである唯乃が校内で大人気なので、なおさらだ。

運動部の女の子についていく唯乃の姿を、親指を噛かみながら見送ったイースナだが……やがて、何かを訴えるように俺を見てきた。それから数十秒の逡しゅん巡じゅんがあり……。

「作って」

「何を……？」

「『好き好きイースナたんファンクラブ』……作って……総そう二じさんが、会長に、なって……」

「いやいやいやいや無茶言うな」

甘えてお願いというより、断ったら呪のろうと言わんばかりの要請だった。

「そもそも、仮に俺が会長やったとしたって、会員がいなきゃ意味が無いだろ……」

「か、会員の当てなら……ある……え、慧え理り那な……」

「なってくれるだろうけどさ！　慧理那はただでさえツインテール部と生徒会の二足のわらじでめちゃくちゃ忙しいんだから、これ以上の掛け持ちは勘弁してやれって……!!」

「じゃ、じゃあ、入会特典、つける……。好き好きイースナたんファンクラブに、入ってくれたら……テイルレッドと、定期的に、ハイタッチ会、できる……。入会希望、続出……」

「それもう好き好きイースナたんファンクラブじゃなくて、テイルレッドのファンクラブの亜種だろ」

　イースナは無言で何度も俺の制服の裾すそを引っ張り、返事を急せかしてくる。

　無茶苦茶なことを言ってるけど、彼女を応援したい気持ちはある。

　校内ファンクラブを作りたいなら、アイドル善いい沙すな闇あん子この姿で喧けん伝でんして回れば一発のはずだ。

　けどイースナは、学校にいるときはできる限り素すの自分で過ごそうと決め、一生懸命実践している。

　そんな努力を見ている以上、彼女の願いを無む碍げにはできない。

　ファンクラブを作りたいっていう目標じゃなかったら、いくらでも力になれるのに……。

「なあ、イースナ。校内ファンクラブって、作ろうとして作るもんじゃないだろ。イースナの魅力がこれから少しずつ全校生徒に伝わっていけばさ。いつか、自然にできてると思うぞ？」

「待つの、イヤ。今すぐ、ちやほやされたい……」

　現代っ子じゃな。ジェネレーションギャップを感じるわい……。

「ちやほや……か。……仕方ない。あの人たちに頼むか」

「え、あ、あてが、あるのっ……？」

　俺の腕に抱きつき、また少し伸びてきたツインテールを擦こすりつけてくる。猫のようだ。

　最近俺はツインテールや人に触れていないと落ち着かない時があるので、こうしたスキンシップはありがたくもある。

以前は恥ずかしいと思っていたのだが、ほっとするようになった。

「善沙闇子の人気ほどじゃないけど、俺だって校内にちょっとは人脈もできてるからな」

「さ、さすが、総二さん……私の、彼氏……頼もしい……好き……」

イースナの表情がぱあっと華やぐ。控え目だが、とてもいい笑顔だ。

全校生徒がこういう魅力に気づく日もそう遠くはないと思うが……今はひとまず、イースナの願いを叶かなえるために頑張るか。

◇

「イースナスナスナスーナスナー!!（はいっさー）」

「イースナスナスナスーナスナー!!（ほいっさー）」

学ランを羽は織おったガタイ自慢の応援団による大だい音おん声じようが、放課後の廊下に響く。既視感がやばいね。

俺ソーラ、唯ゆ乃の、女神ソーラ（暫定）……陽よう月げつ学園高等部歴代ファンクラブ持ちが腰を下ろしてきた伝説の玉ぎよく座ざ、その名もＭＩＫＯＳＨＩ。

その玉座に座った者として、今日また新たに一人の女の子が名を連ねた。

ＦＵＮＤＯＳＨＩまぶしき漢おとこたちに担かつがれ、奉まつられ、イースナは白目を剝むいている。

自慢の神眼鏡ゴツドめがねが、今にもずり落ちそうだった。

今すぐにファンクラブを作ることは難しいが、ツテを使えば陽月

学園高等部でファンクラブ持ちになった末の必須科目を先行体験することはできると思ったのだ。

　コンタクトを取ったのは初めてだが、「いつもの人たち」は快くこころよく引き受けてくれた。

　この陽気な雰囲気を味わって、少しでもファンクラブ気分を満喫してくれればいいのだが。

　しかしそれ以来イースナが、ファンクラブが欲しいと口にすることはなかった……。

　ａｆｔｅｒ５　双子姫珍道中。

「ツインテールトルネ────────ドッ!!」

　異世界の姉妹姫が合体した魔法少女、ロロリー。

　彼女がツインテールから放つ必殺の竜巻が、見事に野良エレメリアンを撃破した。

　珍しくロエルとリルナが出撃したいと言い出したので、ちょうど今日当番だった俺が付き添いで出撃したのだが、無事に勝つことができてほっと一安心だ。

　強くなってはいるが、この娘たちはまだまだ危なっかしいところが多いからな。

　帰還準備を始めていた俺に、トゥアールが意外な提案を通信してきた──。

　俺の家の喫茶店の奥には、ツインテイルズ秘密基地に繋つながるエレベーターがある。今日そのエレベーター内には俺と愛あい香か、トゥアール、慧え理り那なの他に、珍しい顔ぶれが加わっていた。

「わーい、基地だー！」

　飛び跳ねてはしゃいでいる姉と、仏ぶつ頂ちよう面づらで立っている妹。先ほど戦いを終えたばかりの姉妹姫、ロエルとリルナだ。

　ツインテイルズとアルティメギルとの最終決戦に駆けつけてくれた姉妹姫は、戦いが終わった後はイースナが住んでいるマンションに部屋を借り、この世界に逗とう留りゆうすることに。

　自分たちの住む世界とは趣おもむきを異にする世界を満喫しながら、今まで交流のなかったツインテイルズの面々とも親睦を深めている。

　そんな状況を鑑かんがみてか、トゥアールは姉妹姫をツインテイルズ地下基地に招待することにしたらしい。先ほど俺に、基地に直接帰らず姉妹を案内して欲しいと通信してきたのだ。

　俺たちは瞬時に地下一〇〇〇メートルまで運ぶエレベーターを降り、コンソールルームに足を踏み入れる。

「ふん、自慢の基地と聞いていたが、地下深いところにあるだけで大して広くないな。これならボクたちのお城の方がぜんぜん大きいぞ」

　室内を一望したリルナはそう言って鼻を鳴らすが、興きよう味み津しん々しんなのだろう、目線は上下左右に忙せわしなく移ろっている。

「ようこそロリちゃんズ！　今日は心ゆくまで見学していってくださいね♡」

　トゥアールは得意のアルカイックスマイルでおもてなしするが、美しく嫋たおやかな口くち許もとは数秒と維持できずに歪ゆがんで吊つり上がっていった。

「ふっひっひっひっひっひぇ……この基地の中は地球上のあらゆる法の及ばないトゥアール王国……蝶ちようよ花よと育てられたお姫様が無法の荒野でどんな顔を見せてくれるか、今から楽しみですねぇ……」

「つまりここではあたしが生身の人体を使って禁じられた奥義の練習しても罪に問われないのね、助かるわ」

　今さら確認しなくても、愛あい香かはトゥアールとのじゃれ合いが組み手になって相当強くなれたと思うんだけど。

「何で愛香さんもいるんですか！　あなたは楽園たるトゥアール王国から追放したはずです！　地獄の修しゆ羅ら界に帰ってください!!」

　トゥアールがそんなふうに言い返すものだから、愛香の後ろにいる慧え理り那なは気まずそうだ。

「す、すみません……わたくしもお邪魔してしまって……」

「慧理那さんは全然ＯＫです！　お邪魔なのは愛香さんだけです！」

「…………」

　強く言い返すでもなく、愛香は軽く口を尖とがらせてしゅんとしてしまった。

「何で急に拗すねちゃうんですか⁉　可か愛わいいかよですか⁉」

　たまに打たれ弱い面を見せる愛香に、トゥアールはその度たびに困惑を隠せない。

　ばつの悪さを誤ご魔ま化かすためか、白衣のポケットに手を入れ箱を二つにゅるんと取り出した。

「はい、ロリちゃんズの分のトゥアルフォンをあげますよ～」

　手土産みやげ代わりにと、ロエルたちの分のトゥアルフォンを手渡すトゥアール。

　テイルピンクに合わせたピンク色に上下の差し色がそれぞれのリボンの色と同じ白黒で、姉妹どちらのものか区別がつくようになっているようだ。

「わーい、トゥアールお姉ちゃん、ありがとー！　盗聴器とかついてないよね♪」

「そんなことしませんし、そんな物つけなくても私はネットワーク接続された世界中のスマホ全てを今すぐにでも盗聴器代わりに使えますよ♪」

　歌を口ずさむような爽さわやかさで、非常に危険な会話が交わされている。

　大おお袈げ裟さにスキップして姉妹姫の背中を押し、基地を案内していくトゥアール。しぶしぶそれについていく愛あい香か。

　慧え理り那なはというと、感慨深げに基地内を見渡していた。

「最近はここへ来るたび、ほっとしてしまいますわ。秘密基地とは、最終決戦において破壊されてしまうのがお約束ですので……」

「そう言えば昔、そんな心配してたな慧理那……」

　むしろ逆で、俺たちが敵の基地に乗り込んでいく側だったからな。

　戦いが終結した以上、ツインテイルズ基地はこれからも安泰だろう。

「というわけでこの基地には、愛香さん迎げい撃げきシステムが多数備わっているんです！」

　トゥアールはガイドよろしく手の平で各設備を指し示しながら、基地の廊下を案内していく。

「それはけっこうだけど、実際、愛香をちゃんと迎撃できているのかい？」

　リルナの無む垢くな質問を無言の微ほほ笑えみであやふやにし、トゥアールはさらに先へ進む。

　まったく迎撃できてないんだよな……。愛香への対処に費やすリソースを別に割り振ることができれば、この基地はさらに進化するらしいのだが。

　そして辿たどり着いたのは、俺たちツインテイルズがこの基地で最も馴な染じみ深い区画の一つだ。

「ここがツインテイルズ出撃の要かなめ、転送ゲートの設置されたスペースです。世界各地に配置した転送ポイントに一瞬で移動できる、私の自信作の一つです！」

「ふーん、あらかじめ決めたところにしか行けないんだ～。ロエルとリルナちゃんは、一度この目で視みた場所ならどこでもテレポートできるけどね！」

　俺の腕に抱きつきながら、トゥアールに悪戯いたずらっぽい視線を向けるロエル。

「幼女にマウント取られると嬉うれしくて血中γガンマ

ＧＴＰが上昇しますね……」

「興奮しすぎて肝臓に負担かかってんじゃない」

　締まりの無い顔で息を荒らげるトゥアールを愛香が呆あきれながら窘たしなめ、俺の腕からロエルを引き剝はがした。

「便利な能力ですわね！　テレポートに回数制限はないのですか？」

　お姉さんらしく、子供の自慢を立ててあげる慧理那だったが……

「……うん！」

「……当然さ！　一日何回でも使えるよ！」

　姉妹は一拍遅れてから肯定する。

　……あるな、制限。しかもあの言い淀よどみ方だと、逆に一日何度っていう制限が。

　トゥアールたちに弱みを見せたくなくて、隠したいみたいだが……。

「テレポート能力などなくとも、総そう二じ様の部屋に侵入するのはソシャゲに毎日ログインするより簡単なことです。けれど私たちは総二様のプライバシーを尊重しているから、そんな真ま似ねはしません。ですよね？　愛あい香かさん」

「そうよ。そーじに会いたいなら、事前に連絡して、玄関のドアからきちんと入って来なさい。ショートカットしちゃダメだからね、あんたたち」

　強制侵入唐突来訪のエキスパート、トゥアールと愛香が引き締まった顔つきで発言する。

　ツッコミ待ちなのだろうか……だとすれば、すでに何秒かラグができてしまったが、今からツッコんでもまだ間に合うだろうか。

　そして俺たちは、基地のさらに奥へ奥へと進んでいく。

　見る物全てに楽しそうに反応する姉妹。天あま邪の鬼じやくなリルナは一見わかりづらいが、わくわくしているのは見て取れる。

　慧え理り那なを同じように初めて基地に招待した時もそうだったし、桜さくら川がわ先生、イースナとメガ・ネ……唯ゆ乃のがちょっとだけ来た時もだったな。基地の中を新しい仲間が歩いていると、ツインテイルズに加わったんだなって実感が持てて、感慨深い。

　この基地は俺たちにとって、心を通わせた象徴のような場所なのかもしれない。

　やがて俺たちは、基地の最奥、格納庫スペースへと到着した。

「わー、すっごーい！」

「ですわよね！　わたくしも基地の中でこの格納庫が一番好きですわ!!」

　この格納庫スペースの大半を陣取っていた巨大ロボットのトゥアールオーは裏山に放置されているが、異世界を巡る戦艦スタートゥアールは健在だ。

「ボクは一度この戦艦に乗ったけど、すぐ下ろされたんだよな……」

　懐なつかしいな。あの時はあのまま、リルナが俺たちの世界に来ることになるかと思ったけど……やっぱりこの二人は、姉妹一緒じゃなきゃ駄目だもんな。

「だけど今じゃボクたちは、自分自身の力で異世界を移動できるからな！　トゥアールの発明品よりすごいんだ!!」

「どうしてあんたたちはいちいち上から目線になりたがるのよ!?」

「まあまあ津つ辺べさん、子供は負けん気が強いものです。わたくしも小さい頃ころはそれでよく尊みことに迷惑をかけてしまいまし

たわ」

「そりゃ、あたしも小さい頃は負けず嫌いだったけどさ……」

　………………小さい頃は？

　とはいえ、俺もガキの頃は相当愛香と張り合ってたもんな。

「慧え理り那なさんの言うとおりです。こういう可か愛わいらしくイキっちゃう幼女はそのうちわからせられるのが世の常です、今はただ甘んじてこのご褒ほう美びを楽しみましょう！」

「あたしは幼女に見下されて興奮する趣味はないっての!!」

　わからせる……？　って、何をだろう……？

「あのさ。あんたたち、いつまでこの世界にいられるの？」

　スタートゥアールを目にしたことで、ふとそんなことが頭をよぎったのだろう。愛あい香かは少し遠えん慮りよがちにロエルとリルナに尋ねた。

　するとロエルは再び俺の腕に抱きつき、リルナを手招きをして呼び寄せた。

　少し嫌そうにしながらも、反対側の腕にリルナも抱きつく。

「パパは花嫁修業しておいでって言って送り出してくれたし、いっそお兄ちゃんと結婚するまで帰らなくてもいいかなっ」

「そうだな。ボクと姉様の結婚は、ボクたちの国の一大イベントだ。凱がい旋せんは婿むこを伴ってするのが筋だろう!!」

　姉妹の柔らかく弾んだ声に反発するかのように、愛香の表情が硬度を増す。

「じゃあ、あんたたち一生祖国に帰れないわね。御家断絶だわ」

「なんで口調がマジなんだこいつ!?」

　涙目のリルナが、腕に抱きつく力を強める。俺は苦笑しながら、愛香を窘たしなめた。

「二人はこの世界にやって来ていきなり、アルティメギル首領とドンパチやって大変だったんだ。ゆっくりしていってもらえばいいじゃないか」

「いや、別に今すぐ帰れって言ってるわけじゃなくてさ……」

　俺も、愛香が何を言いたいかは何となくわかる。

　むしろ愛香は、親しい人との別れを誰だれよりも悲しむ繊せん細さいな一面があるから。

「そういえば、総そう二じ。金色のテイルレッドは、ボクたちの世界でも目撃できたらしいよ。国民はみんな一度、キミに救われた恩があるからな……。他の世界の声援に負けてなるものかって、あらん限りの声で応援したそうだ」

　急にそんな話をし出すリルナ。強引に話題を替えたのが丸わかりだが、それでいいと思う。

「ああ、それは俺も知覚した。あの時は本当に、全ての世界が繋つながったような心強い感覚だったよ……」

「…………」

　終始笑顔を絶やさず歩いていたトゥアールが、俺の呟つぶやきを耳にした途端、不意に立ち止まってこちらを振り返った。

　俺を映すその瞳ひとみが少しの戸惑いを湛たたえて見えるのは……考えすぎだろうか。

「それじゃああんたたちは、この世界でもっと目立とうって思わないの？　ほら……あっちの世界じゃ、エレメリアンと戦うことをアイドル活動みたいにしてたじゃない」

　それまで無邪気な笑顔を絶やさなかったロエルが初めて、寂しげに表情を翳かげらせた。

「ロロリーは、ロエルたちの世界ではアイドルだけど……ここじゃお客様だもん。この世界のアイドルは、お兄ちゃん。テイルレッドだもんね」

　愛あい香かが無言で自分自身を指差しているが、それはともか

く。

　何を見せても自慢し返す、負けん気の強い子供がふいに見せた遠えん慮りよが、切なかった。

　どんなに天てん真しん爛らん漫まんでも、一国の後継者として厳格に育てられてきた。そして、幼いながら世界を守る戦士としての重責を背負ってきた。

　だからだろうか、ロエルとリルナは、年の割りに物分かりがいい。

　今も最後の最後で、引かなくてもいい線を引いてしまっている。

　自分たちは──あくまで、異邦人なのだと。

「そんなことない。最後の決戦にロロリーが駆けつけてくれなかったら、この世界は滅んでいたかもしれない。君たちがいてくれたから、ツインテイルズは勝つことができたんだ。それは……この世界の人たちもみんなわかってるはずさ」

「も、もー！　あらたまってそんなこと言われたら、照れちゃうよっ！」

「この世界のアイドルがツインテイルズだって言うなら、君たちだって今は立派にその一員、テイルピンクだろう？　胸を張ってこの世界の一員だって名乗ってもいいんだ」

　だから俺は、腕に抱きついている姉妹を抱きしめ返した。

「ロエル、リルナ……ありがとう」

　父親が、娘たちにそうやって愛情を示すように。

　慧え理り那なが、うんうんと何度も頷うなずいている。

「さりげなくテイルレッドじゃなくてツインテイルズがアイドルって言い直すそーじかっこいい……好き……」

「その言葉を総そう二じ様に聞こえるように言えない時点で愛香さんこそこの争奪戦においてはお客様なんですよねあああああああああああああ!!」

　トゥアールオーが不在となって空洞になっている格納スペースに向けて、愛香がトゥアールを放り投げる。ちなみに、トゥアールオーの全長は一〇〇メートル以上だ。

　基地を廻り終え、姉妹は満足げに互いの手を繋つないでいる。

「今日は本当にありがとう！　ロエルたち、次に戦う時は思いっきり世界のみんなにアピールしちゃうね！　ロロリーもこの世界のみんなのアイドル、ツインテイルズなんだって!!」

「ああ。その時はまた俺も同伴するよ」

　彼女たちの安全を守りつつ、その宣言を見守りたいからな。

「バイバーイ」

　姉妹は早速、紹介されたばかりの転送ゲートを活用。

　イースナのマンションに設置された転送ポイントへと送られていった。

　いつかこの場所で、姉妹を元の世界に見送る日が来るのかな……。

　トゥアールよりもむしろ、愛あい香かの方が名な残ごり惜おしそうにしているのが印象的だった。

　　◇

「なーんてね♪」

　ちろりと舌を出すロエル。

　地下基地でバイバーイして帰ったかと思われていた双子姫だったが……しばらくして、こっそり総そう二じの家に戻ってきていた。

　女たちの騙だまし合いはすでに始まっている。

　自分たちの位置情報はトゥアルフォンで把は握あくされているだろうと考え、仮住まいのマンションに一度戻ってトゥアルフォンを置き、テレポート能力を使って観み束つか家へと密かに戻ったのだ。つまり姉妹がここにいることを、今は誰だれも知らない。

　総二の自宅には、何度か遊びに来た。お風ふ呂ろ場ばの位置も把握済みだ。

　姉妹は抜き足差し足お姫足で、浴室を目指す。

　未み春はるが廊下の奥で微笑し、こちらにあえて気づかないふりをして去って行ったように見えたが、気のせいだろう。ばれてない。

　脱衣所に入ると、浴室からシャワーの音が聞こえてくる。曇り硝子ガラスの向こうにうっすら翳かげるシルエットは、男のものだ。それに脱衣カゴには、さっき総二の着ていた赤いシャツや男物のパンツが一番上にある。

　間違いなく、今入浴しているのは総二だ。

　ロエルは小悪魔チックな微ほほ笑えみを浮かべ、てきぱきとドレスを脱いでいく。

「ね、姉様……やっぱりやめようよ……総二と一緒にお風呂に入るなんて嫌だよ……」

「そう言ってるけど、リルナちゃんの方が脱ぎ終わるの早かったよ？」

　明日の一国を担う高貴な姫たちが、堂々たるすっぽんぽんで決戦に臨のぞむ。自国の城で総二たちと一緒に入浴した時のような、湯浴み着といった甘えはもはや、捨て去った。

　そう、これは戦いだ。

　ロエルたちは総二の周りにいる女子に比べ、一緒に過ごした時間が極めて短い。

　その差を埋めるためには、何よりも積極性が重要なのだ。

　リルナは大好きな姉の裸を見て、顔を限界までとろけさせる。

「ああ……姉様の裸、キレイだなぁ……」

「リルナちゃんの裸のコピペだよー？」

　双子ゆえの微笑ましいやりとりの後、二人は頷うなずき合い、浴室のドアを開ける。

「えへへ～、お兄ちゃ～ん、一緒にお風ふ呂ろはーいろっ♡」

「勘違いするなよ総そう二じ、ボクは嫌で嫌で仕方がないんだが、姉様がどうしてもって……」

　ロエルたちの城の浴場と違い、平均的一軒家の標準的な広さしかない浴室内は湯気で隠れることもなく、そこにいる人物がくっきりと見えた。

「やっぱ来たわね」

　腕組みをして仁王立ちする、全裸の愛あい香かが。

「「にゃああああああああああああああああああああああああああああああああ!!」」

　絶叫し、抱き締め合って腰を抜かす姉妹。

　トゥアールが小悪魔系幼女と称する双子姫──ロエルとリルナが合体した魔法少女ロロリーは、愛香とは因いん縁ねん浅からぬ仲。

　ロロリーの世界での貴の三葉ノー・ブル・クラブとの決戦の終局。純真無む垢くに振る舞っているロロリーが本当は腹に一物抱かかえていることを見抜いたテイルブルーは、彼女とガチの戦いを繰り広げた。

　そして最後は愛香が持ち前の威圧感で双子姫両方を屈くつ伏ぷくさせて事なきを得たという顚てん末まつを、総二は今も知らないままだ。

　きっと愛香も双子姫も、秘密にしたまま墓まで持っていくつもり

だろう。

「どうして……カゴにお兄ちゃんが脱いだ服があったのに！」

「昨日きのう着替えた分が洗濯カゴにまだあったから、一番上に移動させといたのよ。さっき見たそーじのシャツと色が同じだったから、勘違いしたみたいね」

　その上で愛香は、自分の脱いだ服はカゴに入れずどこかに隠しておいたのだ。

　僅わずかな手間で最大の効果をもたらすトラップを設置する──生きつ粋すいの狩人の業わざだった。

「さっ、一緒にひとっ風呂浴びて親睦を深めるわよ！」

　愛香が威圧感たっぷりに一歩踏み出したので、姉妹は「ひっ」と声を上げた。

　裸の愛香は、放たれる闘気も剝むき身だ。

　かつて愛香に散々脅されたトラウマが蘇よみがえったのか、ロエルとリルナは腰を抜かしたまま震ふるえて動けない。

「あああ愛香お姉ちゃん、普段とノリが違くないっ!?」

「あんたらみたいに常識無いのを相手にするには、あたしも多少常識を捨て去らなきゃいけないって腹括くくってるだけよ」

「ボクたちのせいにするな！　キミは最初っから非常識が意思を持って歩いているみたいな生物だよぅ!!」

　言葉とは裏腹、愛香は極めて冷静に全裸になることを選択していた。

　お風呂──誰だれもが裸となる彼かの戦場では、自分は最弱の一人に数えられる。

　トゥアールの胸は、同じ人類とはとても思えない。きっとあの中には未知の寄生生物でも棲んでいるのだろう、と強引に納得している。

尊みことにも勝てない。唯ゆ乃のにも勝てない。慧え理り那なも……変身後は屈指の巨乳を誇るため、変身前とで胸囲の平均を算出するとやっぱり勝てない。

そしてイースナにも……悔くやしいが、負けている。本来なら、中学にもまだ上がらないような年齢の女の子に、だ。

だが——この双子姫となら、対等に戦える。一緒に入浴しても、怖おじける必要はない。

トゥアールが聞いたら爆笑を通り越して思わず一筋の涙をこぼしそうな思考回路だが、愛あい香かは真剣だった。

総そう二じを好きな女の子が参加者となる、バストトーナメント。

その栄光の敗者決定戦が、観み束つか家の風ふ呂ろ場ばで人知れず始まろうとしていた。

「だいたいお前、ボクらじゃなく総二がお風呂に入って来てたらどうするつもりだったのさ!!」

「………………」

リルナに痛いところを突かれ、愛香は沈黙で応こたえる。

「それはそれでって顔してる！　えっちー！　お兄ちゃんに言いつけてやるんだからー!!」

「別に言いつけるなら言いつけてもいいわよ、それでそーじがどんな反応するか興味あるし」

「無敵かこいつ!?」

軽く顔を赤くする愛香と、輪をかけて顔を青ざめさせるロエルとリルナ。

愛香は這はってでも逃げようとする姉妹を両脇わきに抱かかえ込み、浴室内へと連れ戻す。

抱えられたせいで、愛香の身体からだの感触がダイレクトに双子姫に伝わる。

「うわー胸が無いー!!」

「固いー!!」

　リルナとロエルはこれ以上文節を削りようがないシンプルな罵ば倒とうで抵抗するも、彼女たちのか弱いプリンセス腕力では、蛮族ホールドを一ミリたりとも緩ませることはできない。

「今日はたっぷり語り合いましょ、あたしも異世界からきたお姫様たちをきちんとおもてなしするから」

「お兄ちゃ――――――――ん助けて――――――――――――――っ!!」

「っ……！　降ろせ！　降ろしてくれよぉ！　恐怖で……我慢が……………………あっ……」

　ばたつかせていた足を急にぎゅっと閉じ、やがて全てを諦あきらめたように弛し緩かんさせるリルナ。

　彼女が何な故ぜそのように行動が遷せん移いしていったかの理由が判明する前に、バン、と音を立てて浴室の扉が閉められる。

　それはさながら、ホラー映画のラストで最後に残った一いち縷るの希望を絶ち切り暗転させる、救いのないバッドエンドを思わせた――。

ａｆｔｅｒ６　その後の普通の人々。

喫茶店〝アドレシェンツァ〟。

俺の家の喫茶店は、今日も個性豊かなお客さんで溢あふれている。というより、いつも満杯だ。

これでも、トゥアールの手を借りて少し店内を増築をしたのだ。建物の外観は変わらないので、地下基地と同じような技術で空間拡張を行ったのだろう。

極端に増築しないのは、この店の内観に思い入れがあるからというのと、母さんはカウンターから店内のお客さんの顔が見える広さのままでいたいそうなのだ。

……多分、ここに来るお客さんもそう思っているだろうな。

壁には各国の著名人のサインが飾られている。ひときわ目を引くのは、デックさんのサインが書かれた映画『ＴＷＩＮＴＡＩＬＳ』の宣伝ポスターだ。

デックさんの映画……最高だったな。

仲間みんなと観に行って、感動した日のことが忘れられない。

アルティメギルとの最終決戦で全世界に先行公開されることとなった、実写版のテイルブルー衣装。それを華々しくまとったデックさんと、吹っ切れたように熱い演技をする妙齢のテイルレッドの織り成す、一大スペクタクル。

今回は発表時から変わらずテイルレッドとテイルブルーがメインの内容だったが、シリーズ化が決定したらしく、今度は他のツインテイルズが出る可能性も示し唆されている。

今作のエンドロールの後に、テイルイエローのブレスを誰だれかに渡そうとしているデックさんのカットが挿入されたのが、実に心憎い演出だった。

デックさんとは今もたまにビデオ通話をしたりするし、俺にとっ

て歳の離れたよき友人だ。

　学校から帰宅した俺は、店に顔を出し、常連さんたちと挨あい拶さつを交わしていった。

　増築で追加された丸テーブルの一人席では、恋れん香かさんがコーヒーを飲んでいる。

「総そうくん、こんにちは」

　恋香さんはちょっとした世間話をした後、愛あい香かの話題を切り出した。

「そういえば総くん、愛香のこと、ちゃんとぎゅっとしてる？」

「あ、それは、その……はい、すみません……」

　人との繫つながりを無意識に求めてしまう──俺の後遺症めいた発作のことは、恋香さんにも知られてしまっているようだ。

「あ、私ね、むしろ総くんに感謝してるのよ。愛香も、抱きしめられた方が落ち着くみたいだから、遠えん慮りょしないでどんどんしてあげて」

　やっぱりそうなのか。愛香本人もそう言っていたけど、恋香さんも知っているとなると、俺を気遣った方便というわけじゃなさそうだな。もしかすると、みんなもあの戦いで死力を尽くした後遺症のようなものがあるのだろうか……。

　若干邪悪な笑顔を浮かべている気がする恋れん香かさんに、軽く手を振って別れる。

　珍しく、桜さくら川がわ先生が一人でカウンターに座っているのを見つけた。

　そしてその隣に立っているのは、この店の看板娘がすっかり板についたポニーテールの少女、結いわ翼ばね唯ゆ乃のだ。桜川先生の話し相手をしているらしい。

　唯乃は社会勉強を修行と考えているらしく、驚くほど真ま面じ目

めにアルバイトをしている。

「……それでな、この前部下のメイドにアナザーテイルブルーの感想を聞いたんだよ。そしたら『アナザーテイルブルーって何ですか』って……ひどいだろう……？」

　アルコールは入っていないだろうが、けっこうメランコリックな雰囲気になっている。

　そういえばトゥアールも悩んでたな、誰だれもテイルホワイトを憶おぼえてないって。

「こればっかりは仕方ねえだろ。センセ、出撃回数自体が絶対的に少ねーんだし」

　そういう唯乃はアルティメギルとの決戦が終わってから一度も出撃してない……。出撃ローテーションに入る話もあったのだが、唯乃本人がのんびりと躱かわしていた。

「少なくとも、覚えておいて欲しいぞ。それに私のテイルブレスも安定して使えるものじゃないらしいから、変身すべき時は見極めなければいけないだろう？」

　忘れられることに落ち込みはするが、だから無む闇やみに出撃したい、などとは言い出さない。

　こういうところ、桜川先生は大人だと思う。

　俺なんて、テンパるとクラスの真っ只ただ中なかで気安く変身したりするもんな。

「でも、何か気になるんだよ。最近、周りの人間の物忘れがひどいように感じてな……まあ、それだけ平和になったということなのかもしれないが」

　穏やかに微笑する桜川先生と裏腹、それを聞いていた唯乃の唇くちびるが何な故ぜか厳しく引き結ばれた。そして、眉まゆ根を顰ひそめて考えごとをしている。

　桜川先生は、自分たちを見ている俺に気づいたようだ。

「おっ、観み束つか。結婚！」

…………。……え、それで終わり!?　なんか「おはよう」と同じぐらいの気軽さで言われているんだけど!?

「オイルフィールドアゲマス」

　後ろの席から、常連さんに挨あい拶さつをされる。

　そうか……挨拶にも、色々な形があるということだな。あの人は本気なのだが。

「そうだ結翼、出席日数は大丈夫なのか。お嬢様の護衛の傍かたわら教師をしている私が言うのもなんだが、すでにまずいだろう」

「まー許してくれよ、色々考えてっから。そういや総そう二じ、ロエル姫とリルナ姫は？」

「ロエルたちはちょいちょい学校に遊びに来て、マスコットみたいな扱いになってるな」

　いわゆる「最終決戦救援組」の縁でか、唯ゆ乃のはちょくちょくロエルたちのことを気にかけてくれている。同じマンションに住んでいるので、家族意識めいたものがあるのかもな。

「おう総そう二じ！　俺様そろそろ休憩入っからよ、暇ひまだったら店員手伝ってくれ！」

「お前にそういうこと言われるの、すっごい不思議な感じがするな……」

　でも、ちょっと嬉うれしいな。

　元々こいつとは気さくにやり取りをしていたけど、それにしたってまさか、アルバイトまで共有できるようになるなんて思わないじゃないか。

「テイルオン」

　俺はテイルレッドに変身し、唯乃から渡されたオーダー帳を手に取る。

　人ひと心地ごこちついた唯乃が「えっ？」という顔で二度見してきた。



「そこで自分がウェイターをやるんじゃなくて女の子に変身してウェイトレスすることを即断してしまう愛いとしき息子を見守る母の目」

　言葉で全部説明して俺を見てくる母さん。

　まったくだ。何をやっているんだ、俺は。朝起きて伸びをするぐらいの自然さでテイルレッドに変身してしまったぞ。

　え…………何やってんだ、マジで。

　え!?　俺……え!?

　案の定、店内ではどよめきが土石流のように溢あふれていく。

「その素晴らしき成長を評して、総そうちゃんにも未み春はる賞を授与するわ!!」

　愛あい香かやトゥアールがもらっていた謎なぞ賞を俺も授与され、周囲からは拍手を贈られる。

　そして快音を響かせていたお客さんたちの手は、挙手へと変わっていった。

「テイルレッドちゃん！　いや……店員さん！　コーヒーおかわり!!」

「私パスタ、一口目あーんして！　明日から頑張って会社行くから!!」

「一分おきに店のメニュー全部持ってきてくれ――っ!!」

　めっちゃオーダーが入るぞ。まあ自じ業ごう自じ得とくだぞ。

「こうなったら、フォーラーチェインにチェンジして高速オーダーだ!!」

「うーん店内がソニックブームで吹き飛ぶわねえ」

　アルバイトが自発的にオペレーションの効率化を図るも、オーナーに制止される。

　ていうか唯ゆ乃のの時はのんびりとしたもんだったのに、みんな絶対楽しんでるだろ!!

　俺はこれまでの戦いで培つちかったツインテールを全開し、必死に注文を捌さばいていく。

「あーごめーん店員ルレッドちゃん、豆挽ひくの追いつかないわ！　コーヒーその他三〇分待ちでーす！」

「あわわ……三〇分待ちで――す!!」

　俺がてんやわんやになりながら復唱すると、店内のお客さんがほえほえと顔を弛し緩かんさせる。

「では豆で構わない。マスター！　豆のままいただこう!!」

「大統領プレジデント!?」

「私パスタ、茹ゆでる前のやつでいいわ!!」

「私が時をわたって来た未来では、食糧が無い時は何でも食べた……食器をくれ！　噛かむ!!」

「オイルフィールドノミマス」

　異次元の追加オーダーが、手加減なく積み重なっていく。

「わ――――――もう無理助けて――――――――っ!!」

　安易にテイルレッドの姿で店員をしてはいけない。

　経験がまた一つ、俺を強くした。

◇　◇

　その日の三限目の授業は、クラス担任でもある樽たる井い先生の数学だった。

樽井先生の間延びした声、そして昼食を前にした午前最後の授業の相乗効果とで、抗あらがいがたい眠気に襲おそわれる。

ふと窓の外を見ると──ツインテール型の雲が青空を泳いでいた。

優しい気持ちになり、自然と目を細めたのも束つかの間ま。

「□□□□□□！」

こめかみを貫くような強烈な感覚に、俺は無意識に席を立っていた。

思った以上に椅い子すで大きな音を立ててしまい、クラスメイトたちの視線が集まる。

「はえー観み束つか君、トイレですかー？」

のほほんと聞いてくる樽たる井い先生。俺が言葉を詰まらせていると──

「総そう二じ様、エレメリアン出現です！　それも、かなりの数を検知しました!!」

トゥアールが手にした端末を見ながら伝えてくる。やはり、俺の気のせいではなかった。

もう周りに聞かれないように音声を暗号化したりしてやり取りをする必要はない。とはいえ、まさか授業中に堂々とエレメリアンの出現を聞かされるのは想定外だったが。

愛あい香かに視線をやると、力強く頷うなずいた。

「すみません……行ってきます！」

俺は樽井先生に、〝早退〟を申請する。

「はいはい、怪け我がだけはしないでくださいね～」

何でもかんでもかったるそうに流す樽井先生のことだ。自分の受け持ち授業の間に生徒が怪我をすると面倒だ、という意味もあるのかもしれないが……それでも、手を振って送り出してくれるのは嬉うれしい。

何より――

「頑張れよ観束！」

「気をつけてね、愛香！」

「トゥアールちゃんも！」

クラスメイトが男女関係なく、俺たちを激励してくれる。

自分に声をかけられると思っていなかったのか、トゥアールは少し驚いた様子だった。

「ありがとう……みんな!!」

愛香、トゥアールが先だって駆けだし、俺もそれに続く。

「そう言えば観束たち、授業中にこっそり抜けることってほとんどなかったよな」

「こういうのもいいけど、もっと『本当は正体知ってるけど気付かないふりして見送るクラスメイト』を体験したかったぜ……!!」

教室を出る間際、そんな呑のん気きな会話が耳に入ってきた。

俺が人生で一番つらかった日に、一ひと欠片かけらの勇気をくれた級友たち。

彼らの優しさに今日も背を押され、俺は日常を後にした。

第三章　ツインテールの怨念。

　連絡を受け遅れてやって来た慧え理り那なと部室で合流した俺たち三人は、転送ロッカーから地下基地へ急行した。

　状況が状況だ。一分一秒が惜しく、今日は予あらかじめ地下基地で変身を終えてから出撃した。

　レッド、ブルー、イエロー。三人揃そろって出撃するのは、いつぶりのことだろう。

　転送ゲートを抜け、高層ビルの屋上を飛び移って現場に向かう。

　目的地のオフィス街には、上空にとんでもないものが浮遊していた。

「戦艦ごと現れやがった……」

　エレメリアンの移動戦艦にしては小型だが、それでもざっと五〇メートルぐらいはある。

　そして、その見た目そのものが異様だった。

「戦艦というより、帆船のようですわ……しかも……」

「あれってやっぱ、海賊船、よね……」

　イエロー、ブルーも俺と同じ考えに至ったようだ。

　黒光りする金属めいた外装で覆おおわれているが、その全容はまさに、海賊船。

　バナナ型の船体は前面に碇を垂らし、側面に何門もの大砲を備え、甲板から屹きつ立りつした三本のマストには、それぞれ大きさの異なる帆が掲げられている。

　フィクションの世界から迷い出てきたような見た目は、ある意味これまで見てきたどのエレメリアンの戦艦よりも常世離れしていた。

　しかし俺は、ひときわ大きな中央のマストの帆を目にした瞬間、全身がかっと熱くなった。

「何だ……あの紋様は」

　帆に描かれていたのは、髑どく髏ろの紋様にツインテール属性のエンブレムをあしらった見た目のマークだったのだ。

「ツインテールを骸骨にするなんて、絶対に許せねえ!!」

「落ち着いて、レッド!!」

　ブルーに冷静になるよう促うながされているところへ、空中から黒い光の帯が飛来。

「相変わらずキレポイントがキレッキレな奴やつじゃのう……」

　呆あきれたように声をかけてきたのは、遅れて駆けつけたブラックだった。

「久しぶりにバトルで四人集合じゃな。ちょうど生放送中にトゥアールから連絡が来たのでな、メガネドンに後の仕事を任せてやって来た」

「大丈夫なのか？」

　頭を冷やした俺は、ブラックが無理をして来たのではないかと心配になった。

「正体が明るみになって以降、色々面倒もあるが……今日の場合はメリットの方じゃな。共演者や観客に声援を送られながらスタジオをフケるなど、なかなか痛快な経験じゃったぞ」

　俺たち同様、善いい沙すな闇あん子こも快こころよく見送られてきたみたいで、ほっとした。

『浮いている海賊船の動向にも注意が必要ですが、すでにかなりの数の戦闘員アルテイロイドが地上に降下しています。まずはそちらの対処を！』

　状況を分析していたトゥアールが、指示を伝えてきた。

「わかった！　いくぞみんな!!」

　四人で走りだし、途中で散開して、先行隊らしき戦闘員アルテイロイドたちの迎げい撃げきにあたる。

「モケー」

「モモケケー」

　いつもの鳴き声、いつものカサカサした動き……と思いきや、ちょっと様子が違う。

「戦闘員アルテイロイドまで、旗のマークをあしらったバンダナ巻いてやがる！」

　奴やつらが揃そろいで巻いているバンダナに描かれているのも、ツインテールの髑どく髏ろのマークだ。

「水兵……いえ、これは……」

「海賊の下したっ端ぱみたい！」

　イエローとブルーも、戦いながら同じ印象を抱いだいたようだ。

　元より戦闘員アルテイロイドは絶妙な下っ端っぽさを醸かもし出していたが、今回の身なりは完全に下っ端海賊だ。戦闘員アルテイロイドはこれまでも何種かのバリエーションが存在していたが、それは身体からだの色の違いや強化装置の追加などであって、別の格好をしていた例はほとんどない。

　だがこいつらは強化を施ほどこされているわけではなく、中身は普通の戦闘員アルテイロイドと同じで普通に弱い。一撃で吹っ飛んでいく。

　そこで最初に仮説を立てたのは、ブラックだった。

「もしやこれは、神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士たちが皆、揃いの白マントを羽は織おっていたように……」

「……部隊の正装コスチュームってわけか？」

　俺の脳裏に、神の名を背負い立ちはだかってきた、手て強ごわい

奴らの姿が浮かぶ。

「なるほど……いーい世界だ。いい感じに属性力エレメーラが育ってやがる……売りさばけば、かなりの稼ぎになりそうだぜ!!」

　そして今。俺の激闘の記憶に名を連ねんと、凄すさまじい存在感を放ちながら歩みを進めてくる者がいた。

「いいデザインだと思うがな……。ツインテールなんざ、死を招く亡霊みたいなもんだ。だから滅ぼす――あの紋章は、そんな俺たちの執念を描いたシンボルだ」

　いつから地上に降り立っていたのか。

　飄ひよう々ひようとした口ぶりで問いかけながら、大柄なエレメリアンがこちらへと近付いてくる。

　戦闘員アルテイロイドが下したっ端ぱ海賊なら、そいつはまさに、海賊船の船長。御お伽とぎ噺ばなしや映画の世界の住人さながらの風ふう貌ぼうだった。

　大きな海賊帽と、豪奢なコートを模した装そう甲こう。左目を覆おおう漆しつ黒こくの眼帯。

　そして左手には、鋭く研とぎ澄まされた重厚なフックが輝いている。

　元々の装甲なのか後天的にそうなったのか判断がつきかねるが、左足は義足のようだ。

　何より目立つのは、全身を彩いろどるくすんだ金だ。その輝ききれていない黄金こがね色は、長い年月の果てに誇示してきた永遠の輝きをとうとう失った、哀しき財宝の山を思わせる。

「……ツインテールを滅ぼす、だと。お前……たまにいるこじらせたエレメリアンか」

　旗の紋様のコンセプトを聞いてすでに怒りが湧わいていた俺は、つい皮肉めいた言葉を投げかけてしまった。ところが悠ゆう々ゆうと向き直ったかと思うと、そのエレメリアンはさらなる暴言を繰り出してきた。

「だってよぉ……ツインテールって……ダサくねえ？」

「――あ？」

　俺は自分でも驚くほど冷たい声とともに、海賊のエレメリアンへとガンを飛ばした。

　周囲の戦闘員アルテイロイドが動きを止め、ブルーたちもこちらを振り向いた。

『落ち着いてくださいレッド！　しょせんアウトローなエレメリアンの戯言です!!』

「……そうだな。アルティメギルがいなくなってからのうのうと姿を現していきがっているこいつの方が、最高にダサい」

　俺はツインテールに滾たぎる炎を鎮め、現れたエレメリアンと真っ向から対たい峙じする。

「お前の思想は勝手だが……ツインテールを悪事の象徴として掲げることは、許さない!!」

「悪事？　慈善事業って言って欲しいもんだな！」

「……！　そういえばさっき、売りさばくとかどうとか言ってたが……」

「そうよ。俺は異世界を巡ってたらふく属性力エレメーラを狩り、それを〝フリーのエレメリアン〟に売っ払うことを生なり業わいとしてんのさ。その名も属ぞく性せい海かい賊ぞく！　エレメパイレーツだ!!」

　背後に巨大な海賊船を望みながら、海賊の戦士は大おお仰ぎように諸もろ手てを広げる。

「エレメ、パイレーツ……」

　俺たちはこの数か月、スーパーアルティメギルだ何だと、新組織

を標榜した連中と何度となく戦った。だがそのことごとくが名前負けと呼ぶにも烏お滸こがましいあっけない弱さで、まるで実力が伴っていなかった。

　しかしこいつが宣言した属性海賊エレメパイレーツという名には、それらとは一線を画した重みを感じる。

「そしてお前は、その海賊組織の──」

「おうさ、俺が〝船長〟！　プロメテウスギルディ様だ!!」

　俺が聞き質ただすや、胸をそびやかして堂々と名乗り上げるエレメリアン──プロメテウスギルディ。

「プロメテウス……主神に逆らって天界から火を盗み、人々に分け与えたとされる神ですわ」

　イエローが奴やつの活性体シルエットたる神の名を言い重ね、複雑そうな表情を浮かべる。

　こいつの場合、人間から心を盗んで、エレメリアンに分け与えてるわけだからな……。

「今さらこれ見よがしな旗引っさげてやって来られてもね。最初っからあんたたちエレメリアンはみんな、人の心を盗む海賊ドロボウみたいなもんじゃない!!」

　そして、相手が神の名を冠していようと怖おじ気の欠片かけらも見せないのが、ブルーだ。

　挑発を受けた船長は、ゆっくりブルーへと向き直り──

「うわっ、びっくりした！　何か平べったい板があるから、甲板かと思ったぜ！　急に喋しやべるな、心臓が止まるかと思ったじゃねえか!!」

　わりと演技ではなく本気っぽいトーンで、怯おびえた様子をお茶目に振りまいた。

「───止めるなんて悠ゆう長ちようなこと言わないから安心しなさい。あんたの心臓、素手で抉えぐり出して握り潰つぶしてやるわ」

　エレメリアンに心臓という器官は存在しないだろうが、ブルーだったら中に何も無くても力尽くで何かを抉り出しそうで怖い。

　さらにプロメテウスギルディは、イエローたちにも値踏みするような視線を送っていたが、ブラックを見た途端に「おっ」と感嘆の声を上げた。

「なるほど……処刑人がアルティメギルを裏切ったと風の噂で聞いちゃいたが、どうやら本当だったらしい。久しぶりだな……ダークグラスパー」

「やれやれ、エレメリアンに会う度たびにそう言われるのう……顔が広すぎるのも考えものじゃ。はっきり言うが、わらわは貴様のツラなぞこれっぽっちも覚えてはおらぬ」

　念のため周囲に人の目がないのを確認しつつ、話を合わせるブラック。

　かなり離れたところでこちらを見ている人が何人かいるが、話声が聞こえる距離ではない。

「俺の記憶が……ねえか。見た目がかなり変わっちまったからな？　かつては、クロウギルディという名でやんちゃをしていた者さ」

「――――クロウ、ギルディ……！　思い出したぞ!!」

　よほど印象深い相手だったのか、ブラックは名前を聞くや即座に思い当たったようだ。

「わらわが知る限り……あのカラスほど執しつ拗ようにツインテールを嫌いだと言っていたエレメリアンはいなかった……無論、わらわが処刑した!!」

　アルティメギル随一のツインテール嫌い――穏やかではない肩書きに、俺の心がざわつく。

「そんな執拗だったかあ？　ま、いずれあらゆる者がツインテールを嫌いになるさ！　俺たちがツインテールを滅ぼすか、世界がツインテールに滅ぼされるか……いわば異世界に住む全ての生命いのちは、ツインテール相手に生存競争をしてんだからなあ!!」

「お前はその身勝手な持論で、多くの異世界からツインテールを奪ってきたのか……!!」

　よくもぬけぬけと……！　競争など、ツインテールは望んでいないというのに!!

「ああ、俺のことなんざこれ以上思い出さなくてもいいぜ。どうせ意味ねえしよ」

　もったいつけた、意味深な自じ嘲ちようとともに話を切り上げるプロメテウスギルディ。

「おうし、おめーら、暴れてやりなぁ！」

　船長の合図で、再び海賊の戦闘員アルテイロイドたちがカサカサと散開していく。

「……イエロー、ブルー！　わらわはこやつと話がある、ひとまず雑ざ魚こは任せたぞ！」

「わかりましたわ！」

「仕方ないわね！」

　イエローは快こころよく、因いん縁ねんをつけられてボルテージが上がっていたブルーは渋々、それぞれの武器を構えて走りだす。

　戦闘員アルテイロイドの殲せん滅めつを二人に任せ、俺とブラックはあらためてプロメテウスギルディと対たい峙じする。

「あんたには感謝してんだぜ？　雑な処刑をしてくれたおかげで、一命を取り留とめた俺はアルティメギルの目から簡単に逃のがれることができた……」

　自分を一度処刑したダークグラスパー……現在のブラックを目まの当たりにしても、プロメテウスギルディからは怒りや憎しみといった感情が見て取れない。

　むしろ、旧知の友でも見るかのような穏やかな眼まな差ざしを向けている。

「雑じゃと……!?　馬ば鹿かな、レッドや焼き鳥のようにわらわと

実力が拮きつ抗こうしている戦士ならいざ知らず、あの時の貴様のような下したっ端ぱにとって、カオシックインフィニットは完かん璧ぺきな処刑法じゃ！　どう間違っても生還などできるものか!!」

「処刑ってんならカンペキに息の根を止めればいいんだよ。圧倒的な力でもって爆散させればいいんだ。異空間に放ほう逐ちくするなんていうお情け技じゃ、万が一で生き残るやつが出たって不思議じゃねえだろ。そしてそのたった一本の籤くじを引いたのが──俺だ」

　嘲あざけりの吐と息いきを漏もらすプロメテウスギルディ。

「□□□□□□」

　自らの甘さを指摘され、ブラックは唇くちびるを強く引き結んだ。

　処刑人でありながら直じかに生命いのちを奪うことを由よしとせず、属性力エレメーラの深しん淵えん世界への封印を処刑技として完成させたのは、イースナの弱さではない。優しさ、心の強さだ。

　俺が言い返そうとするよりも先に、ブラックは晴れ晴れとした笑みを浮かべた。

「言いたいことは色々あるが……ドヤ顔で処刑が甘かったなどと煽あおられた以上、けじめはつけねばなるまいな」

　神眼鏡ゴツドめがねのブリッジを指で押し上げ、ダークネスグレイブを手にするブラック。

「ただし、もうわらわは処刑人を引退した身じゃ。処刑ではなく……この世界を守るツインテイルズの一員・テイルブラックとして、今度こそ完璧に倒してくれようぞ!!」

「おお、そうかしこまってくれんなよ。俺だって組織をフケた身だ、過去の肩書きは抜きにして、純粋に敵味方ってことで楽しもうや！　グアッハッハッハ!!」

　ブラックの清せい澄ちようなまでの闘志を目まの当たりにし、プロメテウスギルディは右手に剣を出現させた。

　湾曲した刃やいばに、ナックルガードで覆おおわれた柄つか……

カトラスなどと呼ばれる形状の刀剣だ。

　その刃に刻まれた模様はまるで、何度も砕けてその度たびに繋つなぎ合わせた亀き裂れつのようだ。

「そりゃああ!!」

　繰り出される剣技も、海賊ならではの荒々しさ。

　俺は受け止めたブレイザーブレイドに、久方ぶりの重い衝撃を感じていた。

「……強い……！」

「口ぶりの割りには、微み塵じんの油断もねえ……。テイルレッド、お前、首領を倒した後も怠けずに鍛きたえ続けていたようだな!!」

　どいつもこいつも、みんな俺が腑ふ抜ぬけて弱くなってると思い込んでやがる！

「意識して鍛えたりはしないさ。けど俺は、ツインテールを決して怠けない！　いつでもどんな時でも自然体でツインテールと向き合う……ただ、それだけだ!!」

「ヘッ……恐ろしく可か愛わいい見てくれとは裏腹、その信念はだいぶ奇き妙みよう奇き天て烈れつ！　これは手て強ごわそうだぜ！　滅ぼし甲が斐いがある!!」

　俺の信念が奇妙奇天烈だと……!?　話が合いそうにないな!!

　何より……俺のツインテールは、滅びない!!

「どぉうらああああ!!」

　プロメテウスギルディが剣を振るうと、波のような衝撃波が地を這はい向かってきた。

　俺とブラックは、それぞれブレイドとグレイブで衝撃波を斬きり伏せる。

「そういえば、まだ思い出せぬことが一つある。貴様の属性じゃ。

ツインテールを嫌っていたお前は何を求め、この世界へとやって来た!?」

　ブラックの言う通り……普通のエレメリアンなら、名乗る時には己の属性も口にするのが常だ。ましてこれだけ豪胆な戦士が、何な故ぜ堂々と属性を明かさないのか。

　その理由は、本人の口から簡潔かつ意外な形で語られた。

「さあな、俺も知らねー」

　聞き違いを疑い、俺とブラックは思わず目配せし合った。

「俺は自分が何の属性か知らねえんだよ。処刑されて、九死に一生を得た後……記憶喪失になっちまったからよお。ほとんど何も覚えてねえんだ」

　プロメテウスギルディは衝撃の事実を飄ひよう々ひようと口にするや、コートをなびかせながら猛たけ々だけしく疾しつ駆くしてくる。

「アルティメギルにいたこと、お前に処刑されたこと……そして自分てめえがツインテールをよく思ってねえこと。覚えてるのは、死にかけたほんの少し前後のことだけさ。そのせいで、何を愛すればいいかわからなくなっちまった!!」

　疑問を投げかけてきたブラックに、これが答えだといわんばかりに痛烈な一いち斬ざんを放つ。ブラックは鎌かまの刃やいばの腹に手を添え、その攻撃を受け止めた。

「馬ば鹿かな！　エレメリアンが自分の属性を見失ったじゃと!?　それこそ、絶対に有り得ん！　たとえ記憶が無くなったとしても、本能でわかるはずじゃろう!!」

『そうです、エレメリアンにとって、属性とは言わば生物学的分類ですよ!?　事故で記憶をなくした人が、自分が犬か猫かわからないと悩むようなものです!!』

　エレメリアンに復ふく讐しゆうを誓い、ずっと研究をしてきたトゥアールも、こんな事例には遭遇したことがないようだ。通信越しに、かなり動揺しているのが伝わる。

「嘘うそじゃねえ。その証拠に、身体からだのどこかに刻まれている属性力エレメーラの紋様エンブレムも消えていた。ま、属性力エレメーラが心に大きく左右されることの弊へい害がいだろうよ……心と記憶は相関関係にあるからな」

　荒くれ者のようでいて、頭の切れる奴やつだ。こいつは自分の置かれた状況を、冷静に俯ふ瞰かんして見ている。

　そうして俺とブラックがプロメテウスギルディと小競り合いを続けているうちに、戦闘員アルテイロイドを殲せん滅めつしたブルーとイエローも再び俺たちと並び立った。

「そんなに驚くことかぁ？　別にいいじゃねえか、属性なんて何でも」

　ツインテイルズ四人を前にしながらあえて曲剣を地面に突き立てて無防備をアピールし、大おお仰ぎように嘆息するプロメテウスギルディ。

　エレメリアンなら絶対に口にするはずのない言葉を、いとも容た易やすく嘯うそぶきながら。

「ちょいと昔話をするよ。復活してからしばらく経たったある日俺は、自分が無性に巨乳が好きなことに気づいたんだ。なら当然思うだろう、そうか俺は巨乳属性ラージバストなんだってよ」

「殺すわ」

「貧乳、ちょっとステイ！」

　速攻で飛びかかろうとしたブルーを、ブラックが身体を張って制止する。

　お姉ちゃんになったね。

「ところが、だ。次の日俺は、とてつもなく貧乳が好きになってた。世界の全てが貧乳になってしまえばいいとさえ思った」

「殺すわ」

「貧乳ステイ……って、何でイエローも並んで『待て』しとるんじゃ、楽しくなっちゃったのか!?」

　ブルーの横で待てをしているイエロー。奇くしくも横並びになった二人の胸元に順に視線を送りながら、プロメテウスギルディは続けた。

「そしてさらに次の日……もはやおっぱいへの興味は塵ちりと消えてた。時代は尻しりだ、と猛たけったぜ。そこでようやく気づいたのさ──ああ、俺の核こころは空っぽなんだってな」

　自身の胸に手を遣り、自じ嘲ちようをこぼす。

「地獄の始まりだった……俺は今でも、属性を一日しか維持できねえ。つまり、何か一つの物を心から愛することができるのは……一日だけだ」

　気分で何かを変えるにしたって、一日というサイクルは性急に過ぎる。

　まして自分を形作る大切なファクターが、目まぐるしく流る転てんしてしまうとしたら……。

「苦しんで、苦しんで……その果てに俺は、難しく考えんのをやめることにした。広く浅く、何でも好きになって楽しめばいい、ってな！　そうしてこの強さを手に入れたのさ!!」

「ふざけるな、属性力エレメーラってのは何かへの思い……『自分だけの大好き』が形になった力だろう！　広く浅くなんてことで強くなれるものか!!」

「強くなれるものか、って言われてもな。ならなきゃ生きられなかった。そんだけさ」

　にわかには信じられない。信じられないが……こいつが口から出任せを言っているとも思えない。

　本当にあり得るのか、属性が日替わりのエレメリアンなんて……。

『……突然変異のエレメリアンというわけですね。マーメイドギルディが研究していた、エレメリアンの生物的進化……ある意味その形の一つかもしれません』

　異世界は広い。

　アルティメギルの管理を離れたエレメリアンの中には、いわゆる突然変異体が出てきても不思議じゃないってことか。

　俺も反射的に否定の言葉をぶつけてしまったが……苦しんで苦しんで、そうしなければ壊れてしまいそうだという状況が、今のこいつを創つくり上げてしまったのか……。

「しょせん俺らは根無し草！　今日は貧乳、明日は巨乳……愛でる属性を気楽に切り替えて愉たのしむ海賊稼業よぉ!!」

　絶望という大海原を乗り越えた海賊は、天高く豪笑し──

「くたばって」

「おぶっふ!!」

　シンプルな殺意をまとったブルーの前蹴げりを炸さく裂れつさせられた。

「おぐぐぐ……夢を語り大笑している男の腹に蹴り入れるたぁ……あまりに無粋！　あまりに野暮！　そしてすまねえ、今日は貧乳の気分じゃねえから帰ってくれ!!」

「日によって好みを切り替えるなんて悠ゆう長ちようなことね……あたしは巨乳好きのエレメリアンも貧乳好きのエレメリアンも平等に血祭りに上げてやるから、安心しなさい」

　マジだから困る。

　こいつら俺たちに、何で大きな戦いが終わったのに油断してないんだ、とか言うけどさ。

　毎回わざわざブルーを煽あおって怒りの炎にガソリン満載のタンクローリーくべてんだから、そりゃ火の勢いだって弱まりゃしないだろうと。

「本人が言ってるとおり、こいつの属性なんてどうでもいいわ。さっさと倒すわよ!!」

「おうさ、来るなら来な！　ぬおうりゃあああ!!」

　プロメテウスギルディは、左腕のフックをブルー目掛けて猛然と

射出した。

「属性玉エレメーラオーブ──脚属性レツグ!!」

　追撃に備えてか、ランスで弾はじかずに強化を付加した蹴けりでフックを弾き上げるブルー。

　しかし長大な鋼線で腕と繋つながったフックは、弾かれた後も勢いを緩めず、俺へ、次にイエローへ、ブラックへ……軌道を変えながら蛇のように襲おそいかかってきた。

　軌道であやとりのように模様を描きながら、反撃の隙すきを与えず乱舞するフック。

　こいつは明らかに、複数との相手に慣れている。

　やがて俺たち全員に攻撃をいなされ、フックは収縮してプロメテウスギルディの手首に収まった。

「皆さん、わたくしたちも最強変身チエインエヴオルブして一気に倒しましょう!!」

「メガ・ネがおらぬから、わらわはこのままじゃ」

　いってらっしゃーい、とばかりに手を振るブラックから、俺たちは一歩前に進み出た。

『……〝最強変身チエインエヴオルブ〟かい。その「お宝」……いただくよ』

　突然、周囲にハスキーな女性の声が響く。

　その直後、俺たち四人の体が急に発光を始めた。黒と金と銀がマーブル模様となった、ひどく不気味な光だ。

「何の攻撃も受けていないのに……どうしてだ……!?」

　困惑する俺を余よ所そに、その光は俺たちの体から勢いよく飛び出し、数メートル上空で静止した。長方形に形取られたかと思うと、やがてそこに、写真を現像するようにうっすらと何かが浮かび始めた。

「あれは！」

　最初に気づいたのは、俺だった。俺とブルー、イエロー、ブラックがそれぞれ最強形態に初めて進化したまさにその瞬間が、まるでポスターのように切り取られている。

　その四枚のポスター状の光は、俺たちが何かをする暇ひまも与えず、空高く急上昇。上空に停泊していた海賊船に吸い込まれるようにして消えていった。

「何よあれ、気持ち悪い……」

　隠し撮りをされたような気分になったのだろう、ブルーが嫌悪感を露あらわにする。

『念写の類たぐいでしょうか……？』

　ホラー映画や心霊番組などが好きなトゥアールは咄とつ嗟さに口にしたようだが、言い得て妙だな。カメラを持った者が本来知るはずのない映像を写真に映し出す……まさに念写だ。

「……あれ……？」

　最初に自身の異変に気づいたのは、ブルーだった。

「…………エターナルパッドが……出ない!!」

　言われて俺はツインテイルブレスを、イエローはアブソリュートリングを出そうと試みるが、結果は同じだ。

「お前らのお宝……奪ったぜえ――っ!!」

　プロメテウスギルディは勝ち誇り、左腕のフックの切っ先をこちらへ向けて挑発してくる。

「わらわたちが強化する力そのものを……奪ったというのか!?」

　さっきの写真のような何かは、俺たちの力そのものを形に変えた現象なのか!?

　メガ・ネがこの場にいない以上、ブラックは確かめようがないが、この分では彼女もメガ・ネとの合体ができなくなっている可能

性が高い。

　何かトリックがあるはずだ。相手の強化能力そのものを奪うなんて……エレメリアンの能力の限界を超えている！

『──ああ。あんたらのお宝、確かにいただいたよ』

　先ほど周囲に響いたハスキーな女性の声が、今度はより間近で、はっきりと聞こえた。

　プロメテウスギルディの背後でぼんやり浮かんだ影が、徐々に人の形に像を結んでいく。

「……プロメテウス……ギルディ……？」

　思わず、確認するように呼びかけてしまう。

　俺たちが今まで対戦していた、全身をくすんだ金色に彩いろどられたプロメテウスギルディが、余よ裕ゆう綽しやく々しやくに胸をそびやかす。

　その隣に何と──現れたもう一体のプロメテウスギルディが並び立った。

「分身体か!?」

　ブラックが真っ先にそう推測するが、明らかに別個体だ。口調が違う。声の高さが違う。

　それ以上に外見が──今まで目にしていたプロメテウスギルディと、大きく異なっていた。

「乳が……乳がデカい……」

　導かれるように胸部へ視線が吸い込まれたブルーだが、胸の有る無しだけじゃない。

　全身は、光沢を失ったような鈍い銀色。金色の方は眼帯も手のフックも義足も左にあるが、女性の方は逆にどれも右側だ。

　くすんだ金と銀、二体のプロメテウスギルディが並び立つ。

　まさに左右対称、揃そろったことで明らかに存在感が増した。

「あたしはお宝を奪うなんて悠ゆう長ちようなことは言わないわよ……デカい乳は全て消滅させるわ」

　ッ……刺すような殺気だ！　敵の正体より胸の大きさの方が重要だとばかり、ブルーの声のトーンが見る見るうちに下がっていく。

　隣に立っているだけでこのプレッシャーだ、直接向けられた銀のプロメテウスギルディは殺意の暴風に晒さらされているはず。

「うーん、この娘こは何食ってここまで堂に入った恫どう喝かつができるようになったんだろうねえ⁉」

　しかし当人はむしろ、その殺気を心地ここちいいとばかり事もなげに受け止める。

「まさか、ご夫婦のエレメリアンでしょうか……」

　ペアルック……と言っていいのかわからないが、あれを見ればそういう考えも浮かぶ。

　イエローが最後に戦った強敵は、結婚属性ブライドのゼウスギルディだ。今いま際わの際きわに、エレメリアンでは決して叶かなわぬ結婚を望んでいたと聞く。

　もし目の前にいる新たな敵が夫婦のエレメリアンだったなら……その好敵手の悲願をあっさりと叶えた存在だということになる。イエローも複雑な気持ちになるだろう。

「違うな」

　金のプロメテウスギルディはぴしゃりと言い放った。

「俺の名はプロメテウスギルディ‼」

「あたいの名はプロメテウスギルディ‼」

「「二人揃そろって」」

　そして二体は互いの持つ曲剣を掲げ、頭上で交差させた。

「「プロメテウスギルディ‼」」



　耐え難がたい静寂が周囲を支配する。想像以上にヤバい奴やつらだった……!!

「……つまり、あいつらは何なんだ!?」

「馬ば鹿か」

　勢いに圧おされて動揺する俺の問いに、ブルーが掛け値無しに単純明快な理ことわりを示す。

　姿形が全く同じ分身体だったらわかるぞ。何度か戦った。

　けどこいつらは、人格を共有しているわけでもない、見た目も全く違う。

　それなのに同じ名前を名乗っているって……わけがわからないぞ。

『二つの身体からだに、一つの意思が……プロメテウスギルディは、元々一体のエレメリアンだったのが今の姿に分裂したのではないでしょうか……』

　トゥアールがそう推察する。分身ではなく分裂、か。いずれにしても奇妙な奴やつらだ。

「あんたらのお宝……強化能力は奪った。これで俄が然ぜんこちらが有利だねえ？」

「だったらこの姿のままでブン殴なぐるだけよっ!!」

　ブルーはアスファルトを蹴けり砕いて飛び出し、振りかぶった右拳こぶしを躊ちゆう躇ちよなく銀のプロメテウスギルディの胸部に叩たたき込んだ。拳の直撃を受けた胸は、木こっ端ぱ微み塵じんに砕け散る。

「ッ……!?」

　破壊したブルーの方が、むしろ動揺している。その眼前で、銀のプロメテウスギルディの胸は周囲の光を取り込むようにして輪郭を形作り、あっさりと再生してしまった。

「そおれ!!」

　瞬時に再生するおっぱいに気け圧おされた隙すきを突かれ、したたかに蹴りつけられるブルー。

　両腕を交差させて防御するも、そのまま遥はるか後方まで吹き飛ばされていった。

「ブルー！　……この野郎……!!」

　俺とイエロー、ブラックは同時に飛び出し、二体のプロメテウスギルディに向かっていく。

　するとどうだ。ブルーと同じく、こちらの攻撃でプロメテウスギルディの肩が、腕が、頭さえもが砕け散るが、瞬時に再生する。

「ハハハハハハどうしたい、腰が引けてんぜぇー!!」

「チクチクとこそばゆいねえ!!　ドＭの属性でも愛めでさせるつもりかい!?」

　奴やつらからの反撃は幹部の戦士に遜そん色しよくない重さだ。ところが防御となると、瞬時に再生こそするものの、一般兵顔負けのひ弱さだ。

　強さと弱さが同居する相手に戦闘の呼吸を乱され、俺たちは徐々に被弾を重ねていった。

「やったわね……！」

　ブルーが合流して四対二となっても、泥沼の戦局は変わらない。

　砂でできた人形も同然に苦もなく破壊できるというのに、次の瞬間には健在な姿でこちらに向かってきている。

　同じ不死身でも、フェニックスギルディは再生能力を切り札として恃たのむだけで、あくまで自身の強さで戦っていた。こいつらは逆に、何度も破壊される方が相手の体力を削そぐことができて好都つ合ごうだと言わんばかりだ。

　まさに海賊船の旗に掲げた紋様そのままの、骸骨むくろの戦士だ。

　俺は奴やつに見えないように後ろ手にしながら、プログレスバレッターを想念する。

　……出せた！　俺が奪われたのはアルティメットチェインの力だけだから、他の形態へは進化可能だということだ。だったらこの場は、フォーラーチェインの速攻でカタをつけてやる。

「そうそう。お前が男だっていうのはわかってるぜ、テイルレッド」

　金のプロメテウスギルディにタイミング良く声をかけられ、俺は集中力を乱してしまった。プログレスバレッターが霧む散さんし、奇襲の機会をふいにしてしまう。

「……だからどうした」

「いや、何も問題はねえさ。誰だれしも、秘密の一つや二つあるもんだからなあ。ただお前ら、俺たちが狙ねらうお宝ってのがどうもうまくイメージできねえみたいだからな……。もっとわかりやすく体験してもらうには、男がちょうどよかったってだけよぉ‼」

　こいつ、俺たちを使ってさらなるデモンストレーションをする気だ。

「俺は経験でわかってんのさ。人間の男は、胸が好きだってな！　そのお宝を……奪う‼」

　再び、俺の身体からだが黒と金、銀のマーブル模様に発光する。

「てっとり早く俺を追体験してみな！　テイルレッド！　ある日いきなりおっぱいに興味がなくなった、俺をなあああああああああ‼」

『やめてえええええええええええええええええええ‼』

　通信越しにトゥアールの必要以上に悲痛な叫びが耳を打つ中、俺の身体から飛び出した光が、長方形に凝縮されていく。

「さあどうだ！　てめえはおっぱいをどう思ってんだ⁉　答えなぁ‼」

　勝利を確信したように喜色をにじませる金のプロメテウスギル

ディ。

「………。………………。………いや──特に!!」

　おっぱいをどう思っているかなんて聞かれても、こういうふうにしか答えようがない。

　ツインテールに対してのアンケートなら、いくらでも回答できるがな。

　俺の心は、微み塵じんも侵食されてはない。その事実を闘志で表すべく、俺は全身から赤い属性力エレメーラを噴き上がらせた。

「皆さん、あれを!!」

　イエローが上空を指差す。俺から飛び出したおっぱいへの「何か」は、コピー機が印刷をミスって排紙だけされた紙のように表裏両面真っ白けだった。

　銀と金のプロメテウスギルディが、俺を見て愕がく然ぜんとしている。

「ば……馬ば鹿かな!?　何も取り出せてないじゃないか！　何の情熱もありゃしないよ！　僅わずかな波紋も無い、澄み切った湖面のようじゃあないかい!?」

「あ、あり得ねえ……今までこんなことは一度もなかった……こ、こいつは、あれもこれもツインテールだ!!」

　あれもこれもツインテールなのか。

　あの、俺は普通にしてるだけなんで……そんなオーバーに驚かなくていいから。わなわな震ふるえなくていいから。

「ま、まさかあんた……元から、これっぽっちも……おっぱいに興味がないのかい……」

　銀のプロメテウスギルディは頭を抱かかえ、理不尽を嘆くように天を仰あおいだ。続く金のプロメテウスギルディはさらにオーバーによろめきながら叫ぶ。

「おっぱいにっ！　興味ねえのかああああああああああああああ

ああああああああ!?」

「声がデケーんだよ黙れコノヤロ――――ッ!!」

　取り乱した俺は雑に斬きりかかってしまい、あっさりと回避された。

「信じてたわよレッド！　あんたはそんな邪悪な意思に支配されてはいないって!!」

　ブルー、信じてくれて嬉うれしいが……そもそもおっぱいへの興味とは、邪悪な意思なのか。

「なるほどぉ……。強烈な意思の力を持った戦士たちが相手だ、楽な仕事かと思ったが……こりゃあ骨が折れそうだ。それなりに支し度たくをした方がよさそうだな、クックック……」

　汗を拭ぬぐうように顎あごを拳こぶしで擦さすり、金のプロメテウスギルディは一歩、二歩と後あと退ずさる。

「よおし、野郎ども！　今日は引き上げだよ！」

　銀のプロメテウスギルディは勇ましく腕を振り、「船員」たちに退却を促うながす。

　とはいえ、残っているのはどこにいたのか、号令でひょっこり出てきた数体の海賊姿戦闘員アルテイロイドだけだ。金のプロメテウスギルディは、手近な奴やつへと聞こえよがしに耳打ちする。

「あいつ、おっぱい興味ねえって。ヤバくねえ!?」

「マジモケ？」

　そうして連中は海賊船から照射された光に吸い込まれ、速すみやかに撤退していった。

　幻聴でなければ、今モケーにすらドン引きされたような……。

　何の被害も出さずに大軍勢を追い返したんだ、俺たちの勝利のはずなのに……。

　どうしてだろう、胸に敗北感が広がっていく。

◇

　地下基地のコンソールルームで行われる会議は、アルティメギルとの戦いが終結して以降はほのぼのとした雰囲気になるのが常だった。

　だけど、今日は違った。久方ぶりに、緊迫した空気に包まれている。

　テーブルについているのは、戦いを終えて戻った俺と愛あい香か、慧え理り那な、イースナ。そして、基地でオペレートしていたトゥアール。善いい沙すな闇あん子この仕事を終えて駆けつけたメガ・ネ。

　それに加えて、俺の母さん。これまた久しぶりに女幹部服を着ているのは、世界の危機を肌で感じ取ったからだろうか。

「……やはり、わらわもメガ・ネと合体できなくなっていた。これはコトじゃぞ」

　イースナは変身解除する前、基地で合流したメガ・ネと念のため合体を試してみたが、結果は俺たちと同じだった。

「属ぞく性せい海かい賊ぞく──エレメパイレーツか。久しぶりに厄介なやつらが現れたな」

　俺は壁のメインモニターに目を移した。

　金と銀、二体のプロメテウスギルディの映像やスキャンデータ、そして引き連れていた特殊な戦闘員アルテイロイドたちが複数のウインドウに分けて表示されている。

　規模も、能力も……全てがここ最近では度外れて脅きよう威いだ。

「ですね。単独行動の野良エレメリアンなら、ある程度強かろうと何の脅威もありませんが……組織だって行動する連中は途端に面倒な存在と化します」

　トゥアールの口調も、真剣味を帯おびている。

　何だか久しぶりに……アルティメギルと戦っていた頃ころに戻ったみたいだ。

「とりあえずイースナに話を聞きましょうか、あのエレメリアンと面識があるようでしたし」

　トゥアールに話を振られ、イースナは腕組みをして唸うなった。

「面識と言っても……あやつが本当に元クロウギルディならば、わらわが星の数ほど処刑してきた反逆者のうちの一体でしかないぞ。アルティメギルは首領がツインテールを極めたやつじゃし、そもそもエレメリアンは本能としてツインテールを愛する。そういう組織では成り上がろうとするあまり、逆張りしてツインテールを軽んじようとするのが下したっ端ぱに多いんじゃ」

　功を焦あせるあまり、あえて変わったことをしようとするんだな。

　そういえばイースナは俺たちの世界に来てすぐの頃、残存部隊でツインテールを軽んじている下着属性アンダーウエアーのエレメリアンを処罰したと聞いたことがある。

「その中でもクロウギルディはまあ、ツインテール嫌いじゃった。憎んでさえいたような気がする」

「せやね。ツインテールきらい―言うまで行くコは珍しいから、ウチも印象に残っとった」

　結局のところ、イースナも、その相棒バデイとして任務にあたっていたメガ・ネも、他のエレメリアンよりちょっと印象深かった――程度のようだ。

　一方プロメテウスギルディは、記憶を失った後もイースナを良くも悪くも因いん縁ねんの相手と認識している。両者の間には、ちょっとしたすれ違いがあるみたいだな。

「ツインテールをダサいと薄ら笑われた時は、カッとなったけど……仲間からも組織からも爪つま弾はじきに遭ったやつの、精一杯の強がりなのかもな……」

別に、誰だれが何を嫌いになろうと自由だ。

けどあいつは自分がツインテールを憎むあまり、その憎悪を異世界に住む全ての人々に押しつけようとしていた。これは今までのエレメリアンと比べて、あまりに異質だ。

存在だけではなく、行動も突然変異体なんだ、あいつは。

「わたくしはむしろ、今回の一件で色々と腑ふに落ちましたわ。野良エレメリアンと呼ばれる戦士たちが、組織のバックアップもなくどうやって活動していたのかずっと疑問でしたが……背後には今回のプロメテウスギルディのような、支援者がいたのですわね」

「なるほど。そういうアンダーグラウンドのネットワークがあれば、組織に属していないエレメリアンも生きる術すべはあるってことか」

皆の話を聞いていて、俺の中でもだんだん糸が繫つながってきた。

アルティメギルに属していなくても、はぐれ者たちのコミュニティは存在していた。

他にも俺たちの知らない規模の小さな組織が、まだまだあるってことなんだろうな。

「プロメテウスギルディは海賊を名乗ってはいますが、いわゆる義賊をしているのですわね」

あいつ本人の真意は定かではないが、行動に限って言えばそのとおりだな。

けど……義賊っていうのは、強きを挫くじいて弱きを助けるからこそ、そう呼ばれるんじゃないのか。何の罪もない無力な人間から属性力エレメーラを奪って、さも善行のように他の怪人エレメリアンに分け与えているあいつはやっぱり……海賊だよ。

「今回の脅きよう威いの本質は、敵の強さではありません。○○ギルディという、エレメリアン固有の名前を有してはいても……プロメテウスギルディの能力は、これまでのエレメリアンと比べてかなり異質です。おそらく、特別な異世界で影響を受けた姿かと」

　トゥアールの表情に深刻さが増す。さっき言っていた、突然変異ってやつか。

「そんな、本来ならば関わりを持てないほどに遠い異世界から、敵がやって来るようになった……つまり、以前から問題になっていた『異世界間の境界が薄れている』問題が顕在化してきた可能性があります。そちらの方を危険視すべきかと」

　ロエルとリルナがたびたび言っていた、異世界同士が繋がりやすくなっているという事実。

　それは別世界の住人同士が交流を持ちやすくなるという微ほほ笑えましいものではなく、それぞれの世界の存亡に関わりかねない事態だった。

「それは、アルティメギル首領を倒して落ち着いたのではなかったのでしょうか……？」

「ええ、私もそう思っていましたが……どうやら原因は他にもありそうです」

　不安げに尋ねる慧え理り那なに、申し訳なさそうに項うな垂だれるトゥアール。

　存在するだけで異世界に多大な影響を与えていたアルティメギル首領が倒れた以上、この問題も収束していくものだと思っていたが……むしろ大きくなってしまっているということか。

　とにかく鍵かぎを握るのは、プロメテウスギルディ。エレメパイレーツだな。

「数か月ぶりの大規模な部隊の襲来ね。世界の反応が気になるわ……ニュース見てもいい？」

　それまで静かに話を聞いていた母さんだったが、一段落したところでそう提案した。

　敵の情報が表示され続けていたメインモニターを、テレビに切り替える。

　ニュースを映して真っ先に目に飛び込んできたのは、大おお仰ぎように装飾された【緊急速報】のテロップだ。

「やっぱり深刻な事件として扱われてるみたいだな……当然か……」

　俺はいたたまれない気持ちになりながら、画面を注視する。

【緊急速報】　観み束つか総そう二じくん、おっぱいに興味がない

「何だこの報道はあああああああああああああああああああああああああああ!?」

　しかしモニターに映し出されたのは、それまで話し合っていた強敵の脅きよう威いが全て吹き飛ぶほど衝撃的なものだった。

　かなり離れた場所にだけど、人はいたから……金と銀のプロメテウスギルディが最後に叫んでいたことを聞かれたんだ！

「俺のプライバシーはどうなったんだ!?　変身前の俺たちのことはなるべく取り扱わないのが暗黙の了解じゃなかったのか!?」

「ネタじゃなくて、本気で心配されてるからじゃない？」

　母さんにそう言われて、速報の内容に耳を傾けると……

『つまり彼はテイルレッドたんとして戦い続けた後遺症で……本来年とし頃ごろの少年にあるべき感性が消えてしまっているのではないかと』

『それが事実であれば、由々しき事態です』

『ツインテイルズにだけ世界の平和を託していた、我われ々われ大人の責任が問われようとしているのかもしれません』

　大の大人たちがガン首揃そろえ、おっぱいに興味がない男子高校生について討論している。

　だからいつもコメンテーターとして出てくるこの名誉教授とかは何の名誉を冠してんだよ!!

　仕舞いには中継繋つながってワイプに総理大臣が映ったんだけ

ど!?　俺のことなんぞ気にしないで職務を全うしてくれよ、忙しいだろ!?

「この報道だよ由々しき事態なのは！　つーか責任感じてるならほっといてくれよっ!!」

　俺はあまりな展開に頭を抱かかえるが、それ以上にショックを受けてしまった子もいた。

「う、うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん……」

　何な故ぜか、トゥアールがマジ泣きしている。

「ちょっ……泣かないでよトゥアール！」

「だって……本当の本当の本当におっぱいに興味がなかったら、私は……」

「大丈夫だから、ホントはちょっとぐらい興味あるはずだから!!」

　泣きじゃくるトゥアールの背中を、愛あい香かが優しくさすっている。

　何だこの光景は……明日空からモケーでも降ってくるんじゃないのか!?　いや、もう今日降ったけどさ!!

「蛇だ蝎かつの如ごとくおっぱいを憎んでいた貧乳が、むしろ慰なぐさめる側に回るとは……」

「美しき友情ですわ!!」

　イースナと慧え理り那なは二人の友情を讃たたえる前に、観み束つか総そう二じくんを緊急心配して欲しい。

「総そうちゃん……ここは思いっきりトゥアールちゃんの胸を揉もんであげて？　後ろから両手で、がばしゃーと。トゥアールちゃんを慰なぐさめるのと……世間の誤解も解かなきゃ」

「そのっ……瞬間の写真っ……撮って……公式アカに、アップします……ひっぐ……」

　トゥアールは声を震ふるわせながら、ネットを震しん撼かんさせ

る大不祥事をやらかそうとしている。

「今度は別の緊急速報されちまうだろそれ!!」

　俺が拒否するや、ふえええええん、とまた泣き出してしまうトゥアール。

　今度は母さんも一緒になってトゥアールを慰める。そしてたまに、わざとらしく俺をチラ見してくる。

「俺もなんか泣きそうだ……。ドラグギルディが言ってたんだ、涙せし時が来るって……」

「落ち着け総二、もう泣いたじゃろ!!」

　トゥアールを母さんに任せ、愛あい香かが俺の元へと歩み寄ってきた。

　そして優しく肩を抱き、穏やかな声で語りかけてきた。

「つらいわよねそーじ、テレビであること無いこと言われるって……。でも、あたしならそのつらさをわかってあげられるから……」

「愛香……」

　愛香のツインテールが揺れ、催眠効果のように俺の思考を鈍らせる。

　弱った時に優しい言葉をかけられると……全て真実に聞こえてしまう……。

「悪女じゃこいつ！　騙だまされるな総二、わらわたちみんなけっこうひどい扱いじゃったぞ!!」

「わたくしも、長きにわたって目を合わせてはいけない人という認識でしたわ……!!」

　そうか……テイルレッドは愛でられるだけだったが、ネタにされるってこういう気持ちなのか。

　俺は今また一つ、仲間たちと思いをともにすることができたのか

もしれない。

　これ見よがしなな海賊船引っさげて世界に襲来した大規模部隊を差し置いて、こんなしょうもないことを話題にするぐらい、平和になったんだ。いいことなんだ。

　強く強く自分にそう言い聞かせないと、口から魂たましいが抜け出ていってしまいそうだった。

◇

　次の日登校した俺は、恐る恐る教室のドアを開けた。昨日きのうのニュースを見たクラスメイトたちが、俺にどんな反応をするか心配だったからだ。

　いや、大丈夫さ。ずっと前からテイルレッドの正体に気づいていたのに、変わらずに接してくれた奴やつらなんだぜ。

　あの報道は誤解だって、きっとわかってくれて──

「み、観み束つか……お、おはよう……」

「その……上う手まく言えないけど……」

「た、戦い……大変だったら無理はしないでね」

「疲れてないか？　昨日きのうテイルレッドたんを道端で見かけたけど……」

「私たちにできることは少ないけど、力になるから……」

　男子女子関係なく、困惑しきった表情で俺を見つめ、慰なぐさめの言葉をかけてきた。

「何で今の方がよそよそしくなってんだよおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

　いっそ笑い飛ばしてくれた方がまだ報むくわれたよ!!

　いたたまれなくなって放課後になるやすぐに教室を出た俺は、慧え理り那なと桜さくら川がわ先生、そしてお付きのメイドさんたちに囲まれた。

　ボブカットのメイドさんが俺の腕を抱き締める。妙に胸を押しつけるようにして。

「あのね総そう二じきゅん……お嬢様、今は発展途上だけど、そのうち変身しなくてもテイルイエローみたくバインバインになると思うから……それまでは、私たちでリハビリしとこ！」

　リハビリって何ですか……と聞く間もなく、他のメイドさんも次々に詰め寄ってくる。

「だいじょぶだいじょぶ、お嬢様と結婚するってことは、もう私たち全員、総二くんのメイドも同然だから！」

「少しずつ治していこうよ、メイド長も多分協力してくれると思うから、ね？」

　そう言うが早いか、メイドさんたちは俺を狩りで捕らえた獲物のように担かつぎ上げ、廊下をダッシュし始めた。

　背後から、愛あい香かのツインテールが衝撃波をまとって接近してくるのがわかる。

　周りの人がみんな……みんなガチで俺を心配している。

　これはもう、公式に否定しないとどうにもなりませんね。ハハハハハ……。

▼　心配かけてごめんなさい。大丈夫です、ツインテールが大好きなだけで、

　　ちゃんと胸にも興味はあります。（総二）

　俺が身体からだ中じゆうの穴という穴から血を噴き出す思いで綴つづったその声明は、ツインテイルズ公式アカウント始まって以来

の反応が寄せられた。

　全ては恐るべき強敵、エレメパイレーツがもたらした悲劇だ。

　絶対に……絶対に倒してみせる……俺のツインテールで!!

第四章　ツインテールの記憶。

「第二回ツインテール部夏合宿計画」

　ツインテール部部室のホワイトボードには、楷かい書しよで大きくそう記されていた。

「もうすぐ夏休みですので、合宿の予定を立てましょう！」

　ボードの横には、揺れるツインテールも厳おごそかに、自信満々の表情で踏み台に立つ慧え理り那な。

　そして長机でそれを見る俺と愛あい香か、トゥアール、イースナ。

　珍しく、今日は唯ゆ乃のの姿もある。椅い子すの上で胡座あぐらをかく癖くせは、相変わらずだ。

　あとは桜さくら川がわ先生が、慧理那から少し離れて控えていた。

　去年も慧理那が先頭に立って進められた合宿の計画だが、今年はまだ夏休みの数週前……早い時期から立案された。入念に予定を練りたいということだ。

　合宿か。部員の人数も増えたし、講堂のような場所でツインテール講座を開くのもいいな。

　俺たちそれぞれがツインテール持論をぶつけ合い、切せつ磋さ琢たく磨まするのだ。

　そうだ、密かに書き溜めていた俺のツインテール論文を発表するのはどうだろう？

「今年は山とかよくない？　森林浴して、キャンプして、バーベキュー！」

　一方愛香の提案は、インドアな俺の構想とは異なり若者じみたキラキラしたものだった。

　っていうか愛香、子供の頃ころから海よりは山派だったもんな。強い野生動物がいるから。

　トゥアールはジト目で薄笑いを浮かべる。

「それなら水着にならなくてもいいですからねー」

「なればいいじゃない！　山で、水着に!!」

「山で水着になる変人がそうそういると思いますか!?」

　川とかで遊ぶのであれば、山で水着になることもありそうな……？　どうだろう。

「山でしたら、神しん堂どう家の所有する神堂山さん……別名ツインテール山やまがありますわ。全く同じ標高の山が二つ連なっていて、遠くから見るとツインテール属性のエンブレムにそっくりですの」

「おお、それは是非とも踏破したいな!!」

　俺は思わず拳こぶしを握り締める。何な故ぜ山に登るのか？　山にツインテールがあるからだ。

　それにしても相変わらず神堂家は、森羅万象とりあえず何でも所有しているな。かつて理事長は、ツインテールの道のりを山に喩たとえていたが……。

「そのビジュアルはツインテールというより、おっぱい山では……!?」

　劇画調の大真ま面じ目めな表情でトゥアールがツッコみ、俺はギクリとしてしまう。

「トゥアール！　今そーじの前で気軽におっぱいとか言うんじゃないわよ！　あんたのそのおっぱいも目立つからしぼめて仕舞っちゃいなさい!!」

「仕舞えませぇん……」

　えぐえぐとしゃくり上げるトゥアール。

　くっ……おっぱいって単語がトラウマになるなんて、冗談じゃないぞ。

「おいおーいどうした総そう二じ、お前らしくもねえ！　こんなもん別にどうってことねえだろ、ほれほれ!!」

　唯ゆ乃のは俺の首に腕を回して引き寄せ、頭を自分の胸に押しつけた。

「ば、馬ば鹿か、からかうなっ！」

　慌あわてて俺が離れても、唯乃はけらけらと笑ったままだ。

「危険ですね……ああいう気さくな男友達みたいに接してくる女子ほど、不意に垣間かいま見せる女としての一面にコロッとまいらせてしまうものなんです」

「じゃあ何で男友達みたいに気さくに接してきたあたしにはコロッとまいらずにそして十年の月日が流れてるのよ!?」

　トゥアールと愛あい香かがひそひそと話し合っているが……とにかく、しゃきっとしないとな。みんな俺のことをからかっているというより、心配しているんだろうし。

「わ、私は去年、参加、できなかったから……楽しみ……」

　イースナは去年、奇くしくも俺たちツインテール部の合宿と同じ目的地……つまりロエルたちの世界に任務でやって来ていたが、別行動みたいなものだったからな。

　学生として初めて迎える夏休みでもあるし、イースナには思いっきり楽しんで欲しい。

「そうだみんな、週末にでも新しい水着買いに行かない？」

「新しい水着って……愛香さんなんて、セロファンテープで何冊分か繋つないだラノベのカバー巻いておけば十分じゃないですか」

「トゥアール以外のみんなで水着買いにいきましょ！」

　からかってくるトゥアールをガン無視し、話を進める愛香。

「えっそういうパターンですか!?　せめて天井にブッ飛ばしてくださいよぉ!!」

　本人にとってはスルーされる方が堪こたえるらしく、トゥアールは愛香の腰に縋すがり付いて嘆きをこぼしていた。

「合宿期間中は、極力エレメリアンとの戦いは忘れること！　その間、地球の平和は唯乃にでも任せて、あたしたちは思いっきり夏をエンジョイしましょ！」

「ん？　俺様も夏合宿行きてーんだが？」

　この場にいるのだから当然、唯乃は即座にそう反論する。

「あんた普段の出撃ローテに参加しないから、部の活動に興味ないと思ってたのよ！」

　愛香たちのやり取りを見ていた桜さくら川がわ先生が、苦笑して慧え理り那なに質問した。

「この合宿は去年と違って、別の世界に出かける予定はないのですよね？」

「ええ、色々な場所を巡る予定ですが、この世界の中でですわ！」

「ならいいじゃないか、津つ辺べ。合宿中に怪人が現れても、誰だれかがすぐに出撃すればいい。必要な時は私も戦いに参加するし……できるだけみんな楽しめる方がいいだろう？」

　桜さくら川がわ先生……アナザーテイルブルーは、今でも「補欠」というスタンスは崩さない。

　しかし必要ならば俺たちの力になるという強い意志は、ずっと変わらないんだ。

「わかってます。でも唯ゆ乃の、これはツインテール部の合宿って名目の旅行なんだから。合宿するからには、ちゃんと普段の部の活動にも参加してよね」

　実際愛あい香かの言うとおりなんだけど、普通に名目って言い切

るなあ。

「悪わりィ悪ィ。ちーっと特訓で張り切りすぎたのか、最近俺様のギアが不調でよ。雑ざ魚ことの戦いで変身したくなかっただけさ」

　一応唯乃にも、出撃を拒否している理由はあったようだ。

　出撃より特訓を優先するのが、こいつらしいと言えばらしいのだが。

「来週テイルブレスの定期メンテナンスをします。その時テイルレインフォーサーも見せてみなさい、唯乃。元々あなたは試作品のギアを無理矢理動かしていたんです、少しは調整してあげられるはずですから」

　どうせ触らせやしないだろうと言って、今まで唯乃のテイルギアにはノータッチだったトゥアールが、自分からこんな提案をするなんて。なかなか歴史的な歩み寄りだぞ。

「そ、それがいいよ、唯乃……。グラスギアも……トゥアールさんに、整備……してもらってから……すこぶる調子が、よくなった……」

「そうだな。大事な親友ダチの形見だが、あんたになら任せられる。よろしく頼むぜ！」

　嬉うれしそうに後押しをするイースナ、何よりトゥアールの心意気に感じ入ったのだろう、唯乃も快こころよく応じる。

「まずは、迫り来る異世界の海賊を打倒して……穏やかな毎日を取り戻しましょう!!」

　今日の話し合いを総括するように、慧え理り那なが潑はつ刺らつとした声で宣言する。

　早めに合宿の計画を立てるためだけでなく……俺がヘコたれてる

から、みんなで楽しい時間を過ごして元気を出させようとしてくれたんだな。

　そういう慧理那のお姉さん気質なところには、いつも救われている。

「エレメリアン、出現しました」

　電子妖精エレクトフエアリー・とぅあるんが机の上に浮かび上がり、エレメリアンの出現を告げた。

　話し合いが一区切りついたからいいとはいえ、相も変わらず人が楽しんでいるところに水を差すようなタイミングで現れるな、エレメリアンは。

「前回の戦いの時と微妙に波形パターンが変わっているように見えますが……おそらくプロメテウスギルディたちです！　大きな反応は、一つだけのようですね……」

　トゥアールは端末を操作して詳細を把は握あく。

　俺は勢いよく立ち上がり、先ほどの慧え理り那なの快こころよい宣誓に応こたえるべく拳こぶしを握り締めた。

「よし！　今日は逃がさない……あいつがこの世界を本格的に狩り場にしだす前に、叩たたく！」

「戦力を分散している可能性があります、ひとまず三人くらいで出撃して、残りは別働隊に備えて基地で待機してください。総そう二じ様と愛あい香かさん……慧理那さん、お願いします」

　俺たちが同時に頷うなずいた時、椅い子すの上で胡座あぐらをかいていた少女がゆっくりと挙手をした。

「いや──今回は、俺様が行くぜ。分断戦を見越してんなら、慧理那が残りな。あんたの装備は大勢の掃除に向いてんだろ」

「唯ゆ乃のさん！」

　予想外の申し出に驚く慧理那。

「あんた、さっきあたしが言ったこと気にしてるの？」

「雑ざ魚こと戦っても面白くねえってだけさ。だが、今回の敵は相手にとって不足はねえ!!」

　愛香は自分の発言が原因ではと後ろめたさを感じたようだが、あまりに素直な答えが返ってきて呆あきれて嘆息していた。

　珍しい組み合わせだが、今日は俺と愛香、唯乃とで出撃することになった。

　唯乃は逆手持ちに構えた焔えん銃じゆう剣けんフェニックスラッシューターに、変身デバイス・テイルレインフォーサーを装着する。

「テイルオン！」

　眩まばゆい紫光の輝きが、ポニーテールの少女を包み込む。テイ

ルギア・ＴＹＰＥ　Ｐを身にまとい、不敵な笑みを浮かべる太陽の戦士・テイルフェニックス。

　そのまま悠ゆう然ぜんと歩を進め、地下基地に繋つながっている転送ロッカーに──

「おうい、このロッカー俺様の翼がめっちゃ引っかかるぜ!!」

　入ろうとして、背中の翼が引っかかっていた。

「そんなゴテゴテしたギアのくせに移動前に変身するからです！　ロッカーに入ってしまえば中の空間は拡張されていますから、翼の先っぽから慎重に入れなさい!!」

「おー、先っぽからにゅるんて入ってくぜー!!」

　言われたとおり、横歩きでロッカーの中に入っていくフェニックス。身体からだの大きなメガ・ネもあんなふうにして出入りをしている。

「…………わざと言ってんのかしら、あいつ……」

「え!?　何がですか愛香さん!?　具体的に説明おああああああああああああ!!」

　転送ロッカーの中へとトゥアールを蹴り込み、その後に自分も続く愛香。

「あいつらは普通のエレメリアンとは侵攻の仕方が違う！　被害が出ないうちに急ぐぞ!!」

　待機組も俺に続き、基地へ向かうためにロッカーへと身を躍らせていった。

◇

　今回は銀のプロメテウスギルディが、大型のショッピングモールに単身出現した。

　避難を促うながす店内放送に従って出入り口に逃げ込む人々とすれ違い、俺とブルー、フェニックスは建物の中へと走る。

「ふんふん、早いもんだねえ。攻め込んだ世界の戦士にこんなに素早く捕捉された記憶はないよ。まあ、それも忘れちまっただけかもしれないけどねえ」

　幸い、俺たちが到着した時、プロメテウスギルディは行動を起こす前だった。

「けどそんなに急ぐ必要はないよ。あたいはあんたそのものに興味はないからねえ。この世界を売りやすくならして、たんまりお宝をいただくだけさあ!!」

　その戯ざれ言ごとが俺のツインテールに──深く静かに怒りの炎を灯ともす。

「侵略者であるアルティメギルに、俺が敬意を払わずにいられなかったのは……奴やつらは自分たちの信念があったからだ。生きる

ために戦っていたからだ。それをお前は……商売のために人間の心を奪うだと？」

「見た目通りの可か愛わいいお子様だねえ、テイルレッド。商売……仕事は人間だって誰だれでもしてることじゃないかい。他人を踏みつけにして成り立ってる仕事も山のようにあるだろう？」

　プロメテウスギルディは右腕のフックの先端を指で撫なでながら、呆あきれるように反論した。

「生命いのちがけで仕事をして、糧かてを得る……それがあたいらの信念さね。わかっちゃくれとは言わないがね」

「そうだな……わかる努力もするつもりはない」

　俺が避けえぬ戦いへの覚悟を胸に沈めた、その時。

「それにあたいらの仕事をしやすくしてくれたのは、テイルレッド、あんたなんだけどねえ」

「何だと!?」

　決意の炎が、僅わずかに揺らぐ。

「あんた、アルティメギル首領を倒す時、とんでもない力を発揮して異世界中のツインテールを繋つないだらしいじゃないか」

　その情報を一体どうやって得たのかは定かではないが、具体性からいってカマをかけているわけではなさそうだ。

「それが功を奏したのか、そこら中の異世界で境界線が綻ほころび始めていてねえ。それまで行けなかったような世界にも、まあまあ行きやすくなった。テイルレッド様々だよ、まったく」

　――――ゴールドチェインが……異世界の境界にダメージを与えていた……。

　そのせいでこいつらのような野良エレメリアンの活動範囲が、広まってしまった。

　それじゃあトゥアールが言っていた、異世界が脅きよう威いに晒さらされている原因は……。

　動揺する俺の視界に、炎の帯のように猛たけ々だけしく美しいポニーテールが舞い広がる。

「レッド。こいつは俺様にやらせな。せっかく久々のバトルだし……何より、こういう手合いはお前さん向きの相手じゃねーや」

　気を遣われているのはわかるが、さすがにちょっとだけムッとしてしまった。

「……みんな、俺のことを繊せん細さいに思いすぎてやしないか」

「へへっ、愛されてるショーコだぜ！　よかったな!!」

　膝ひざ立ちで屈かがみ、肩を組むようにして俺を抱き締めるフェニックス。レッドに変身すると、見た目に引っ張られて子供扱いされるわけじゃないよな……？

「近いわよ！」

　ブルーが間に入って引き離すと、フェニックスはプロメテウスギルディへと進み出る。

　そして俺とブルーの周囲には、突とつ如じよとして数体のエレメリアンが殺到してきた。

　そいつらはプロメテウスギルディより小さな黒い海賊帽のパーツと、同じく黒いマントを揃そろいでまとっている。増援か……？

「戦闘員アルテイロイドだけじゃない……普通のエレメリアンまで海賊の一味になってるのか！」

　翻ひるがえる黒マント。俺の目に、あの忌いむべきエンブレムが飛び込んでくる。

　プロメテウスギルディが装備しているコート型の装そう甲こうの簡易版、と言うべきか。やはり揃いの装いで、海賊であることを強調している。

　掲げた焔えん銃じゆう剣けんフェニックスラッシューターの切っ先が、ショッピングモールの天井に遮さえぎられた先に輝く天の円まどかを指し示す。

「ポニーテールは世界を繋つなぐ架け橋！　太陽の戦士、テイルフェニックス見参!!」

　フェニックスは、戦いの号砲代わりに威風堂々と名乗りを上げた。

　プロメテウスギルディも、銀に染まった曲剣を抜き放つ。

「虚むなしい口上さね……架け橋なんざなくても、あたいらは自由に世界を行き来するさ!!」

「ヘッ……この言葉に込められた魂たましいを理解できねえなら、無理しねえで黙ってな!!」

　互いの振り下ろした刃やいばが、快音を先置いて邂かい逅こうした。

　初しよっ端ぱなから全力──あたかも音ズレを起こした動画のように、激突音が一拍おいて到来する高速の斬きり結びが繰り広げられる。

　劣勢にならない限り、プロメテウスギルディの相手はフェニックスに任せよう。

　俺とブルーはまず、目の前のエレメリアンを倒す。ブレイザーブレイドとウェイブランスを装備し、無人となったショッピングモール内を疾走する。

　難なく蹴け散らしながら最後の一体になった時、そこには見知った顔があった。

「ダーフィニアギルディ！　そうかお前……エレメパイレーツに合流したのか」

　でっぷりとした身体からだに被かぶせて浮いているが、ダーフィニアギルディはやはり他と揃いの黒い海賊衣装をまとっていた。さすがに節操がなさ過ぎると、俺は苦言を呈ていする。

「エレメパイレーツは、愛する属性をころころ変えることを由よしとしてる組織だぞ。いくら俺たちにリベンジしたいからって、そんな魔境でお前は手への愛を維持し続けられるのか!!」

「間合いに気をつけてレッド、あいつまた手に接着剤つけてくるつもりよ」

　もちろん俺も、先の戦いを教訓に奴やつの急襲には警戒していたのだが……。

「はあ、はあ……手……？　愛……？　な、何な故ぜだ……」

「何故って、お前……手が好きな属性だろ」

「はあ、はあ……」

　ダーフィニアギルディの様子がおかしい。俺たちの話を聞いているのか、いないのか……気もそぞろな感じだ。やけに目が虚うつろで、まだ戦闘が始まってもいないのに息が乱れている。

「う……うおおおおおおおおおおおお!!」

　俺が言い知れぬ胸騒ぎを覚えた途端、ダーフィニアギルディは両手の指を俺とブルーに向けて突き出した。

　指の先から細かい光弾を撃ち放ってくる。メガ・ネのバルカン砲に似た攻撃だ。

　右に左にと連続で跳躍し、砲撃を回避していく。

　通路のタイルカーペットが剝はがれ、粉ふん塵じんが舞い上がる。

「よくわかんないけど、あいつ強くなってる」

「また無茶な強化でも受け容いれたのかもな……マーメイドギルディの悪さみたいに」

　ブルーは一足飛びで距離を詰め、ダーフィニアギルディにフルスイングで平手を見舞った。

　快音が通路に反響し、追加パーツとして装備された海賊帽が地に落ちる。

「…………あ、脚……違う、手……」

　何かを言いかけて苦く悶もんし、ダーフィニアギルディは攻撃を

再開しようと両手を構えた。

「やっぱり……！　こいつ、ビンタしてもありがとうって言わない!!」

「それが普通なんだけど、確かに妙だな……。とにかく、一気に決めるぞ!!」

　俺とブルーは武装を同時に構え、飛来する砲撃を斬きり落としながら完全解放ブレイクレリーズした。

「「オーラピラー!!」」

　炎と水が螺ら旋せんを描いて円柱型の結界を形成し、ダーフィニアギルディを拘束バインドする。

「グランドブレイザー！」

「エグゼキュートウェイブ!!」

　俺が頭上を飛び越えざまに縦一文字に斬り込んだ後、ブルーの投とう擲てきしたランスがダーフィニアギルディを貫く。

「ぐあああああああああああああああああああ……」

　致命傷を受けたことで呪じゆ縛ばくから解き放たれたかのように、その目には光が戻っていた。

「……や、やはり……あの時あの場所で、散っておくべきだった。友と過ごした、俺たちの基地で……」

「お前……。やっぱり決戦前にアルティメギル基地から退避した生き残りだったのか……」

「だが、お前に倒されてよかった……。一度逃げた俺の、唯一の自慢になる……」

　お前は一度逃げたのに……逃げられたのに、それでも戦うことをやめられなかったんだな。

「……テイルレッド、ブルー。エレメパイレーツには気をつけろ……や、奴らの真の目的は……属性では、ない……。プ、プロメ

テウスギルディは──」

　最後まで言い終えることなく、ダーフィニアギルディは爆散した。

「ダーフィニアギルディ!!」

「ちょっと!!」

　今いま際わの際きわの言葉のあまりの哀切さに、俺だけでなくブルーまでも咄とつ嗟さに手を伸ばしていた。

　奇くしくもそれは、奴やつが最後まで愛した属性。随分と自分の生き方に迷って、後悔しているみたいだったが……最期は、満足して逝いったのだろう。

　手属性ハンドの属性玉エレメーラオーブ。一人の戦士が、一つの愛に邁まい進しんした証あかし。

　菱ひし形がたの宝玉を握り締めながら、俺は天を仰あおぐ。

　一時のセンチメンタルから意識を引き戻したのは、豪快な爆発音だった。

「おらああああああああっ!!」

　フェニックスが銃型に変形させたフェニックスラッシューターで炎弾を連射すると、プロメテウスギルディは眼帯から光線を照射して相殺していく。

「いーいヘソだねえ。マフラーから覗のぞくうなじもいい。腰つきも大したもんだ。……はてさて、あたいは今日、何を愛していたのかねえ……」

「お前さん、ホントに今のその日暮らしが楽しいのか？　無理してねーか？」

　フェニックスは攻防の狭はざ間まに、プロメテウスギルディの心中を見透かすような鋭い問いを投げかける。

「ポニーテールは間口が広い。迷った時は、いっちょう腰を据すえて愛めでてみな!!」

「フッ……あたいに属性のアドバイスとは粋だねえ！　考えておくよ!!」

　プロメテウスギルディが右腕のフックを射出して変幻自在の軌道で攻撃を仕掛ければ、フェニックスはすかさずマフラー状のパーツを伸ばして正面からの激突を受けて立つ。

　秘められた謀略、疑念……そんなノイズの入り込む余地の無い、純粋な力比べが繰り広げられていた。

「まあ、とりあえずは！　この世界でたんまりお宝を稼いでからのことさあ!!」

　全てを抱き締めるように諸もろ手てを広げ、床を砕いて爆走するプロメテウスギルディ。

　フェニックスは胸の前でクロスさせた腕を振り抜き、背にまとった鳳ほう凰おうの翼を分離させる。

「お宝が欲しけりゃ、こいつをくれてやるぜ！　俺様の……完全解放ブレイクレリーズ!!」

　分離した翼はプロメテウスギルディの周囲で炎の渦うずを巻き、その疾走を阻はばむ。

　銃剣両特性を備えた変形を果たしたフェニックスラッシューターに、巨大な炎の刃やいばが形成された。

「バーニングフォースフィニ――――――――――――――――ッシュ!!」

「おっ……ぬわあああああああああああああああああっ!!」

　鳳ほう凰おうの神こう々ごうしき羽ばたきを思わせる炎の一いつ閃せんは、銀のプロメテウスギルディの総身を余さず呑のみ込み──塵ちりへと還かえしたのだった。

　全身が一瞬で粉々になったからか、しばらくしても再生することはなかった。

　簡単な再生は瞬時に行えるが、全て消滅してしまえば復活することはできない。そこが不死鳥であるフェニックスギルディと、骸骨

であるプロメテウスギルディとの差か。

「うわあいつ、あっさり倒しちゃったし……」

「まあ、早期に決着が着いたならいいことさ」

　捨て台詞ぜりふすら許さぬ煉れん獄ごくの瞬殺劇に、ブルーも俺も呆あつ気けに取られる。

「へへっ！　テイルフェニックス様の大勝利だ！　ヘイ、お二人さん!!」

　俺とブルー、順にハイタッチをしていくフェニックス。ブルーは渋い顔つきをして、差し出した手の位置も葛かつ藤とうがそのまま顕あらわれたように低い位置だったが。

　気き紛まぐれな風ふう来らい坊ぼうだけど、味方になると頼もしい奴やつだよ、唯ゆ乃のは。

　プロメテウスギルディの属性玉エレメーラオーブは──出現していない。奴自身が自分の属性を見失っていたんだ、当然かもしれないが。

　残るは金のプロメテウスギルディだけ……と言いたいところだが、エレメパイレーツには引き続き警戒しておいた方がよさそうだ。

　ダーフィニアギルディの遺言が、気がかりだからな……。

　ふと、廊下の先でこちらの様子を伺うかがっている人影があることに気づいた。

　黒のビジネススーツを着込んだ小学生ぐらいの男の子が、食い入るようにこちらを見つめている。

　その子の格好だけでももうかなりインパクトがあるが、隣にいる女性はもっと派手だった。

　紺こん碧ぺきの長髪……全身にピッタリと張り付いた、白のドレス。何かのコスプレだろうか。よほど自分のスタイルに自信がなければできないであろう格好だ。愛あい香かたちと同じぐらいの年だろうか、少年とは頭一つ分の身長差がある。

　やがて少女が少年の腕を取り、引ひき摺ずるようにして去って行く。

「わー素敵。あの雰囲気、姉弟じゃないよね。まさか歳の差カップルかな……？」

　ブルーも気づいていたようで、二人の様子を見て頬ほおを緩めている。

　印象的な二人と入れ替わるように、多くの人たちが押し寄せてきた。

「テイルレッドたんだ！　あ、ブルーもいる……お───いレッドたーん！」

「あと一人は……誰だれだろう？」

　そろそろ撤収しないとと考えていたところへ、民衆の思わぬ声が聞こえた。

「そりゃないぜ、俺様だって何度か人前で戦ってるじゃんかよ～。忘れないでくれよな～！」

「普段からこまめに出撃しないから、忘れられんのよ」

　一般人に名前を覚えてもらえていないのが堪こたえたのか、とほほ、と肩を落とすフェニックス。ブルーは苦笑しながらチクリと刺す。

「ポニーテールのツインテイルズ」であるテイルフェニックスはかなりインパクトがあるからか、決戦が終わった後もたびたびテレビなんかで特集されているのを見たんだけどなあ。

『何か気になるんだよ。最近、周りの人間の物忘れがひどいように感じてな……』

　俺は何な故ぜか不意に、先日喫茶店で桜さくら川がわ先生がそう愚ぐ痴ちっていたことを思い出した。

「□□□□」

　いや、まさか、な……。頭をよぎった不穏な思考を振り切る。

　考え過ぎだとは思うが、ふと視線を送ったフェニックスが俺と同じように何かに思い至ったように顔つきを険しくしていたのが、少し不安だった。

　戦いを終えて基地に戻った後。唯ゆ乃のは剣から外した変身デバイス・テイルレインフォーサーを、トゥアールへと差し出した。約束通り、メンテナンスを頼むようだ。

「よろしく頼むぜ。俺様はちょいと気になることができた。お姫サンたちの力も借りて、別の世界に行って来らあ」

　アイテムを預けた矢先、唯乃は唐突に戦線離脱を宣言する。

「はぁー!?　まあ、銀の方のプロメテウスギルディはあんたが倒したし、いいけどさ……」

「合宿までには戻って来るぜ！」

　愛あい香かはいつもの気き紛まぐれと諦あきらめたようだが、俺には唯乃の真意が別にあるような気がした。

　俺がここのところ何かが引っかかっているのと同じく、唯乃も今日の戦いを経て、何かしらの懸念を抱いだいたのだとしたら――。

　強敵を撃破しても、俺は喜べる気分ではなかった。

　俺が全ての異世界から力を借りたことが原因で、多くの世界が危機に晒さらされているかもしれないと知ったからだ。そしてそれに乗じて、エレメパイレーツは何かを企たくらんでいた。

　俺のツインテールに、迷いにも似た感情が拡ひろがっていく。

　願いと呼ぶには儚はかない、不確かな動揺が。

◇

　エレメパイレーツの襲来を警戒しながら、数日が経過した。

『テイルレッドの中の人がおっぱいに興味が無い問題』は、俺たち子供に戦いを強しいているという誤解ともども、何とか収束に向かっている。

　今日、トゥアールは調べ物があるということで部室から基地に直接帰ったので、俺は愛あい香かと二人で下校していた。

「でね、やっぱ体力作りもしておいた方いいと思うのよ。予定の中に身体からだを鍛きたえるメニューも組み込んだ方がいいかなって」

「そうだな、その方が合宿っぽい雰囲気作りにもなるだろうし」

　愛香は今から夏休みが待ち遠しくて仕方がないらしい。最近の話題が合宿のことばかりで、何とも微ほほ笑えましい。

　俺と愛香と桜さくら川がわ先生はもちろん、トゥアールも科学者だてらにタフネス特化の超絶フィジカルを誇っているし、唯ゆ乃のやメガ・ネは人間の筋トレメニューは必要ないだろうし……ツインテール部部員の中で体力作りが必要なのは、慧え理り那なとイースナぐらいか。

　ロエルとリルナは、一応名誉部員ってことになってるらしいが……。

　バリバリの運動部ではないのだから体力作りは無理強いしないようにすべきだが、慧理那とイースナは本人も体力向上を望んでいるので、飽きずに楽しく安全にトレーニングできる方法を考えよう。

　俺がツインテール部の部長なのだ。たまには部長らしいところを見せないとな。

「会長の山に熊くまとか出ないか、後で聞いておこうよ。あたしとそーじがみんなに熊との戦い方教えてあげられるでしょ？」

「えっ…………俺も教官側……!?」

　何な故ぜ当たり前のように「野生動物と戦ってみよう」コースが

あるのか。

　愛香なりに飽きずに楽しく安全にトレーニングする方法を模索した結果だというのか。

　戦せん慄りつしながら歩いていると、道の先に小さな少女が立っているのを見つけた。

　その少女の周囲を柔らかに舞う赤いツインテールに、俺は思わず瞠どう目もくする。

「…………テイル、レッド……」

　間違いない、テイルレッドだ。他ならぬ俺がここにいるというのに。

「いや……あれは……進級テイルレッドたん……!?」

「は？」

　さらに愕がく然ぜんとする俺と正反対に、素すの声が喉のどから放射される愛香。

　テイルレッドが立っている……ランドセルを背負ったテイルレッドが！

「見ろ、愛香！　進級テイルレッドたんが!!」

「何言ってんのマジでっ!?」

　しきりに指を差すも、もう一度視線を送った時には、すでにテイルレッドの姿は影も形もなくなっていた。そんな……確かに見たのに。

　ゲームの中にしか存在しないはずの、ランドセルを背負ったテイルレッドを……。

「……ごめん。疲れてるみたいだ、俺」

　矢庭に項うな垂だれた俺が顔を上げた時、いつの間にか愛あい香かが目の前に立っていた。

　苦笑しながら、そっと俺を抱き締めてくる。

「せっかく平和になったんだから。あんまり気を張り詰めすぎないで」

　俺も愛香の背中に手を回し、無言で首しゆ肯こうする。

　微風に揺れる愛香のツインテールを感じながら、静かに、優しい時間が流れてゆく。

　アルティメギルとの戦いが終わってから、何度こうして温ぬくもりを分かち合っただろう──。

「…………あのね。そーじには……もっともっと、人との繫つながりが必要だと思うんだ」

　俺の耳元で、少しだけ震ふるえた囁ささやき声が響く。

　抱ほう擁ようを解いた愛香は、顔どころか、ツインテールまで真まっ赤かになっているかのようだった。

「さ、さすがに何が言いたいか、わかるでしょ？　そういうことだから……あたしの部屋、いつでも来てっ……!!」

　そう言い残し、愛香は一人で走り去っていった。

　わかったよ。愛香は、俺にもっと人と繫がれと──仲間を頼れと励ましているんだな。

◇

　家に帰ってすぐ、俺はトゥアールに先ほどの出来事を報告するため地下基地に降りた。

　さっき見たのが幻覚でないとすると、いつかのアルティメギルの真ま似ねっこ大作戦のように、エレメパイレーツが何かを企たくらんで創つくったものか？　それともプロメテウスギルディが言っていたように、異世界の綻ほころびが原因か？　トゥアールを頼って、意見を仰あおごうと思ったのだ。

　コンソールルームに入ると、トゥアールはメンテナンスをしているところだった。

　俺とブルー、イエロー、アナザーブルーのテイルブレスに、イースナの神眼鏡ゴッドめがね……少し前に預かった、唯ゆ乃ののテイルレインフォーサーもある。

　そしてテーブルの上に置かれたメンテナンスケースには、さらにもう一つ。

　輝きを失ってしまったホワイトのブレス、テイルブレスレボリューションがあった。

「あ、総そう二じ様。ちょうどよかったです、ちょっとレッドのブレスをつけてくれませんか？」

　言われたとおりブレスを右手首に塡はめると、トゥアールは手元の端末を操作し始めた。ホワイトのブレスの方もエネルギーが充じゅう塡てんしていくように淡く発光し、そしてすぐに沈黙する。

「うーん、まだまだ調整が必要みたいですね」

「だけど、たった数か月で随分と調子がよくなってきているじゃないか」

　アルティメギルとの最終決戦を最後に、テイルホワイトへの変身能力を失ってしまったトゥアール。それからは自分のペースでツインテールの研究を続けていたはずだが……久々の強敵の出現で、少し焦あせりを感じているのかもしれない。

「戦いのことは、俺たちに任せて欲しい。トゥアールはいつかツインテールに戻るために、ブレスの研究を続けてくれ」

「……はい。ありがとうございます、総そう二じ様」

　トゥアールは……この世界で英雄の一人として認められた瞬間、普通の女の子に戻ってしまった。可か憐れんに戦う姿を──ツインテールを、人々に見せることができなくなってしまった。

　気にしないように振る舞っていても、もどかしさはきっとあるだろう。

　俺も、ちょっと世間でネタにされたぐらいで動揺しちゃいられないか。

　メンテナンスがひと段落したところで、俺はあらためてここに来た目的を切り出した。

「その進級テイルレッドたん……幻覚ではないかもしれません」

　すぐに肯定されたのは意外だったが、トゥアールにも思い当たるフシがあるらしい。

「同じような書き込みをネット上でもちらほら見かけました。まだ真しん偽ぎの程は不明ですが」

「そうなのか⁉」

　白衣のポケットから白いトゥアルフォンを取り出し、俺に画面を見せてくる。

　件くだんのソーシャルゲーム、『いつでもテイルレッドたん』のタイトル画面が表示されていた。

「『いつでもテイルレッドたん』……最近は私もチェックしているのですが」

「俺は、クラスのみんながよく話してるのを聞く程度だな」

「少し前に、ツインテイルズの情報を提供した縁で、ゲーム運営会社の広報の女性と知り合いになったんです。成人女性なのに幼児体型で、親しみが湧わいたので」

　提供していい情報……詳しい技名やテイルギア各部の名称などを、トゥアールは世界に公開している。俺の希望で、映画の続編が控えるデックさんには特に詳細に伝えてもらった。

「それでこのゲーム、どうやらエレメリアンが結構な課金をしていたようで……」

　そりゃあめっちゃプレイしてたんだろうな、あいつら。戦闘中にこのゲームのこと話してるの聞いたことあるし。

　その〝上得意〟が滅んでしまったということは――

「アルティメギルが滅んだから、課金額が減少して運営がヤバいとか？」

「いえ、入れ替わりで世界中のプレイ規模が大きくなったので売り上げは維持しているようです。サーバーの維持費がとにかく大変らしいのですが……エレメリアンからのアクセスがなくなって以降、妙にサーバーに負荷がかかる時があるらしいのです」

　ああ、そういえばクラスメイトが話していたな、最近メンテが多いって。

「せっかく知り合ったのです。不具合が多いのであれば、こっそり修正してあげようと思って運営会社のサーバーにアクセスしたのですが……一切の問題はありませんでした。ただ、原因不明の負荷がゲームにかかっているのは確かです」

　原因不明の負荷。エレメリアンたちがいなくなった後から。不穏な並びだな。

「ちなみに総そう二じ様。この世界の人たちは今でも異世界の概念を理解していませんが……普通の人にとって、一番身近な異世界って何だと思います？」

「……虚構の話に出てくるような世界とか？」

「――そう、創作物……たとえばゲームの世界です。この世界で今一番ホットなゲーム。つまり、この世界の人々にとって一番身近な〝異世界〟が、外部からの負荷を受けているのです」

「異世界が負荷を……攻撃を受けているって……」

　異世界。最近は以前にも増して頻ひん繁ぱんに聞くフレーズが、予想外の線で繋つながった。

「これらは全て、異世界同士の境界が綻ほころびはじめたことによる弊へい害がいと推測します」

「エレメリアンがいなくなったから負荷が大きくなったんじゃない……エレメリアンがいなくなる瞬間……つまりアルティメギルとの決戦が影響しているってことか。やっぱり俺が、ゴールドチェイ

ンになったことが……」

　肯定も否定もしなかったが、トゥアールの表情を見れば察することはできる。

「世界間の境界線が完全に壊れるのは、単純に無数の世界が一つになるということではありません。怪談話で、自分にそっくりの人間を見ると死んでしまうというものがありますよね？」

「ああ、ドッペルゲンガーか」

「あれと同じです。存在の近い異世界同士で触れ合ってしまえば——世界は、対消滅します」

　決して大おお仰ぎようにならぬよう、トゥアールは淡々と事実を口にしていく。

「エレメパイレーツとの戦いも重要ですが……これからは、異世界の境界が崩壊していくのを食い止める方法を模索していかなければなりません」

「……そうだな」

　例えば、ほんの少しずつでもいい。他の異世界にも足を運んで、守ることができれば……。

　けれど、それが俺に可能だろうか。自分の世界を守ることだけで精一杯だった俺に。

　メンテナンスはすでに終わったとのことなので、俺はブレスをそのまま塡はめて帰ることにした。……のだが、コンソールルームの入り口のドアが開かない。

「まったく……ようやく少し落ち着いた日々を送れると思ったのに、エレメリアンには困ったものですね……」

　そして、清らかな微ほほ笑えみとともに虚空を見つめているトゥアールが、その体勢のまま微動もせずにこっちに近付いてくる。遠近感がおかしい。

「総二様……もっと色んなことを私に頼んでください。メンテナンスとか、調査とか……それだけじゃなくて、私はトゥアールという女として総二様のお役に立ちたいんです」

「えっと……トゥアール？」

「総二様にかけられたおっぱいの汚名……濯すすぐことができるのは、私だけです。もう泣いてばかりのトゥアールちゃんではありません……!!」

「いや無理に濯すすがなくても収束に向かってるから!!」

「今いま頃ごろ愛あい香かさんは虫の知らせでこっちに向かってきているかもしれませんが……手遅れですよ。最善の策は総そう二じ様と一緒にこの部屋に入ってくることだったんです。いくら愛香さんでも、ブレス無しでこの基地の装そう甲こう壁を破壊することはできません」

　トゥアールはコンマ数秒ほど邪悪な笑みを浮かべ、すぐに清らかな笑顔に戻った。

「総二様……世間に証明してみせましょう！　おっぱいにちゃんと興味があると！　私たち二人の力で！　かっここう熱血っぽく言うと総二様がコロッと騙だまされるとわかってますからかっことじ!!」

　かっことじって口で言っても、その中の言葉はミュートされないんだが……。

「あのエロゴリラにファッション痴ち女じよの烙らく印いんを押されて久しいですが……今日という今日はやりますよ！　その証拠に、見てください、この決意の全裸を!!」

　襟えり元を摑つかんで白衣を天井高く放り捨てたかと思えば、次の瞬間には全裸になっていた。

　下の服は、下着は、一体どこにいったんだ……！



「待て！　もう巷ちまたでどう言われるかとか気にしない！　だから服を着てくれ、トゥアール!!」

「いーや着ません！　願いを成就するまで二度と服を着ません！　服を着ないという覚悟が私を強くする……見守っていてください、テイルイエロー！　ここも熱血ポイント加算です!!」

　力いっぱい目を瞑つむると、暗くら闇やみの中、近づいてくる荒い息が鮮明に感じられた。

　時々よくわからなくなるが、多分こういう時はトゥアールの責任感が暴走している。

「うっ！　……な、何な故ぜ、こんな時に眠く……ま、まさか愛あい香かさんの怨おん念ねんが……」

　うっすら目を開けると、トゥアールは俯うつぶせに倒れ込んでしまっていた。

　尻しりを丸出しでピクリともしないトゥアールに慌あわてて駆け寄った俺だが、わずか二、三歩で強烈な眠気に襲おそわれた。

　閉じゆく五感と入れ替わりに、俺の肉体をツインテールが支配する。

　俺を……ツインテールが呼んでいる……。

◇

　次に瞼まぶたを開いた時、眼下には母なる惑星ほしが……地球が、蒼あおく輝いていた。

　宇宙空間──俺は戦闘中に生身で放り出された経験もあるが、これほど穏やかな気持ちでこの闇やみの只ただ中なかに在あれるのは、ある人物との対話で訪れた時だけだ。

　それはありえない。しかし、それしかありえない。

諦てい観かんと期待が相そう克こくする中、俺の目の前に淡い光が灯ともり、そして拡ひろがっていった。

紅のツインテールと純白の女神服が、一面の闇の中で輝き光こうを放つ。まさに、全てを照らす天の陽光のように。

宇宙創世とツインテールの女神、ソーラが屈くつ託たくのない笑顔でそこに立っていた。

「久しぶり、総そう二じっ」

例えるならそれは、道端で不意に顔を合わせた級友にかける挨あい拶さつ。

劇的な別れを果たした二人の、久しぶりの再会とは思えない気軽さだ。

「…………ソーラ！」

懐なつかしい声が、優しく甘い痛みとなって身体からだに染しみ渡る。

ソーラはアルティメギルとの戦いが佳か境きようにあった頃ころ、普通の人間の女の子のように過ごしたいという願いを叶かなえるため、ツインテイルズとひとときの交流を重ねた。

だがその矢先、強敵と戦う俺たちの危機を救うため、夢幻むげんの戦士・ミスティテイルレッドに変身。地上に現界する力を使い果たしてしまった。

そして俺たちとソーラは、永い別れを迎えたはずなのだが……。

「はー、危ないとこだった……間に合わないかと思ったよ」

胸に手を当て、安あん堵どの溜ため息いきをつく。子供のように可か愛わいらしい仕草は、あの時から何も変わっていない。

「危ないって……何が？」

「総二は優しすぎるのっ！　気をつけないと駄目だからねっ！」

急速に眠気に襲われたのは、ソーラが俺と逢あうために意識を繫

つないだからだったのか。

「ところで今日は、どうして……」

「あ、うん……。色々あって、ちょっと逢あえそうだったから来ちゃった」

　先ほど友人との再会に例えたが……本人の口から語られた理由もまさに、近くに来たから立ち寄ってみたぐらいの気軽さだった。

　おそらくはあらゆる生命体の歴史の中で最上級の重要人物でありながら、彼女は自身の願いどおり普通の女の子と何ら変わらない。その飾らないツインテールこそが、一番の魅力だ。

「そういえば今日は、その女神の衣装なんだな」

「もー、私だっていつも裸なわけじゃないもん！　前に総そう二じとここで話した時は、そっちの方が様になるかもって思っただけ!!」

　別にいつも裸だと思って言ったわけではないのだが……陽よう月げつ学園の制服で逢ったことも何度かあるし。

　世間話をしたあと、本来の静謐が宇宙を包む。

　本題を切り出しづらそうに眼めを細め俯うつむいていたソーラが、次に顔を上げた時。

「一番大変な時に力になってあげられなくて──ごめんね」

　寂しげな笑みが、俺の胸を打った。

「ありがとう、総二。あの子を救ってくれて」

　それが誰だれのことかは口にしないソーラ。俺も、あえて聞き返しはしなかった。

　ソーラがずっと気にかけていた存在。

　間違った形でツインテールへの愛を極めてしまった、全異世界最強の怪人。

　テイルレッドの……生涯最大の強敵。

　アルティメギル首領テイルギルディがこの果てなき宇宙そらで散ったことを、女神ソーラは悟っているのだろう。

「あの子はもう私よりずっとずっと強くなってたから、どの道どうにもできなかったけど……せめて私も、総二にがんばれって言ってあげたかった。誰よりも大きな声で」

　俺はことさら大おお袈げ裟さにかぶりを振った。

「いや、その気持ちだけで十分だ。……っていうより……ソーラの声も、あの時ちゃんと俺に届いていたんだよ、きっと」

　その場凌しのぎの慰なぐさめなどではなく、俺は心の底からそう思っている。

　ゴールドチェインになったあの時、俺を知る全ての人の声が聞こえた。

　だからあの声援の中には、世界や時空を隔へだてたとしても、ソーラの声もきっとあった。

「俺はむしろ、こんなにも早く君と再会できたことに驚いてるよ……。すごく嬉うれしい」

「もー！　相変わらず総二は、女の子を喜ばせるのがうまいんだからっ！」

　ソーラは俺の両手を取ると、照れ隠しのように何度も上下させる。

「総二の言うとおり……逢えるようになるのは、本当はもう少し先のはずだったんだけど……ちょっと、困ったことになっちゃったんだ」

　俺はソーラのツインテールから、不安にも似た困惑を察知する。

　再会できたこと自体は嬉うれしいが……それには何やら不穏な理由があるようだ。

「私が女神さまだっていうことは、覚えてるよね？」

「忘れようったって忘れられるもんか。最初に宇宙を創つくった、

ツインテールの女神様。それが君だろ、ソーラ」

「うん。ツインテールの女神さま」

　無邪気な頷うなずきの後に続く言葉は、まだ俺に語っていないツインテール神話の一節だった。

「私は全ての始まりの女神で、ずっとずうっと一人きりだった。けれど、異世界が今ぐらい無数に増えてしまった頃ころ……私に近い存在が生まれてしまっていたみたいなの」

「……それはつまり、女神なのか……」

「その存在をどう呼ぶかって言ったら、やっぱり女神だろうね。けどそれは本来、絶対に人間と関わることはないはずだった」

　握ったままの手から、ソーラの熱が伝わる。ごく僅わずかの震ふるえも。

「それが今になって、ちょっと問題を起こしてるみたいで……」

「大丈夫か？　俺にできることがあるなら、何でも手伝うぞ」

　だから俺は、真っ先にそう提案した。これ以上、言いづらいことを言わせないために。

「ううん、それは大丈夫！　けど、直接的ではないにしろ、総そう二じたちの世界にも影響が出ちゃうかもしれないんだ」

　彼女がずっと言葉を迷っていたのは、そういう理由があったからなのか。ある意味自分の後輩のような存在が問題を起こし、それが俺たちにも影響があるかもしれないのだから。

「今、たくさんの世界がおかしくなってるのは、テイルレッドのせいじゃないよ。異世界って、すごくナイーブな存在なの。それこそエレメリアンが生まれるずっと前から、大小様々な問題が起こっては、それを乗り越えて今がある」

　ソーラは握った俺の手を抱き締めるようにして自分の胸に引き寄せる。

　俺はソーラを気遣おうとしたが……逆にソーラは、俺の悩みを全

て承知していたんだ。

「ツインテールのように二つに別れて、それを繰り返して……無限に広がり続けた異世界。元は一つだったんだから、たまに境界が壊れかけるのは風か邪ぜを引いた時に熱が出ちゃうみたいなもの。むしろ必要な痛みなの」

　この手に伝わる体温も、胸の鼓動も……何もかも普通の人間と変わらない。

　そんな女神ソーラが語るからこそ、その励ましは実感を伴って俺の胸を打つんだ。

「この世界が今直面している危機は、その『必要な痛み』を利用しようとしてる悪いやつの……異世界の悪意のせい。総二は何も悪くないんだよ」

「ソーラ、君は……それを俺に伝えるために……」

「何か起こると、総そう二じはすぐ自分のせいじゃないかって思っちゃうから……ほっとけないよ。あれもこれも自分で何とかしなきゃ、なんて……考えたら駄目」

　ソーラは俺の手を名な残ごり惜おしそうに離した。

　それと同時に、彼女の輪郭が薄らいでいく。

　泡沫うたかたの再会に、再び終幕が訪れようとしていた。

「総二は、自分の世界を守ることだけをしっかり考えて。自分が幸せになることを第一に考えて。もっとたくさんのものに頼っていいんだよ」

「……うん。ありがとう、ソーラ」

　満足げに頷うなずくソーラに合わせ、ツインテールが可か憐れんに揺れる。

　宇宙のあらゆる物理法則を超越し、ツインテールは揺れるんだ。

　それはきっと宇宙創生にまで遡さかのぼり、可能性という言葉の始まりだったのではないかと思う。

「トゥアールちゃんに、ごめんって言っておいて。それと……頑張ったね、って。ツインテールの女神のお墨付きだよ。あなたなら、絶対に大丈夫……って」

「それは、すごく心強いよ。必ず伝える」

　ツインテールとの本当の再会を夢見て、長い長い努力を今も重ねているトゥアールにとって……その言葉は、どれだけ頼もしいことだろう。

「あ、でも、あまり逢あえないから強くは言えないけど……浮気はちょっとだけにしてね？」



　俺はツインテール以外に浮気をした覚えは全くないが、どうしてか逢あう度たびにこう釘くぎを刺されるんだよな……。

「それじゃあね、総そう二じ。今度はまた、一緒に街を歩けるように。私も頑張るから──」

「……うん。それじゃあ、ソーラ」

　以前ほどの寂せき寞ばくを残すこともなく、束つかの間まの再会は終わった。

　俺の意識は、眼下の地球に吸い込まれるようにして薄れていく──。

◇

　翌日の放課後、部室でトゥアールは頭を抱かかえていた。

　慧え理り那なは生徒会が、イースナはアイドルの仕事があるため、今日は俺と愛あい香かを合わせた三人だけだ。

「総二様の前で全裸になったところまでは憶おぼえているんです……気づいたら自分の部屋で寝てました……いったい何が起こったんでしょう……」

　ソーラが俺と繋つながった余波で、トゥアールも眠りに落ちてしまったのだろうか。彼女が風か邪ぜを引かなかったのは幸いだ。

「その話詳しく聞きたいんだけど、トゥアール」

「えっ!?　私が戦闘の件で相談しに来た無警戒な総二様に全裸で迫ってた時に、気配に気づいて基地まで降りてきてなかったんですか愛香さん!?　平和ボケも大概にしてください!!」

「昨夜ゆうべはめっっっっちゃ覚悟決めて待ってたのよ！　なのにフツーに戦いのことであんた頼りに行ってたとか、あの言い方で駄目ならマジで直ちよくに誘うしかないじゃんも────っ!!」

「ぎゃばあああああああああ断片的な言葉だけでなんかエロいこと考えてたと伝わる同志!!」

　またよくわからんじゃれ合いをしている二人を横目に、俺は何となく映していたテレビの映像が気になっていた。

　レッドとブルー、イエローを映し、「三人のツインテイルズ」として紹介している。

　説明足らずなだけ、あくまで「この三人」という意味での枕詞なのだとは思うが……今さらこの三人だけに絞って紹介する意味はあるのだろうか。

「エレメリアン、出現しました」

　俺がちょっと考えごとをしてると……高確率で君が浮かび上がるね、とぅあるん。

　机の上に浮かんだ電子妖精エレクトフエアリーに寂しげな微ほほ笑えみを送りながら、俺は立ち上がった。

「プロメテウスギルディ、だと思うのですが、例によって反応がヘンテコなんですよねえ……一体は倒したはずなのに、今度はなんか二体分あるっぽい波形ですし。ひとまず、お二人で出撃よろしくお願いします」

　天井や壁には穴が何箇所も空あいているのだが、トゥアール本人はピンピンしながら状況を分析している。これほどのフィジカルを含めた部員の体力強化メニューを合宿に加えるというのだから、なかなか大変なことになりそうだぞ……。

「わたくしも、参ります！　ちょうど今、生徒会が終わったので……急いで来ましたわ!!」

　俺たちが転送ロッカーを潜くぐる直前でドアが開かれ、慧え理り那なもやって来た。

　ひとまず走り込みは体力強化メニューに入れようかなと、爽さわやかな汗を頬ほおに滴したたらせる彼女を見て思った。

「ぐははははははははツインテールなんてやめろやめろ――時代遅れだぜ!!」

「最新のトレンド、姫カットにしてあげるよ！　こっちに来なあ!!」

　現場に到着すると、金のプロメテウスギルディだけではなく――銀の方も一緒にいた。

　まるで、先日フェニックスが倒した相手が幻だったかのように。

　二体は相変わらず不快な言葉を撒まき散らしながら人間を追いかけている。

　今度は大学の構内だ。狙ねらうべき属性力エレメーラが定まっていないからか、こいつらはとにかく人の多い場所を選ぶ傾向にあるようだ。

「……そ、そんな……銀のプロメテウスギルディが、普通に復活していますわ……!!」

　動揺するイエローを余よ所そに、俺は何をおいても先に奴やつらの放言を否定すべく叫び返した。

「ふざけるな！　姫カットは、ツインテールと両立できる!!」

　何が最新のトレンドだ！　お前の本日のトレンドなだけだろう!!

「ぬうっ……こんなユニークな反論をしながら登場する戦士は、今までいなかったぜ……!!」

「さすがだねえ、テイルレッド!!」

　粉々からの再生には時間を要するだけで、プロメテウスギルディは手のつけられない不死者なのか。だとすれば、どうやって戦う。

　いや――そもそもこいつらは、アルティメギルじゃない。本当に戦いだけが解決策か？

　先日ツインテールの女神と過ごした優しい時間が、対話という方法を俺に導く。

「……お前は、開き直って海賊をしていると言ったが……もう一度だけ、属性と向き合ってみる気はないか。何な故ぜツインテールを憎んでいるかは知らないが、俺とツインテールを語り合えば……その誤解が解ける手助けができるかもしれない」

　俺は戦闘態勢を取る前に、二体のプロメテウスギルディに問いかけた。

　無駄かもしれない……暖の簾れんに腕押しかもしれないが、エレメリアンとは別個の進化を歩み始めた存在であるこいつとは、一度胸襟を開いて話をする価値はあるはずだ。

「嫌われてナンボのあたいらだが、そんなふうに言われると……ときめいちまうねえ」

　うっとりとしながら破は顔がんする銀のプロメテウスギルディを見て、俺は安あん堵どする。

「……テイルレッド。テメーとの絆きずなこそが、異世界で最高のお宝なのかもしれねえな……」

「よし、こいつら殺しましょう」

　純粋な感慨をインターセプトする形で、ブルーがしめやかに抹殺を宣言してくる。

「え――――――――何でええええええええええええ!?」

　金のプロメテウスギルディが絶叫するのも無理からぬことだった。

「待てブルー、俺はもう少しこいつと話を……」

「……レッド。気持ちはわかるけど、あたしだってふざけて言ってるんじゃない」

　ブルーはフォースリヴォンに触れ、ウェイブランスを手にして振り下ろした。それが遮断機のように俺の行く手を阻はばむ。

「あいつの目を見て。あれはもう……エレメリアンとは違う生き物だよ」

　金銀二体のプロメテウスギルディの、眼帯に隠れていない、それぞれの瞳ひとみ。

　最初に会った時から、ずっと気にはなっていた。ひょうきんなことを言い、お気楽に行動しても……プロメテウスギルディの目は、あまりにも冷え切っていると。

「てか、当たり前のように復活してるけど……今度はどういう手品よ」

「たまたまさ。たまたまツインテールを嫌いなあたいが中心になっただけ。このカラダは、エレメリアンの怨おん念ねんの塊かたまり……全てのツインテールへの憎しみさ」

「俺らの力の源は無限にあるんだ……まあ、復活もするわな」

　ブルーの問いをはぐらかしたようでいて核心を突いた答えが、金と銀それぞれのプロメテウスギルディからもたらされる。

「そりゃ、お前らと戦ったエレメリアンは満足して逝いっただろうよ。だが、他の無数の異世界で戦ったエレメリアンは違うぜ……特に、何も知らずに作戦に組み込まれた雑ざ魚こはな。それがどんだけいるか、想像できるか？」

「ツインテール属性を奪うために、ツインテールへの貢ぎ物にされたみたいなもんさ。建前はどうあれ、内心は悔くやしいだろうね……ほんの少し。そう、ほんの少しだけの怨念さ。けどそれがどんだけあるか、想像できるかい？」

「□□□□!!」

　俺は思わず息を呑のむ。曖あい昧まいなこいつらの説明でさえ、怨念の存在を理解してしまった。

　アルティメギルの侵攻の常じよう套とう作戦は、最初にツインテールの戦士を育て、世界にツインテールへの愛を芽吹かせ、最終的に一挙に奪うというものだ。

　当然その過程では、ツインテールの戦士に倒されるエレメリアンが存在する。

　それがどれだけ誇りを持って出撃をしていたとしても、こいつら

の言うように、本当にほんの少し、脳裏を掠かすめるほどの悔恨はあったかもしれない。そしてそれが、芥け子し粒つぶにも満たない怨念となる。それが、積もり重なっていく……。

　元よりエレメリアンは人間の心から生まれる生命体だ。

　怨念という、本来ならば不確かなものを吸収することに特化した個体も誕生する可能性はある。まさに、こいつらがそれだ。

「もうあたいらは、あたいらだけのカラダじゃない。たとえ望まなくても勝手に人間の宝を奪い、エレメリアンに施ほどこすだけの存在さ……開き直って楽しまなくてどうするんだい⁉」

　悲壮な嘲あざけりを自らに課す銀のプロメテウスギルディ。

　思った通り……こいつらは、悪にならなければ、海賊にならなければ、耐えられなかったんだ。イエローも、何を言っていいかわからず立ち尽くしている。

「――――で？　御ご託たくはいいから、ちゃんと質問に答えてよ。今ブッ倒せば、あんたらはまた復活するの？　しないの？」

　だがブルーだけは、絶対にエレメリアンの語る身の上話に絆ほだされたりはしない。

　答えないのならとりあえず倒す、とばかりに、ランスの穂先を金のプロメテウスギルディの顔面に差し向ける。

「マジやべえ……。俺らはそりゃ怨おん念ねんだけどよ……こいつ生物と喋しやべっている気がしねえ」

「フッ、テイルブルー……あんたは怨念を超えた恐ろしい存在のようだねえ……‼」

　プロメテウスギルディたちは、「何こいつ？」という視線を俺に向けてくる。そう言われても……。

　しかしブルーの闘志と関係なく、幕切れは唐突に訪れることとなった。

「モケ」

「……よし、今日の釣ちよう果かも上々だな。引き上げ時か」

　近寄ってきた戦闘員アルテイロイドの報告を受けて──あいつ、今、なんて言った……全く戦いもしないうちに、引き上げるだと⁉

「今日のところは、預けておくよ」

「預かるわけないでしょっ‼」

　ブルーの突き出したランスが、黒い壁によって阻はばまれる。

　ダーフィニアギルディと初めて戦った時に突然出現した、謎なぞの黒いエレメリアン。

　それがいつの間にか何体も湧わき出て、俺たちの周囲を囲んでいる。

「こいつら……やっぱりエレメパイレーツの一員なのか⁉」

　ブルーの槍やりで一体が爆散しても全く躊ちゆう躇ちよすることなく、他の黒いエレメリアンも全てこちらに襲おそいかかってきた。

　俺とブルー、イエローは背中合わせで全方位をフォローし合い、迎げい撃げきにあたる。

「ようし、現れだしたねえ……もうすぐだよ」

「この世界は──これで俺たちのもんだ」

　満足げな笑みを残し、銀と金のプロメテウスギルディは上空の海賊船から照射された光の帯に吸い込まれていった。

　現れだした……？　エレメパイレーツじゃないのか、この黒い奴やつらは？

「伏せてください、お二人とも‼」

　イエローは完全脱衣形態フルブラストモードの一斉射で、取り囲む黒い戦士を爆砕していく。

　全てが塵ちりに還かえったその時、トゥアールが悔くやしげな声で通信してきた。

『プロメテウスギルディの反応、ロストしました。退却した模様です』

「持久戦狙ねらいか……」

　一度フェニックスに完全撃破されたせいで、余計に慎重になっているんだろう。

　俺たちとの戦いより作戦遂行を優先しているエレメリアンは、躊ちゆう躇ちよ無く撤退するので追いかけっこの様相を呈ていすることがこれまでにもままあった。

　ましてあいつらは、アルティメギルという大組織の戦士じゃない。なおさら無益な戦いに拘こう泥でいしないはずだ。武ぶ勲くんを尊たつとぶタイプでもなさそうだしな。

　一旦避難していた人たちが集まりだしたので、俺たちは帰る準備を始める。

「なんだ、新しいツインテイルズがいる!?」

「青と……黄色いツインテイルズだ！　しかも見ろ、黄色い方は痴ち女じよだぞ!?」

　まるで初めて会うかのように、ブルーとイエローを物珍しそうに見つめる人々。

「…………え!?　みんな、何を言って……」

　さすがに冗談が過ぎるだろうと思ったが、俺が少し咎とがめるような視線を送っても、周囲の人々の様子は変わらない。

　愛あい香かが以前、テイルブルーになって一周年という投稿をしていたのを不意に思い出した。

　人々がかける言葉はまるで、フォクスギルディと戦った後ブルーに初めて向けられたものと同じだったからだ。

「と、とにかく……帰還しましょう……はあはあ」

　久しぶりの脱衣に息を荒らげながら、イエローが撤退を促うながす。

　興味と奇異の視線から逃のがれるように、俺たちはその場を速すみやかに走りだした。

　頭上では、プロメテウスギルディの海賊船も今まさに飛び去ろうとしている。

「……海賊船が……金色に輝き始めている」

　色が、明らかに違う。初めて見た時の不吉な黒から変貌を遂げたその輝きに、俺はむしろさらなる禍まが々まがしさを感じた。

　まるで色水を染しみ込ませた半紙のように、中途半端に地の黒と混じった金は……何かを吸い取っている過程のように思えたからだ。

『まさか、侵攻の要かなめは……あの海賊船の方……!!』

　トゥアールが、導き出した結論を躊躇ためらいがちに絞り出す。

　あっさりと撤退を繰り返すプロメテウスギルディは──地上に降りて俺たちを引きつける囮おとり。ただの誘導だった。

　いや、そもそもエレメパイレーツと最初に戦った日……それよりも先にこの世界にやって来て、根回しをしていたとしたら。

　とっくの昔に、この世界への侵食が始まっていたのだとしたら……！

　これまでのことを思い返し、俺はツインテールを雷で打たれたように身体からだを震ふるわせた。

　最初は、ホワイトとアナザーブルーだった。

　トゥアールと桜さくら川がわ先生の二人は、自分はほとんど一般人に姿を見られていないから忘れられても仕方がないと達観していた。

　しかし、次はテイルフェニックス。最終決戦においてあれほど鮮烈に駆けつけ、人々の心に焼き付いたであろう勇姿がおぼろなものとなっていた。テイルピンク、ロロリーも同様だ。

　あの時、もっと不審に思っておくべきだった。

　そういえばイースナ自身は気にしていなかったが、そもそもここ最近、ブラックとシルバーについての報道も全くなかった。エレメパイレーツとの初戦では、ブラックも仕事中に共演者に見送られて出撃し、しっかりと参戦したにもかかわらずだ。

　ずっと前から世間の人気が高かったシルバーのことが報道されなくなった時点で、もうかなり怪しかったんだ。

　そして今の、ブルーとイエロー。もはや、疑いようもない。

　プロメテウスギルディたちがお宝と呼び、海賊船に奪わせていたのは──

「…………この世界から……ツインテイルズの記憶が奪われつつあるのか!?」

キャラクター名鑑
048

プロメテウスギルディ



DATA

身長：255㎝
体重：281㎏
属性力：日替わり
（様々な属性を愛でる）

属性海賊エレメパイレーツの船長。金と銀の二体で一体の存在。死の淵を彷徨っていた雑兵が、異世界に堆積したツインテールへの怨念を吸収することで不死身の戦士として再誕。異世界そのものを破滅させようと目論む「世界の意思」に利用され、無数の異世界を巡りアルティメギルとは異なる侵略で人間たちを絶望させてゆく。属性力をどうでもいいと達観することで自我を保っている。

第五章　忘れない、そのツインテールを。

　基地のモニターで、戦闘後にニュースを確認する。

　いつも当たり前のようにしているルーチンだが、その日は空気がまるで違っていた。

　俺と愛あい香か、トゥアール、慧え理り那な、イースナ、メガ・ネ、桜さくら川がわ先生、母さん。

　一様に困惑を湛たたえた目で、スタジオでの討論を見守る。

『なるほど……つまり、この青の少女は味方かどうかはわからないと？』

『ええ、今の段階で判断するのは早計でしょう。笑っていてもひどく暴力的な目をしているのが気掛かりです』

「何これ……」

　一年前に同じように報道された時、怒り心頭だった愛香だが……さすがに今回は怒りよりも動揺が遥はるかに勝っているようだ。

　今のこの世界で、ブルーをからかってこんな放送をするとはとても思えない。

　間違いない。世界中のツインテイルズに関する記憶が、少しずつ奪われている。

「迂う闊かつでした。ツインテイルズの強化変身を封じられた時、この可能性に思い至っておくべきでした」

　これ以上直視かなわず、トゥアールはモニターの表示をプロメテウスギルディの海賊船の映像に切り替えた。

「世界中で──ツインテール属性が失われた時と同じような現象が起きています」

「そんな馬ば鹿かなことが……俺たち全員、属性力エレメーラは奪われていないんだぞ!?」

　属性力エレメーラの因果干渉力は凄すさまじい。

　例えば、ツインテール属性を失ったトゥアール、ツインテール属性を奪われた時の俺がそうだ。属性力エレメーラの修正力によって、すでに撮影された写真の自分すらツインテールでなくなってしまう現象を、俺自身の目で見てきた。

　しかしそれは、属性力エレメーラという絶対の力を奪われたがゆえのことだ。

　俺たちツインテイルズが健在なのに、世界からツインテイルズの記憶が消えるというのは、強大なエレメリアンの能力にしても限度を超えている。

「はい。私たちが個人的に所有している写真などは、今もまだちゃんと残っています。これはまだ仮説の段階ですが……」

　そこでトゥアールは、口を噤つぐんでしまう。

　単なる仮説ならば、これ程までに言うのを躊躇ためらわないはず。

「───プロメテウスギルディの能力は、正確には記憶の奪取ではありません。テイルギアでいうところの認識攪乱装置イマジンチャフ……つまり、記憶の改かい竄ざんです」

　ならばこうして観念して語られるのは、確信に近いものなのだろう。

「ツインテイルズの遺のこした痕跡はあるのに、それを認識できないっていうの!?」

　愛あい香かもツインテイルズとして、テイルギアの認識攪乱装置イマジンチャフに助けられてきた。だからこそ、認識の書き換えが世界にどれほどのことをもたらすかをよく理解している。

　俺たちのツインテールが紡つむいだ歴史が……この世界から消える。

　その哀しさ、やるせなさを噛かみしめ……しかし、ふと考えてしまった。

　これからの世界にとって、それは本当に悪いことだけなのかと。

「かなりまずい状況です。下手にプロメテウスギルディを倒せなくなってしまいました。認識攪かく乱らんは奴やつが無意識に発動している能力である以上、倒すことでむしろ世界中の記憶を元に戻す手立てを失ってしまうかもしれません」

「そんな……もしこのままだとしたら、あんまりですわ!!」

　慧え理り那なも、顔を真まっ青さおにして慌あわてふためいている。イースナも同様だ。

　どうする……。ここで俺が伝えるべきか、秘めるべきか。

　さっきのトゥアールよりも言うのが憚はばかられることだが……仕方がない。

「エレメパイレーツは倒す。だけど……人々の記憶が戻らないなら、それでもいいと思う」

　俺が意を決して告げた言葉は、コンソールルームに集った全員の思考を存分に凍り付かせたようだった。

「どうしてじゃ!?　あんな奴にいいようにやられっぱなしでいいのか、総そう二じ!!」

「みんな、頑張って戦ってきたのに……あんまりやないの！」

　イースナはもちろん、メガ・ネまでも普段の彼女からは考えられない剣幕で返してくる。

「エレメリアンは、属性力エレメーラを奪うこと以外に被害を与えはしないと思っていた……けど、これから来る連中はアルティメギルと違う。今日、それをよく思い知らされたよ」

「…………」

立ち上がり、俺に詰め寄りかけていたイースナは、ゆっくりと椅い子すに座り直した。

「この世界の人たちが笑顔でツインツイルズを応援してくれたのは、エレメリアンが侵略者とは思えないコミカルな一面があったことが大きいと思うんだ」

武器を振り回し、大勢の戦闘員せんとういんを引っさげて現れる怪人は、確かに怖いだろう。

けど俺たち人間にとって本当に恐いのは、目に見える侵略じゃない。

静かに日常を侵食される……征服だ。

「この先現れる奴らは、組織の統制の取れていない、どんなことをするかわからない奴らだ。世界中の人が、どれほど怖い思いをするかわからない」

俺の大きな願いの一つ。

戦い始めてからずっとずっと願い、そして努力してきたことの一つが……この世界の人々が、侵略に怯おびえないよう暮らしていけること──だった。

大きな戦いが終わって、ついにその願いを守り切れたと、ほっとしていた。

「だからこの世界が平和になるためには、ツインテイルズのことを忘れた方がいいのかもしれない。俺は、そう考えてしまった」

だけど……違ったんだ。むしろこれからの方が、その脅きよう威いは大きくなってしまう。

現れる敵は今までより弱くても、俺の願いは守り切れないかもしれない。

「あとは俺たちが、時々やって来る野良エレメリアンを人知れず倒す……そうすればみんな、侵略者に怯えずに暮らすことだけは続けられる。そうじゃないか……？」

重い沈黙に支配されるコンソールルーム。

　それを破ったのは、愛あい香かだった。

「そーじは、本当にそれでいいの？　世界のみんなが、ツインテールを好きになったっていう気持ちにまで蓋ふたをされちゃうかもしれないんだよ？」

　すまない、愛香。そんなつらいことを言わせてしまって。

　心の輝きを奪われることは、確かに怖い。今までだってずっと危険はあった。

　けど、高らかに名乗り上げて現れ、堂々と属性力エレメーラを奪うことを誇りとしていた連中と、知らぬ間に大切な記憶を書き換えていく連中とでは、脅威度が違いすぎる。

「俺は、もう覚悟を決めた。でも……みんなには悪いと思っている」

「……あたしはどっちでもいいよ。最近のテイルブルーだって、ようやくマイナスがちょいプラスになったぐらいだし。自分のせいで一般人が危険な目に遭うかも……って、一番つらいのはそーじだもんね」

「私はそもそも人々のテイルホワイトの記憶が曖あい昧まいなのが敵のせいかすら定かではないので、愛香さんに同じで」

　愛香もトゥアールも、俺を傷つけまいとしてくれている。本当は反論も罵ば倒とうも、山ほどあるだろうに。

「……大きな戦いが終わってからのこれじゃからな。この先のことを考えてしまうのはわかる……。特にお前は、誰だれよりも責任を背負い込んでいるからのう」

「うん、ごめんなあ、総そう二じくん」

　イースナ、メガ・ネも、全てを受け容いれたように、寂しげに笑った。

「私もトゥアールと同じく、それほど人々の記憶に残っていたわけではないから、言えた立場ではないが……」

　桜さくら川がわ先生は静かに立ち上がり、俺の後ろまで歩いてく

る。

「どうしてお前はいつも、悲しい選択を自分一人でしてしまうんだ。何な故ぜ私たち大人が、それを背負ってやることができないんだ」

　そして哀しみごと包み込むように、そっと抱き締めてきた。

「尊みことさんに全部言われちゃったけど……。母さん、総そうちゃんが大人になったこと、いっぱい褒ほめたけど……大人の責任しごとを全部引き受けてっていう意味じゃないのよ？」

「わかってるよ……ごめん、母さん」

　ふっと、頭の後ろの温ぬくもりが消える。

　桜さくら川がわ先生が離れた代わりに、慧え理り那なが俺の後ろに立っていた。

　立ち上がろうとした俺は、想像以上に自分の足が重くなっていることに驚く。

　俯うつむいたままの慧理那の表情は、前髪に隠れて伺うかがえない。

「観み束つか君……」

「……慧理那、ごめんな。せっかく、本当の意味で憧あこがれのヒーローになれたのに……」

「――見くびらないでくださいまし」

　大粒の涙を湛たたえていることも覚悟した。しかし俺を見上げる慧理那の瞳ひとみは、晴れやかなほどの気け高だかさに溢あふれていた。

「人々に憧れられたからヒーローなのではありません。憧れてもらえるほどの行動で示したからこそ、本当のヒーローなのです。それが世界のためならば……わたくしは喜んで、人々の記憶から去りますわ」

　胸の前で拳こぶしを握り締め、満面の笑みを浮かべる慧理那。

「わたくしたちだけが、それぞれをヒーローだと知っている……それでよいではありませんか！」

　愛あい香かたちは次々に、慧理那の貴とうとい決心に賛同するように頷うなずいていった。

　しかしもちろん慧理那も、自分がこれまでに残してきた思い出の全てを吹っ切れているはずもなく──

「……なんて、強がりましたが……やっぱり……ちょっと寂しいですわね」

　俺の胸に飛び込んできた慧理那を、そっと抱きしめ返した。

　か細く震ふるえるツインテールを見ていると、決意が鈍りそうだ。

　そんな半端な心根に冷水をかけるように、けたたましいアラートが響きわたった。

「あら何、このアラート。あんまり聞いたことないけど」

　母さんが不思議そうに天井を見上げる。確かに、エレメリアン出現のアラートとも違うな。単純に焦しょう燥そう感を煽あおる、一般的な警報音って感じだ。

「これは基地への侵入者を検知したというアラートです。……もしかして、結いわ翼ばね唯ゆ乃のが帰ってきたんでしょうか。部室の転送ロッカーからここに来る時、エレメリアンの姿だと警報に引っかかると教えていませんでした」

　トゥアールは立ち上がると、壁の端末を操作してアラートを手動でオフにする。

　確かに人間以外でこの基地に来るのは、他には唯ゆ乃のしかいないか。別の世界に出かけてくるって言ったっきり、帰ってきたって連絡がないが……。

「あれ？　そういえば唯乃さ、復活してから一度もエレメリアンの姿には──」

　愛あい香かがふと疑問を口にしかけたその時、ちょうどコンソー

ルルームの奥側の出入り口のドアが開いた。

　唯乃……フェニックスギルディがやって来たのだろうと、俺は視線を送った。

「よう」

　そこには――肩に曲剣を担かついだ金銀二体のプロメテウスギルディがいた。

「―な……」

　掠かすれた空気が喉のどから漏もれる。

　ツインテイルズの基地にエレメリアンが侵入してくるという、想像だにしえなかった非現実。

　普通に考えれば、幻覚か何かだ。

　俺たちの誰だれもがその事実を瞬時に受け止めることができず、放心状態で硬直してしまった。

「こいつはイカす隠れ家じゃないか。それじゃあ、ちょいとやらせてもらうよ!!」

　銀のプロメテウスギルディが、眼帯からレーザーを発射。

　俺たちが座っていたテーブルの天井が爆破され、建材の破片が降り注いできた。

　俺は咄とつ嗟さにトゥアールたちをかばい、その場を離脱する。

　焼け焦げた空気の香りで、ようやく眼前の惨状が現実であることを認識した。

「ありえない……テレポート能力を得たロリちゃんズでさえ、この基地には直接入り込むことはできません！　ましてや転送ゲートには、何重ものセキュリティを張り巡らせています!!」

　エレメリアンの姿であろうとアラートが鳴る程度で済むのは、唯乃が基地へのゲートの移動を認証されているからだ。

　こいつらが各地のいずこかの転送ポイントをジャミングしたとしても、この基地まで辿たどり着くのはセキュリティ上絶対に不可能。幾度も説明を受けたことだ。

　それなのに、何な故ぜ……!!

「あたいらは異世界移動の……異空間を超えるプロだよ？　あんたらがアルティメギルと同じような転送ゲートを使ってる以上、力尽くで介入することは不可能じゃあないよ」

「そもそも何度も言ったはずだぜ、俺たちは怨おん念ねんだってな……。怨念ってのはいつでも消えていつでも現れるし、どこまでもまとわりつくもんさ。お前らがどれだけ嫌がってもな……」

　っ……仮に、トゥアールの科学でも全く想定しきれない、出で鱈たら目めな能力を持った存在だとしても。無防備な俺たちを狙ねらって、基地に急襲してくるなんて……。

　こいつらは本当に、戦士じゃない。絶望を振り撒まく、怨おん霊りようなんだ──。

　金のプロメテウスギルディも一緒になって、無軌道に辺りを攻撃し始める。

「相手の拠点ふねに乗り込んで壊しまくるのは、海賊の十八番おはこだぜ!!」

「ッ……テイルオンッ!!」

　俺は吠ほえ立てるように叫んで変身し、トゥアールたちを庇かばって攻撃を弾はじいていった。

　愛あい香か、慧え理り那なとイースナも続けて変身し、金のプロメテウスギルディの前に立ちはだかる。しかし奴やつは俺たちに構わずフックを放ってメインモニターを貫き、亀き裂れつが全体に広がる。

　壁が砕かれ、床が燃え……コンソールルームは、見る見るうちに破滅に支配されていく。

　それどころか、銀のプロメテウスギルディの方は廊下に踏み出し、コンソールルームだけではなく基地の全体を破壊し始めたではないか。

　弾かれたように飛び出したのは──イエローだった。

　爆炎を突き破り、走りながら完全脱衣形態フルブラストモードとなって全武装を展開し、金のプロメテウスギルディ目掛けて一斉発射した。

「う、うう……ああああああああああああああああっ!!」

　イエローらしからぬ激しい雄お叫たけびが、爆発音をも塗り込める。

「ぐっ……な、何だこの気迫はっ……!?」

　金のプロメテウスギルディが何か攻撃を試みるより早く、イエローの放つ弾丸の暴風が直撃していく。零距離の絨じゆう毯たん爆撃であらゆる反撃を封殺され、ただ自らの肉体で破壊と再生を繰り返しながら、じわじわと後退していくだけだった。

　イエローの狙ねらいがわかった。俺はトゥアールに目配せして準備を頼み、もう一体の銀のプロメテウスギルディに向かう。

「桜さくら川がわ先生！　母さんと一緒に退避を!!」

　アナザーブルーのブレスはあれ以来不調が続いている。先生には、避難を頼むしかない。

「わかった！　私の代わりに、お嬢様を頼む……冷静さを失っておられる!!」

　俺に慧理那を託すと、桜川先生は母さんを伴ってコンソールルームの外へと避難していった。

　トゥアールは視線が合った俺に首を振り、ギリギリまで残るという意思を示している。

　踏み止とどまろうとする金のプロメテウスギルディと、火力任せに押し抜こうとするイエロー。

　死力を尽くした接戦で、二人は廊下の壁を最短一直線にブチ抜いた。瓦が礫れきをまといながら、曲がり角も行き止まりも関係なくひたすら一箇所を目指して突き進んでいった。

「レッド、ブルー！　メガ・ネ！　わらわたちは銀の方じゃ、力尽くで追い出すぞ!!」

「わかった！　属性玉エレメーラオーブ──男の娘属性ガールズボーイ！」

　ブルーは左腕に属性玉多重変換機構エレメアデイツシヨンを装着すると、髪紐属性リボンと匂い属性フレグランスを同時発動。

　飛ひ翔しようからの突撃力を強化し、銀のプロメテウスギルディに体当たりした。

　俺とブラック、メガ・ネもそれに続き、イエローの空あけた穴を通って押し込んでいく。

「くっ……こっちは四人がかりかい!?」

　辿たどり着いたのは基地の最奥、転送ゲート。やはりイエローは、こいつらが侵入してきた場所から外へ叩たたき出すつもりなんだ!!

「トゥアール！　今だ!!」

『了　い　　す!!』

　コンソールルームの通信機器がダメージを受けているためか、トゥアールの通信はノイズ交じりになっている。俺たちの思い出が破壊されたという事実を突きつけるように。

　トゥアールの操作で転送ゲートが起動し、極彩色の光を発する。

　俺は歯を食いしばり、イエローに続いてプロメテウスギルディもろとも転送ゲートの中に突っ込んだ。

　数え切れないほど世話になった、地下基地の転送ゲート……まさか、エレメリアンと同時に潜くぐる日が来ることになるとは。

　そのせいか、ゲートを抜けるまでの時間が普段の何十倍にも感じ

られた。

　転送ポイントから飛び出し、二体のプロメテウスギルディは地面を転がる。

　場所を吟味する余裕がなかったのだろう、そこは人通りの多い駅前の路地裏だった。

　勢い余って大通りに出ると、行き交う人々が足を止め、どよめきが上がる。

「わたくしが……基地が壊れるのはお約束だなどと言ったから……怨おん念ねんを呼び寄せてしまったのですわ……！　わたくしのせいで……!!」

「イエローのせいじゃない！　プロメテウスギルディの話を全部真に受けたら駄目だ!!」

　全弾撃ち尽くした武装を脱衣パージしても興奮より悲しみが上回り、弱々しく肩を震ふるわせているイエロー。日常の中のほんの雑談なんて、何ほどの影響力もあるはずがないのに。

　自罰の理由を何とか見つけ出し、責任を感じたがってすらいるようだった。

「……お前が正しかった、レッド……。まさか、ここまでする奴やつらじゃったとは……」

　ブラックが、怒りで声を震わせる。彼女たちの無念も合わせて叩きつけるべく、俺は立ち上がったプロメテウスギルディに向かい激高した。

「俺たちがアルティメギル基地にしたことの意趣返しか！　そんなにツインテイルズが憎いか……エレメパイレーツッ!!」

　いくらアポロギルディたちから招待を受けたからとはいえ、俺たちもまた、エレメリアンの基地を崩壊に導いた。その怨念もこいつらが吸収していたとしたら、ツインテイルズ基地へ攻め込んできた理由も合が点てんがいく。

「アルティメギルがあたいらに関係あるはずがないだろう⁉」

「俺が憎んでんのはツインテールだ！　意趣返しも何もねえさ、ただツインテールに滅びて欲しいだけなんだからなあ!!」

　上空に海賊船が現れる。世界から、一体どれだけの記憶を奪ってきたのか。

　もはやその船体は、限りなく純金に近い黄金こがねに彩いろどられていた。

　周囲の人々が、こちらを見て恐怖に顔を引きつらせる。

「怪物!?」

「なんだ、あの空に浮かんでるのは!?」

「逃げろ——っ!!」

　……悲鳴が聞こえる。パニックが連鎖していく。

　誰だれも俺たちのことを「頼りになる正義の味方」と認識していない。

　ツインテイルズがいれば大丈夫だ、と安心してくれてはいない。

　そうか……こんなに早いのは予想外だったが、来るべき時が来てしまった。

　ついに、テイルレッドも人々の記憶から消えてしまったのだ—。

　けれど、それでも構わない。この世界の人たちの、心の輝きを守ることができれば……。

「やろう、みんな。『名も無き戦士』として……この世界の平和を守るために戦おう!!」

　俺とブラック、メガ・ネは金、ブルーとイエローは銀の方へ。武装を手にし、二手に別れて二体のプロメテウスギルディへ向かっていく。

攻撃がぶつかり合い、火花が散ると、辺りの悲鳴が一層強くなる。

そうだよな。怖いよな。武器を持った人間が、怪人を相手に暴れているんだ。

俺たちが「ツインテイルズ」だという記憶が無ければ、エレメリアンも、俺たちも、恐怖の対象でしかないんだ。

仲間たちに大きなことを言ったばかりなのに……堪こたえるよ。

ブルーとイエローを相手に戦っていた銀のプロメテウスギルディが放った光線が、目標を逸それて逃げ切れていない人たちの方へ向かっていく。

俺は咄とつ嗟さに射線へと身を躍らせ、小さな両腕を目一杯に広げて攻撃を受け止めた。

「ぐうううっ……は、早く逃げて!!」

俺が避難を促うながすと、その人たちは小さく頷うなずいて駆け出していった。

「こいつら……人間に被害が出ようとお構いなしか！」

それとも、俺たちが庇かばうことも織り込み済みで暴れているのか。

周囲が真っ白に染まり、聞こえる音がことごとく遠ざかっていく。

どうしてこんなことになってしまったんだろう。

俺たちは確かに一度、世界を守ったのに。平和が訪れたはずだったのに……。

次に俺が我われに返った時、ブルー、イエロー、ブラックのテイルギアは弱々しく放電を始めていた。

「……あのさ、レッド……人知れず戦おうって方針はいいんだけどさ……いざやってみると、これってきつくない……」

「わたくしたちは、心の力でテイルギアを駆動させています」

「ちょっとな……か弱い乙おと女めのメンタルにはきついぞ、これ……」

　みんなの心が著しく弱って、テイルギアの出力に影響してしまっているんだ。

「ブ、ブラックちゃん……」

　ブラックのグラスギアの影響を受けるメガ・ネも同様だ。

　わかっている。本当は俺も、わかっている。わかっていて強がっていたんだ。

　忘れられるのは悲しい。こんなに素晴らしい思い出を……ツインテールの思い出を、世界から消したくない……!!

　でも、こうするしかないんだ！　この世界が、怨おん念ねんに取り憑つかれてしまったんだから!!

「そんな顔するなよ、テイルレッド……。俺たちはこうやって、異世界を巡ってきた……周囲の記憶が消えて孤独になれば、どんな強い戦士だって戦い続けられやしねえ」

「そうしてあたいらは、属性力エレメーラを奪って他のエレメリアンにバラ撒まく……もう、そういう生き方しかできない。そういう生き物なのさ、あたいら海賊は」

　決して誇るでもなく、自じ嘲ちようするように語る二体のプロメテウスギルディ。

「……結局、アルティメギルの作戦と大して変わんないじゃない」

　ブルーは地面に膝ひざをつきながらも、ランスを杖つえ代わりに懸命に立ち上がる。

「属性力エレメーラを奪うという生態を突き詰めるあまり、侵攻作戦がシステマティックに洗練されていく……そして、いつも最後にはツインテールの戦士を絶望させる……！」

　この世界で、一番最初にエレメリアンに狙ねらわれた少女。イエ

ローが、悲痛に言葉を絞り出して糾きゅう弾だんを重ねる。

「お前は、あれ程まで疎うとんでいたアルティメギルと、知らぬうちに同じ道を歩んでおるのじゃ……それも、度を超えて悪あく辣らつにな」

　ブラックがそう結ぶと、プロメテウスギルディは二体揃そろって自嘲を強めた。

「あたいらは怨念のカタマリだ。悪どいと言われたら、そうですとしか返しようがないね」

「……これで最後だ、恨み事ならいくらでも聞くぜ」

　プロメテウスギルディ二体が曲剣を重ね、エネルギーを集束させていく。

　俺はブルーたちを庇かばって進み出ると、真っ向から迎え撃つべくブレイドを正せい眼がんに構えた。

　状況は確かに危機的だ。哀しさで言ったら、これまででも屈指のものだ。

　だけど俺はもう、絶対に絶望したりしない。

　俺が本当にくじけそうな時……こうして立っていることさえできなかった時。

　力強い声援を届けてくれた人たちの思い出は、今も消えずにこのツインテールに残っているから。

　たとえこの世界からテイルレッドの記憶が消えてしまっても、最後まで戦い抜く!!

「うおおおおおおおおおおおおおおおおっ!!」

　闘志が消えかけないよう、雄お叫たけびを上げて着火させた、その時。

　俺とプロメテウスギルディの前に──幼い少女の幻影が浮かび上がった。

俺だ。テイルレッドだ。

我われながら、いいツインテールしてるなあ……と、他ひ人と事ごとのように思った、次の瞬間。

光が──周囲を包み込んだ。空が眩まばゆい輝きに包まれ、それが地平の彼方かなたまで拡ひろがっていく。

そしてその光の中から、次々とツインテールが溢あふれ出した。

様々な衣装、様々な表情の、無数のテイルレッドが。

「……な、何だい!?」

「何が起こったんだ、こりゃあ!?」

動揺し、重ねていた曲剣を離すプロメテウスギルディ。

「何か、見覚えあるレッドがいっぱいいるんだけど……」

「そうです……『いつでもテイルレッドたん』ですわ!!」

「ゲームの中から、飛び出してきたというのか!?」

ブルー、イエロー、ブラックと、次々に驚きよう愕がくを共有していく。

そうか……エレメパイレーツが認識を改かい竄ざんできるのは、生きている人間だけだ！　機械のデータまで書き換えられるわけじゃない!!

ゲームのデータとしては、依然としてテイルレッドは世界中に満ち溢れている。

たとえ人々がそれをテイルレッドだと認識できなくなっても、存在はしているんだ!!

トゥアールが言っていたじゃないか。異世界との境界が綻ほころび、『いつでもテイルレッドたん』が現実に影響し始めたと。

エレメパイレーツがこの世界に関わりすぎたことで、その歪ゆがみが爆発的に増大したんだ!!

　異世界同士が繋つながり、世界同士が対消滅してしまうというモデルケースが、これか。

　一方の世界のあらゆる生命いのちが、もう一方の世界へと溢れ出す。

　確かにこんなことが現実の世界同士で起きれば、破滅を迎える以外にない。

　今は一方がゲームのデータだからこそ、メルヘンな光景で済んでいるのか。

　それにしたって、これはあまりに神がかり過ぎている。一体どうして……。

『がんばれ、総そう二じ』

　清らかな旋律が、俺のツインテールに触れる。

「……まさか、ソーラ……」

　アルティメギル首領との戦いで声援を送れなかったことを悔やんでいた女神の声が、確かに聞こえた。

　それを皮切りに、周囲のテイルレッドもよりくっきりと視認できるようになっていく。

　ランドセルを背負った、進級テイルレッド。

　性能がすごいらしい、卒業式参加テイルレッド。

　正月早々実装されたという、晴れ着テイルレッド！

　現実の俺がチョコレリアンに襲おそわれている時ゲームでピックアップガチャになっていた、バレンタインテイルレッド！

　どこで見つけてきた、スク水テイルレッド……！　ナーステイルレッドに、パーカーテイルレッド……体操服テイルレッド！　元気にこんがり日焼けテイルレッド！

　世界合計課金額がゲーム史上最高とクラスメイトが言っていた、花嫁テイルレッド……!!

　まだまだまだまだまだまだ、ゲーム内のテイルレッドが、世界に溢あふれていく!!

　知らないうちに無茶苦茶実装されていたテイルレッドの数々が、ツインテールと笑顔を世界中に振りまく――――!!

「ぐ、ぐううう……世界が、可か愛わいいで溢れていく……！」

「世界が、ツインテールで溢れていく！　どれだけ記憶を改かい竄ざんしても、ツインテールが止まらない!!」

　金と銀のプロメテウスギルディは、揃そろって頭を抱かかえて苦しみ悶もだえる。

　怨おん念ねんの集合体であるこいつらには、光輝く希望こそ劇薬なんだ。

　まじまじと見たのは初めてだけど……ゲームのテイルレッドのバリエーションって、エレメリアンに妙ちくりんなコスプレさせられた俺ばっかりじゃねえか……。

「――――みんな、よく見てんなあ……!!」

　戦いの最中なのに……思わず笑ってしまった。声を上げて笑った。

　なんだよ、この面白過ぎる光景は……どこを見ても、テイルレッドだらけじゃないか!!

「……可愛いなあ……!!」

　最初に呟つぶやいたのは、誰だれか一人だった。

　それは次々に、周囲へと伝でん播ぱしていく。

　世界に溢れるテイルレッドを見て、恐怖に支配されていた人たちの顔が、穏やかな笑顔に変わっていく。

「テイルレッドちゃんはやっぱり、可愛い!!」

　忘れたはずのテイルレッドの名を、誰かが呟いた。驚いて振り返ると、その人は不思議そうに立ち尽くしていた。やがて、本物の俺へと視線を向けた。

「そうだ……どうして忘れていたんだ、俺たちのテイルレッドたんを!!」

「よくわからないけど、あの怪人たちが何かしたのか!?」

「今日も頑張って、テイルレッドちゃん！　怪人をやっつけて!!」

　他た愛あいのない声援に、これまでのどんな攻撃よりも動揺し、プロメテウスギルディたちは周囲へしきりに目を移ろわせる。

　いや、声援はテイルレッドへだけではない。

「テイルブルー！」

「テイルイエロー！」

「テイルブラック、テイルシルバー!!」

　あの最後の決戦で、世界を埋め尽くす侵略者たちに負けじとツインテールに送られた、沢山の声援。

「俺たちには、ツインテイルズが……ツインテールがついてるんだ!!」

　それは今日もまた、俺たちの心を熱く震ふるわせた。

　宝船のように黄金色に輝いていた戦艦から光が霧む散さんし、世界中に飛び散っていく。

　あとに残ったのは、黒く鬱うつ屈くつとした外装だけだった。

「あ、ああ……宝が……俺の宝が……消えていく……!!」

　上空の海賊船を見上げ、呆ぼう然ぜんと立ち尽くすプロメテウスギルディ。

　無意識に、勝手に奪ってしまうから仕方ない、と自己弁護していたくせに、随分と諦あきらめの悪いことだ。

「お前のじゃない……。ツインテイルズの記憶は……ツインテールは！　この世界全ての人たちの宝だ!!」

　俺たちがこの世界で紡つむいできたツインテール……怨おん念ねんごときに奪えるものか!!

　人々が沸き立つ中、トゥアールから通信が送られてくる。

『総そう二じ様。この世界の人たちが笑顔でツインテイルズを応援してくれていたのは……エレメリアンがコミカルだから余裕があるとか、話が通じて怖くないからだとか、そんな理由じゃありませんよ』

　何とか通信状況を回復できたようだ。しかし通信の精度以上に、彼女の晴れやかな心こそが俺たちへ澄み切った言葉を届けているのだろう。

『テイルレッドが可か愛わいいから！　いつも大好きなツインテールのために頑張っているから応援するって、みんな言っていたでしょう！　忘れていいはずないじゃないですか!!』

　さらには傍そばに立つビルのオーロラビジョンにトゥアールの顔が映し出された。

　それに注目する人々の笑顔を見れば、彼女がツインテイルズの一人・テイルホワイトであることを思い出しているのがはっきりとわかる。

『さあ、今日も胸を張って戦ってください、ツインテイルズ！　全ての異世界のヒーローとして!!』

　人々は画面を見つめ、歓喜の声を上げる。戦いを支ささえるもう一人の戦士、テイルホワイトへの声援が大きくなっていく。

「……何でこういう時には胸ネタでいじらないのよ、馬ば鹿か！　あんたいつもならあたしには張る胸が無いとか茶化すでしょ……!!」

　ブルーは深く俯うつむき、肩を震ふるわせている。

『あっれ泣いてるんですかブルー!?　レッドがおっぱいに興味あると世界が知ってしまったから!?』

「……よし、帰ったら針金ぐらいの細さになるまで絞る!!」

『えっ……何を……誰だれを!?　いつでもトゥアールたんを!?』

　ありがとう、トゥアール。

　俺がテイルレッドを忘れてもらおうと言った時、本当に悲しかっただろう。

　君の作ったテイルギアの輝きが世界から消えることが、切なかったはずなのに。

　もう二度と、君の思い出を奪わせはしない。

　俺は思いっきり息を吸い込むと、世界中に届けとばかりに目一杯の笑顔で叫んだ。

「みんなっ！　ツインテイルズを、いつまでも忘れないでね!!」



　周囲のビルの窓ガラスが割れるのではないかというほど、凄すさまじい歓声が轟とどろく。

「テイルレッドが可か愛わいいのはともかく、中身のそーじがたまに可愛いのはなんなの!?」

『うぎゅおおおおおおおおおおおん可愛いよレッドたあああああああああああん!!』

「いかん、身内に限界テイルレッドオタクがおるのじゃ！　いや確かに可愛いが!!」

「ええ子や……ほんまテイルレッドちゃんはええ子や……」

「テイルレッド可愛いでしゅわあああああああああああああああああ!!」

　ブルーもトゥアールも、ブラックもメガ・ネもイエローも……声に喜色が溢あふれていく。

　周囲には俺を見て立ちくらみを起こす人まで出始めているが、大丈夫だろうか。

　反面、プロメテウスギルディは先ほどのブルーたちよろしく身体からだを放電させて、ダメージの程を物語っている。

　絶望を施ほどこすことに特化しすぎた神が、輝く希望に苦しんでいる。皮肉な因いん果が応おう報ほうだった。

「これが、ゲームのデータだと……!?　たかがゲームに、俺たちの仕事が……!!」

「どうにかしてゲームデータを書き換えて、『いつでもテイルブルー』にしておくんだったよ……そうすりゃあ、事前登録段階でサ終していたのにねえ……!!」

「サービスが始まってないのに終了って何よ！」

　そのたかがゲームを、アルティメギルのエレメリアンたちは喜んでやっていたらしいぜ。

　誰だれが一番集めた、誰が一番進んだ……友達の家に集まって遊ぶ、子供みたいに笑ってな。

「笑顔を軽んじるお前たちが……誰かに施しをするなんて無理な話だったんだ」

　俺の言葉に歯は噛がみし、初めて怒りで身体を震ふるわせる金のプロメテウスギルディ。

「どいつもこいつも！　そんなにツインテールがいいか……海賊から記憶おたからを奪い返すほど!!」

「この世界の人たちは……強い。自分で何が好きか、惑わされず選ぶことができる。お前の施すまやかしなど、何一つ必要ない!!」

　そして最後に俺とブルー、イエロー、ブラックの頭上に、最強形態のビジョンが刻まれた記憶の欠片かけらが飛来し、それぞれの身体に吸い込まれていった。

「俺のツインテールは、記憶おもいでだ!!」

　左腕にツインテイルブレスを輝かせた俺を中心に、五人のツインテイルズが並び立つ。

「ツインテイル！　オンッ!!」

「エターナルパッド！」

「アブソリュートリング!!」

「インフィニットコンバイン!!」

　四色の光が天に立ち昇り、螺ら旋せんとなって絡み合った後、弾はじけ飛んだ。

　テイルレッド・アルティメットチェイン。

　テイルブルー・エターナルチェイン。

　テイルイエロー・アブソリュートチェイン。

　テイルブラック・インフィニティチェイン。

　四人のツインテイルズは最強変身チエインエヴオルブを果たし、偽いつわりの施ほどこしの神との決着に臨のぞむ。

「さあ行くぞ！　ツインテイルズの底力を見せてやる!!」

　俺たちは人々の声援を受けながらプロメテウスギルディに突撃していく。

「うおおおおおおおおおおおおおおっ!!」

　万感のツインテールを込めた鉄拳を放ち、金のプロメテウスギルディの右肩から先を爆裂させる。今までの戦いと違い、奴やつが再生を果たすまでにタイムラグが生じ始めた。

「ぐむむっ……！　さ、再生力が弱い……！　テイルレッドがあまりにもツインテール過ぎて、異世界のツインテールへの怨おん念ねんが封殺されつつあるのかよ!?」

「そうだ！　とくと見ろ……俺はツインテールだろう!!」

　前後左右に限りなくテイルレッドが溢あふれる、ツインテール空間。

　奴が異世界から怨念をかき集めて強くなるなら、俺はこの無数のツインテールでツインテールを高める。パーフェクト・ツインテール・サイクルが完成を見た。

　……って、全部俺のツインテールか……。自給自足のツインテールってやつだな―。

「レッドがだいぶヤバいわ！　みんな、とにかくもっと暴れられるとこまで行くわよ!!」

　俺はヤバいどころか絶好調なのだが、何かを危き惧ぐしたらしきブルーがウェイブランスエクシードを振り回す。

「ちいっ……周りを見ればツインテールに幻惑されちまうよ！」

「けど真正面を向けば、ブルーの甲板が上陸してきやがる！　どうすりゃいいんだ!?」

「沈没しろボケエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ!!」

　目をどぎつい逆三角にして赤く染め上げ、咆ほう哮こうとともに銀と金のプロメテウスギルディに飛びかかるブルー。

　大海原どころか地獄に沈没させんばかりのその迫力は、生命いのちを略奪する大海賊。

　周囲の人々はそんなブルーを見て、先ほどのように怯おびえるどころか「いよっ待ってました」とばかりに拍手を贈る。これが──今の俺たちの世界だ!!

　怒り狂うブルーを援護しながら、全員で突撃を続ける。背中に受ける熱く尊とうとい声がついに聞こえなくなった時、俺たちは街外れにある人ひと気けのない荒れ地に辿たどり着いていた。

「また勢いでやっちゃったけど、人前でパッド出し入れするのヒヤヒヤするわ……」

　やっと暴走が収まったブルーはトドメとばかりに一いつ蹴しゆうりしてプロメテウスギルディと距離を取り、念のため胸元を確認する。

「どうした、顔が暗いぞ！　その日暮らしを気ままに楽しむ海賊稼業、これほどのサプライズならば泣いて喜ぶところじゃろう!!」

　ブラックはダークネスグレイブメビウスを豪快に振るい、金銀それぞれのプロメテウスギルディの胴に光の斬線を刻み込んだ。

「ああ、ありがとよ……嬉うれしいぜぇ、ツインテイルズ!!」

「おかげで頭ん中がグチャグチャさ！　何を考えていいかわからない……とりあえず暴れるしかないねえ!!」

「───それはあたしも同感よ!!」

　ブルーは溜たまりに溜まった鬱うつ憤ぷんをぶつけようと、地面を蹴けり砕いてプロメテウスギルディに肉薄する。

　銀のプロメテウスギルディは腕からフックを射出。周囲数メートルを網目のように乱舞させ、触れる物全てを砕いていく。

「属性玉完全解放ブレイクエレメリーズッ!!」

ブルーの全身の属性玉変換機構エレメリーシヨンが閃せん光こうを放ち、敵の能力を写し取る。

ウェイブランスエクシードの穂先をアンカーのように撃ち出し、フックの乱舞に対抗。大気が爆発するかのような勢いで激突が絶え間なく繰り返されていく。

その攻防の間かん隙げきを縫ぬって銀のプロメテウスギルディに突っ込むと、俺は胴抜きでテイルカリバーを叩たたき込んだ。

「ぐあっ……ぐぐぐっ……!!」

劣勢になった銀のプロメテウスギルディの元へ駆け寄ろうとする金のプロメテウスギルディ。そこへはブラックが立ち塞ふさがり、神眼鏡ゴツドめがねから∞の光輪を放った。

「セラフィックインフィニットッ！　今日は大盤振る舞いじゃ、もりもり行けいおっさんたちよ!!」

いつもより数の多い幻影のおっさんたちが、プロメテウスギルディに大挙して押し寄せる。

『ぷふー、ぷふー……入団希望ス』

『俺たちの吐と息いきでマストに風を送るぞ！　せーの、』

『『『ふ―――』』』

それはさながら、全身てっかてかの筋肉自慢たちが荒れ狂う大海原を泳ぎ抜き、次々と海賊船の船体に取り付いていくかのような恐ろしい光景だ。

「グワ――――――ッ何だこの両目に眼帯をつけたくなる地獄絵図は――っ!!」

あまりの阿あ鼻び叫きよう喚かんに両目を手で塞ぎ、金のプロメテウスギルディはひたすら悶もん絶ぜつする。

「フッ……思い出したか、それが恐怖じゃプロメテウスギルディ！　ニヒルに感情を失ったとかほざいておいて、本当に感情が無かった奴やつなど見たことがないわ!!」

　身も蓋ふたもないことを言っているブラックだが、真理は突いているのかもしれない。

　プロメテウスギルディは……捨て鉢に今を生きるペシミストのように振る舞ってはいても、本当はもっと単純な楽しさを求めていたのではないだろうか。徐々に歪ゆがんでいくことに、自分でも気づかずに。

　それを、もっと大きく邪悪な意思に利用された。願っていた「施ほどこしの者」として生きることができなかったのが、こいつの不幸だ。

「メビウスクラッシャーッ!!」

　もちろん、ブラックの本領は幻術だけではない。

　超重武器メビウスクラッシャーを振り回し、二体の胴体へ立て続けに打ちつけてゆく。

「腋わき……汗……よだれ……ぐっ……ああああああああああああ!!」

「あぐううう、教師……男おとこの娘こ……お母さ――――ん!!」

　金と銀のプロメテウスギルディは、縋すがるように属性を口にしながら悶もだえる。身体からだのダメージは再生できているのに、奴やつらの全身からの放電はむしろ激しさを増していく。

『性癖のオーバーロードです!!』

　その理由を、基地でオペレートしているトゥアールが看かん破ぱした。

『プロメテウスギルディの属性は、日替わりでリセットされていたわけではなかった……ただ切り替わっていただけだったのです！
堆たい積せきしていた無数の属性が今、彼らが危機に陥おちいったことで防衛本能のように溢あふれ出しているのです!!』

　金のプロメテウスギルディが、左腕のフックを天に掲げた。

「こうなったら……もういっぺんてめえらのお宝を奪ってやる!!」

　奴らの海賊船が、上空に飛来。俺たち四人の身体が、最初の戦いで強化能力の記憶を改かい竄ざんされた時のように黒と金と銀のマーブルに包まれかける。

「そうはさせるか！　テイルカリバー！　時空装塡クロノモード!!」

　俺はテイルカリバーを逆手に構え、刃やいばを中心から二つに割ってに変形させた。

　時計の針の如ごとくＬの字形に変わった刃が、時間を一瞬逆行して奴らの特殊能力を斬ざん裂れつ。

　タネさえわかっていれば、危険な手品にも対処はできる。俺たち四人の身体を取り巻いていたマーブルの光は、あえなく霧む散さんした。

「じ、時間に縛られないツインテールだってぇ……!?」

　もはや、お宝を奪うという生きがいすらも斬きって捨てられ、銀のプロメテウスギルディは愕がく然ぜんとしながら後あと退ずさる。

「俺のツインテールを縛るのは時間じゃない……リボンやゴム紐ひもだ!!」

「レッド！　……ご主人様、お願いしますわっ！」

　決然と言い放つ俺に、イエローが凜り々りしくもどこか犬のような目で合図を送ってくる。

「テイルカリバー、生命装塡ライフモード!!」

　俺はテイルカリバーをエネルギー供給特化の形態に変形させると、柄つか尻じりから首輪紐リードを伸ばし、イエローのヴォルティックブラスターフォートレスの銃じゆう把はに合体させた。

「……まだ足りませんわ、もっとですわ……!!」

　凄すさまじい勢いで俺のエネルギーが吸われる。イエローは、かつてないほどの昂たかぶりで己のツインテールを爆発的に高めてゆく。

「ヴォルティックブラスターフォートレス！　最大被虐フルパワーッッ!!」

　手にした銃から発射する極大の雷弾だけでは飽き足らず、イエローは絶対脱衣形態アブソリユートブラストモードでの全武装も一斉発射。

　考え得る限りの最高火力で、金のプロメテウスギルディを欠片かけら一つ残らず吹き飛ばした。

　そのあまりの発射圧力には従来通りツインテールをアンカーにしただけでは耐えきれず、割腹筋属性シツクスパツクの属性玉エレメーラオーブでさらにツインテールを硬化していた。

　全武装を脱衣パージし、息を荒らげるイエロー。

　しかし数秒と経たたず空中にシルエットが浮かび、金のプロメテウスギルディは健在な姿で復活してしまった。銀の方が消滅した時に比べ、完全再生が桁けた違いに速い。

　今は世界の侵攻に費やす力までも全て、再生に回しているのだろう。

　それを見たイエローは、俺にツインテールでコンタクトを取ってくる。

　そうして俺たち四人は、相手を目まぐるしく入れ替えながら、次々と攻撃を叩たたき込んでいった。ブレイドが、ランスが、ブラスターが、グレイブが、四色の斬ざん光こうと弾光となって重なり、くすんだ金色と銀色を呑のみ込んでいく。

「気合いが足んないよプロメテウスギルディ！　ツインテールに屈したら、あたいら商売あがったりじゃないのさあ!!」

「ああ、すまねえプロメテウスギルディ……!!」

　……意思が統合されているはずのプロメテウスギルディに、乱れが見え始めた。

　金の方は徐々に弱気に……銀の方がより気性烈はげしく。

　要するに、迷ってるってことか……!!

『散々ご高説垂れていますが、不死身のシステム的にはありきたりのものです！　金と銀のプロメテウスギルディは、補完関係にあります……両方同時に完全消滅すれば、いずれか一方を縁えにしに復活することはできません!!』

　戦闘中に敵データを分析していたトゥアールから、先ほどイエローとコンタクトを取り合ったのと同じ撃破方法が通信されてくる。これで、確信に変わった。

「了解した！　そういうエレメリアンなら、何度か戦ったな!!」

「はんっ……何を了解したってえ!?」

　通信が聞こえない銀のプロメテウスギルディが、茶化すように問い質ただす。

「俺たちが今まで、どれだけ多くの戦いを繰り広げてきたと思ってる!!」

「あんたがドヤ顔で自慢してる不死身の能力なんて、今までの戦いでとっくの昔に攻略済みだってことを了解かくにんしあったのよ!!」

　ブルーは言い捨てながら、全身に搭載されたブレードを金と銀両方のプロメテウスギルディに振るっていく。獣けものの爪つめ痕がごとく全身に刀傷を刻まれながらも、やはりプロメテウスギルディは一拍おいて完かん璧ぺきに再生してしまう。

　こいつらほどの力の相手を寸分違わず同時に撃破するとなると、容易なことではない。

　そこで思い出したのが、この数日俺と世間を悩ませていた、こいつの軽口だ。

「……お前は、俺が胸に興味がないと揶や揄ゆしたな。確かに俺は、胸のことをよく知らないかもしれない……だが、胸のことを仲間に教えてもらうことはできる!!」

　俺は一計を案じ、それを悟られぬように、ブルーたちに伝えたつもりだったのだが──

「……あれ、これ、めっちゃえっちなこと言われてるんじゃな

い……？」

「はあ、はあ……も、もちろんお教えいたしますが……」

「これで誤解するなと言ったらもうアホじゃろ……!!」

　ブルーたちは全員顔を真まっ赤かにし、思い思いにもじもじしている。

　何っ……仲間に、俺の作戦が阿あ吽うんの呼吸で伝わっていない……!?

『ぐあああああああああああああ何な故ぜ私は変身してそこにいないんですぐわあああああ!!』

　しまいには、通信越しにトゥアールが何故か悶もだえている。

　……言葉無くコンタクトを取ることに、慣れ過ぎていたかもしれないな。

　やっぱりちゃんと口に出して言うことも、時には必要だ。

「絆装塡ネクサスモードと希望装塡ホープモードだよ！　胸の属性玉エレメーラオーブの力、リフレクションバーストを増幅するぞ!!」

「アホじゃった……!!」

　ブラックが絶句している気がするが、俺は気にせずテイルカリバーを絆装塡ネクサスモードに変形させた。

　テイルカリバーに、ブルー、イエロー、ブラックの武器から分離した一部が装着される。

　フュージョニックバスターの剣ともいうべき、ツインテイルズの合体大剣だ。

　そこへ属性玉エレメーラオーブの力をテイルカリバーに負荷する希望装塡ホープモードを合わせる狙ねらいは、ブルーとイエローの得意とする合体技を極大化して放つためだ。

「希望装塡ホープモード！　教師属性テイーチヤー!!」

　ツインテイルズ最古の合体技であるリフレクションバーストは、巨乳属性ラージバストと貧乳属性スモールバストの力を合わせ、弾性を備えた反射結界を生成する攻防一体の技だ。

　二人はその技を進化させ、これまで何度もピンチを乗り越えてきた。

　エターナルチェインの力で発動する上位技リフレクションギガバーストに、今回は俺とブラックの力も合わせ、解き放つ!!

「「「「リフレクション・エクサバースト!!!」」」」

　俺以外の三人が若干ヤケクソ気味に言い放ったのが気になるが、ツインテールの呼吸は完かん璧ぺきだ。

　俺たちがいま発動できる、最大最強のオーラピラー。弾性を備えた壁どころか、空間そのものを遮断する究極の拘こう束そく結界。

　テイルカリバーから発射された光の球体は、二体のプロメテウスギルディをまとめて拘束バインドする。

「ぐああああああああああ……き、巨乳と貧乳の力……いや、それだけじゃない!!」

「カテゴライズしづらい胸の大きさの力まで、込められているねえ……!!」

　プロメテウスギルディが驚嘆の声を上げる。

「わらわのことか？　フッ……巨乳とも貧乳とも言えぬ魅惑の成長途中胸、その力を思い知ったか!!」

　……まあ俺は力を結集と増幅する役だし、ブラックも特に胸関係の属性玉エレメーラオーブを使用しているわけではないのだが、四人分の力を合わせているのは確かだ。

　勝機を逃のがさず、俺たちはそれぞれの武装を構えた。

「「「完全解放ブレイクレリーズ!!」」」

「完全解放ブレイクレリーズ！　テイルカリバー究極装填アルティメットモード!!」

　四人の武装が完全解放ブレイクレリーズし、属性力エレメーラが充じゆう溢いつしていく。

　感じているか、プロメテウスギルディ。

　今お前たちを捕らえた結界も……これから放つ技も。

　お前が不要だと断じた、「とことんまで好きになる」心の力だ……!!

　ツインテールの力だ!!

「ファイナルブレイザー!!」

「エクストリームウェイブ!!」

　俺とブルーの技は途中で交差して融合し、渦うずを巻いて突撃し。

「コズミックジャッジメント!!」

「インフィニットバニッシャー!!」

　ブラックの技をイエローが蹴けり込むことで、威力を加積させた光弾となって飛ひ翔しようした。

　四人のツインテイルズの必殺技はリフレクションエクサバーストの中に突入し、威力そのものを閉じこめ、反射させ、増幅再発射する。

　再生特化エレメリアンへの特攻とでも言うべき効力を発揮した。

　奴やつらのどちらかが健在という状況は、もはや生まれようがない。

「ぐわあああああああああああああ……!!」

「うああああああああああああああああああ!!」

　消滅と再生を何度か繰り返したようだが、ついに同時の消滅を迎えた瞬間。

　閃せん光こうに呑のみ込まれ、爆散する二体のプロメテウスギルディ。

　怨おん霊りようが天に昇り消えていくかの如ごとく、爆炎は静かに消えていく。

　お前たちの敗因は……エレメリアンの心の集合体でありながら、それがネガティブに傾きすぎたことだ。

　たとえ人間に負けたエレメリアンであっても、負けてなるものか、次は必ず勝つ──そんな崇高な精神を集めて奮ふるい立っていれば、どれほどの脅きよう威いであったか。

「……すごいのうレッド。これだけ規格外の力を発動しても、まるで疲れた様子を見せぬとは……やはり首領との決戦以来、ツインテールの力が無尽蔵になっているのかもしれんな」

　ブラックは賞賛しているようで、「無理をするな」と言い含めているようにも感じられた。

　心配ないさ……俺は、ツインテールを好きな気持ちを増幅させて戦っているんだからな。

　だからこそ、プロメテウスギルディは敗北した。

　元々エレメリアンは、気持ちのいい奴やつらばかりだ。そんな連中の、あるかないかわからないような憎しみをちょっとずつ集めたところで、強くなれるわけがないだろう。

　俺は、ダーフィニアギルディの最期の言葉を思い出していた。

　プロメテウスギルディは、何者かに利用されている……そんなふうに言おうとしていたように思える。

　プロメテウスギルディはクロウギルディが再生復活しただけの存在ではない。自然発生したエレメリアンじゃないのかもしれない。

何者かが意図して創つくり出した存在。異世界を消したいという破滅的な願望を持っていたのは、そのためではないだろうか。

広大な異世界のどこかに、もっと巨大な野望を秘めた敵が潜んでいるとしたら。

──いや、ツインテールへの憎しみそのものが、意思を持った敵だとしたら……。

悲しげに俯うつむくイエローを見て、それらの推測が静かに霧む散さんしていく。

戦いに集中して考えないようにしていたが……帰投しようと準備をしたところで、俺たちは現実に打ちのめされることとなった。

帰るべきツインテイルズ基地が、今は──。

◇

今度こそ、プロメテウスギルディを打ち倒した。

二体同時に消滅させた以上、怨おん念ねんとやらが結集するのもまた幾年月がかかるだろう。

しかし、その勝利の代償は……大きかった。

戦いが終わり、基地へと無言で戻る俺たち。とても凱がい旋せんという気持ちにはなれない。

転送ゲートを潜くぐった先は、見るも痛ましい光景が広がっていた。

火の手は消えているが……だからこそ、かえってその惨状がまざまざと浮き彫りになる。

「うっ……ううう……わあああああああ……」

壊滅してしまった基地をあらためて目まの当たりにし、慧え理り那なは人目も憚はばからず号泣する。

　俺も愛あい香かもイースナも、メガ・ネも……かける言葉が見つからない。それどころか、無惨に破壊された基地を見ていると、自分たちも涙してしまいそうだった。

　俺は慧理那の肩を支ささえながら、コンソールルームへ向かう。

「お疲れ様です、皆さん……今度こそ、よくやってくださいました！」

　ドアが周囲の壁ごと吹き飛んでいるため、トゥアールの姿は廊下からでも確認できた。

　頬ほおも白衣も煤すすで汚れながら、いつもと変わらない輝くような笑顔で俺たちを出迎えてくれる彼女の姿が。

　無事を確認して戻ってきたのだろう、桜さくら川がわ先生と母さんもそばにいる。

「ごめんなさい、トゥアールさん……わたくし、基地を守れませんでした……!!」

　トゥアールの前まで躊躇ためらうような足取りで歩み寄り、慧え理り那なは再び肩を震ふるわせる。

　天井から垂れ下がったケーブルの切れ端はしが断続的に散らす火花の音にかき消されるほど、弱々しい嗚咽おえつを漏もらしながら。

　トゥアールは膝ひざを屈かがめて慧理那の頬を撫なで、あやすような声で言う。

「大丈夫ですよ、慧理那さん。だって──」

　　　みみっさ。もぱえあらんにゃー。

　ぴめすすぽゆせせ。

　　　　　　　　きゅあーん。きゅあーん。

　基地の外に出た俺たちが、奇妙な作業音を聞くようになってから、僅わずか二時間。

「すぐ直せますから」

　再び招かれて入り口のドアが開くと、まぶしく輝くトゥアールのドヤ顔とともに真新しい基地の全ぜん貌ぼうが目に飛び込んできた。

「…………………………そりゃそうだよな。そもそもこの基地自体、出会ったその日に一晩で造ったんだから、直すのはもっと早いよな……」

　俺はちょっと目め眩まいを覚え、ふらついてしまう。ブチ切れて完全に忘れてた……。

　愛あい香かとイースナ、メガ・ネも、思い思いにほっとしている様子だった。

「よかった……よかったですわ――――――っ」

「フフフいいんですよいいんですよ慧理那さん、好きなだけ私のおっぱいに埋まっていてください」

　感極まってトゥアールの胸に飛び込む慧理那。愛香も桜川先生も、さすがにいつものように引き剥はがそうとはしなかった。

「それにぶっちゃけ私、基地のそこら中が爆発する中でヒビ割れたモニターに向かいながら通信するの、かなり燃えましたし……一生に一度は体験したいシチュでした」

「うわあああああんわかっちゃいますわその気持ち――――っ！　わたくしは悪い子ですわ―――っ!!」

「わかるわトゥアールちゃん！　超絶わかるわ！　私も残ればよかった……!!」

　何やら共感し合っているようだけど……万事解決したから言い合える冗談か。俺も、あの時は本当に気が気じゃなかったんだぜ。

「慧え理り那なは責任感が強すぎるよ。何でも一人で背負い込もうとしなくていいんだ」

「はいブーメラン」

　愛あい香かにビシリと指を突きつけられ、俺ははっと自分を省かえりみる。

「……そうだな。本当にそうだ……」

「総そう二じ。ぶっちゃけまだ完全には吹っ切れておらんじゃろ。異世界の境界のこともあるしのう」

「まあな……。でも、色々複雑に考えすぎてると反省したのは、本当だよ」

　イースナは常日頃ごろから、自分の眼鏡めがねは全てを見通すと豪語して憚はばからなかった。

　俺の悩みがまだ宙ぶらりんなことも、見抜いているんだろう。

　けど、自分の至らなさを痛感したのは確かだ。だからこそ、悩んでばかりはいられない。

　この世界とツインテールを守ること。それが俺の原点であり、終着でもあるのだから。

「よし、基地もリフォームされたことだし！　早速これから、ツインテール部夏合宿の打ち合わせの続きだ‼」

　俺は、思いきり今を満喫することに決めた。

　ガラにもなくあれこれ考えすぎるから、侵略者に足元を掬すくわれる。

　俺はツインテール馬ば鹿かのまま突っ走るぐらいで、ちょうどいいんだ。

「あら、珍しくノリノリじゃない、総ちゃん」

「今回のことで、俺も自分の心の未熟さを痛感した。まずは、ツインテールを鍛きたえ直しだ‼」

「素敵ですわ、観み束つか君‼」

「これ以上どう鍛えんのよ、あんたのツインテール好きを⁉」

　真新しくなったテーブルにつきながら、これからの日々に思いを馳はせる。

　世界に刻まれた、ツインテールの記憶。

　それは属性力エレメーラという心の輝きとともに、人々に勇気を与えてきた。

　侵略者との戦いの日々で強くなったのは、俺たちだけじゃない。この世界の人間全てが、心の強さを育はぐくんでいたんだ。

　俺はもう、世界に忘れられた方がいいなんて思わない。

　むしろ、積極的に記憶していて欲しい。

　ほんの少し、やる気を出したい時。前に進みたい時。勇気を振り絞りたい時。

　俺たちのツインテールがそのきっかけになってくれれば……何よりも嬉うれしい。

　全ての心の輝き……そしてツインテールを守るため。

　今日も俺は、ツインテールになる。

繋章　辿り着いた魔星。

心の力。それは、無限の可能性。

数あま多たの並行世界がそれぞれ独自の進化、繁栄を遂げても、人間の心をエネルギーとした科学技術がその極点に位置するのは、一つの例外もなく変わらない。

だからこそ、生まれる邪悪も心の力で駆動する怪人や怪獣となるのは必然だった。

それぞれの正義と生存のため、人間と怪魔の戦いは、あらゆる世界で果てしなく続く。

とある異世界にも、総そう二じたちツインテールの戦士とはまた別の形で心の力を振るう、強力な戦士がいた。

その名は、魔ま星せい少しよう女じよ。

星の意思を宿していると言われる魔法──魔ま星せい術じゆつを操る、魔法少女たち。

心の力を基に超文明を発展させた惑星・ユーマエルよりの使者によって、大いなる力を与えられた存在だ。

より正義のヒーローとしての活動に特化した存在。

自らテレビ番組の登場人物となり、世界の平和と玩具の販促ノルマを守る戦士たち。

そんな彼女たちは──

「あああああああああああああああ助けてくれッス死んでしまうッスあああああああああ」

　弾はじけるような若さを水着に包み、猛吹雪ふぶきの雪山で遭難していた。

　四人の少女と一匹の謎なぞぬいぐるみが、白銀の中に消えていく。

　異世界の境界が綻ほころんだ影響で、ツインテールと星の魔法――二つの世界の戦士たちが今、運命の交こう錯さくを果たそうとしていた。

　そして、さらにもう一つ――――

集結章・一　ツインテールの異世界。

　プロメテウスギルディとの戦いから数日が経過した。

　世界の人々の記憶も元に戻り平穏な日が続いているが、まだ最大の問題が残されている。

　異世界の境界が壊れ始めていること──ソーラの言うように、ゴールドチェインが影響したのでないとすれば、本当の黒幕が残っているはずだ。

　エレメパイレーツを操り、異世界を消滅させようと企たくらむ、真の敵が。

　その日夕食後しばらくして、俺は近所のコンビニに出かけた。

　買い物を終えた帰り、薄暗い道を歩いている時のこと。

　よろめきながら歩く、小さな影が目に入った。不審に思い、そっと近付く。

「さささ……寒い…………助けて……」

　何とそれは、海パン一丁の男の子だった。

　赤髪で色白、年の頃ころは小学校の低学年ぐらいだろうか。

　自分の身体からだを抱き締めて震ふるえ、足取りが覚おぼ束つかない。今にも倒れ込んでしまいそうだ。

「君っ……どうした⁉　家族とはぐれたのか⁉」

　男の子へと慌あわてて駆け寄り、声をかける。

　どうしてこんな夜に、こんな格好で外を歩いているんだ。子供がその辺の水場で戯たわむれるにはまだ微妙な季節だし、今日は特に蒸し暑いわけでもない。

何かの事件に巻き込まれたのではないかと、肝を冷やす。

屈かがんで目線を合わせると、男の子は恐る恐る口を開いた。

「と、友達と一緒に山で撮影…………いや、遊んでいたら、猛烈に吹ふ雪ぶいてきて……気が付いたらここを歩いていたんだ……」

「吹雪ふぶきの雪山!?　そんな馬ば鹿かな……っていうか、どこの山だ？」

そりゃ季節問わず雪が残ってる山はいくらでもあるだろうけど、さすがに六月で猛吹雪はないだろ。

そもそもここから徒歩で行ける山なんて、陽よう月げつ学園の裏山ぐらいのもんだ。

今、トゥアールオーが守護神になっている、あの……。

「……冷たい……！」

俺が肩に触れると、男の子の身体は冷え切っていた。

まるで、本当にこの格好で雪山を歩いて来たみたいに。

この子の言っていることが本当なら、ちょっとした超常現象だが……少なくとも寒い場所にいたことは本当のようだ。

「とにかく、家族や知り合いとはぐれたんだね？　まず、警察に保護してもらおう。俺も一緒に行くから」

そう提案した途端、男の子は激しく動揺し始めた。

「お願い、警察はやめて！　僕、身元を証明できないんだ……！」

ど、どうしよう。なんか訳ありっぽいぞ。

でもそうなるとますます、俺ができることは警察に連れて行くことだけなんだよなあ……。

俺の逡しゆん巡じゆんを見て取ったのだろう、男の子は意を決して言った。

「…………信じてもらえないかもしれないけど。僕は、ここと は別

の世界から迷い込んでしまったみたいなんだ……。ここでは力が上手く使えなくて、自分ではどうしようもなくて……」

　男の子が不安げに見つめてくるので、俺は――

「――ああ、なんだ。異世界から来たのか……それなら納得だ！」

　ほっと胸を撫なで下ろした。よかった、重い家庭の事情とかじゃなくて、世界を超えて来ただけで。

「何でそんな秒で納得するのおおおおおおおおおおおおおおおおおお!?」

　元気なツッコミだ。体力もまだ残っているようで、何よりだ。

「知り合いに異世界人が何人もいるし……それに、この世界の人間なら誰だれでも知ってることだけど、俺は異世界からやって来る怪物と戦ってるからな…………今も」

「か、怪物と戦っているだって？　君は一体――。男、だよね……それなのに戦う力を持っているの？」

　超常現象にはまだ馴な染じみが薄いが、異世界からの来訪者なら人間でも怪人でも、対応には慣れたものさ。本来なら男に戦う力は無いと、この子も認識しているフシがあるのは気になるが……。

　異世界人とわかった以上、警察よりもうちに連れて行ってトゥアールに協力してもらった方が安全だろう。

◇

　男の子はかなり身体からだを冷やしている。地下基地に連れて行く前に身体を温めた方がいいと考え、一緒にお風ふ呂ろに入ったの

だが──。

「…………」

　男の子は、バスチェアに座ったまま無言で動こうとしない。フランクにし過ぎて、警戒心を強められてしまったような気がする。

　やむを得ず、俺は髪の毛を洗ってあげるためにシャンプーを手の平に取った。

「あ……僕の身体からだは魔ま星せい力りよくで清潔に保たれてるから、シャンプーとかは大丈夫だよ」

「ませいりょく……？　エレメーラ……属ぞく性せい力りよくじゃなくて……？」

　もしかして、警戒しているのではなくお風ふ呂ろ自体に慣れていないのだろうか。

　結局シャンプーをしてしまったが、水に濡ぬれても尖とがったままの髪の毛が不思議だ。まるで、馬の耳みたいに二箇所、ピンと張っている。

　それにちょいちょい気になるワードを口にしているので、後で聞かせてもらわないとな。

　男の子を脇わきの下に手を入れて持ち上げ、浴槽に浸からせる。

　少し狭いが俺も一緒に入り、同時にほっと溜ため息いきをついた。

　何か、弟ができたみたいで新鮮だな。この子が異世界人だと告白してくれなければ、ここまではできなかっただろうけど。

「俺、余計なことをしたかな？　君がすごく寒そうにしていたから……」

「う、ううん……ありがとう……だいぶ落ち着いたよ。お風呂はちょっと一生モノのトラウマがあって苦手なんだけど、今日はありがたいや……」

ようやく安あん堵どの表情を浮かべる男の子。

トラウマって何だろう。まあ、寒いっていうのは、それだけでただつらいもんな。

「俺は、観み束つか総そう二じ。君は？」

「知り合いからは、ウマちゃんって呼ばれてるよ。いや、この姿の時はウマト……かな？」

俺の知ってる異世界の子たちと同じで、やっぱり名字は持たないみたいだ。

ウマトを見ていると、不思議な感覚に囚われる。

「……ツインテール……」

「え？」

思わず口にしてしまっていたようだ。俺は照れ笑いを浮かべ、

「俺、目に見えないツインテールを知覚することができるんだけど……」

「いや、そんな霊の気配がわかるみたいなノリで言われても!?」

「言い得て妙だな。君の傍そばに、強力なツインテールを感じるんだ。まるで守護霊のように、この場にいなくても君を抱き締め、守っているみたいだ……」

俺としてはより安心してもらおうと口にしたことなのだが、ウマトは自分の身体を掻かき抱いだいた。

「ひいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい地じ縛ばく霊れい!!」

浴室に反響した悲鳴に、思わず自分の言動を省かえりみる。

確かに、言ってることがまるっきり霊能力者だな。

初対面の子にこんなことを信じてくれって方が無理か……。

「さて、ぼちぼち上がろうか。俺の仲間を紹介するから、その子の

力を借りよう」

「うん、ありがとう」

　ウマトも今度は自分で出ようと、ゆっくりと浴槽をまたいだ。

『……スター、トランス──』

　その時。絞り出すような声が、電流のように脳を貫いた。

　同時に、今まさに世界の片隅でツインテールが誕生するのを知ったような──祝福にも似た感動が心に満ちる。

　併あわせて叩たたきつけてくるような殺気も感じ、俺は水飛沫しぶきを上げて浴槽から立ち上がった。

「！　何だ、この恐ろしく獰どう猛もうなツインテールの気配は!?」

「ツインテールの気配!?」

　またも絶句するウマト。

　この子はまだ子供だ。ツインテールにも気配が存在することを知らなくて、当然か……。

　脅きよう威いが質量を持って、さざ波のように到来する。周囲がじわじわと震ふるえ始める。

　来る……何かが!!

「まずい！　湯船の中に入れっ!!」

　ウマトの頭を押し込むようにして、二人で湯船に身を沈める。

　直後、激しい震動に襲おそわれ、頭上を衝撃波が通り過ぎていったのを感じた。

　息継ぎをするために、二人で立ち上がった瞬間。

「……ぅぅゥゥウマちゃ――――――――――――――――――――
んっ!!」

　背後に月の輝く夜空を臨のぞみながら、狼おおかみのように吠ほえ立てる少女の姿を見た。

「何だあああああああああああああああああああ!?」

　夜空が見えるのも当然。浴室の壁は、大きくブチ抜かれている。

「そこまでよ、誘ゆう拐かい魔！　まさか、悠ゆう々ゆうと一緒にお風ふ呂ろキメてるとは思わなかったわ……!!」

「誘拐!?　違っ――」

「落ち着いて陽ひ奈な、この子は――」

　俺たちは血相を変えて弁明しようと試みるが、

「指一本動かさないでっ!!」

「っ……!?　これは……!?」

　少女の警告が言霊と化したかのように、一瞬で身体からだの自由が奪われる。手足が思うように動かず、心なしか息苦しい。

　俺の周囲の重力を操作しているような……これはあの子の力か!?

　せめてタオルを巻かせてくれ、丸出しなんだ!!

　下半身の無防備に焦あせる俺の網もう膜まくに、夜よ闇やみを切り裂さく山吹色のツインテールが飛び込む。

　見事なツインテールだ。今、全裸で身体からだの自由を奪われているのを忘れてしまうほどに。

　自らのツインテールと揃そろいの、華やかなフリルに彩いろどられた山吹色の服。

　それを見て、彼女はロロリーと同じ魔法少女なのではないかと想起してしまった。

「魔ま星せい力りよくの気配がする……君、普通の人間じゃないわ

ね」

　一方、少女の方も俺を観察していたようだ。

　また〝ませいりょく〟か……。どうやら、この子たちが共通して操る力の名前みたいだな。

「百戦錬磨のツインテールだ……まるで一年間戦い続けてきたような凄すごみを感じる……」

　彼女を見て、俺はそう結論づける。いや、一年と見て取ったけど……ツインテールの奥底に、もう一年分の戦いの記憶が刻まれているような……。それは俺の気のせいか……？

「そんなこと、僕は一言も教えてないよね⁉　どうやってその情報を引き出したのさ⁉」

「ツインテールは万の言葉よりも雄弁にその人を語る。あの子のツインテールを見れば、どんな日々を過ごしてきたのかはある程度推察できるさ」

「何だこの子……もしかして僕は、とんでもなくヤバい人の世話になってしまったんじゃないのか⁉」

　……人生の先輩として、わかりやすくツインテールについて解説したつもりなのに……ドン引きされてしまった。俺にはものを教える才能がないのだろうか。凹へこむ。

「……ヤバい⁉　ヤバイやつなのね⁉　でももう大丈夫よ、ウマちゃん！　助けに来たわ‼」

　ウマちゃんと呼ぶということは、このウマトの知り合い……だろうか。

　女の子は勇ましく浴室に踏み入ってきたが、俺たちの……というか俺の格好を見るや、

「えっ……ていうか、誰だれ、君……。やだ、裸……」

　ぽぽっと頬ほおを染めた。

　でも、特に手で目め許もとを隠したりはしない。俺と、隣の男の

子をガン見している。

「ちょ、ちょっと早く隠してよっ！　堂々と見せつけるようにしちゃってさ……そんなに自信あるわけ!?」

　それなのに、この理不尽です。

「指一本動かすなっていったのは君だろう!?　人ん家ちの風ふ呂ろの壁ぶっ壊して入って来といて、裸に驚くか普通!?」

「陽ひ奈な！　この子は僕を助けてくれたんだ、乱暴な真ま似ねはしないでくれ!!」

「え……そうなのっ!?」

　ウマトが必死に訴えると、女の子は大層驚いた様子だった。だから、最初にそう言おうとしたのに……。

　身体からだを取り巻いていた重圧が消えたため、俺は置いてあった洗面器を咄とつ嗟さに摑つかんで股こ間かんを隠した。

　それが免罪符になったかのように、女の子はさらに遠えん慮りょなく俺を観察してくる。そしてその目が、胡う散さん臭そうに細められていく。

「あれぇー……おかしいな。確かに君、パッと見は常識人っぽいよね……でもどうしてだろう、私のセンサーが危機を感じ取ったのよ。とてつもない変質者がウマちゃんをさらっていったって……」

　……………………いや、自覚が無いわけじゃないけど、見ず知らずの人に面と向かって変質者って言われると、やっぱショックだ……。

　つまりその気配を感じてしまったから、確認無しに民家の壁をブチ抜くなんて無茶をしたのか。

「とにかく、ゴメンね！　壁は私が何とか直してみるから……そういう魔ま星せい術じゅつは苦手なんだけど……」

　誤解も解けてほっと一安心したところで。

　一安心したところ、だったんです。

ここに近付いてくるんだ。お馴な染じみのツインテール、お馴染みの闘気が。

「久々に何かやらかしたわねトゥアール――――――――――――ッ!!」

浴室のドアが×字に斬きり裂さかれ、ガシャリと音を立てて床に落ちる。

やっぱりそこには、息を切らした愛あい香かが立っていた。

手には何も持っていない。ただ、手刀を形作っているだけだ。

俺はあらためて、床に転がったドアの残ざん骸がいの鋭利な切断面を見つめる。参りましたな。

こうして、邂かい逅こうしてしまった。

愛香と、謎なぞの魔法少女。二人のツインテール。二対ふたつのツインテールが。

「……トゥアール、じゃ、ない……!?」

動揺を隠せない愛香。俺の家で爆音が響いたら真っ先にトゥアールを疑うのは、まあ……これまでの経験からして仕方がないことかもしれないが。

「――――誰だれよ、あんた」

愛香の声のトーンが下がる。

「それはこっちの台詞せりふよ。あなた誰」

一人だけ場にそぐわない煌きらびやかな服をまとった少女も、一歩も退ひかずに鋭い眼光を放つ。

「そーじの家ブッ壊してんじゃない!!」

「これは、ウマちゃんが誘ゆう拐かいされたと思って、無我夢中で！　っていうか、あなただってほら、壊してるし!!」

「あたしはドア！　あんたは壁じゃない!!」

…………人ん家ちを損壊させたという点では、等しく公平なのだが……。

愛あい香かは視線だけをこちらにやり、俺の隣に見知らぬ男の子がいるのを認めた。

「見たのね、そーじの裸を」

「え……うん、見たけど、別に気にしないって言ってたわよ、カレ」

言ってない……。俺は言ってない……。

愛香のツインテールが、緩やかに逆立っていく。

「……あんた、さてはエレメリアンね……。唯ゆ乃のみたいに、人間の姿に化けられるタイプってわけ。痛々しいコスプレしちゃって……」

「なっ……痛々しいですって!?」

そうだろうか。むしろ、小柄なあの子には普通に似合っているように見えるが。

もっとも、現場を見ただけで判断すれば目の前の魔法少女服の女の子がこんな破壊をしてのけたことになるわけで、愛香が真っ先にそう考えるのも無理はない。

愛香は胸の前で腕を構えると、躊躇ためらうことなく唱となえた。

「テイルオン……!!」

テイルブルーに変身した愛香は、裸の男二人を挟み、魔法少女の女の子と激しく視線をぶつけ合う。

「変身した!?　なんだあのデバイスは……ユーマエルのものじゃない!?」

テイルブルーを目撃して随分驚いているが……ウマトの言葉から、俺にも少しずつ事情が呑のみ込めてきたぞ。

　ロロリーと同じ印象を持ったのは、おそらく間違いじゃなかった。

　つまりあの魔法少女は、別の世界の戦士なんだ。

　ブルーは無言で顎あごを上げ、浴室の外を示す。魔法少女と二人、家の外の狭い裏道に出た。

「私はレイアーソル。星の力を振るう魔法少女……魔ま星せい少しよう女じよよ」

　少女は律儀に名乗り上げた。

「魔法少女？　この世でもっとも信用できない肩書きの一つね」

　せっかく相手が歩みを見せているのに、ブルーは変わらず喧けん嘩か腰だ。

「あたしはテイルブルー。あんたと同じように自己紹介するなら……ツインテールを力にして戦う戦士、ツインテイルズよ」

　お返しとばかり、大おお仰ぎようにふん、と鼻を鳴らすレイアーソル。

「ツインテールを力にして戦う？　意味不明ね……怪しすぎるわ」

　何てことを言うんだ……そんなに素晴らしいツインテールを持っているのに！

「「………………」」

　凄すさまじい視殺戦が繰り広げられている。

　どっちがより深く眉まゆを顰ひそめられるか競ってるのかってぐらい、二人の顔に険が増していく。

「ねえ……あなた、鏡で自分の胸見たことあんの？」

　レイアーソルの目線が、より深くブルーの胸に注がれる。

　ターゲットをロックする電子音声を幻聴するほど、一直線に発射された力強い視線だ。

「あるわ……っていうか毎日見てるわ。何でそんなこと聞くのよ」

「だったらあなたのその服、何の罰ゲーム？　胸の谷間が無いのに谷間を見せるための隙すき間まがあるって……なかなかの悲劇なんですけど。無理してそんな胸の大きい人用にしつらえたような格好しない方がいいわよ？」

「んなっ……！」

　ブルーのツインテールが、急速に怒りを湛たたえていく。

　恐るべし、レイアーソル。テイルブルーのギアのアンダースーツが本来胸の大きい女の子のために作られたものだということを、この一瞬で看かん破ぱしたのか……‼

　しかし、ブルーも言われっぱなしではない。ひくつく頰ほおを顔面の筋力で抑え込みながら、視線をレイアーソルの胸元に全力投球する。

「そういうあんたの服こそ、くしゃみしただけでずり落ちて胸が丸出しになりそうなくらい不安定に見えるけど、大丈夫？　引っかかるものがないのに見栄張ってそんな服着なくてもいいのに」

「ぬぐっ……！　ご、ご心配なく、ご覧のとおり自前の巨乳でぎゅうぎゅうに押し上げてるから。それに星衣類スタイルは、分子間結合力で肌にくっついてるから、ずれることはないの」

「はっ、何かテイルギアの説明で似たようなこと聞いた覚えあるわ。やっぱり唯ゆ乃のと同じで人間に化けた上にテイルギアパクってんのね」

　確かに、自分の意思で動かさない限り外部からの干渉でスーツがずれたりしないのは、テイルギアと同じだな。

「あたしの胸も確かに小さいけど、それでも限りなく微乳程度にはあるわよ。あなたみたいに、ギャグにして面白いレベルで突き抜けたド貧乳と一緒にしないでもらえる？」

「ギャグ……あたしの胸が……ギャグ……⁉」

　まずい……ブルーが劣勢だ……！

「……いいわ。どっちの胸が小さいか……」

「拳これで決めるってわけ？」

「「上等」」

　ブルーとレイアーソルの目が、同時に発光した。

「よせ、ブルー！」

　濡ぬれた肌を夜風が苛さいなむのも気にせず、俺は洗面器で股こ間かんを隠したまま裸足で家の外に飛び出した。

「大丈夫よ、ご近所に迷惑はかけないわ！　そんなレベルの戦いになるはずないしね!!」

　ブルーはフォースリヴォンに触れ、光の帯を引き抜くようにウェイブランスを取り出した。

「それは私も同意見だわ。あなた見た感じそこそこ打たれ強そうだし、あんまり手加減しないわよ!!」

　相手が武装したのを確認し、レイアーソルは太ふと股ももにつけたバンドから何かを取り出した。

　文庫本を数冊重ねたぐらいのサイズだろうか……パールホワイトとピンクで彩いろどられたその箱が、前開きでＶ字に展開。そして、中からトレイのようなパーツが迫り出してくる。

　続けてもう片方の手で胸のブローチに触れると、光が押し固められるようにして細長いカードが出現した。カードの中心のサークルには、ステッキのようなものの絵が描かれている。

　レイアーソルはそのカードを、先ほど開いたトレイに差し込み、再びカバーを閉じた。

　その瞬間。

　《Ａｒｍｅｄアームド ｏｎオン，Ｐｒｏｍｉｎｅｎｃｅｔａｆｆプロミネンスタツフ．》

天空から流星のように光が降り注ぎ、レイアーソルの手に棒状の何かが握られた。

「ステッキ……？」

「あれはレイアーソルの武器、プロミネンスタッフ。魔ま星せい少しよう女じよはああして、魔星紙片スターピースと呼ばれるカードを使って武器を実体化したり、様々な能力を行使することができるんだ！　普段はあまり使ってくれないのに、相手との同調行動が功を奏したね……！」

思わず見入ってしまった俺に、ウマトが横で解説する。その声は、どこか誇らしげだった。

「はああっ！」

「たああっ!!」

二人は近所に迷惑をかけないという前言通り、大きく跳躍して空中で戦闘を開始した。

確かに俺や愛あい香かの家の周辺は（主に俺の部屋がたまに吹き飛ぶので）近所迷惑にならないよう防音や衝撃吸収を施ほどこしているとトゥアールも言っていたが、それはテイルギア装着者レベルの戦士が戦うことを想定したシロモノじゃあないはずだぞ。本当に大丈夫か……。

蒼あおと山吹色の光が、尾を引きながら空中で何度も交こう錯さくする。

顎あご。鳩尾みぞおち。肝臓……。

レイアーソルは手にした魔法のステッキで、躊躇ためらいなくブルーの人体急所をブン殴なぐりに行っている。

そしてその容よう赦しゃなく放たれる攻撃が、ブルーにとってはむしろ「ああ、このぐらいやってもいい相手なんだな」という安心をもたらしてくれる。

「ただの洋服だと思ってたけど、やたらと大おお袈げ裟さに火花が

散るじゃない」

　ブルーも最初は遠えん慮りよがちにランスの柄つかで脇わき腹を殴るなどしていたが、刃やいばの部分で斬きりつけても魔法少女服が防護しているのを確認した途端、一層攻撃が激しさを増していった。

「な、何者なんだあの青い子は……レイアーソル相手に一歩も退ひかないなんて、ただ者じゃないぞ……!!」

　洗面器が他にないので重ねた手の平で股またを隠したウマトが、興奮気味に言い放つ。

「その青い子を知る人間からしてみれば、あっちのオレンジの服の女の子の方がよっぽどただ者じゃないんだけどな……」

「いや、陽ひ奈なは普通じゃないんだ！　あまりに強すぎてヒーロー番組一つダメにしておもちゃの過剰在庫の山を築いた伝説の戦士なんだよ!?」

「君のその説明で強さが伝わるか!?」

　上空で繰り広げられる女子高生超決戦。

　レイアーソルとブルーはそれぞれ、道路を挟んで対面の電柱の上に着地し、睨にらみ合う。

「ホントに痛い目見なきゃわかんないみたいね」

「オーケー、あたしも怪け我がさせないように立ち回るのやめるわ」

　小休止ももどかしいとばかり、またしても同時に跳躍。前言通り、輪をかけて激しい激突音が木霊こだまし始めた。

「やあああああああああっ!!」

「はあああああああっ……!!」

　岩で岩を叩たたく音にも聞こえる。

　金属で金属を殴なぐりつける音にも聞こえる。

はっきりとしているのは、それらの鈍い轟ごう音おんを奏かなでているのは、十代の女の子同士の肉体のぶつかりだということだ。

しかし、いつからだろう。

二人のツインテールが──微ほほ笑えんでいる。俺にはそれがわかる。

拳こぶしを交えるうちに、言葉なくとも気付いたのだろう。

互いの相手に邪心はない。正しき信念を持った戦士なのだと。

二人は、戦いを通してわかり合うことができたんだ……。

──────わかり合ったのに、なんで引き続き戦ってんの……!?

さんざっぱら殴り合い、先ほどと同じ電柱に、今度は位置を入れ替えて着地する二人。

互いの瞳ひとみが、決着を望んでいた。

「私の〝大魔星術マキシマギアス〟、見せてあげるわ」

レイアーソルは、二本指で挟んだカードを見せつけるようにしてかざした。

「完全解放ブレイクレリーズッ!!」

それに応こたえ、ブルーはランスを頭上で旋回させ、構え直すと同時に完全解放ブレイクレリーズした。

《Ｅｘｔｅｎｓｉｏｎエクステンシヨン，Ｍａｘｉｍａｇｉａｓマキシマギアス．》

先ほどのようにデバイスにカードを読み込ませて電子音声が響くと、レイアーソルが手にしていたステッキが変形。薄赤色の刀身を持つ光波剣が形成された。

「エグゼキュートウェ――――――――イブッ!!」

「プロミネンスラッシュ……!!」

獣けものが吠ほえるように叫び、ウェイブランスを手にして突っ込むブルー。

静かに力強く唱となえ、剣と化したプロミネンスタッフでそれを迎え撃つレイアーソル。

奇くしくも炎と水という対極の技が相そう克こくし、天に巨大な爆華が咲く。

…………俺ん家ちの真裏で。

爆煙は地上にまで到達し、狭い道路に濛もう々もうと立ち込める。

「ホントに……やるじゃない」

「……あんたもね……」

その煙が晴れる頃ころ……二人のツインテールが、息を切らして向かい合っていた。

「あたしたち、どうして戦ってたんだっけ？」

「こっちの台詞せりふよ！　もうっ……！」

「「あはははははははは っ……」」

その快こころよい笑い声は、ノーサイドの体現。試合終了のゴングが鳴った後に憎しみは存在せず、ただお互いを認め合った志の同じ二人の闘士がいるだけ。高潔な敢かん闘とう精神がそこにはあった。

でもリング上じゃなくてよそのお家うちの風ふ呂ろ場ば破壊して試合開始しちゃったんですよ、あのヘビー級ボクサーの方々。

「…………」

「…………」

　そして強制的にそのタイトルマッチを観戦させられたフル○ンの男二人は、呆あつ気けに取られたまま立ち尽くしていた。

◇　★

　今さらながら俺は、脱衣所に着替えを取りに出た。素早くトランクスを穿はきシャツを羽は織おって、ウマトにも洗濯してあった俺のシャツを渡す。サイズは合わないだろうが、勘弁してもらおう。下は乾燥機にかけておいた海パンを返した。

　出入り口の方に気配を感じ視線を移すと、こちらを伺うかがうようにひっそり立っているトゥアールに気がついた。

「これは珍しい……異世界からのお客様ですか」

「トゥアール！　あんた、もっと早く来なさいよ!!」

　変身を解除した愛あい香かが、浴室から脱衣所へと顔を出す。

「もちろん来ていました！　ただ総そう二じ様の総二様が期間限定無料公開中だったので、視力という名のアクセスがそちらに集中していただけですごっふん!!」

　見つかって早々、愛香の物理攻撃で肉体のサーバーダウンを迎えるトゥアール。

　ロエルたちがそうだったように、別の世界の人間が初めてこの豪快なじゃれ合いを目撃したら大層驚くだろうな、と思っていたら──レイアーソルはむしろ安心したように頷うなずいていた。脱衣所はもう一杯なので、彼女は浴室内に留とどまっているが。

　レイアーソルの山吹色の魔法少女服の輪郭が粒子になって弾はじけ、一瞬で変身が解ける。

　ウマトは陽ひ奈なと呼んでいたな……小柄な女の子が姿を現した。

「私は星ほし上がみ陽奈よ。よろしくね」

　上も下もヒラヒラしているビキニっぽい水着に、同じ山吹色を合わせたビーチサンダルを履いている。

「わっ、何で水着なのよ!?」

　変身を解いたらそんな格好とは思っていなかったのだろう、愛香は目を丸くしていた。

「話せば長くなるけど、水着姿で山で撮影してる途中で、猛吹雪ふぶきに巻き込まれて遭難したのよ……。それで気がついたらここにいたの」

　いや……格好より重要なのは、彼女の髪型だ。黒髪のロングストレート。

　二度見しても、やはりツインテールじゃなくなっているな。めちゃくちゃアクティブに動いてる巨大なアホ毛は二本、頭頂にあるが……。

「ふふ、年とし頃ごろの男の子にはちょっと刺激が強い格好かな？」

「何よその余裕っぷり!?」

　俺の視線に気づいたのか、陽奈がウインクしてくる。愛香も横で何か言っているようだが、確かに俺は陽奈の首から上に眼まな差ざしを送りすぎているのかもしれない。

「ちょっと？　おーい」

　陽奈が俺の前で目の焦点を確認すべく手を振っているようだが、よく見えなくなってきた。

　そっか。

　この娘は、変身している間だけツインテールなのか……。

　そっか。

　そっか………………。

「――キミ。変身解いた私見て、露骨にがっかりしてない？」

「！　ま、まさか！」

　陽奈に強い口調で詰め寄られ、俺はようやく少し我われに返った。

　俺の悪い癖くせだ……。ツインテールを解ほどくところを見ると、落胆したり絶望したりするのは。

　愛あい香かにも散々怒られてきただろうに。

　何か深い理由があるかもしれないじゃないか。トゥアールのように、変身した時しかツインテールになれない事情があるとか。

「嘘うそ、めっちゃがっかりしてる！　女はそういう視線、すぐわかるんだからね!!」

　陽ひ奈なはまだ納得していない様子だ。仕方がないので、俺は思いきって本音をぶつけることにした。

「……わかった。じゃあ、質問したいんだけど……君が変身している時だけツインテールになるのはどうしてなんだ？　きっと、何か事情があるんだよな？」

「え？　別に事情なんてないし……何だったら、変身してもツインテールじゃない方がいいくらいだけど」

　馬ば鹿かな――――――――――!!

「そーじ!?」

　白目を剝むき、口から霊魂が出かけ、膝ひざから垂直落下した俺を、慌あわてて抱かかえ起こす愛香。

　あ、あれほどの素晴らしいツインテールを、いらないと思っているなんて……。

「ほらそーじ、ツインテールよ!?　わかる!?」

　愛香は俺の手に自分のツインテールを握らせる。それはさながら、脱水症状時の経口補水液。生命いのちの水だ。うう、生き返る……。

「……ねえねえ、もしかしてその子、人外!?　未確認生物っ!?」

　目を輝かせて俺に接近してくる陽奈。

「ご覧の通り陽奈は、ＵＭＡウーマが大好きなんだ……」

　その理由はウマトの口から語られる。え……俺を、未確認生物ＵＭＡと……？　そんなふうに誤認する要素がどこにあるというんだ……。

「失礼なこと言わないで！　そーじはれっきとした人間よ！　ツインテールに変身したりツインテールの気配を感じたりツインテールを見て感情を読んだりツインテールに一喜一憂して瀕死になったり古代ツインテール語を話したり自分の中にツインテールを飼ってたりツインテールを武器に変えて戦ったりするぐらいで、かっこいいただの男の子よ!!」

「そうだ、俺は観み束つか総そう二じ……ツインテールが大好きなだけの、ごく普通の男子高校生だ……」

　息も絶え絶えながら、俺は自分がどれだけありふれた凡夫かをアピールする。

「ふーん……まあ、それはおいおい。ねえ、どこか落ち着ける場所で話さない？」

　全然信じてない系の「ふーん」を俺たちに手た向むけると、陽奈は髪の毛と水着のフリルをはためかせてトゥアールへと向き直った。

「話し合いは必要ですが……さて、どうしたものでしょう。閉店した後ですが、未み春はる将軍の喫茶店をお借りしましょうか」

「え、いいじゃん地下の基地に案内すればさ。同じ異世界の戦士同士なんだから」

「いつもは愛あい香かさんが真っ先に警戒するじゃないですか、知らない人を基地に入れるのは!?」

　トゥアールが慎重になっているのは、先日基地が敵の襲撃を受けたばかりで、その時慧え理り那なに大泣きされた件が尾を引いているんだろう。

　愛香は助け船を出さんと、握った拳こぶしを見せつけるように掲げた。

「拳これで語り合ったあたしが言うんだから間違いないわ、この子はいい子よ」

　そうか……異世界の戦士同士が友情を育はぐくむ架け橋になれたなら、破壊された風ふ呂ろ場ばもフル○ンで長時間夜風に晒さらされた俺たちも報むくわれるってもんさ。

　ウマトを温める目的で風呂に入ったのに、どうしてまた寒い思いをさせることに……。

「…………私のことは、出会ってから一か月ぐらいずっと疑ってたくせに……」

「あ、何よトゥアール、拗すねてんの？」

　愛香に指摘されるや、トゥアールは顔を真まっ赤かにしてそっぽを向いた。

　確かに、異世界からやって来たトゥアールが何か裏の思惑を秘めているのではないかと、愛香はしばらくの間警戒していたようだったからな。

　でも裏を返せば、トゥアールのお陰でそれだけ人を信用できるようになったんだよ。

「そうだ、お風呂の壁の修理お願いしていい？」

「私をＤＩＹ研究会観み束つか家駐在員だと思っていませんか愛香さんはっ!?」

　不機嫌そうに肩で風を切りながら、トゥアールは浴室に足を踏み入れた。

　白衣のポケットから取り出した携帯型の修復剤噴霧器を浴室に空あいた穴に向けた、その時。

「せんぱ――――――――――――――――いっ!!」

　水着姿の女の子が外から走ってきて、トゥアールの横を突き抜けて来た。

「やっと見つけたッス！　お空にでっけー花火が上がったから、『あ、絶対先輩だ』って思って走ってきたら……案の定だったッス!!」

「でっけー……、花火……？」

　愛香の眼まな差ざしが明らかに女の子の胸元に発射される。

　そこに咲いた大輪の花を見るや、この世の憎しみを凝縮したような形ぎよう相そうと化して。

「あの子も、ウマトの関係者か？」

　俺のシャツを着て膝ひざまで裾すそで隠れているウマトに、念のため確認を取る。

「うん……彼女は地ち平ひら遥はるか。陽ひ奈なと同じ魔ま星せい少しよう女じよ……レイアーテラだ」

　この子も魔星少女らしいが、急いでいたのに陽奈のように変身して突っ込んでこなかったのには、理由があるのか……それとも、それだけ冷静だったのか。

「遥はるか……皇み月つきちゃんや愛まな美みちゃんは見かけた？　念話どころかコスモチェンジャーの通信さえうまくいかないのよ、この世界」

「いんや、残念ながら。てゆーか、魔ま星せい術じゆつそのものが上う手まく発動できねーッス」

「私は、戦う分にはなんともなかったけどなあ」

　横から二人の話を聞いている感じ、あと二人、この世界には魔ま星せい少しよう女じよが来ているっぽいな。

　その二人の安否が気がかりなのだろう、陽ひ奈なの表情が深刻さを帯おびていく。

「お願いみんな、力を貸して。私たちみたいに、水着で遭難したままこの世界に来ているはずの仲間がいるの。特に一人は、小学生の女の子で……今いま頃ごろ怖くて泣いてるかも」

「────何な故ぜそれを先に言わないのです!!」

　ここまでは異邦人たちに珍しく距離を取って接していたトゥアールだったが……その陽奈の懇願を聞いた途端、紺こん碧ぺきの双そう眸ぼうに眩まばゆき意志の光を灯ともらせた。

　彼女の心の昂たかぶりに呼応するように、白衣はアイロンをかけてすぐのようにパリッと伸び、風もないのに裾すそがはためいている。

「幼女の助けを求める声に応こたえる……！　それはヒーローにとって全てに優先されること！　相手の素性を警戒するなどという小こ賢ざかしいことは後です！　このトゥアールちゃんの科学力の全てを懸けて、必ずやその幼女を見つけ出してみせます!!」

「……う、うん、お願い、ね……幼女じゃない子の方も」

　たじろぎながら頷うなずく陽奈に、愛あい香かがけっこう神妙に忠告する。

「こいつには気をつけて、小さい女の子相手には見境ないから。最悪の場合はこのあたしの腕力の全てを懸けて、必ずや葬り去るわ」

　トゥアールの場合は陽奈へのちょっとした照れ隠しでもあるんだろう。多分。

　愛香の宣言は間違いなくガチだが。

　トゥアールは手早く風ふ呂ろ場ばの壁を塞ふさぐと、先頭に立ってその場にいる面々を基地へと案内していく。水着の上から羽は織おれる着替えの服も用意するとのことだ。

「……まあ、そのぐらい欲望に正直な人の方が、信用できるかな」

　歩き出した陽奈がトゥアールをそう評したのが、少し意外だった。

★

　総そう二じたちが陽奈、ウマト、遥と遭遇を果たしたのと、同時刻。

　彼らの家がある区内から少し離れた場所を、二人の少女が不安げに彷徨さまよっていた。

　森しん閑かんとした夜道に、ビーチサンダルが地面に擦こすれる音がやけに響く。

「……マナ、もう駄目かも……」

　黄色いビキニを着たポニーテールの少女、美み金かね愛まな美み。彼女の衰弱は著しく、こぼれ出る言葉も弱々しい。

「しっかりしてください美金さん……猛吹雪ふぶきの山から、ようやく人里まで降りてこられたのです……わ、私たちは助かります……」

　ウサギの耳に似たカチュームを頭につけ、白いワンピースの水着を着ている幼い少女は、朔さく良ら皇み月つき。

　年上の連れを懸命に鼓こ舞ぶこそしているが、下腹部を両手で押さえ内股またで歩いていることから、彼女が何に耐えているのかが推して量られる。

「でもこれ、ホントに現実なの……？　マナたち、雪山で遭難して凍えて幻覚を見てるだけじゃないの……？　まだすっごく寒い

し……」

「わ、私、ずっとおトイレを我慢しているんです……寒さよりも、そちらの方が……!!」

「皇月、無理しすぎると身体からだに悪いよ？　もう、その辺で済ませちゃったら？」

「絶っっっ対に、嫌ですっ…………!!」

　皇月と愛美もまた陽ひ奈なや遥はるかと同じ魔ま星せい少しょう女じょだが、人の家で暴れるほど元気なその二人に比べれば、頼るものが無く不安なためかこの世の終わりのような顔をしている。

　そんな無防備なか弱い二人の少女の後ろから、巨体がそっと近付いていく……。

「お嬢ちゃん」

「ぴっ……」

　二メートル以上あるぬぼっとした巨体に背後から声をかけられ、皇月は軽く飛び上がって仰天した。致命的な追加ダメージが下腹部に入る。

「何だお前ー!?　宇宙怪人かこんにゃろめー!!」

　皇月をかばいながら虚勢を張る愛美。弱々しく握ったグーを軽く前後させる。

「仕事帰りに妙な気配を感じてこっそり後をつけてみれば……。メガネドンを知らぬことといい、怪人と誤解することといい……お前たち、この世界の者ではないな」

　また一人、少女が闇やみの中から現れ出でた。健けな気げに脚を震ふるわせる愛美たちを気遣ってか、努めて穏やかな口調で。

「わらわの名はイースナ。安心するがよい。わらわも、元は異なる世界から来た人間じゃ」

　華やかなアイドル衣装をまとった少女、善いい沙すな闇あん子こだ。昔取った杵きね柄づか、尾行のスキルは、今現在も頻ひん繁ぱ

んに役立っている。

「こやつはわらわの相棒のメガ・ネじゃ。今は仕事着を着てメガネドンとなっておるがな。わらわとメガネドンを知らぬ人間は、この世界にはほぼほぼ存在せぬ」

　街灯で照らされてた全ぜん貌ぼうをよく見ると、巨体はサメの着ぐるみを着たゆるキャラだ。

　皇月と愛美はひとまず安あん堵どし、イースナの言葉に耳を傾ける。

「ちなみにアイドル業の傍かたわら、この世界を護まもる戦士をしておる。おそらくは、お前たちと同じにな。信じるか？」

「うん、マナ信じるー！」

「そうか、それでは──」

　イースナはもう少し話をしたがっていたが、のっぴきならない事情を抱かかえる少女がいることを忘れてはならない。

「あの、お尋ねしますが……この辺に、おト……化粧室のあるお店などは……コンビニも見つからないし、ず、ずっと我慢していて……」

「フッ……ならば、わらわの家のおトイレに案内する。そこで存分にするがよい!!」

「ありがたいのですが、ちょっとデリカシーが足りません……!!」

　イースナが目配せ……いや眼鏡めがね配せをすると、阿あ吽うんの呼吸で了解したメガネドンは着ぐるみを脱ぎ、お腹なかの収納箱ににゅるんと収納する。

「わおー、ゆるキャラの下は銀ピカのロボットだー！　かっちょいー!!」

　愛まな美みに興奮気味に詰め寄られ、メガ・ネは照れくさそうに頭を掻かく。

「イースナのお家、近所なのー？」

「近所ではないが一〇秒かからぬ！　メガ・ネ、乙おと女めの尊厳の危機じゃ、最高速でゆくぞ!!」

「了解や！　みんなー、座席の近くに乗ってなー。大丈夫や、落ちへんから～」

　戦闘機形態メガネウインガーに変形し、道幅ギリギリの長大な翼を拡ひろげるメガ・ネ。

「わはーい、すっごい！　ジェットメカだ――――!!」

　操縦席に詰めるように座ったイースナに続き、海に飛び込むようにジャンプして座る愛美、四し肢しを極めて慎重に動かしながら乗り込む皇み月つき。

　メガ・ネが自信満々に言ったとおり、操縦席の周囲に力場が発生して三人を包み込んだ。

　空高く浮上した戦闘機形態メガネウインガーは、搭乗者にＧを感じさせない慈愛に満ちた亜音速で発進する。

「ゆ、ゆゆゆゆ揺らさないでください、もう本当に紙一重のところなんでしゅむ……」

　乗ってからこっち大はしゃぎの愛美と対照的に、皇月はデッドゾーンだ。この性能と速度からすれば規格外な乗り心地ごこちのメガ・ネの発する僅わずかな振動にさえも反応し、悶もだえている。

　銀の翼が、夜空を斬きり裂さく。

　幼き少女の尊厳を守り抜くため――おかんは翔ぶ。

　救済の地は、もうすぐそこだ。しかし――。

「………………あ」

◇　★

「すっげー……マジで秘密基地ッスね」

　地下基地に案内された陽ひ奈なと遥はるかは、そわそわと落ち着かない様子だった。

　無理もないか。いち民家の地下一〇〇〇メートルに、現代科学を超越した巨大な設備が建設されているんだから。

「や、やっと落ち着ける……陽ひ奈な、魔ま星せい力りよくを借りるよ……」

　一方ウマトは一般人の目につかない場所まで来てようやく人ひと心地ごこちついたようだ。

　ポンッ、と音を立てて煙に包まれたかと思うと……馬のぬいぐるみになってしまった。

「なんだあ!?」

　手品を見せられた時の反応を晒さらす俺たちの前で、陽奈はそのぬいぐるみを抱き上げた。

「これがウマちゃんの真の姿よ。惑星ユーマエルからやってきた宇宙人で、私たち地球人に宇宙からやってくる怪人と戦う力をくれたの」

　えっと……唯ゆ乃のとフェニックスギルディみたいな関係を想像すればいいのだろうか。

　異世界は広いな……。

「じゃあ、これからは俺もウマちゃんって呼ぶよ」

　ウマトはともかくウマ、って呼ぶのも据すわりが悪いもんな。見た目がファンシーだし。

「宇宙人……」

　トゥアールが、ウマちゃんを怪け訝げんな目で見つめている。

　宇宙人という、俺たちとは馴な染じみが薄い存在に知的好奇心を刺激されたのかと思ったが、むしろ何かを疑っているように見えるのは考え過ぎだろうか。

　ともあれ俺たちはコンソールルームでテーブルにつき、トゥアールが基地のコンピュータで陽奈と遥はるかの仲間の女の子を見つけるまで待機することにした。

「見つけました！　魔星幼女」

　トゥアールがメインモニターの前の端末を操作し始めてから、わずか数分。

　何やら自分好みにカスタマイズした名称だが、無事に発見できたようだ。

「早はっや……」

「なあに、初歩的な捜査方法です！　この基地のコンピュータには、地球上の全幼女のデータが登録されています！　それ以外の未確認幼女反応を衛星にサーチさせただけですよ!!」

　驚く陽奈にドヤ顔でサムズアップするトゥールだが、もちろん拍手喝かつ采さいの起こるようなものではない。

「……あのさ、トゥアール……あたし、あんたのこと友達だって思ってる。けど……」

「やめてくれませんかそういう深刻な雰囲気は!?　冗談ですよ！　もっとゲラゲラな感じ出してギャグっぽくスルーしていきましょう!!」

　愛あい香かから怒りを通り越して哀しみを宿した眼まな差ざしを送られ、トゥアールは慌あわてふためく。

「……イースナから連絡があっただけです。別世界から来たという少女二人に偶然遭遇したので、自分の家で保護したと。それでこちらの事情も伝えて、これから基地で合流しようということになりました。慧え理り那なさんたちにも連絡しておきます」

　異世界からの来訪者をすぐに見つけて保護か。あのイースナがここまで迅速かつ適切な行動を取れた上に、自分の家に友人として招待するなんて。本当に成長したんだな……。

　何か、出会った頃ころのことを思い出して、感動しちゃったよ。

「それにしても、随分と冷静なんだな、トゥアール……別の世界の戦士がやって来たから、もっと慌あわてるかと思っていたよ」

　三日月形の白目になって口くち端はによだれを滲にじませながらゲハハハハハハと昂たかぶり笑っているが、トゥアールは今日、沈着冷静に見える。

「異世界の境界が機能不全を起こした以上、いずれこういう事態も起こり得ると想定していました。愛あい香かさんとガチで一戦やらかす蛮族二号がやって来たのは、さすがに予想外ですが」

　特に皮肉というわけでもなく、トゥアールは純粋に陽ひ奈なの力を評価しているようだ。

　俺もすごいと思う。特に、女の子なのに殴なぐり合いもいとわない度胸の良さが。

「蛮族二号……悪くないわね」

　すんなりとその称号を受け容いれる陽奈。愛香は苦笑しながら肩を竦すくめた。

「陽奈、結構変わってるわね……あたし未いまだに蛮族って呼ばれるのヤなんだけど」

「そうだな。陽奈は──」

「ちょーちょーちょー。いっスか？」

　遥はるかは挙手をして俺の言葉を遮さえぎると、ギロリと睨にらみ付けてきた。

「当たり前のようにいるけど……お前誰だれッスか」

「……俺？」

「おうお前ッス！　つーかお前、何先輩のこと呼び捨てにしてんスか、馴なれ馴れしい！」



なんというか、動作の一つ一つが演技的というか……大おお仰ぎょうな女の子だ。

怒りを表すために腰に手をやるのだが、それでまた胸が豪快に揺れる。

その揺れが愛あい香かの怒りを呼び起こす。哀しみの連鎖がそこにあった。

「そーじは基本的に同年代の女の子は呼び捨てにするのよ。そもそもここ、そーじの家の敷地内よ、いるのは当たり前でしょう？　嫌なら出てって、その乳とともに」

「ひでえ！　わかったッス、おいお前、私のことも遥はるかと呼べッス!!」

敵てき愾がい心しん剝むき出しだけど、ちょいちょいいい人感を隠しきれない感じだな、遥は。

「でもそっちの……えーっと蛮族一号ッスか、お前が先輩と敵対したことに代わりはねえッス！　その仲間の男を怪しむのは当然の自衛心ッス!!」

「だから遥、それはもう誤解ってことで話がついたんだってば。総そう二じくんは、寒さに震ふるえてるウマちゃんを保護してくれたのよ」

胸に抱き締めたウマちゃんを優しく撫なでる陽ひ奈な。

おかしいな……問答無用で風ふ呂ろ場ばブッ壊した相手なのに、「この子物分かりが良くて助かるなあ」とか思ってしまっているぞ。

これがツインテイルズだったら、和解するまでにもう二、三悶もん着ちやくはあるんだが……。

「わかった、本音で話そうッス！　私は先輩に男が近づくことを危き惧ぐしているッス！　清らかな百ゆ合りカップルの間に挟まろうとしてくる男は処刑していいと聖書にも記されているッス!!」

「どこの邪じや神しん話わが掲げたバイブルよ、それ……っていう

か私はあんたとカップルじゃないからね？　総二くんいい人だし、彼氏持ちの女に手を出したりしないわよ」

「いやッスいやッス！　魔ま星せい少しよう女じよは女の子だけの聖域ッス！　私たちという物語にチ○コは必要ねーんすよおおおおおおおおおおおおお!!」

　遥は床に大の字に寝転び、駄々をこね始めた。

「えっ……ひ、陽奈、彼氏いるのっ!?」

「うん、もう同どう棲せいもしてるわよ！」

「……わー……そっかぁ……！　何か余裕あると思ってたけど……納得」

　愛香に尊敬の眼まな差ざしで見つめられ、陽奈はふふんと鼻を鳴らす。

「はーなるほど、どうりで……。陽奈さん幼児体型で私のストライクゾーンのはずなのに何かビッとこないと思ったら、オトコがいたんですね」

　トゥアールも妙な納得をしていた。

　それはそうと、陽奈が抱き締めているウマちゃんがさっきから滝のような汗を流しているのが気になる。遥が限りなく直線に近いジト目で陽奈を見ているのもだ。

「さ、さて、それじゃあ……皇み月つきたちと合流できるまで、お互いの情報を交換するとしようか。もちろん、話せないことは話さなくてもいいよ。それは僕たちも同じだ」

　ぬいぐるみでありながら場の仕切りが上う手まいウマちゃんに促うながされ、話し合いを始める。

「あ……そういえば、すっごい綺き麗れいに総集編に繋つなげられる流れだね、これ!!」

　ウマちゃんが変わった感性で状況を俯ふ瞰かんしている理由は、その話し合いで知ることになる。

◇　★

「ツインテールを愛する力を使って、異世界をわたって侵略してくる怪人と戦う、か……なかなかスケールの大きな日常を送っているね、君たちは」

「そういうあなたたちこそ、ヒーローとしての戦いを別の世界で放映して、おもちゃを売る……興味深いシステムを構築しているじゃあないですか」

　互いの司令塔であるウマちゃんとトゥアールが納得し合い、それぞれの情報交換は終わった。ウマちゃんの提示した「話せないことは話さなくてもいい」……つまり言ってはいけないことは伏せるべきだという基準がどうにも曖あい昧まいだったので、その判断はトゥアールに任せることにした。

　それは陽ひ奈なたちも同じだったようで、ほとんどトゥアールとウマちゃんだけで話し合うことになってしまったわけだ。

「それとトゥアール、僕たちの番組が放映されるのは別の世界じゃなくて、別の惑星だよ？」

「え、あ……ああ、そうですね……」

　ウマちゃんに言い直され、トゥアールは歯切れ悪く頷うなずく。

『私の知る限り、あらゆる異世界において地球以外の惑星に知的生命体は存在しません。彼女たちは何か秘密を抱かかえているのかもしれませんね……』

　席を立ったトゥアールは、不思議そうにしている俺に耳打ちしてきた。そのままモニターの前に向かい、本題に移る。

　直近のこの世界の危機だった、エレメパイレーツの襲来。その原因でもある、異世界の境界が壊れ始めている件だ。

　こちらについては、陽奈たちもにわかには信じられないといった面おも持もちだった。

「なるほど……どうやら僕たちがこの世界に辿たどり着いたのは、単なる偶然ではなさそうだ」

　心当たりがあるようで、ウマちゃんはぬいぐるみの可動域の限界で考えるポーズをする。

「実は僕たちは異世界という存在を、最近知ったばかりなんだ」

「訳知り顔の悪役どもが教えてくれやがったッス」

　遥はるかが憎にく々にくしげに舌打ちをする。先ほど話していて、カラミティーサタン、ディザスターネプルティアという悪の魔ま星せい少しよう女じよがいると聞いているが、そのことだろう。

「まして、異世界同士の移動が可能なことを聞かされたのは、時間的に言えばついさっきだ。その直後に、こうして実際に異世界へと転移してしまった。偶然とは考えにくい……」

　確かに、存在を認識したことが何らかのトリガーになった可能性はあるのか。

「別の世界に行くとか信じられなかったんスけど、さっきの話だとトゥアっちは戦士を探してぽんぽん異世界を旅行して、この世界に辿たどりついたんスよね……」

「トゥアっち……」

　少々強引な愛称に、戸惑いを浮かべるトゥアール。嬉うれしくないわけではないだろうけど。

「気にしないで、遥はるかなりの親愛の証あかしみたいなものだから」

　苦笑交じりにフォローする陽ひ奈な。

　会って間もないけど、陽奈と遥の二人がいい先輩後輩関係なのは、十分に理解できた。

「ここで問題なのは、僕たちは何があろうと番組を放送する義務があることだ。数日以内に自分たちの世界へ帰らないと、次回の放送分が間に合わない」

　三〇分の番組を毎週一本ずつ撮って編集して、翌週すぐ放送するって、魔ま星せい少しよう女じよもある意味ものすごいことしてるよな。魔法的な超技術で回しているのは間違いない。

「スタートゥアールを使って元の世界に送ってやるのは……無理か」

　何度も説明を受けているので、俺にもわかる。トゥアールも申し訳なさそうに頷うなずいていた。

　スタートゥアールを使って異世界間を移動するには、その異世界がどこにあるかを示す固有の座標が必要になる。カーナビを使う時に入力する住所コードのようなものだ。

　俺たちがこれまで異世界に行った時は、ロエルやアポロギルディなど、移動先にいる側から座標を提供されたから可能だったのであって、それがなければトゥアールといえどもピンポイントで目標の世界を見つけ出すことは現状不可能に等しい。

　だが陽奈たちは、つい最近まで異世界という概念自体を認識していなかった。これでは、彼女たちの元いた世界の座標の手がかりを摑つかむことさえできないだろう。

「君たちは今、異世界の境界を破壊しようとしている敵と戦っている最中だと言ったね。その敵を倒して異世界の境界が正常に戻れば、イレギュラーな世界移動をしてしまった僕たちも元の世界に帰れるという可能性はあるかい？」

「十分にあり得ます。むしろ、今のところそれが最も確実な方法かもしれません」

「よし、一歩前進だ。よかったら、異世界についてもう少し詳しく教えてくれないかな」

「私は、できれば魔星少女システムについてまだ聞きたいですね。特に、変身前にもある程度魔法を使えるというのはテイルギアとの大きな差ですから」

　両陣営の司令塔同士が話を進めていく。遥はそれを顎あご杖つえをつきながら横目に見守りつつ、憂うれいのこもった溜ため息いきをこぼした。

「帰る当てが見つかっても……結局、今すぐにでも原因の敵が現れてくれねーと同じことッスからね。過密スケジュールのつらいところッス」

「わかるわ。あたしたちも、いつ敵が攻めてくるかわかんないから、なかなか遊びに行けないのよね……」

「ねー！　そッスよね、ちょっと遊びに出かけたら狙ねらったかのように宇宙怪人が出てくるんスよ！　コンサートの途中で現れやがった時は、ホント頭にきたッス!!」

　遥はるかはテーブルに両手をついて身を乗り出すと、愛あい香かと意気投合し始める。

「……ところで、さっきちょっと話に出てから、ずっと気になってるんだけど……総そう二じくん、愛香みたいに変身できるのよね？　見てみたいな～」

「あ、そうッス！　ツインテール好きな心で戦うとは聞いたけど、どんな武器とか使うのか気になるッスねえ。ちょっと見せてくれッス!!」

　どんな武器を使うか……というような当たり障さわりのない質問をしてくるということは、陽ひ奈なは俺の姿が激変することは想像していないみたいだな。

　だったら、とっておきのサプライズを見せてやるぜ。俺のツインテールをな……!!

　テーブルから立ち上がった俺は、よく見えるようにモニターの前まで移動し、ブレスを可視化して胸の前に構えた。

「テイルオン！」

　赤い光が弾はじけ、紅あかいツインテールが舞う。この世界のツインテールの戦士、テイルレッドの姿が異世界からの来客に公開された瞬間だった。

　ウマちゃん、陽奈、遥は驚きのあまり三人同時に身を乗り出す。

「えっ……幼女化!?」

　すっげー直球な感想きたな。まあ陽奈は先だってテイルブルーの姿を見ているから、余計に変身して姿が変わることを想像できなかったんだろう。

「フッ……幼女化です」

　ブレスの製作者が、これ以上ないほどのドヤ顔で自身の科学の結晶を自負する。

「うわ、何これすごい！　めっちゃ女の子だ、わー!!」

　陽奈は目を輝かせ、俺の全身をペタペタと触ってくる。完全にＵＭＡウーマ扱いだな。

　それよりどうだ、俺のツインテールは。一番の自慢なんだぜ。

　……って、そこは全く見てない……。

「ちょっと陽奈、女同士になったからって触りすぎ!!」

　あんまりにも手つきが入念なので、愛香に羽交い締めにして引き剝はがされていった。

　俺が言うのもなんだけど、少年の姿から直径数十センチのぬいぐるみになる君の仲間の方がもっとすごいような気がするんだよな……。

「すごい！　すごくいいよ、総二！　君のその見た目で装そう甲こうを着込んでいるなんてもったいない！　君はもっと可か愛わいい服を……魔法少女服を着るべきだ!!」

　仕舞いには、別世界の番組プロデューサーが急にヘッドハンティングしてくるぞ。

「は――――――!?　こんな可か愛わいいのにメカニカルなアーマー着込んでるのが可愛いんでしょうが別次元に更こう迭てつされたいんですかこのヘボプロデューサー!?」

「やめて！　ウマちゃんはやればできる子なの!!」

　憤ふん懣まん遣る方ないこちら側のプロデューサー・トゥアールをなだめるべく、陽ひ奈なが懸命にフォローする。

「………………総そう二じ……」

　遥はるかは俺のツインテールをじっと見つめる──のもそこそこに、視線を下に落とす。

　そして存分に面おも持もちを引き締め、神妙な声こわ音ねで問い質ただしてきた。

「───ち○ちんどこ行ったんスか……？」

「もう遥、そういうナイーブなとこに触れんじゃないの。きっと一時的にもげて亜空間に格納されるのよ」

　女体化の具体的なプロセスを理解するとくじけそうだから、勘弁してくれませんか。

　……桃色の髪の双子姫に、純真ピュアな瞳ひとみを向けられたあの日のことを思い出す。

　異世界の女の子たちってどうして、俺がテイルレッドに変身するのを見ると真っ先にそのことを気にするんだろう……。

ふぉーくーる あふたー

4 cours after

魔星少女とは……

星の力を振るう魔法少女。
侵略者の魔の手から地球を守るため、
娯楽の消えた超文明惑星・ユーマエルの使者より
星の力を得た少女たち。
その見返りとして彼女たちの戦いは、
惑星ユーマエルのヒーロー番組として放映される。



星上陽奈（ほしがみひな）

UMA（ウーマ）を愛する女子高生。
レイアーソルに変身。



地平 遥（ちひらはるか）

陽奈を愛するストーカー。
レイアーテラに変身。



朔良皇月（さくらみつき）

おもちゃを愛する
社長令嬢。
レイアールナに変身。



美金愛美（みかねまなみ）

ライトノベル作家を
目指す女の子。
レイアーヴィナスに変身。



ウマちゃん

宇宙から来た
テレビプロデューサー。
人間の姿になれる。

集結章・二　ツインテールの交流。

「ねえ総そう二じ、魔ま星せい少しよう女じよになろうよ！　ねえ!!」

　ウマちゃんが俺の腕に懸命にしがみついてくる。

　といってもぬいぐるみなので、なんか抱っこする系の商品みたいなことになってるが。

　この肌触り……ポリエステル？　それともフェルト……？

「…………ウマちゃん、随分総二くんのこと好きになったみたいね」

「テイルレッドをね!?　てか陽ひ奈な、めっちゃ機嫌悪くない……？」

「私はウマっちが総二と愛し合う分にはまったく反対はしねーッス……ってははは冗談ッスよ先輩、目が鬼ヤベーッス」

　そしてそんなウマちゃんの様子を見ている陽奈が、露骨に不機嫌になっているのだ。

　何かもう、陽奈の周囲に怒りのオーラが見える。シダ植物の葉のようにわさわさ蠢うごめいてる。

「問題です。私はどうしておこなのでしょうか」

　人差し指を立て、シンキングタイムを提示する陽奈。

　しかし、ウマちゃんも遥はるかも無言で固まっている。当然、俺も愛あい香かもトゥアールも答えられるはずもなく。焦じれた陽奈は、時間切れで回答を告達した。

「正解はウマちゃんが、他の女の子にデレデレしてる上に、冗談でも私を他の男の子とキスさせようとするからでした。傷ついちゃうんだぞ、ぷんぷん」

「めんどくせ――――――マジめんどくせ――――――――――――この女!!」

　頭を抱かかえて七転八倒するウマちゃん。しかし彼の四し肢しは頭に届く長さではなく、ぬいぐるみがテーブルの上でころころと転がっているようにしか見えない。

「――キスって何？　ちゃんと教えて？」

　今度は愛香の周囲に怒気が放射されていく。食虫植物のような形に、もしゃもしゃと。

「……魔星少女の仲間を増やすには……私がその子にキスをして、魔ま星せい力りよくの経路パスを繋つなげないといけないの。つまり総二くんが魔星少女になるなら、私とキスしなきゃいけないってこと」

　溜ため息いき交じりに陽奈が説明した瞬間、愛香はピンと背せ筋すじを伸ばして起立した。

「三人とも、会えて嬉うれしかったわ。それじゃ、さよなら」

　口調こそ爽さわやかになっているが、背後のオーラが今度はぶぶ漬けの形に変化している。

「僕たち元の世界に帰れなくて困ってるんだけど!?」

　必死に抗議するウマちゃん。

「……つまり遥さんも、これから逢あう他の魔星少女さんたちも、全員陽奈さんとキスしてるわけですね。何かエロい目で見ちゃいますねフフフ」

「おう上等ッス、いくらでもエロい目で見るがいいッス！　総そう二じ以外!!」

　トゥアールの言葉に、照れるどころか逆に胸を張る遥はるか。俺は何か聞いてて照れてしまう。

　それにしても、愛あい香かは何を怒っているんだ……ツインテイルズでありながら魔法少女を薦められている俺の不ふ甲が斐いなさを糾きゆう弾だんしているのだろうか。

「まあ色々な事情は置いておいて、テイルレッドが番組映えすると考えているのは本当さ。もちろんテイルブルーもなかなかだったと思うよ。もうちょっとギミックが多ければ、あの槍やりも商品化を検討する価値はあるね」

「さっきから気になってたんだけどそのボク、すっごい年上目線で話してこない？」

「私の作ったテイルギアにギミックが少ないとは聞き捨てなりませんね」

　愛香とトゥアールはウマちゃんの商談に待ったをかける。

　しかしウマちゃんの言動が大人びている理由は、実にシンプルだった。

「ウマちゃんはこう見えて就職してる社会人なのよ！　私の年上の彼カレなんだから」

「「えっ」」

　愛香とトゥアールは同時に声を上げた。さっきまで陽ひ奈なを天上の存在のように憧あこがれの目で見ていたのが、瞬またたく間に困惑に変わっていく。実は俺もちょっとびっくりした。

「ひ、陽奈……一応聞くけど、あなたが付き合ってるの、さっきの男の子の姿の方よね？」

「ううん、こっちのウマちゃん」

　陽奈はテーブルの上のウマちゃんを持ち上げ、愛いとおしげに撫なで始めた。

「まあ彼氏じゃないけど、僕が社会人なのは本当さ。魔ま星せい少しよう女じよの番組のプロデューサーだよ」

「――――は？　ウマちゃんは私と付き合ってるよ？」

　陽奈の目から光が消え、ウマちゃんも観念したようにその円つぶらな瞳ひとみを消灯した。

　……失礼ながら陽奈たちは俺の仲間の女の子たちに比べると普通の感性の子だと思っていたのだが、やっぱりどこでも戦士の女の子は変わっているようだ。

「メンの者ですか？　ヘラの人ですか？」

「ヤンの女ッス。しかもヤンデレっつーか、ヤンヤンッス」

　トゥアールが遥に耳打ちし、何かを尋ねていた。多分、陽奈のことだろうけど。

「…………。あっ、イースナたちが来たみたいです！　来客の人たちに一時パスを発行しますので、ちょっとお待ちくださいね！」

　やや焦あせり顔だったトゥアールが、上のエレベーターに人が乗ったのを確認した。渡りに船とばかり、席を立って小走りでメイン端末に向かう。

　先ほど陽奈たちがここに来た時と同じく、基地のセキュリティに引っかからないように操作をするとのことだ。

　何か危険な雰囲気になり始めていたので、みんなが来てくれたのは助かった。

◇　★

　ツインテイルズ地下基地のコンソールルームは、かつてない大所帯となっていた。

　俺と愛あい香か、トゥアール、慧え理り那な、イースナにメガ・ネ、桜さくら川がわ先生。母さん。

　さらにはイースナが一緒に連れてきた唯ゆ乃のとロエル、リルナもいる。

　唯乃はこの間から異世界に出かけていたが、ちょうど帰ってきたようだ。トゥアールに、ディスクのようなものを手渡している。

　そしてテーブルで俺の向かいに座っているのが──

「それじゃあらためて。私は星ほし上がみ陽ひ奈なよ」

「地ち平ひら遥はるかッス」

「朔さく良ら皇み月つきと申します」

「美み金かね愛まな美みだぞー！」

「そして僕が、彼女たちに変身する力を与えたユーマエル星人。みんなからはウマちゃんって呼ばれているよ」

　イースナが保護した二人を含めた、五人の魔ま星せい少しよう女じよ陣営だ。

　愛香はやたら深刻な表情で、陽奈を指差した。

「ツインテール指差し確認……よし」

　意図がわからないからか困惑の表情を浮かべる陽奈。彼女の立派なアホ毛が二本ともハテナマークに近い曲線を描いて見えるのだが、目の錯さつ覚かくだろう。

「よし」

　次にその指を、遥へ。注目されることには慣れっこだとばかり、逆に自信たっぷりにドヤ顔で見つめ返している。

「よし」

　そしてその横、ウサギ耳のようなカチュームをつけた幼い少女、皇月へ。

　イースナから借りたらしい服は、フリルたっぷりのワンピースだ。

　おとなしさの中に強い芯を感じる、ミステリアスな雰囲気の女の子だな。

「よし」

　最後は、ポニーテールの女の子、愛美へ。彼女は挨あい拶さつもそこそこに何やらキーボードのような機械をテーブルの上に出して軽快にタイピングしており、愛香には気づいていない。

　やはり借り物らしいタンキニとミニスカートが似合う、遥とはまた違ったベクトルで元気な雰囲気の女の子だな。より無邪気な感じがするというか。

　最後にウマちゃんだけは目視で済ませ、腕組みをしてうんうんと頷うなずく愛あい香か。

　何な故ぜ、初対面の女の子たちに対して指差喚呼が必要なのかは不明だが、ツインテールであるかどうかの確認は愛香にとっても大事なのだろう。

　俺が同じようなことをすると、女の子に失礼だと怒られるのだが……。

「あれを一〇年以上総そう二じ様のそばで密かにやってきたかと思うと……。イースナよりもよほどヤバいストーカー適性秘めてますよね……」

「エレメリアンにも指差し確認をしてくる者はいましたわ。あれはきっと戦士の本能なのですわ……!!」

　トゥアールと慧え理り那なも、愛香の行動を不思議に思っている様子だった。

「以上五人が──」

　ウマちゃんが自己紹介を締めようとしたところで、陽ひ奈なの背後の空間に小さな穴が出現した。プロメテウスギルディの急襲を思い出して即座に警戒する俺だが、拡張した空間の穴から出てきたのは、予想だにしないフォルムの生物たちだった。

　丸い頭部に巨大な眼めを備え、蒼あお白い魚に長い腕がついたような、ぬぼっとした生き物。

　当たり前のように宙に浮いている、円つぶらな瞳ひとみと唇くちびるがついただけの毛玉。

　最後は小型のポニーぐらいのサイズの、ぼーっとした顔つきな首長竜に似た生物だ。

「えっ、何々!?　何かヘンテコな生き物が出てきたー!!」

　陽奈たちと同じ魔法少女のロエルが、突とつ如じよ出現したＵＭＡウーマを見て大はしゃぎする。ちなみに彼女もおもしろ生物であるツインテールのゴリラを異世界から連れてきたことがある。

　リーダー格らしき青白い生き物が、ぺこりとお辞じ儀ぎをしながら自己紹介を始める。

「この世界の皆さん、初めまして！　僕は、ＵＭＡのヒトガタ……ガッタくんと呼ばれています！　魔ま星せい少しよう女じよの皆さんと一緒に戦っているんです！　以後、お見知り置きを!!」

「おお、爽さわやかな青年だな……一年前なら婚こん姻いん届とどけを渡していたぞ」

　めちゃくちゃ礼儀正しいガッタくんに感心しきりの桜さくら川がわ先生。

　俺も、見た目とのギャップが大きすぎてビビッた。

「総二様にゾッコンになる前だったら未確認生物にも求婚してたってんですから、尊みことさんも大概ヤベー女ですね……」

「そこが可か愛わいいのよねえ尊さん」

　トゥアールが母さんと小声で話し合っている。やはり驚きを隠せないのだろう。

「アティシは、ケセランパサランのケセりんよぉん。真実ほんものの演技を見たくなったら、大女優のアティシに一声、かけなさぁいん」

　ケセランパサラン……どうりで輪郭がパチパチいってると思ったら、何か聞いたことあるＵＭＡだった。それにしても、大女優を自称しているだけあってやたらねっとりとした口調だ。

「モケー」

「何っ！　モケーって鳴いたぞこやつ!!」

　最後の首長竜は人語を話せないようだが、その鳴き声が衝撃的だった。イースナは立ち上がり、眼鏡めがねのフレームを指で直しながらまじまじと見つめている。

「モケーレ・ムベンベだから、モケーって鳴くの」

　自己紹介できない本人に代わって、自慢げに解説する陽ひ奈な。

「すごい偶然だな……。俺たち、一年以上その鳴き声聞いてるよ」

「…………モケー」

　モケーレ・ムベンベとやらが、じっと俺を見つめてくる。何だろう……この、知ち己きに向けるような穏やかな眼まな差ざしは。まるで、前から俺を知っているような。

　ふと思ってしまった。あるいは……この鳴き声は本当に偶然なのだろうか、と。

「ウチら、先輩が勝手に拾ってきたこの未確認生物も武器にして戦ってるッス。変形してるの見たら驚くッスよ～」

　遥はるかが悪戯いたずらっぽく笑うが……今、しれっと武器にしてって言わなかったか？

　想像がつかないな……愛あい香かもたまにトゥアールを武器代わりに振り回しているが、ああいうことだろうか。

「ＵＭＡウーマは基本的に疑似空間収納箱アナザスペイシンという小型の異次元……簡単に言うと、魔ま星せい少しよう女じよのアイテム収納箱だね、そこに棲せい息そくしているんだ」

「ウマっち、最初はＵＭＡ否定派だったんスよ。ところが視聴者受けがよくておもちゃも発売されることになったんでクルッと手の平リバースしたッス」

「僕は今でもＵＭＡたちを認めてはいないからね!?　ただ、企業人としては個の感情を殺してでも全体の利益を優先しなきゃいけない時があるんだよう!!」

自己紹介だけを済ませ、ガッタくんたちは異次元に帰っていく。

「それでは、僕たちに手伝えることができたら、いつでも喚よんでください!!」

本当に爽さわやかな生き物だな……。

「さて、全員集まったところでまず、現在の状況について共有しておきます」

トゥアールはメインモニターの前に立ち、進行を引き受けた。

今度こそ自己紹介も終わり、まずやるべきは現状確認だ。

特に陽奈たちはハプニングでこの世界に来てしまっているので、重要なことだろう。

先ほど俺たちだけで話した異世界について、より掻かい摘つまんで皇み月つきたちにも語っていく。

「異世界の境界が綻ほころぶのは、免疫作用のようなもの……それ自体は特に問題がないということがわかっています。ちょっと不思議なものが見えることがあるぐらいで、人間に害はないと」

いつの間に編集したのか、今度はメインモニターに異世界の情報を表示して説明を補助している。どのような概念か、どうやって移動をするか、などだ。

「しかしその免疫作用に乗じて暗躍していたのが……エレメパイレーツという組織です」

「俺様も……時間がねえから廻まわれた異世界は知れた数だが、エレメパイレーツがやってきたことの目星はついたぜ。ま、やらされてた……って言う方が正しいかもしれねえが」

やって来たばかりの唯ゆ乃のが、トゥアールの説明を補足する。

「免疫作用で不安定になる状態がさらに加速するよう仕込んで、異世界を崩壊させせようと企たくらんでやがったのさ。ツインテールの無い世界を創つくりたいってのは本心らしいぜ」

「ええ。組織そのものが、世界の憎しみ、悪意の凝縮した一個の生

命体。中心にいるプロメテウスギルディという戦士すら、その悪意に支配された操り人形のようなものです」

　愛まな美みは目を輝かせてトゥアールの話を聞いている。

　さっきからキーボードを使って何をしているんだろうと思っていたけど、色々なことをメモしているのか。

「その果てに奴やつらが辿たどり着いたのが、私たちの世界。全異世界で最強のツインテール属性が結集したこの世界を起点に、あらゆる異世界の境界を破壊して消滅させようとしているのです」

　ツインテールへの憎しみが、全てを滅ぼす。室内は、緊迫した空気に包まれた。

「結いわ翼ばね唯乃が調べてきてくれた情報、そして私の計算を合わせると……数日以内にこの世界に異空間の入り口が出現し、エレメパイレーツの大おお本もとが総攻撃を仕掛けてくるでしょう。それを止めるのが私たちの役目であり……陽ひ奈なさんたちが元の世界に帰るための鍵かぎとなります」

　最後にモニターに表示されたのは、マス目状に表現された無数の異世界から矢印が伸び、一つの大きな穴に繋つながっている絵だ。

　これが、俺たちの世界と繋がりつつあるということなのだろう。

「そいつらがいなくなって異世界同士の繋がりが正常に戻れば、私たちも元の世界に戻れるってわけね。わかりやすい説明ありがと、トゥアールちゃん！」

「陽奈さんはホントに気遣いの人ですね……これでカレシ持ちでさえなければ……」

　白衣の袖そでで目め許もとを拭ぬぐうフリをするトゥアール。

　色々状況に翻ほん弄ろうされた数週間だったが、これほど簡明に解決策が提示されるところまで来た、ということか。

「マオンさんやルーティアさんが言っていました。私たちの世界は、異世界同士が奇跡的に繋がって生まれた極めて不安定な存在だと。たった二つの世界ですらそうなのに、それを意図的に、無数の世界で行うとしたら──異世界全てが滅ぶと言われても納得できま

す」

　皇み月つきがクールな口調で補足する。マオンたちとは、先ほど話に出た悪の魔ま星せい少しよう女じよか。

　ところでさっきから慧え理り那なが、説明を聞くのもそこそこにその皇月のことをじっと見ている様子なのだ。人の話をしっかりと聞く彼女にしては、珍しい。

「あ………………あ――――――――――――――――っ！　ですわ!!」

「なかなか特徴的な驚きよう愕がくをする人ですね……」

　慧理那の絶叫を向けられた皇月は、動じることなく湯気の立ち昇る湯呑のみを手にしている。

　この基地の備品じゃないよな。マイ湯呑のみ……だとして、中身のお茶はどこから……!?

「そうですわ、皇み月つきさん……あなたを一目見た時から、ずっとどこかで逢あったような気がしていたのですが……！」

　慧え理り那なは皇月の席まで歩いて行くと、彼女の小さな手を取って優しく握った。

「わたくし、あなたの動画を観たことがありますの!!」

「え……」

　ずっとクールな無表情を保っていた皇月が、それを聞いた途端目に見えてわかるレベルで表情に喜びをにじませた。

「なるほど、これが、お嬢様が見せたいと仰おつしやっていた動画の娘こなのですね」

　桜さくら川がわ先生も何か覚えがあるようで……って、いや、待てよ。俺もなんか慧理那に聞いたことあるな、小さな女の子のおもちゃレビューが面白いって。

「……動画がすぐに消えてしまうので、不思議に思っていたのですが……異世界の方の動画が、奇跡的にわたくしたちの世界に〝混信〟していたのですわね。御お伽とぎ噺ばなしのようで、素敵です

わ」

「御伽噺、ですか」

「はい！　わたくしたち……別々の世界に住んでいたのに、ずっと前から繋がっていたのですわね……!!」

　慧理那の直向ひたむきなまでの好意を一身に向けられ、皇月は面おも映はゆそうに顔を背ける。



「……私の動画が異世界に混信していたとは驚きですが……小学生のファンは大歓迎です」

「わたくし高校三年生ですわ⁉」

　慧え理り那な、本当に嬉うれしそうだな。二人を見ていると、陽ひ奈なたちがこの世界に来たのは偶然じゃないんじゃないかって思えるよ。

　俺たちは、出会うべくして出会ったんじゃないかって。

「小ちっちゃい娘こ同士のいちゃいちゃ……素晴らしいですねえ。基地が桃源郷になりました」

　よだれを口くち端はに滲にじませているトゥアールが、愛あい香かにぺいっと投げ捨てられる。

　それでは皆様でご歓談を──という挨あい拶さつがあったわけではないが、慧理那と皇み月つきのやりとりを契機に、後からやって来たイースナたちも含め、魔ま星せい少しよう女じよたちとの交流が始まった。

「お前さんが異世界の戦士ってか。いいポニーテールしてんな！」

「そかー？　マナ、ふつーにしてるだけだけど」

　やはり唯ゆ乃のは真っ先に、ポニーテールの愛まな美みに話しかけている。

「だって俺様がこの世界でダチになった女、ツインテールばっかりだしよお。お姫さんはサイドポニーだけど、合体して結局ツインテールになるしなー」

「あんた、ツインテイルズに入っといて無茶言ってんじゃないわよ」

　唯乃の気持ちもわかるが、まあ愛香の言うとおり俺たちは基本的にツインテールの戦士、ツインテイルズだからな。もちろん、唯乃がツインテイルズであることに変わりはないんだが。

「じゃ、マナと友達になろ！　でさ、面白いネタいっぱい教えて!!」

　愛美はずっと手元に置いているキーボードを指差してそう宣言した。

　さっきウマちゃんに聞いたのだが、あれはルシファーズタイパーという彼女の専用武器で、普段はノートＰＣとして使うこともできるそうだ。

「んだよお前、小説家でも目指してんのか？　それなら俺様がアルティメギル五大修練を教えてやるよ。メロゲイマ・アニトゥラーって言ってな、自分自身を主役に創作物を作って、知り合いに熟読してもらうんだが……」

　初対面の女の子にいきなりアルティメギルの修行法を勧める唯乃もたいがいブッ飛んでいるが、愛美の変わり者ぶりもそれにひけを取らないものだった。

「マナ、自分が主役の小説ならずっと書いてるよー？　ひなたんたちに読んでもらってるし」

「──ほおう、さすがはいいポニーテールしてるだけあるぜ、なかなかやるじゃねえか。まさか、屈強なエレメリアンたちが音を上げる試練を無意識に突破してやがるとはな……」

　何か知らず知らずのうちにどんどん唯乃に認められていくな、愛美。

「……というわけで、僕が企画を考えて、魔星少女たちに実践してもらう。今のところ、理想的な番組制作体制が構築されているんだ」

「めっちゃ見たいわ～、あとでそこのモニターに流して？」

「ごめん、記録媒体を持ってきてないんだ……」

　ウマちゃんが母さんや桜さくら川がわ先生に「テレビ番組制作かくあるべし」的な話を語って聞かせている。

「ウマちゃん、か。なるほど、ぬいぐるみ君はトゥアール枠なんだな」

「何ですかトゥアール枠って!?」

　雑な理解で納得する桜川先生に抗議しながら、トゥアールはテーブルの上にテイルブレスを並べていった。陽ひ奈なたちに見せるためだろう。

「時間がかかってしまいましたが、尊みことさんのブレスも何とか調整が済みました。唯ゆ乃の、あなたのテイルレインフォーサーもメンテナンスが終わっています」

「おっ、サンキュー！」

　ウマちゃんや皇み月つきが興きよう味み津しん々しんといった様子なので、俺や愛香たちもブレスを外し、テーブルの上に置いた。

「じゃあ、私たちのも見せるわね……よっと。あれ、上う手まく魔ま星せい術じゆつが……」

　陽奈は背後に先ほどガッタくんたちが出てきたのと同じ穴を展開していく。

「やっぱこの世界、疑似空間収納箱アナザスペイシン出すのも一苦労だわ」

　どうやらメガ・ネのお腹なかの収納箱のように亜空間へと繋つないで個人用収納に使えるようで、中からたくさんのアイテムを取り出した。

　こちらは実物ではないな。皇月たちが来る前に簡単に説明を受けた、魔ま星せい少しよう女じよの使うデバイスや武器のおもちゃだ。

「あ、魔法のステッキだ！　ロロリーとかぶるー！」

　プロミネンスタッフを手にしたロエルが、子供らしい意見で頬ほおを膨ふくらませている。彼女も魔法のステッキを持っているからだろうが、別に傾向が似ていてもいいと思うのだが。

「色違いの変身ブレスレットか……いいねえ～！　陽奈たちも色別

にすべきだったかな？」

「いえ、色別販売は諸もろ刃はの剣つるぎです。ヒーローの変身デバイスは主力商品……しかし、それを全て色別にしてしまっても、逆にどれを買えばいいか迷わせてしまうことになります」

　ウマちゃんが迷っているようだったが、皇月が却下する。とりあえずこれ、っていう商品がないと駄目ってことか。

　俺たちのアイテムはテイルブレスだけだが、数が多い。

　陽奈たちは、コスモチェンジャーという変身デバイスに、皇月だけはコスモフォンという別のものらしいが──それと武器がたくさんある。フィギュアまで置かれた。

　愛まな美みがずっと使っているキーボードと同じおもちゃもラインナップの中にあった。

　別世界の戦士同士、それぞれの変身アイテムの閲覧会が始まる。

　陽奈が真っ先に興味を示したのは、トゥアールのテイルブレスレボリューションだ。

「この白いのは？　他と形が違うけど」

「ああ、そのブレスは私の物なんですが、故障中で──」

　陽ひ奈なが触れた瞬間、トゥアールのブレスが僅わずかに発光した。

　けどあれはまだまだ調整に時間がかかると、つい先日に本人が言っていたばかりだ。俺の見間違いだろうか。

　しかしトゥアールも、陽奈からブレスを受け取って顔を強こわ張ばらせたように見えたが……。

「これらのブレスの製作者は、あなたですか？」

「はいはいはい一六歳女子高生トゥアールちゃんです、以後お見知り置きを♡」

　皇み月つきに指名された瞬間トゥアールはすぐに笑顔に戻り、彼

女のそばに瞬間移動めいた速度で急迫した。

「……不思議です。私たちの世界に、これと全く同じ形をした変身ブレスレットのおもちゃが販売されています」

　皇月が俺の紅あかいテイルブレスを手に取り、照明に透かすなどしてじっくり観察している。

「えっ、ツインテイルズのおもちゃとしてパッケージされて、ですか？」

「いえ、何のヒーローかはわからなかったのです……ただ、つい買ってしまいました」

　これもまた、不思議な話だな。皇月たちの世界では、俺たちツインテイルズの情報は一切出回っていなかったはず。アルティメギルが訪れた形跡もない。

　それなのに何な故ぜ、テイルブレスそっくりの変身ブレスレットが流通しているのだろう。

「ですがトゥアールさん、このテイルブレスという変身アイテム……少々、プレイバリューが足りません。変身時に展開するとのことですが、音声がもう少し欲しいです」

「はい、何でも言ってくださいね！　お客様の声はすぐに商品に反映させていただきます！」

　うっきうきで皇月のアドバイスに耳を傾けるトゥアール。

　さっきウマちゃんが同じようなことを言った時には、反発していたのだが……。

　そんな皇月を見て、慧え理り那なはずっと嬉うれしそうに微笑している。

「動画で観て素敵だと思った人が目の前にいるのは、夢を見ているような心地ここちですわ」

「……観たいと思ってくれる方の元に届く……魔法ですね」

　皇月もうっすらと微ほほ笑えみながら、慧理那との出会いを喜ぶ

のだった。

　俺は武器などを一通り見た後、レイアーソルのフィギュアを手に取った。

　妙にツインテールの再現性が低いので、気になって触ってみる。

　するとどうだ。ポールジョイントでスライドし、変身前の陽奈のアホ毛の位置に移動したではないか。

「ツインテールが稼働するアクションフィギュアか……！　いいな、これ……!!」

　なるほど……あれだけ素晴らしいツインテールを持ちながら変身時だけというのを寂しく感じたが……アホ毛からツインテールへの変形ギミックを搭載し、ツインテールにおもちゃとしてのプレイバリューを持たせる！　こういう意図があったとは……勉強になったぜ。

「君はいい子だね、総そう二じ……僕の作ったおもちゃをこんなに喜んでくれるなんて……」

　ウマちゃんは俺の腕をそのスポンジめいた前脚でポンポンと触れてくる。

　いえこちらこそ、素晴らしいおもちゃをありがとうございます、プロデューサー。

「あの、総二くん……楽しそうなのはいいんだけど……あんまり私の身体からだいじらないで欲しいんだけど……」

　恥ずかしそうにこちらを見てくる陽ひ奈な。俺はそこでようやく、自分がレイアーソルのフィギュアをがっつり握りしめ、ツインテールをいじっているという構図の危険さに気づいた。

　そりゃそうだ、俺だってクラスメイトに同じようなことされてきつかったし！

「何でそーいうエッチな言い方するわけ!?　狙ねらってる!?　狙ってるでしょ!?」

「狙わないわよもー、愛あい香かって何かむっつりさんじゃない？」

「あんたが言う⁉」

　愛香と言い争いをしている陽奈に、俺はあらためて自分の気持ちを伝える。

「いやでも、あの時見たレイアーソルのツインテールは素敵だったよ」

「…………。あ、ありがと」

　陽奈は頬ほおを染めて俯うつむいた。もしかして、ツインテールを褒ほめられ慣れていないのかな？

「気をつけた方がいいッスよ、あいかち」

　遥はるかが愛香にけっこうな音量で耳打ちしている。あいかちて、愛香の愛称か……？

「百ゆ合りの専門家の遥ちゃんが解説すると、こいつ絶妙に可か愛わいい寄りのイケメンくんなんスよ。純粋な百ゆ合りっ娘こがうっかり気の迷いを起こしやすいのが、こういうタイプッス」

「じゃああんたが一番堕おとされる可能性高いじゃない、遥」

「わ、私は先輩一筋ッス‼」

　特におもちゃに触れることもなく見守っていたリルナが、自信たっぷりに鼻を鳴らす。

「ボクも愛する姉様を総二に取られそうで困ってる身だ、気持ちはわかるが……女性を愛する女性が気の迷いを起こすような奴やつじゃないよ、こいつは」

　そんなリルナを横にいるロエルが薄ら笑いのジト目で見ているのが気になるが、俺の視線を察するとほっぺに指を立ててはにかんだ。

「総二くんは愛香より強いって話だし、噛かみついたって今の遥じゃ返り討ちに遭うわよ」

　陽奈がなだめるも、それは遥の闘志に火を注ぐ結果となってしまった。

「百合にちょっかい出してくる男はぜってー許せねえッス……！　力の差なんか関係ない……この身が砕かれ、最後には胸の肉片しか残らなかったとしても、そのおっぱいだけで貴様の前に立ち塞ふさがってやるッス……!!」

　どんな脅し文句だ……トゥアールが好んで観るＺ級ホラー映画みたいな絵面にならないか、それ。

「ごめんなさい……根はいい子なんだけど、ホント馬ば鹿かで……ホンット馬鹿で……」

「そこまで入念に言い含める必要あるッスか!?」

　陽ひ奈なに呆あきれられてはいるが、遥はるかの闘志はすごいと思う。こう言ったら本人たちに怒られるかもしれないけど、この二人は愛あい香かとトゥアールの関係にちょっと似ているよな。

　シャツの袖そでを引かれ、そちらを振り向くと、皇み月つきがそばに立っていた。

「あの。フィギュアだけではなく、コスモチェンジャーやプロミネンスタッフなどの武器も触ってみてもらえませんか。男性の意見を聞く機会は滅多にありませんので」

「ああ、いいよ」

　皇月に頼まれ、魔ま星せい少しよう女じよのおもちゃを触っていく。こういうので遊ぶのは子供の頃ころ以来だ。

　指に伝わる感触を通して、幼い日の記憶が蘇よみがえる。なんか、ぐっと来ちゃうな。俺たちは今、子供の頃遊んでいたおもちゃを現実で振るうヒーローになったんだって実感して。

「すごいな。大人が触ってもちゃちな感じがしないっていうか……めちゃくちゃしっかりしてる。動作もしっかりしてて、遊んでて心地ここちいい」

「当然です。ほとんどが、私の意見を取り入れてもらったものですから」

「すごいじゃないか、レビューだけじゃなくて、おもちゃ制作のアドバイスもするんだな！」

「……あ、あの……子供扱いしないでください……」

「……？　ああ、ごめん」

　言われるまで気づかなかった。吸い寄せられるようにして皇月の頭を撫なでてしまっていた。

　子供扱いされたことが恥ずかしかったのだろう、皇月は耳まで真まっ赤かにしている。

「もーっ！　観み束つか君はすぐ、もーっ！　ですわ!!」

　慧え理り那なは手にしていたレイアーソルのおもちゃで、俺を咎とがめてきた。

　ポリ塩化ビニル素材のツインテールの毛先が、俺の手の甲にチクチク刺さる。

　フフフ……いいツインテールだ。こうして手の甲を通じて、製造工場にある金型の形がわかるようだ。

「ちょっ……私のおもちゃのツインテールで変なコトしないで!?」

　さっきから自分のフィギュアで遊ばれて、陽奈はリアクションに困っている。

「すっげー自然に女のカラダ触る奴やつッス……！　あいかち、お前あーいう撫で撫でとか無意識にやらかす男を女の園に中に放り込んどいて、私が警戒したら怒ったんスか!?　みつきちあれでクッソチョロいッスから、あのままだとヤベーッス!!」

「あたしの前で胸を揺らすんじゃないわよ世が世なら抜刀してるわよ」

「あーもうこの胸を憎むっぷり先輩にちょっと似てて憎めねーッス!!」

　愛香と遥は波長が合うのか、目を向ける度たびに仲よさげにしているな。

実感が湧わかないけど、これって異世界交流なんだよな。

笑い合うみんなを見ていると、この時間がいつまでも続けばいいのにと願ってしまう。

それがやがて消えゆく、魔法のように儚はかない時間なのだとわかっていても。

◇　★

陽ひ奈なたちは全員、この基地で夜を明かすことに決まった。

コンソールルームで一泊するのは、基地でわいわいやった時のお約束だな。

母さんは、後はみんなで楽しんでね、と言い残して家に戻っていった。

テーブルなどを全て床に収納して広々としたコンソールルームに、メガ・ネが全員分の布ふ団とんを運んでくる。

「位置とか好きに決めてな～」

俺も布団を敷いていくのを手伝うが、桜さくら川がわ先生の完かん璧ぺきなベッドメイクには敵かなわない。

陽奈たちにはトゥアールの用意したフリーサイズのパジャマも配られ、就寝準備は整った。

「下着も用意できますが……一応、明日の朝着替える時はまた水着も着てください。元の世界に帰る時、こちらでお渡しした服が残っているかわかりません。もし全部消失するとしたら、陽奈さんたちは元の世界に帰った瞬間に全裸になってしまいます」

「それは困るわね……」

かなり深刻な表情で納得する陽奈。

元の世界に帰ったら、こちらで渡したものが消えるかもしれな

い。正規の方法で世界をわたって来たわけではないのだ、トゥアールの危き惧ぐは当然なのだが……。

　それじゃあ、この世界で得たもの……俺たちとの記憶。思い出はどうなのだろう──。

　遥はるかはまたも俺の動向をチェックしていたようだ。俺がいつもの調子でここに泊まろうとしているのがわかると、すかさずそれに物申してきた。

「ちょい待ち。泊めてもらえるのはありがたいけど、どーして総そう二じまで一緒なんスか!?」

「いや、俺は別の部屋でもいいよ。何だったら自分の家に帰るし」

「お前物わかりが良すぎなんスよもう少し粘ってこいッス!!」

「どうすればいいんだよ!?」

　よく考えれば、愛あい香かたちだって異世界組と女子同士でしたい話もあるはずだ。俺は母さんと一緒に流れで帰っておけばよかったかな。

「さささ、総二様、真ん中にどうぞ。異世界の女の子たちの前で夜のバトルを見せてあげるのも戦士の先達としての使命ですよ」

「何をほざくッス、こちとら夜のマジカル夜よ這ばいを先輩にかます気満々だから見物するがいいッス。総そう二じには目隠しして声だけは聞かせてやってもいいッス」

　愛あい香かの拳こぶしと陽ひ奈なの指先から放たれた波動が二条の閃せん光こうとなって空を疾はしる。

「肝臓ッッ!!」

「腎じん臓ぞうッッ!!」

　トゥアール、そして遥はるかは、それぞれのダメージ箇所を正確

に告げ、糸の切れたマリオネットのように床に崩れ落ちた。この組み合わせも何か似た者同士だな。

　そのまま手て頃ごろな布ふ団とんに転がされ、真っ先に眠りにつかされるのだった。

◇　★

　〇時を回る頃には異世界からの来客たちも寝静まり、地下基地に静寂が訪れた。

　最終的に魔ま星せい少しよう女じよ組にも気を使わせてしまったが、やはりどうにも男が俺だけというのはバツが悪い。

　一人で廊下にでも寝ようと、俺はこっそりコンソールルームを抜け出した。

　が、何な故ぜか後を尾つけてくるように、廊下の奥の闇やみから一人の女の子が姿を現したのだった。

「あ、やっぱり。気を使って抜け出したんだ、総二くん」

　陽奈だった。就寝しても型崩れしない二本の立派なアホ毛が、光量を落とした廊下の照明に照らされ妖あやしく揺れている。

「みんなすごいよねえ、逢あったばっかりの異世界人と布団並べて雑ざ魚こ寝ねなんて……肝が据すわってるっていうか」

　陽奈はこの状況をちょっとだけ警戒もしたのだろう。それも当然だが……俺は、トゥアールがこの基地でみんな一緒に寝ようと提案する気持ちが痛いほどわかる。

「この基地ついこの間、敵の怪人に壊されたばかりでさ。トゥアールは普段からここに住んでいるから……一人でいるのがつらいと思うんだ」

　数時間で修復したとはいえ、トゥアールにとっては住居を怪人に襲撃されたも同然の出来事だったのだ。強がっているだけで、怖さ

は感じているだろう。

　なので俺も、最近は足繁く様子を見に訪れている。愛香たちにも、ちょくちょく泊まってもらうように提案してみようかな。

「そうなんだ……けっこう修しゆ羅ら場ばってるね、君たち」

「ああ。だいぶ修羅場ってるな」

「……私はまだ、あんまり経験してないんだよね……」

　俺と陽奈は廊下の壁に背を預け、並んで座り合った。

　会って間もない女の子とこんな距離感で話をするのは不思議だが、多分俺たちは、お互いに何か近しいものを感じているのではないだろうか。

「私、魔ま星せい少しよう女じよになって最初の一年間フォークールは、一人で戦ってたの。でも孤独を感じるより、『つまんない』って思う方が強くて。敵はめちゃくちゃ弱いし、みんな同じような見た目だし」

　そうか。陽ひ奈なも最初は、一人きりで戦っていたんだな。

「で、今は一緒に戦う仲間がたくさん増えて……何か楽しいんだ。不謹慎だよね」

「不謹慎なもんか。仲間と喜びを分かち合うって、大切なことじゃないか」

　楽しく戦うことが不謹慎だったら、俺たちはとっくに壊れてしまっていた。

　心を力に変えて戦う以上、底抜けに前向きで楽しく過ごすことは、むしろプラスに働くはずじゃないか。

「……俺は一年どころか、何年も一人で孤独に戦い続けた人を知っているからさ。一人の支援者もいない、全部自分で解決しなきゃいけない中……本当に辛つらかったと思う」

「……そっか」

　それが誰だれとは口にしなかった。多分、陽奈も思い浮かべているような気がした。

「だから『つまんない』で済むのは、陽奈の心の強さなんだよ」

「ホントー？　なんか総そう二じくん、何でも褒ほめてくれるよね。私、ぬいぐるみみたいな宇宙人にベタ惚ぼれしてる、おかしな女の子だよ？」

「別におかしくないよ。っていうか、その点に関して俺は全く人のことは言えないから」

「あっはっは、だよね、君は生き物どころかツインテールに惚ほれてるんだもんね!!」

　心底おかしそうに、俺の肩を叩たたいてくる陽奈。

　まあ、それは人への好きとは違うから分けて考えろって、散々言われているんだけどな。

「……頑張ろうね、総二くん。何か私、やる気が出てきた」

「ああ！」

　変わった女の子だけど、この人柄に惹ひかれて多くの仲間が集まったんだろうな。

　俺も、この子みたいにみんなのリーダーとしてちゃんとやれているといいんだけれど。

　などと感傷に浸ひたっていると、足音が迫ってきて俺たちの前で急ブレーキをかけた。

　パジャマ姿で息を切らしているのは、遥はるかだ。

「いやいやいやいやいやヤる気が出たって！　黙って見てれば何行きずりの男とワンナイトかまそうとしてんスか先輩!!」

「どこがワンナイトよ!?」

「何日もってことッスか!?」

　隠れてこっそり見てたのか……全然気配しなかったぞ。

まあ俺は、ツインテールじゃない子の気配はほとんど感知できないんだけど。

「はいはいわかったわかった、それじゃね総二くん、おやすみー」

陽奈は俺に手を振ると、遥の首根っこを摑つかんでコンソールルームへと戻っていった。

「おい総二！　せめて先輩じゃなくみつきちかマナっちにしとけッス！　特にみつきちはまんざらでもなさそうだったから、今からお布ふ団とんに潜り込んでもぐぼあ!!」

遥はるかの襟えり首を引っ張って、物理的に言葉を遮さえぎる陽ひ奈な。戦士同士で仲良くなると、どの異世界でもだいたいああいう感じのじゃれ合いが日常化するんだろうか。

話せば話すほど、陽奈って俺と信条とか少し似ている感じがする。

できればもっと時間をかけて、お互いの世界のこととか、どんな敵とどんな戦いをしてきたとか、ゆっくり語り合いたいけど……そういうわけにもいかないんだろうな。

俺たちが異世界の平穏を取り戻す時。それが、彼女たちと別れる時だから。

◇　★

遥を布団にブン投げた陽奈は、今度は愛あい香かに呼び出しを受けていた。

総二に見つからないよう廊下を進み、手て頃ごろな場所で足を止める。

「……そーじと密会してた」

そして開口一番、愛香の詰問が始まる。十数人の女子と雑ざ魚こ寝ねをするという状況で、愛香が神経を尖とがらせていないはずは

なかった。

「ごめんってば。大丈夫、戦いのことしか話してないし」

　それでも仏ぶつ頂ちよう面づらを続ける愛香に、陽奈は核心を突く。

「心配しないで、総そう二じくん取ったりしないから」

「なっ……」

「知ってのとおり、私、好きな人がいるし……」

　内緒事を共有するように、唇くちびるにそっと指を添える陽奈。

「──私を好きになってくれた後輩ひともいるし、ね」

　唇の動きを読まなければ聞き取れないぐらいの小声で、付け加える陽奈。

「ん。わかった。陽奈を信じることにする」

　そんな真しん摯しな眼まな差ざしに絆ほだされ、愛香はさして食い下がることもなく信用することにした。

「あとね、私この前パワーアップしたんだけど、何かその後遺症っぽい感じで、誰だれかとキスしたくなっちゃっててさ」

「え、何それヤバいじゃん！」

「そう、ヤバい。でもその発作がこの世界に来てからは治まってるのよね。だからなおさら心に余裕ができてる感じ」

　愛香は、総二も同じような後遺症に悩まされていることを説明した。

「……陽奈、実はね──」

　総二は繋つながりを求める……誰かを抱き締めたり手を繋いだりだが、それがキスであっても何もおかしくなかったわけだ。ちょっと惜しいと感じてしまう愛香。

「……どこにでもあるんだ、強くなる代償って」

「あたしも、驚いた。陽ひ奈ながそういうふうになってたなんて」

「まーつまり、戦いより自分のことで手一杯ってわけ。異世界に来てまで浮気なんてしてられないわよ。ウマちゃん故郷に好きな女の子いるっぽいから、その子に勝って振り向いてもらわなきゃいけないし」

まっとうだ。実に真っ当な恋バナだ。愛あい香かは嬉うれしくなり、口すべりがよくなる。

「言ったでしょ。そーじなんて、ツインテールが好きなのよ？　好みじゃなくて、恋と愛、両方の好き。あたしはそんな人に振り向いてもらわなくちゃいけないんだから」

「それは……かなり大変ね」

「「あはははははっ……」」

初しよ手てで拳こぶしで語り合ったことが殊更に功を奏しているのか、とりあえず初対面の人間は疑ってかかる愛香にしては、驚異的なスピードで仲を深めている。

もちろん、それが面白くない人物も、両陣営に存在した。

廊下の影から、陽奈と愛香を見守る影。もはやフクロウのように目が暗くら闇やみに光っていた。

「ぐ、ぎぎぎぎぎぎぎぎ……何スか先輩、そのめっちゃ青春映画の予告編みたいに爽さわやかな雰囲気は……！　その後悲劇に見舞われてタイトルコール直前に絶叫する役私が引き受けてやろうッスか!?」

「なに恋するＪＫみたいな可か愛わいらしい声出してるんですか愛香さん……！　あなたは腰こし蓑みの巻いて棍こん棒ぼう持ちながら野太い声で『オ、オデ、ナグルコトデシカ、キモチ……シメセナイ』とか言うキャラでしょうが……!!」

遥はるかはトゥアールと愛香を交互に見やると、訳知り顔で頷うなずいた。

「……トゥアっちも、一ひと方かたならぬ恋をしているんスね……」

「私が好きなのは、あの蛮族ではなくて総そう二じ様です!!」

「じゃあ先輩とあいかちが仲良くする分には、何も問題ねーんじゃねえッスか……？」

　もっともな正論を返され、言葉を詰まらせるトゥアール。

　が、黙ったら負けとばかりにとりあえず文句を連ねる努力をする。

「だっておかしいでしょう！　私は一番最初から愛香さんと苦楽をともにしてきた仲間なんですよ！　それなのにどうしてポッと出の女といい感じの恋バナし合ってるんですか!!」

「……なるほど……。うん、まあ、頑張れッス」

　納得したのかしないのか、意味深な笑みを浮かべる遥。

「……それはともかく。遥さん、あなたに聞いておきたいことがあります」

　しかしトゥアールが遥を尾つけてきたのは、遥自身にも用があるからだった。

「陽奈さんは、一体何者ですか」

「ん？」

　やおら貌かおつきを締めたトゥアールが白衣のポケットから取り出したのは、彼女の変身アイテム、テイルブレスレボリューションだった。

　遥はるかは知しる由よしもないが、最終決戦以降輝きを失っていたそのブレスに灰ほのかな光が灯ともっている。

「陽ひ奈なさんが触れただけで、私のブレスの出力が一時的に安定しています。彼女は本当に、魔法を使えるとでも言うんですか」

　魔法で何でもできるとしたら、これまで邁まい進しんしてきた科学の敗北だ。

　ブレスの復調をトゥアールが素直に喜べずにいるのも、無理はな

かった。

　遥は頭の後ろで手を組むと、トゥアールの憂ゆう鬱うつな表情を吹き飛ばすかのように破は顔がんする。

「んなわけねーッス！　先輩が本当に何でもできる魔法使いなら、ウマっちととっくに両思いになってるはずッス!!」

「……それは、そうですが……」

「まあ、未確認生物に会いたいって強く願えば本当に未確認生物拾ってくる人ッスから、不思議な力があるのは間違いねーッスけど」

「強く、願えば……」

「んでもそんなん言ったら、ウチらだって一緒ッスからね」

　遥は廊下の壁をそっと撫なで、その製作者であるトゥアールを讃たたえる。

「こっちがどんな環境で活動してるかわかるッスか？　普段は先輩ん家ちのリビングで作戦会議。ちょっとした撮影しようって時は、異次元の中にある掘っ立て小屋がスタジオッス。私からしたら、こんな秘密基地を一人で作ったトゥアっちの方がよっぽど魔法使いッスよ」

「遥さん……」

「仮に先輩の影響でちょっとだけ元の力が戻ったんだとしても……それはきっとそう遠くない未来に、トゥアっちが自分自身で叶かなえられることの前借りってだけだと思うッス」

　普段の粗野でふざけた口ぶりからはイメージができないが、この心優しい一面こそが、遥の本当の魅力なのだろう。

　自分が愛あい香かたちの明るさに救われたように。

　一年間孤独に戦った陽奈は、遥の優しさに救われたのだ。

「……そうですね。一夜限りの儚はかない奇跡というのも、魔法のお約束です。その先の幸せを摑つかむのは、自分の力で何とかしな

きゃですからね」

　トゥアールも覚悟を決め、ブレスを固く握り締める。

　そしてトゥアールがその一度限りの輝きをまとう時は……総そう二じが覚悟していた〝その時〟は、あまりにも早く、唐突に訪れたのだった。

集結章・三　ツインテール大戦。

休日ということで少し遅めの九時に起床し、俺たちはコンソールルームのテーブルで簡単な朝食を済ませた。

一息ついたところで、あらためて今後の方針を立てようとした、その時。

メインモニターの端末を操作していたトゥアールが、険しい表情で振り返った。

「異世界の境界に強烈な属性力エレメーラの反応を確認した後、とあるポイントに空間の裂さけ目が出現しました。異世界消滅の起点……いわば崩壊極点です」

テーブルの上にまたおもちゃを広げ始めていた皇み月つきと慧え理り那なが、半ば啞あ然ぜんとしながらトゥアールの報告に耳を傾ける。

「そんな気はしていたんですよ。私たちがこの基地で楽しく騒ぐと、その翌日にだいたい何らかの事件が起こるんですよね……何の恨みがあるのやら」

半分諦あきらめの表情で吐気をもらすトゥアール。

俺たちは慣れっこだが……残念なのは、今日は陽ひ奈なたちにこの世界を案内する予定だったことだ。陽奈たちにできるだけ早く自分たちの世界に帰らないといけない事情がある以上、この週末が最初で最後のチャンスだったかもしれないのだ。

「えっと……つまり、どういうこと？」

「ようするに、敵が最後の悪あがきを始めた。決戦の時が来た、ということです」

陽奈に要約を求められ、トゥアールはリクエスト通り簡潔に現状をまとめてみせた。

「よし、わかりやすくて助かる。要は、その異世界の狭はざ間まで悪さをしようとしているやつ……エレメパイレーツの本当の大元を叩たたけば、世界の崩壊は止められるわけだ‼」

　俺は立ち上がってモニターの前に歩み寄ると、表示された崩壊極点を見み据すえて平手を拳こぶしで打ち鳴らした。

「大元というより、正真正銘の〝悪意〟が具現化した存在のはずです。おそらくはエレメリアンどころか生命体ですらない可能性もあります」

　今回はいつものようにエレメリアンの反応を探知してからの出撃ではないので、不確定要素が多い。

「本番は崩壊極点の内部に突入してからですので、力を温存するためにも変身しないまま現場を踏破しようと考えます。このミッションの志願者は──」

　トゥアールが言い終える前に、俺たちツインテイルズ側は全員が手を挙げる。

　そして一拍遅れ、陽奈たち魔ま星せい少しよう女じよも四人ともが挙手を重ねた。

「ま、遥はるかちゃんは義理固いッスから。一宿一飯の恩返しに、ちょっくら世界守るの手伝ってやるッス」

「……普通に考えて、異世界全ての危機であるのなら、それを守るのは私たちの戦いでもあるはずです。ツインテイルズだけに責任を押しつけることはできません」

「何でみつきち大人なコト言っちゃうんスか⁉　遥ちゃんのキメ顔がふいになったッス‼」

　涙目で詰め寄られても、真顔を微み塵じんも崩さない皇み月つき。クレバーな小学生だ……。

「マナ、戦いはテキトーに流すけど、ネタ集めはがんばるぞー‼」

「そういうわけだから、私たちも遠足に付き合うわ。連れてって？」

愛まな美みと陽ひ奈なもそれぞれ照れ隠しめいた希望を告げたところで、俺たちは全員でこの戦いに臨のぞむことを決意した。

◇　★

転送ゲートを使って現場近くに到着する。

外国にある数十キロ四方に及ぶ岩地で、かなり遠くまで民家はないのが幸いだった。

俺と愛あい香か、トゥアール、慧え理り那な、イースナ、メガ・ネ……桜さくら川がわ先生、唯ゆ乃の、ロエルとリルナ。そして陽奈、遥、皇月と愛美。

なんとも大所帯だが、遠足気分でいられるのはものの数分だろう。

『じゃあ、何か情報がわかったら僕が通信するからね！』

『私がウマちゃん君に操作を教えるわよ～』

今回はトゥアールの代わりに基地に残ったウマちゃんが、母さんと一緒にオペレートを担当するようだ。というより、俺たちの戦いの映像素材が欲しくてたまらないらしいが……。

「てか、何でトゥアールまで来てるの」

「ふふん、一回分余裕ができました。変身できちゃいますよ、今日のトゥアールちゃんは」

「マジで!?　よかったじゃん、トゥアール!!」

我わがことのように喜ぶ愛香。どんなマジックを使ったのか、決戦に備えて一度限りの調整を仕上げてくるとは、さすがトゥアールだ。

もしかしたら……女神さまの励ましも、少しは影響しているのかもな。

「繰り返しますが、本番は空間の裂さけ目の中に突入してからのはずです。皆さん、それまで力を温存してくださいね」

　ツアーガイドよろしく先頭に立って進むトゥアールだが――

「！　あれは……」

「ああ。残念ながら力の温存なんざ無理だな。俺様は残念じゃねえがな」

「ウチは残念や……」

　真っ先に気づいたのは、神眼鏡ゴツドめがねを装備しているイースナ、そして人ならざる視力を備える唯ゆ乃のとメガ・ネだった。

　嫌な予感がしながら歩みを進めるうち、俺たちにもその光景が視認できるようになった。

「……もしかしたらとは思ったけど、こういうパターンか」

　俺たちの眼前は、ちょっと生理的嫌悪を催すレベルで大量の黒い何かが蠢うごめいていた。

　比喩ではなく、黒い何か、だ。

　見渡す限りの荒野だったはずの場所を全て黒が埋め尽くす光景は、対処不能なまでに大量発生した昆虫を思わせる。

　それら全てが、このところの戦いで何度も出現した、黒い戦士たちだ。やつらはこれまで、異世界の裂さけ目からほんの少しずつこぼれてきていたに過ぎなかったということか。

「……ロエル、帰っていい？」

　双子姫は、二人で手を握り合い、立ちくらみを起こしたようにふらついている。

　半分冗談で言っているのだろうが、本気だとしても引き留とめられない悪夢だな、これは。

「憎しみの怨おん霊りよう……エレメゴーストと呼ぶべきでしょうか」

　慧え理り那ながその黒い影を前に、心細げな声で呼称する。

　確かに、生命体ですらないのならもはやゴーストでしかないな。

「当然、精神……心の力を操る私たちならば、全て撃滅できます。幽霊であっても」

　トゥアールの力強い宣言に、俺たちは頷うなずきを返していった。

『いつでもテイルレッドたん』というゲームだが、さしてエレメリアンの資料が無い状態で製作されている。そのため、ゲーム上に必要な敵キャラは黒い影で表現されていた。

　エレメゴーストが模しているのは、その『いつでもテイルレッドたん』の敵キャラだ。依然としてこの世界に一番強く繋つながった異世界である以上、この世界を侵食する悪意へのフィードバックも強力だということなのだろう。

　エレメリアンではなく、何にでも形を変える黒いモンスター。

　すでに人型だけではなく、大型の動物や四足歩行の獣けもの、果ては恐竜めいた巨大な怪物まで現れ始めている。

　空には鳥や巨大な虫を模した個体が羽ばたき、あっという間に太陽の光を遮さえぎりだした。

〈ツインテールが、憎い……〉

〈全てのツインテールを消し去り、異世界を一つに……。我われらが新たな世界の創造主に……〉

　蠢く怪魔たちの意思が、不気味な声こわ音ねとなって周囲に響きわたる。

　これこそが、エレメパイレーツの正体。記憶を奪われた世界でこれらが暴れるとしたら、それはもう灰色の世界どころではない。正しく地獄が顕けん現げんすることだろう。

　そんなことは、俺たちが絶対に許さない。

「それじゃみんな、『魔ま星せい少しよう女じよリフレイアＳ』

〝特別放送〟……いくわよ!!」

「了解ッス!!」

　陽ひ奈なの号令で並び立った遥はるか、皇み月つき、愛まな美みはカードを二本指で挟み、胸の前で構えた。

　そして陽奈と遥と愛美は左手にコスモチェンジャーを構えた。軽やかに右腕をスイングさせ、変身魔星紙片トランススターピースを装そう塡てん。

　皇月は手にしたコスモフォンで変身魔星紙片トランススターピースを読み取って、本体に分解吸収させる。

　《Ａｌｌオール Ｓｅｔセット， Ｓｏｌソル Ｓｔｙｌｅスタイル．》

　《Ａｌｌオール Ｓｅｔセット， Ｔｅｒｒａテラ Ｓｔｙｌｅスタイル．》

　《Ａｌｌオール Ｓｅｔセット， Ｒｕｎａルナ Ｓｔｙｌｅスタイル．》

　《Ａｌｌオール Ｓｅｔセット， Ｖｅｎｕｓヴイナス Ｓｔｙｌｅスタイル．》

　その声はまさに、魔法使いの呪文詠唱。派手な電子音声が、連続して高らかに鳴り響く。

「「「「スタートランス!!」」」」

　《《《《Ｓｔａｒｔｉ，nスターテイン ，Ｓｔａｒスター Ｔｒａｎｃｅトランス．》》》》

　変身完了を告げる電子音声は四人分乱れなく重なり、ハーモニー

を奏かなでる。

　可か憐れんな星の光を振りまきながら、陽奈たちは変身を完了した。

　異世界の戦士たちの揃そろい踏みを前に、俺も否応なしに戦意が高まる。

「変身アイテムがめっちゃ喋しやべって鳴ってる……今時のヒーローってあんななの？」

「時代、ですかね……」

「トゥアールさんに頼んで、テイルブレスもいつかめっちゃ喋って鳴るようにしていただきましょう!!」

　愛あい香かとトゥアールは呆あきれたような感心したような視線を向けていたが、慧え理り那なは子供のように目を輝かせて彼女たちの変身を凝視していた。

「よし、俺たちもいくぞ!!」

　俺が赤きテイルブレスを胸の前に輝かせたのを合図に、愛香たちも一斉にそれぞれの変身デバイスを構えた。

「「「「「「「「「「テイルオン!!」」」」」」」」」」

　変身機構起動略語スタートアップワードであり、魂たましいの合い言葉。

　十人がその言葉を唱となえた時、九人の戦士が戦場に舞い降りる。

　あらゆる色の光が綯ない交まぜになって爆裂し、エレメゴーストたちは進軍の足を止めて怯ひるむ。

　二つの世界の、二つのヒーロー。

　テイルレッド。テイルブルー。テイルイエロー。テイルブラック。テイルシルバー。

　アナザーテイルブルー。テイルフェニックス。テイルピンク。テイルホワイト。

　レイアーソル。レイアーテラ。レイアールナ。レイアーヴィナス。

　今回は大盤振る舞い、一三ヒーローの結集だ！

　どんなカタストロフが相手だろうと──絶対に負けない!!

『いい画えが撮れたよ！　陽ひ奈なたちも、四人同時変身は初めてじゃないかい!?』

　基地で母さんと待っているウマちゃんは、どうやら本当に今回の戦いを番組の素材にしようと考えているようだ……。

「あの子はレイアーウマちゃんとかにならないの？」

「その案も考えてはいるわ」

　ピンクに無邪気な質問を投げかけられ、レイアーソルは不敵に唇くちびるを吊つり上げる。

『おっそろしい計画、本人の聞いてるところで立てないでくれる!?』

　そして俺は、全員の心を一つにするべく、あらん限りの声で叫んだ。

「いくぞ！　全ての異世界を守るために……決戦だっ!!」

〈ツインテール……滅ぶべし!!〉

　エレメゴーストの放った光線が、弧を描いて飛来する。

　光線が着弾した爆発を背後に背負い、一三人の戦士は誰だれともなく走りだした。

　さらにレイアーソルたちの背後の空間に穴が穿うがたれ、ガッタくんたちＵＭＡウーマも馳はせ参じる。

噴き上がる土砂も、爆炎も、俺たちの放つ光に散らされて吹き飛んでいく。

この戦場は、幹部級の戦士が紛まぎれているわけではない。敵の全戦力が平等な、殲せん滅めつ戦だ。

ならば、誰が誰と戦うといった戦力分配は必要ない。

目についた端から撃破し、最後の一体になるまで戦い続けるだけだ。

「魔ま星せい少しよう女じよたちよ！　わらわに続けーい!!」

神眼鏡ゴツドめがねから∞型の光線を連続で発射し、先陣を切るブラック。

レイアーテラ、ルナ、ヴィナスの三人はすでに、召喚した武器をそれぞれ手にしている。

クロノブラスター、アルテミアロー、ルシファーズタイパー。昨日きのうおもちゃを見せてもらった武器だ。

「どぉうりゃ――――――――ッス!!」

おもちゃのプレイバリューを見せつけるかのように、手にした実物の武器を変形させながら戦うレイアーテラ。

魔法使いさながらの錫杖のような基本形態から、ライフル銃のように銃身の長い砲撃形態、トンファーのように縮めて近間の敵に叩たたき込む打撃形態。

《ＥｘｔｅｎｓｉｏｎエクステンシヨンＭｉｇｈｔｙマイテイー．》

それら変形を使いこなし、さらに〝強化マイテイー〟の魔星紙片スターピースを併用して威力を高め、着実に相手を追いつめていく。

　そんなレイアーテラの戦いぶりを見て発奮したように、テイルホワイトも久しぶりの大暴れを披露する。

「シャイニングアームド──ガンアームド!!」

　黄色のレイヤーをツインテールに換装し、手てつ甲こう型武器・シャイニングアームドを銃型に変形。周囲に光弾の雨を撒まき散らしたかと思えば、間かん髪はつ容いれずに槍やり型のスピアアームドに変形、回転しての斬きりつけで接近してきたエレメゴーストを両断した。

　そしてすかさずソードアームドに瞬間変形すると、疾走ざまに斬ざん撃げきを繰り出していった。

　戦局を冷静に見極め、武器の運用一つ取っても計算を怠おこたらないホワイトにしては珍しいが、きっと魔ま星せい少しよう女じょたちの武器を見て感化されたのだろう。

　当然、ツインテイルズで一番おもちゃ好きなイエローに至っては、さらにわかりやすく影響を受けていた。

「ヴォルティックジャッジメント・クレセント───ッ!!」

　全身の武装を一箇所ずつ順番に発射した後は、属性玉多重変換機構エレメアデイツシヨンを用いた必殺の蹴しゆう撃げき。

　そしてとどめに、完全脱衣形態フルブラストモードによる一斉射。

　持ちえる武装と技、全てを余さず発動しようという気概が伝わってくる。

　そんなイエローの砲撃とは別に、周囲が次々に爆裂。俺は咄とつ嗟さに空を見上げた。

　エレメパイレーツの海賊船だ。消滅したと思ってたが、ギリギリ残ってやがったのか。

　船体に搭載された全ての砲門をこちらに向け、次々に弾丸を発射してくる。

「みんな、ちょい下がってぇな!!」

　メガ・ネがバルカン砲を発射し、俺たちの射線上にある弾丸を迎げい撃げきする。

　断続的な爆発は続く。この砲撃、地上のエレメゴーストが巻き込まれるのもお構いなしだ。

　火力も厄介だが、また記憶を奪われるわけにはいかない。俺は魔星少女たちにも聞こえるよう大声で提案した。

「まずはあの海賊船を撃破するぞ！　あれは移動しながら人間の記憶を奪う!!」

「ひとりでに動く掃除機みたいなもんっスか」

　言い得て妙だな。ちょっとデカいだけの家電って考えれば、恐れることもないか。

「待ってください、レッド！　崩壊極点が拡ひろがる速度が予想以上です!!」

　右手のシャイニングアームドで敵を殴なぐり、左手に持った端末で崩壊極点を分析──忙せわしなく立ち回っていたホワイトが、焦あせりで声を上うわ擦ずらせる。

「レッド、先に行ってください！　月並みですが──ここはわたくしたちが引き受けます!!」

「なら、先輩も！　魔ま星せい少しよう女じよ代表として、しっかりやってきてッス!!」

　イエローとレイアーテラに背中を押され、俺とレイアーソルは頷うなずき合った。

「任せて！　奥でドンと構えてる奴やつブッ飛ばすのは、得意だから!!」

　力強く胸を叩たたくレイアーソル。

　俺はせめて戦いの足しになればと、三つ編み属性トライブライドの属性玉エレメーラオーブを発動した。

「属性玉エレメーラオーブ──三つ編み属性トライブライド!!」

「あふんっ」

　イエローの装そう甲こうが強制脱衣され、合身巨大砲ユナイトウエポンに合体。俺のブレイド、ブルーのランスがそれに合わさって、融合巨砲フュージョニックバスターが完成する。

『わ――――なんか脱いだ――――っ！　露出度高いよ放送ギリギリなんだけど!?』

　基地でウマちゃんがイエローの初見殺し（脱衣）に驚きよう愕がくしている。

　そこは編集で何とかしてくれ……!!

「これを置いていく――海賊船を頼んだ!!」

　とろんだ目で頷くイエローにバスターを託し、俺が走りだそうとした時。

「待って、ここはモケーくんの力を借りましょ！」

　レイアーソルはモケーレ・ムベンベを前にコスモチェンジャーを手に取った。

　《Ａｒｍｅｄアームドｏｎオン，ＭｏｋｅＲａｉｄｅｒモケーレイダー．》

　モケーレ・ムベンベの身体からだが発光したかと思うと、その身体が機甲の輝きに包まれる。

　首や手足が縮み、代わりにタイヤやシートが迫り出してきた。バイクへと変形したのだ。

　レイアーソルが騎き乗じようすると、騎乗者の印しるしを刻み込むように、ボディに灼しやく熱ねつの炎がラインとなって走った。

「魔法少女がバイクに乗るのか!?」

「これで突っ切ってくわ！　私の後ろに乗って、総そう二じく

ん!!」

　フュージョニックバスターを手にしようとしていたブルーが、猛然と抗議してくる。

「はー!?　駄目に決まってるでしょ、レッドに腰に手ェ回させるつもり!?」

　一秒を争う局面でブルーの制止を受けたレイアーソルは、凝った笑いを浮かべる。

「愛あい香かって、結構男の子束縛するタイプだね……」

「先輩が言うなッス!!」

　そこに救いの手を差し伸べてきたのは、同じくフュージョニックバスターのボディに手を添えたブラックだった。さりげなく自分のグレイブも乗せ、いつもの疑似合体を敢行しながら。

「案ずるなレッド！　バイクならこちらにもある！　頼むぞ、メガ・ネ!!」

「了解や！　ウチに乗ってってーな、レッドちゃん!!」

　爆走機形態メガネストライカーに変形したメガ・ネが、俺に搭乗を促うながす。

　対抗する必要あるか……!?　とは思ったが、確かにメガ・ネの力を借りれば、この包囲網も速すみやかに突破が可能だ。

「ちゃんとカタ付けてきてよ。そのまま帰ってこなかったりしたら、どこまでも追いかけてってやるから」

　シートに跨またがった俺の背に、ブルーの心細げな言葉がかけられた。

　ツインテールを空に舞わせ、俺は力強く頷うなずく。

「俺はどこにも行かないよ。必ずみんなの前に帰って来る」

「……みんな、ね……。ま、いいわ！　いってらっしゃい!!」

　俺とレイアーソルはそれぞれの乗機のハンドルを握り、同時にア

クセルを全開にした。

　唸うなりを上げるタイヤが砂利を巻き上げ、二台のバイクは一気に発進。

　数体のエレメゴーストを跳ね飛ばし、加速に加速を重ねる。

　しかし追いつけないと悟ったエレメゴーストは、何と移動砲台のような異形に合体。

　横から前方から、砲火のスコールを浴びせかけてくる。

　騎き乗じようする俺とレイアーソルのツインテールをバランサーとし、爆走機形態メガネストライカーとモケーレイダーは踊るように蛇行。爆発をかい潜くぐり疾走する。

　ついには俺たちの目の前に、火線を集中した巨大な砲撃が放たれた。

「レイアーソル!!」

「オッケー!!」

　俺の合図にレイアーソルも首しゅ肯こうし、同時に跳躍。

　激しい爆発を背に背負いながら、二台のバイクは天馬のごとく大空を舞った。

　重力から解放された機甲の炎は、すれ違うだけで空中のエレメゴーストを爆砕。見事包囲網を突破した。

　仲間たちを振り返らず突き抜けることこそが、固い信頼の証あかし。

　再び地を摑つかんだ車輪が咆ほう哮こうし、俺たちをさらなる高速へと誘いざなった。

◇　★

　テイルレッドとレイアーテラを見送った両陣営の戦士たちは、別れ際に託された戦艦撃墜へ臨のぞむ。

「ツインテイルズに負けてらんねー、こっちもドデカいの行くッス！　ガッタくーん!!」

「はい、遥はるかさん!!」

　ブルー、イエロー、ブラックがフュージョニックバスターを構えるのを見たレイアーテラは、武装魔星紙片アームドスターピースをリードしてグランガッターを呼び寄せた。

　《Ａｒｍｅｄアームドｏｎオン，ＧｏｔｔｅｒＣａｎｏｎガツターキヤノン．》

　魔法戦艦が内側に折り畳たたむようにして変形し、フュージョニックバスターと同スケールのバズーカ砲へと姿を変える。

　レイアーテラ、レイアールナ、レイアーヴィナスの三人の中心に、厳おごそかに降下するガッターキャノン。

「はー!?　何で魔法少女が必殺バズーカ持っとるんじゃーっ!?」

「こちとらおもちゃの販促ノルマ背負って戦ってんだから、何でも出てくるッスよ!!」

　さすがのブラックも度肝を抜かれるが、販促ならば仕方がない。

　ツインテイルズと魔ま星せい少しよう女じよそれぞれが誇る巨大砲が、天空に砲口を掲げる。

「フュージョニックバスター!!」

「ガッターキャノン!!」

「「「「「「ファイヤ――――――――ッ!!」」」」」」

　ブラックとレイアーテラがそれぞれトリガーを引き、全員の力を合わせて発射する。

　三色の螺ら旋せん波光とプリズムの巨大光線が、船体の左右に直撃。

　エレメパイレーツの海賊船は、連鎖的に大爆発を巻き起こし、跡形もなく崩れ去った。

「撃墜ですわ!!」

　快かい哉さいを上げるイエローだが、それで後がなくなったからだろう、エレメゴーストたちはさらに激しく暴れ始めた。

　受けてたつとばかりにイエローはアブソリュートリングを手にし、アブソリュートチェインを以もつてして最後の殲せん滅めつ戦に挑む。

　歩く爆薬庫さながらの重火力に熱い眼まな差ざしを送るのは、レイアールナだった。

「慧え理り那なさん。戦いの合間に確認していましたが……テイルイエローのギミック、素晴らしいですね。アクションフィギュア映えすること間違いなしです」

　戦闘の巧拙ではなく装備や武器やどれだけおもちゃにして映えるかで観察するのが皇み月つきの特長だが、これはそんな彼女にとって最大級の賛辞だ。

「この世界で、もうすぐ発売が予定されていると聞きましたが──」

　言いかけて、ふっと寂しげに微ほほ笑えむイエロー。

　ツインテイルズの設定情報が開示されたことで、レッドに比べればごく少ないとはいえイエローたち他のメンバーの関連商品も発売の予定を聞き及んでいる。

　できれば発売したおもちゃを皇月にも渡したいが……その頃ころにはもう、彼女たちはあるべき世界へと帰還しているだろう。だが──

「……いつか、レビューさせてください」

「はい、喜んで!!」

おもちゃ好きの同志として、皆まで言うまでもない。

二人は背中合わせになってエレメゴーストに相対すると、まずレイアールナが〝大魔星術マキシマギアス〟の魔星紙片スターピースをコスモフォンにリードさせた。彼女の弓形武装・アルテミアローの柄つかのジョイント部へ、コスモフォンが合体する。

空に地に蠢うごめくエレメゴーストが、アルテミアローにジョイントされたコスモフォンの画面上で、ことごとくロックされていく。

番つがえた光の矢がレイアールナの手を離れると同時、流星さながらに分裂して飛ひ翔しよう。照準されたエレメゴーストは一匹漏もらさず爆発していった。

「……ミーティアスアロー」

踵きびすを返したレイアールナが、背後の爆炎に決着の言葉を手た向むける。

「絶対脱衣形態アブソリュートブラストモード!!」

そしてイエローは　跳躍して空中にツインテールをアンカーとして打ち込み、暴力的なまでの火力で恐竜型のエレメゴーストを粉砕。

着地と同時に、着ている装そう甲こうを綺き麗れいさっぱり脱衣パージした。

『めっちゃ脱いでるうううううううううううそれはもう駄目だああああああああああああ!!』

火力の向上と引き換えに何な故ぜか露出度も限界に達したイエローの強化形態に、プロデューサーが頭を抱かかえる。

『まあまあ、たまに刺激的な格好の子が出てくるのもヒーロー番組の醍だい醐ご味みでしょ？』

『そういうのは悪の魔ま星せい少しよう女じよたちで間に合ってるんだよう!!』

基地待機組の賑にぎ々にぎしいやり取りを耳に、やれやれと力無

く笑うブルー。

　彼女の前に幽鬼の如ごとく立ち塞ふさがったエレメゴーストが、掠かすれた声で問いかけてきた。

〈テイルブルー……お前は巨乳への憎しみで戦っていたはず……何故、我われらの無念が理解できない……!!〉

「は!?　何、あんたら勝手に仲間意識持ってたわけ!?」

　まだ話しかけてくる個体がいたことが驚きだが、それに輪をかけて話の内容に呆あきれる。

「確かにあたしは巨乳が嫌いよ。それでいじってくるエレメリアンもね。けど、ムカつくやつはその場でブッ飛ばして、それで終わり！　憎しみなんて、そんな単純なもんでいいのよ!!」

　ブルーは言葉のままに快こころよい暴れぶりで進行上の四足獣を散らしながら、声をかけてきた個体に渾こん身しんの一突きを叩たたき込む。

「いちいち次の日まで持ち越して悶々としてるあんたらと、一緒にしないでもらえる!?」

　そして、エターナルチェインへの強化を果たそうとエターナルパッドを手にした。

「いやブルーは絶対巨乳への憎しみ日ごとに積み重ねてるであっぶなサイズアームド!!」

　明らかに自分にぶつけようと放り投げられてきたエレメゴーストを、鋏はさみ状に変形させたシャイニングアームドで防御する。

〈憎い……ツインテールが……憎い……〉

　数が減り始めたからか、エレメゴーストに怨おん念ねんとしての側面がより濃く顕あらわれ始める。

　かつて、ツインテールに翻ほん弄ろうされた少女がいた。

　後悔と、憎しみと、怒りと、哀しみと……あらゆる感情を抱かかえて旅を続けた。

　そう、ただ負の怨念だけを抱えて異世界を放浪した、エレメパイレーツのように。

　目の前に広がるのが、かつての自分だとまでは言わない。

　ホワイトはただ、誰だれよりもツインテールと向き合ってきた者として、答えを示す。

　ツインテールに……憎しみなど、必要ないと。

「スペリオルエクスプロード――――――――ッ!!」

　ホワイトの放つ必殺の爆光は、漂う怨念もろとも怪魔を光の彼方かなたに滅ぼし去る。

「ブルー！　アナザーブルー！　久しぶりにあれでいきますよ!!」

　ちょうどブルーとアナザーブルーが自分の近くにいるのを視認したホワイトは、一いつ気き呵か成せいに進撃すべく提言した。

「わかったわ！」

「なんだったかな……」

　本来はレッドの助力あって完成する技だが、この使い走りの怪人崩れたちを掃そう討とうするには、歴代レジエンドテイルブルー三人が力を合わせれば十分に過ぎる。

　ウェイブランスエクシード、シャイニングアームド、そして技を忘れかけていたアナザーブルーもウェイブメイスを重ね、眼前の大だい蛇じゃ型エレメゴーストに切っ先の照準を合わせた。

「「「トライアードビロウズ!!」」」

　蒼あおと水色と白が織り成す光の渦うずが、怨念を呑のみ込む。

　目の前の怪物が何度憎しみを囁ささやきかけようと……少女たちは、決して惑わされはしない。

　誰よりもツインテールに希望を抱いだいた少年の横顔を、ずっと見続けてきたのだから。

　一方、早くも疲労のぼやきをこぼしている戦士もいた。

「もー！　ロロリー、こういうわちゃわちゃした戦いに巻き込まれてばっかりだよう!!」

　ロロリー……テイルピンクは、この世界にやって来てすぐアルティメギルとの最終決戦に巻き込まれた。そこにきて、たった数か月でこの大軍勢との戦いだ。

　溯さかのぼれば彼女たちは自分の国でも、ツインテイルズとともに貴の三葉ノー・ブル・クラブの総攻撃に立ち向かっている。愚ぐ痴ちの一つも出てくるのは無理からぬことだった。

「ツインテール！　ミラクルトルネ――――――――ドッ!!」

　ヤケクソ気味に叫んでツインテールから虹にじ色の竜巻を発射し、獣けもの型のエレメゴーストを空にかち上げていく。

「おおおおーなるほどーツインテイルズだからツインテールで攻撃すんのかー!!」

　ピンクの戦いぶりをウキウキで観察するレイアーヴィナス。

　しかし実際には、ツインテールを使いまくるロロリーの戦い方の方がツインテイルズの中ではイレギュラーなのだが。

「よっしゃあ、メンバーも増えた〝超ポニーテール同盟〟の大暴れといこうぜ!!」

　ちょうど二人のそばに着地したフェニックスは、ピンクとレイアーヴィナスの肩を叩たたき、同盟の拡充を宣言した。

「ロロリーは変身するとツインテールなのに……!!」

　不満を重ねるピンクのそばに、ＵＭＡウーマ・ケセランパサランのケセりんが浮遊してくる。

「ハァイお姫様、あなた、レイアーソルちゃんと武器が被かぶったって嘆いてたわよねん？」

「あっ、昨日きのうの……大昔の大女優みたいにねっとり喋しやべる毛玉ちゃんだ！」

「アティシがお洒しや落れな武器になってあげるわぁん、感謝しな

さぁい」

　魔法少女ステッキがレイアーソルと被ったという、子供ながらの些さ細さいな我わが侭ままを口にしていたのを、ケセりんは憶おぼえていたのだ。

「おっ、やっちゃうかケセりん！」

　レイアーヴィナスが意図を察し、コスモチェンジャーで武装魔星紙片アームドスターピースを読み込む。

　《Ａｒｍｅｄアームドｏｎオン，ＫｅｓａｌａＰａｒａｙｚｅｒケセラパライザー．》

　毛玉から鋼鉄のハンマーボールに変形したケセりんを見て、ピンクは目を輝かせる。

「よ――し行っけ―――毛玉ちゃ――――――――んっ!!」

　自身のツインテールステッキにケセラパライザーの鎖を絡め、砲丸投げのようにブン回すピンク。

　これこそが、魔ま星せい少しよう女じよ陣営一の大女優（自称）の粋な異世界交流。

　生命いのちある超重武器は遠心力に加えてボディのブースターも点火して自ら加速し、この世界の幼き魔法少女にパワフルな打撃力を与える。

　電撃をまとった鉄球に打ち据すえられ、エレメゴーストが宙を舞う。

「どっかーん！」

　その爆風でマントを揺らしながら、レイアーヴィナスは嬉き々きとして打撃音を口ずさみ、ルシファーズタイパーを振り回す。そして攻撃ざまの旋回で周囲に充満する自分の魔ま星せい力りよくを水飴のように巻き取っていった。

「ルシファーインパクト――――ッ!!」

　とどめとばかりに脳天へ〝大魔星術マキシマギアス〟の剛ごう槌ついーいつ閃せん。巨大な獣型のエレメゴーストを粉砕した。

　レイアーヴィナスは歩みを止め、ルシファーズタイパーをキーボードに変形。

「……面白い話思いついた!!」

　大技後の小休止かと思えば、何と怪魔溢あふれる地獄の只ただ中なかでラノベの執筆を始めてしまった。

「あーもう、ネタがたくさん溢れてるー！　みんなの戦いだけ見てたーい!!」

　すかさずレイアーヴィナスのフォローに入り、周囲の敵を蹴け散らすフェニックス。

「おう愛まな美み、いいバトルを書きてえなら、自分でもしっかりバトルを経験すべきだぜ!!」

　ただ甘やかすだけではなく、うまいやる気の出させ方が微ほほ笑えましい。

「そうなのかなー？」

「おうよ！　バトルもののラノベなんてだいたい怪物と戦ったことある奴やつが書いてるし、ラブコメも作者の体験談だ！　当たり前すぎて、誰だれも公にはしてねえだけさ!!」

「そっかー、やっぱりそうだよねー。マナも初心に返ってみよーっと」

　戦いながら横で聞いていたホワイトは、こんな時に何をアホな冗談を言ってるんだ……と苦笑していたが、続く愛美も何やら心当たりがあるらしいのを見て一瞬真顔になっていた。

「え、私が間違ってます……？」

　と、ほんの一瞬言葉をかけ合っただけの隙すきに、フェニックスとレイアーヴィナスへ四足動物型のエレメゴーストが急襲する。

「はあああああああっ！」

　すかさず二人を庇かばいに入ったのは、アナザーブルーだ。ウェイブメイスでエレメゴーストの腹を突き、そのまま持ち上げて後ろの敵に叩たたきつける。

「細けーやつは任せたぜ、センセ！」

「そう呼ぶならもう少し真ま面じ目めに出席しろ、結いわ翼ばね!!」

　あえてコードネームで呼び合うよう窘たしなめたりすることもなく、自然体な関係で背中を任せ合う「援軍組」の二人。

　どちらからともなく笑い合うと、まずはアナザーブルーが大地を蹴った。

　性転換属性トランスセクシヤルの属性玉エレメーラオーブを使用し、能力の同時使用が可能な属性玉多重変換機構エレメアデイツシヨンを発動する。

「属性玉エレメーラオーブ──母属性マザー、金髪属性ゴールドヘアー」

　高速化を付加する強力な属性玉エレメーラオーブの一つ、母属性マザーを発動。

　疾走の途中でさらに加速し、空気の壁を突き破って衝撃波で雑ざ魚こを蹴散らす。

　そしてそれと同時に使用したのは、大恩ある神しん堂どう家の女性と同じ金髪の属性。

　攻撃に雷を付加する属性玉エレメーラオーブが、アナザーブルーの超重武器に夥おびただしい電撃を絡みつかせる。

「サンダーストライキングウェイブ───!!」

　流れゆく運河のように自由に、そして牙きばを剝むいた激流のように猛たけ々だけしく。

　仲間だけをよけて超高速で蛇行しながら、アナザーブルーの新必

殺技がエレメゴーストを掃滅していった。

　そして運河流るる地上から巨大な炎の塊かたまりが射出され、空に翼を羽ばたかせる。

「俺様も新必殺技でいくぜ！　バーニングフォースフィニッシュフラアアアップ!!」

　テイルフェニックスは必殺技の炎をあえて全身にまとわせ、天高く旋回。

　巨大な炎の不死鳥となって、上空から攻撃を仕掛けてくる飛行型のエレメゴーストを焼き散らしていった。

「あんたの技名は長なっがいのよ、もうちょっとコンパクトにしなさい!!」

　フェニックスに苦言を呈ていしながら、ブルーは悲鳴に反応して背後を振り返る。

　混こん沌とん極まる戦場では、華々しく舞う者だけではなかった。

「あだだっ！　何でみんなそんなポンポコ倒してけるんスか!?　この怪物ども、どいつもこいつもめちゃくちゃ強つぇーんスけど!?」

　魔ま星せい少しよう女じよの中でもまだまだ発展途上のレイアーテラは、一番シンプルな人型のエレメゴースト相手にも手間取っている。

　ポテンシャルの低さを持ち前のガッツで補って少しずつ成長している途中の彼女にとって、この大規模な戦場は少々荷が勝ちすぎていた。

「属性玉エレメーラオーブ──手属性ハンド!!」

　ブルーが駆けつけ、ダーフィニアギルディの属性玉エレメーラオーブを発動。

　拳こぶしを強化し、レイアーテラに群がるエレメゴーストを鉄拳の連撃で爆砕していく。

「大丈夫、レイアーテラ！」

　その鮮やかな瞬殺を目まの当たりにし、レイアーテラはむすっと口を尖とがらせた。

「……悪かったッスね。そうッスよ、私まだまだめっちゃ弱よぇーんス。こういう全員で力を合わせる時は、足を引っ張ることが多くって……」

　ブルーはさらに一体をランスで斬きり伏せた後、苦笑しながら嘆息した。

「今、弱いなら……これから強くなっていけばいいってだけ。そうでしょ？」

「あいかち……」

　ブルーの奮戦を前にしたレイアーテラは、瞳ひとみに闘志の光を煌きらめかせていく。

「完全解放ブレイクレリーズ!!」

「おっし、遥はるかちゃんも〝大魔星術マキシマギアス〟ッス！　合わせようッス、テイルブルー!!」

　そしてそれは、ブルーの必殺技を前に、最高潮に達した。

「「ガイアエクストリームウェイブ!!」」

　レイアーテラは先んじて発射されたエクストリームウェイブに重ねるようにして必殺のガイアブラストを発射。光流をまとった槍やりが、エレメゴーストの陣形に長大な風穴を穿うがつ。

　弧を描いて戻ってきたウェイブランスエクシードを摑つかむと、ブルーはレイアーテラに優しくウインクした。

「大丈夫。好きな人のために頑張ってるなら、絶対に強くなれるわ。あたし……ツインテイルズになる前から、ずっとそうやって強くなってきたから」

「サンキュッス！」

軽やかに踵きびすを返すテイルブルーを、レイアーテラは晴れ晴れとした面おも持もちで見送る。

「ちゃんと話せばめっちゃいい人じゃねーッスか……普段カリカリして見えるのはおっぱいの無さが余裕の無さに繋つながってただけだったんスぎゃあああああああああああッス!!」

突然目の前の地面が破裂し、天高く舞うレイアーテラ。

異世界よりの友人にも容よう赦しゃ無くツッコミという名の衝撃波を叩たたき込み、ブルーは最も敵が集中する激戦区へと身を投じていった。

異世界という、不確かで儚はかない存在。

しかし、だからこそ、決して出会うことのないはずだった世界の力がつながった。

彼女たちは確かに一つとなり──希望の光を以もつて、破滅もたらす憎悪の化身へと立ち向かっている。

そして。もう一つの世界が今、繋がろうとしていた。



◇　★　○●

　俺たちの乗るバイクがようやくブレーキをかけた時、異様な光景が眼前に広がる。

「見えた！　あれが崩壊極点……!!」

　トゥアールが異世界崩壊の中心点と分析した、崩壊極点。

　それは近くに来て見ると、想像以上に巨大な空間の裂さけ目だった。

　剣で袈け裟さ懸がけに斬きり下ろした傷が超巨大化したもの、と表現すればいいだろうか。

「レッドちゃん！　ウチがおらんとブラックちゃんが強化でけへん、先に戻るで!!」

　目的の場所に到達し、周囲に敵影がないと確認したところで、メガ・ネは俺を降ろした。

「ああ、ここまでありがとう!!」

〈……それではな、炎のツインテールの少女……いつか、存分に語り合おう〉

　モケーと鳴くバイクも、妙にいい声で俺に別れを告げて去って行く。あいつ、変身するとあんな声になるのか。昨日きのうからこんな感覚ばかりだけど、どっかで聞いたことあるような……。

　無人のバイクが並んで走っていくのを見送る。サイバーとファンタジーの共演だ。

「そう言えば前に、モケーくんが言ってたわ。ツインテールは仲間と自分の思いの二つを心に込めるものだって。何だかんだ言ってツインテールに縁があるのかもね、私」

　ツインテール属性のことを知っていなければ出てこないような理念だ。

やっぱり、陽ひ奈なたちのモケーは俺のことを知っている……？

というより、俺が考えている以上に、俺のことを知っている者が異世界にはいるのか。

感慨に胸打たれながら、空間の裂け目に突入しようとした、その時。

裂け目から、クッションが破けて中からビーズがこぼれ出てくるかのように、マーブルの不定形物体が溢あふれ出してきた。

それは見る見るうちに人型に固定化され、エレメゴーストの形を取る。

しまった、まさかまだあの穴の中から敵戦力が這はい出てくるとは!!

「くそっ……みんなが身を挺ていして、俺たちをここまで送り出してくれたっていうのに……！」

「当然、守りは固めてるってわけ。しゃーないわね！　総そう二じくん、ここは私が……」

逡しゅん巡じゅんする間も惜しく、レイアーソルが俺を先に行かせると言いかけた瞬間。

「待ってください!!」

快こころよい声が背中にかけられ、俺とレイアーソルは同時に振り向いた。

轟ごう音おんを響かせながら着地するでもなく。

華々しい光をまとって飛来するわけでもなく。

散歩の途中で偶然居合わせたかのような自然さで、二人の男女が俺たちの前に現れる。

まだあどけなさの抜けない、潑はつ刺らつとした黒髪の少年。

思わず息を忘れるほどの美貌をまとった、紺こん碧ぺきの長髪をなびかせる少女。

黒のスーツと白のドレス、対照的な出で立ちの二人が、並び立って足を止める。

それは崩壊する異世界を食い止めるべく遣わされた、最後の救援だった──。

集結章・四　異世界の救世主たちへ。

　少年は無邪気な笑顔を浮かべながら、俺とレイアーソルに近づいてくる。

　この子……どこかで見たことがあると思ったら、以前プロメテウスギルディと戦った後見物に来たように見えた子か。あの時は、いつの間にかいなくなっていたが……。

　すでに一度、俺たちと接触を図ってはいたのか。

「金色こんじきの紅くれない女神か……」

　白いドレスの少女は、俺の全身を値踏みするように見ていく。今日は前に目撃した時よりも、そのドレスの各所が鎧よろいのような派手な見た目に変化していた。

「ああ。装そう甲こうは赤いけど、間違いない！　いつかのあの日に俺が見た、女神さまだ!!」

　随分昔みたいに言ってるけど、それって数か月前のことだよな……。

「……もしかして君も、異世界から来たのか？」

　いささか性急だが、俺のまとう装甲が金色なのが普通だと認識しているのは、ゴールドチェインの戦いを中継された異世界の住人だとしか考えられない。

「そうです！　よかった……！　大事な時に間に合った！」

「仕方ないでしょ？　ちゃんと裏を取ってからじゃないと、迂う闊かつにこの世界の人間とは接触できなかったんだから」

「ならもう関わっていいってことだよな!!」

　少年は少女に確認を取るやスーツの内ポケットから名刺ケースを抜き出し、名刺を俺に渡してきた。

「初めまして！　俺、創そう条じよう照しよう魔まっていいます!!」

『デュアルライブス』──これは会社名か？　それに、アドレスに電話番号……そして大きく、創条照魔という名前が記載されている。

「社長……キミが？」

　レイアーソルは俺の背中越しに名刺の肩書きを覗のぞき込むと、不思議そうに見つめ返す。

「はい、色々兼任した社長です！　えっと……あなたも女神さまの仲間なんですね！」

「女神災害……解決します？」

　名刺を見ていた俺は、さらに気になる言葉に目を留とめた。まるで修理屋の宣伝フレーズだが、裏面にそう書かれている。

　知り合いに女神がいる俺としては、穏やかではない言葉だが……その真意を尋ねる前に、少年はここにきた理由を掻かい摘つまんで説明した。

「実は俺たちも、異世界崩壊の原因を探していて……この世界に辿たどりつきました」

　ということはやはり、この少年たちも別世界の戦士ということか。

「私はエルヴィナ。彼の会社の契約社員とか、色々兼任してるわ。社長くんと同じく、異世界崩壊の原因を滅ぼしにやってきたってとこ」

　少女は態度こそぶっきらぼうだが、特に敵意のようなものは感じられない。それどころか、何となく親近感を抱いだかれているように感じられた。

　色々興味は尽きない二人だが、悠ゆう長ちように話している時間は無い。

〈ツインテールに与くみするならば……もはやツインテール……〉

ツインテールの怨おん念ねん……エレメゴーストたちが、めちゃくちゃな理屈で照しよう魔またちをも標的と定めて迫り始めた。

照魔はそれら怪魔を忌いま忌いしげに睨にらむ。迫り来る脅きよう威いに急せかされながら、これだけは言っておかなければという強い意志を瞳ひとみに宿し、その言葉と同じく真まっ直すぐな眼まな差ざしで俺を見み据すえる。

「あの……テイルレッド先輩！　今のあなたに、どうしても言っておきたくて……」

「…………先輩……俺が……!?」

「そう、君は私の先輩。色んな意味でね」

エルヴィナは俺を指さしながら、照魔の言葉を念押ししてくる。

多分二人ともただ者ではないんだろうけど、武装も装そう甲こうも何一つない、一見普通の男女に先輩と呼ばれるのが、すごく不思議な感じだった。

「俺は、テイルレッド先輩に憧あこがれて……女神に憧れて……恐怖に立ち向かう勇気をもらいました。その時の思いがあるから、今も戦っている。あなたは多くの異世界、多くの人々に勇気を与えてくれた」

俺ははっとして照魔を見返す。

それはまさに自分にできること、自分がやるべきことに迷走し……守るべき対象を異世界にまで拡ひろげなければと重圧を感じていた俺への、一つの答えだったからだ。

名刺のフレーズの意味は聞くまでもない。女神に憧れるというその一点の曇りもない瞳の方が、十分に信用に値するからだ。

「その恩返しに……俺も今日、ここで、戦います!!」

熱く晴れ晴れとした思いが、俺の胸を打つ。

いつか見たヒーローに無む垢くな思いを告げる小さな子供そのままの、真っ直ぐな言葉。

　それはこれから異世界を巡る最後の戦いに向かう俺にとって、何よりも心強い激励だった。

　……この世界だけじゃない。

　俺の……俺たちツインテイルズの戦いが、多くの異世界の人たちに勇気を与えていた。

　そしてその人たちは奮起し、この照魔のように今も戦っている──。

　また、泣いてしまいそうだ。

　俺は、全ての世界に平等に手を差し伸べる聖人にはなれない。

　だけどこのツインテールを見せることで、たくさんの世界を救うことができているんだ。

　俺は照しよう魔まと固い握手を交わすと、彼の心意気に応こたえるべく迷わず踵きびすを返した。

「ありがとう、照魔──ここは任せた!!」

「よろしくね！」

　レイアーソルと一緒に、極彩色の光が覗のぞく異空間の裂さけ目へ向かい一直線に走り出した。

　◇　★　○●

　テイルレッドたちが飛び込んだ極彩色の裂け目の前で、照魔とエルヴィナは後続の全てを食い止めるべく立ち塞ふさがった。

「よし……この中に邪魔者が入っていかないよう、俺たちが食い止めるんだ!!」

　興奮冷めやらぬ照魔とは対照的に、エルヴィナは呆あきれ顔で嘆息する。

「あなた、ちょっと挨あい拶さつに来たらうっかり世界崩壊に巻き込まれそうになっただけのくせに、なに援軍として馳はせ参じましたみたいなこと言ってるのよ」

「いいだろ！　でも、話し合わせてくれてありがとうな!!」

　本当は照魔たちは、異世界の崩壊など全く知らなかった、ただの旅行者にすぎない。

　テイルレッドに会いたくて会いたくて会いたくて会いたくて、ようやく会いに行く方法を突き止めたため会社の経費で出張した、テイルレッド限界オタクの一人だった。

　しかし偶然とはいえ、まだ新米である自分たちでも頭数になれるだけの規模の戦いに遭遇した以上、胸を張って参戦するつもりだ。

「私は戦えるならそれでいいけど……これはどう考えても時間外労働よ。別途報酬は必要だと思うけど？」

「もちろんだ。お前、新型のノイズキャンセリングヘッドホンを欲しがっていただろう。それを特別手当とするっていうことでどうだ」

　小さな社長は胸を叩たたき、自分の会社にサービス残業ははびこらせないと断言する。

「……いいわ。報酬がそれなら、倒す怪人は四〇〇体といったところね……!!」

「交渉成立だ！　テイルレッド先輩を援護するぞ、エルヴィナ!!」

　正当な報酬には、真しん摯しな働きで応えるがマナー。

　希望小売価格四万四〇〇〇円の黒物家電が、美しき少女の双そう眸ぼうを色めかせた。

　並び立つ照魔とエルヴィナの中間に、生命いのちの樹を思わせる形をした光の柱が樹立する。

　それは、女神の武器庫。

　照魔は光の柱に手を差し入れ、中から何かを引き抜くように袈け

袈裟懸がけに振り抜いた。

　その軌跡に追従するように、光が凝縮されて武器の形を取っていく。

「ディーアムド──オーバージェネシス!!」

　照しよう魔まの右手には、彼の小さな身体からだとほぼ同じ長さの白い剣が握られていた。

「ディーアムド、ルシハーデス」

　続いてエルヴィナも両手を光の柱に触れさせ、緩慢な動きで胸の前に両腕をクロスさせる。

　その手には、いつの間にか黒い二に挺ちようの拳けん銃じゆうが握られている。

「穴を守るだけなら、〝ディーギアス〃を使うのが最適だけど……この世界では解放できないわ。少しでも憧あこがれの先輩の役に立ちたければ、こつこつと敵を削っていきなさい!!」

「ああ、お前も頼むぞ、エルヴィナ!!」

　照魔とエルヴィナの右目が、金色の光を宿す。まずは照魔が大剣を苦もなく振りかぶり、目前の敵に斬きり込んだ。

「はあああっ!!」

　一体目を斬り倒した斬ざん撃げきの軌跡の光が、くっきりと残っている。その光はバリアーのように照魔に付き従い、背後からのエレメゴーストの攻撃を易やす々やすと弾はじき返した。

　剣が放つ輝きは、魔ま眩どう光こうと呼ばれる神の権能。

　共有者としての練度レベルが高まるほどに、照魔が創つくり出す魔眩光も高まってゆく。

　神の刃やいばを振るう戦士──創そう条じよう照魔は、小学生である。

　だが、強い。だからこそ、強い。

無限の可能性を秘めた、まぶしく輝く存在……それが小学生だ。

中学生。高校生。そして、大学生……。

昇ってゆく階段を将来さきに見み据すえながら、そのさらに先に存在する社会人みらいをすでに手にした、何事も待ちきれない現代っ子。

会社経営者であり、世界の護まもり手の一人だ。

今日の戦闘は、イレギュラー。彼の会社のプロダクトに記載されることはない。

ただ彼の手にした魔ま創そう剣けん〝オーバージェネシス〟の刃だけが、それを憶おぼえ続けるだろう。

「ふぅっ……!!」

五体ほどエレメゴーストを撃ち散らしたところで、ようやく一呼吸を置くエルヴィナ。

鼓膜の鍛きたえが浅い凡夫ならば、その吐と息いきを耳にしただけで胸の鼓動を停とめるであろう。

艶つやめく唇くちびるから漏もれる吐息は、世界に遍あまねく全てのＡＳＭＲを差し置き、人々の心を惑わす。

紺こん碧ぺきの髪をたなびかせる少女、エルヴィナ。

彼女は正真正銘──現代に生きる女神だ。

正義のために戦うわけでも、愛と希望のために力を振るうわけでもない。自らの欲望と利益のため、同じく支配者の座を狙ねらう天の者たちを迎え撃つ。

女神の有り様を破壊した女神。女神を滅ぼす女神。全てが規格外の存在だった。

吐息の残響もそのままに、爽快な銃撃音が周囲を支配していく。

滅めつ神しん銃じゆう〝ルシハーデス〟──女神が戯たわむれに生成した、容た易やすく破滅を撒まき散らす二に挺ちよう拳けん銃じ

ゆうの放つ光弾が。

「やっぱりテイルレッド先輩はすごかったな！　あれが伝説のツインテールか……!!」

「…………」

　激しい戦いの最中だというのに、「思い出しテイルレッド」でにやける照しよう魔ま。

　エルヴィナはむすっとした表情でルシハーデスを空中に置くと、手の平の上に光を凝縮させて細紐ひもを創つくり出し、それで髪を結わえてしまった。

　始まりの女神をリスペクトするかのような、完かん璧ぺきなるツインテールの完成である。

「どうした？　テイルレッド先輩のマネか？」

　不思議そうに視線を送ってくる照魔に、エルヴィナは不敵な笑みを返す。

「ツインテールの女神の後継者が守護している世界なのよ。ツインテールにするのはドレスコードみたいなものでしょ？」

「そうか！　……俺はどうしよう!!」

「あなたは私と結ばれている。だからツインテールということで問題ないでしょう？」

「よし！　じゃあ俺もツインテール!!」

　エルヴィナは再びルシハーデスを手に取り、トリガーガードに指をかけて軽快に旋回させる。二挺拳銃を構えるのに合わせ、柔らかに揺れるツインテール。

　それは予想外の効果を発揮し、迫り来る怪魔たちの冷静さを失わせる。ツインテールを憎み、ツインテールを畏い怖ふする怨おん念ねんたちの。

「さあ──ツインテール大戦の始まりよ!!」

エルヴィナは高らかに祭りの開幕を宣言し、銃撃を再開した。質量と実態を伴った剣けん閃せん──照魔が振り抜いた剣が、その場に遺のこした光の軌跡に跳弾させて。

一弾目が顔の左半分を砕き、弾はじかれ戻ってきた二発目で右の脇わき腹に大穴が空あく。

超高速のブレイクショットの渦中に晒さらされ、エレメゴーストは瞬またたく間に人のシルエットを失っていく。

エルヴィナは、銃撃で敵を狙ねらい撃つだけでは飽き足らず、悠ゆう然ぜんと歩を進め始めた。

群がる怪魔にただの一いち瞥べつもくれず、零距離おかまいなしに発砲し、あまつさえ銃身で殴なぐりつける。時には、無造作に蹴けりを叩たたき込む。

その麗うるわしき姿からは想像もできない、荒々しい戦いぶりだった。

だがそんなラフファイトを繰り出しながらも、周囲の時間すら凍り付かせるほどの高潔な美はますます輝きを増していく。

エレメゴーストが集結し、巨大な剣の形に合体。照魔の頭上へと降り注いだ。

「パズルのように自分たちを自在に組み替えられるのか……だけど！」

照魔の剣が形を変える。テイルレッドのブレイザーブレイドが完全解放ブレイクレリーズによって必殺の姿を取るように、彼の剣は持ち主の成長に合わせて限りなく進化していく特性を備えている。

聖剣めいた厳おごそかな刀剣が展開し、中の光り輝く回路のような模様が剝むき出しとなった時。

エレメゴーストが形作った巨大剣は、刀身も柄つかも全てが微み塵じんに斬ざん裂れつされていた。

剝き身となった光の刃やいばの只ただ中なかに持ち手がついたようなその見た目は、大剣であり、騎き上じよう槍そうであり、盾たての面影すら感じさせる。

「パズルは脆もろく壊れやすい。崩すのは簡単たやすい──」

　それを見届けたエルヴィナが、照しよう魔まの言葉を引き継ぐ形で言い捨て、不敵に微ほほ笑えむ。

　次々に仲間が滅ぼされていく中、エレメゴーストの一体は恐竜のような長大な体たい軀くのモンスターへと変化。眼下の二人を、威圧するように咆ほう哮こうした。

〈そこをどけ……我われらが目指すは、新たなる創造主。全ての異世界を統一する神の座が、その先に待っている……!!〉

　大気震ふるわせる咆哮にも威い嚇かくにもまるでひるまず、少年は空高く己が信念を響きわたらせた。

「それは叶かなわない。次の女神は──俺たちだ!!」

　剣けん閃せんと銃撃の二重奏が、すぐそこまで迫る終末を食い止め、押し流していく。

　無限の可能性を胸に羽ばたく小学生・創そう条じよう照魔。

　完全無欠の絶対存在として舞う女神・エルヴィナ。

　総そう二じたちがツインテールを結び力とするように、照魔とエルヴィナの二人もあるものを結び、大いなる力とした存在。

　あらゆるものが対極の二人ながら、すでに比ひ翼よく連れん理りの相棒バデイ。

　世界の危機を就業時間内に駆逐する、コンプライアンス遵じゆん守しゆの企業人ビジネスマン。

　神の戯たわむれが人の世界を脅おびやかす時代、人神じんしん二勢力の力を以もつてそれに挑む者たち。

　人々は誰だれからともなく、彼らをこう呼んだ。

　デュアルライブス――と。

　　◇　★

　俺とレイアーソルは、異空間の裂さけ目へと突入した。

　その先に待っていたのは、極彩色に輝く広大な空間。

　無数の異世界の狭はざ間ま──未知なる異次元が、決戦の地となった。

　文明や生活様式、闊かつ歩ぽする動物──俺たちの住むこの世界とは違う別の地球が、周囲にうっすらと浮かんでは消えていく。

　あれが、融合を果たそうとしている異世界か。

「ね、総そう二じくん。あれ、知り合い？」

　レイアーソルが指差した先には、金と銀、二体のプロメテウスギルディが浮かんでいた。

　しかしその目にはもはや生気は無く、天井すらないこの空間で吊つり糸に吊られているかのように、宙に四し肢しを投げ出している。

「……ああ。仲間と一緒に二体合わせて何度もブッ倒した。あれは、もう……」

　トゥアールの言っていたとおり、プロメテウスギルディはすでにエレメリアンという精神生命体から、全く別の存在にシフトしてしまっているのだろう。

　今目の前に浮かんでいるのは、異世界に堆たい積せきしたエレメリアンたちの怨おん念ねん、その集合体。駆動する憎悪というべき異形中の異形だ。

　俺たちが近付いたのがトリガーとなったかのように、二体のプロメテウスギルディは静かに重なり合う。その輪郭を、見上げてもな

お足りないほど巨大に変貌させていった。

　敗北を繰り返し、あの姿のままでは勝てないと、本能で悟ったのだろう。

　やがて出現したのは、巨大な箱から上半身を飛び出させ、四本の巨大な腕を触手のように伸ばした怪物だった。

〈吾われの名は、パンドラギルディ……〉

　あらゆる絶望を解き放ったパンドラの箱の名をその身に冠し、属性海賊エレメパイレーツの長おさは異次元の荒波に浮かぶ。

〈全てのツインテールを消し去り……全ての異世界を消し去る事象〉

「存在とかじゃなくて、事象ときたか」

「こじらせてるわね～……」

　そう。こいつは、こじらせすぎたんだ。

　始まりは些さ細さいな「ソリが合わない」だった。

　ツインテールって、そんなにいいもんか？

　誰だれでも持ちえる可能性のある、微々たる反感だった。

　鬱うつ屈くつは堆積し憎悪に変わり、ツインテールを消し去ることを使命として暴走を始めた。

　そしてついにこいつは、全ての人間の「自分だけの大好き」を消すため、異世界そのものを消し去ろうというところまで来てしまった。

　今や積み重なった憎悪の依より代しろに過ぎないとはいえ、たった一体の雑兵エレメリアンから始まった、悲しいまでに壮大な負のサクセス・ストーリー。その主役が──こいつだ。

「もう、いいだろう……終止符を打とうぜ」

　ツインテールをたなびかせ、俺とレイアーソルは疾走する。

パンドラギルディは、四本の長腕をさらに伸ばして発射してきた。

回避しても、伸縮を繰り返しながら振り回し、執しつ拗ように俺たちを狙ねらう。

自分の腕は四本ある。だから、二対つい四房ふさのツインテールを余さずむしり取ることができる。

そんな屈折した憎悪に満ちた連撃は、慟どう哭こくのような唸うなりを大気に響かせる。

さらには左右の肩に残っていたフックを射出。それは追尾弾のように迫ってくる。

フォーラーチェインにチェンジして高速で翻ほん弄ろうしても、ライザーチェインに変わって斬きりつけても、ビクともしない。

あいつの憎悪には、生半可なツインテールでは太た刀ち打ちできない。

「ツインテイルオン!!」

俺はアルティメットチェインへと最強変身チエインエヴオルブし、テイルレガリアを旋回させて奴やつの金銀二色のフックを弾はじき飛ばした。

究極双房剣テイルカリバーを装備し、伸びてきた腕を斬りつける。

「めっちゃ色々変われるじゃん!!」

徒と手しゆ空くう拳けんで奮闘していたレイアーソルが、俺の目まぐるしい様変わりに驚きの声を上げる。

「まずいわね……遥はるかが戦ってるからレイアーテラの魔星紙片スターピース借りられないし……」

「借りる？　変身するためのカードだろ？」

「私、全力出すためにはもう一枚変身魔星紙片トランススターピースが必要なの」

　俺だったら、ブルーかイエローからブレスを借りなきゃ強化できないみたいなことか。

　それはなかなか、使いどころを選ぶパワーアップだな。

「完全解放ブレイクレリーズ！　テイルカリバー超越究極装塡ハイパーアルテイメツトモード!!」

　時間をかけるだけこちらが不利になる。俺はテイルカリバーを完全解放ブレイクレリーズし、最強の技を発動させるべくツインテールを集中した。

「ゴッドブレイザ―――――ッ!!」

　虹にじ色の輝きをまとわせた黄金の波光が、パンドラギルディを呑のみ込む。

　光の中で、確かに一度シルエットが崩れていくのを見たが……パンドラギルディは、何食わぬ顔で健在な姿を俺たちに見せつけてきた。

「私もさっきから何箇所か破壊してるんだけど、すぐに再生しちゃうのよね……」

　さすがは俺たちと同じく一年間戦い抜いた戦士。レイアーソルは、冷静に敵の特性を見極めていた。

「あいつは元々怨おん念ねんの集合体。一体ずつの時は、同時に吹き飛ばせば何とかなったけど、それも今となっては……」

「まずいまずい……何か、完全に消滅させられるような方法はないわけっ!?」

　核を探して潰つぶすなんていう方法も無理だろうな。でなければゴッドブレイザーでカタはついている。

　奴は、異世界が存在する限り、そこから怨念をかき集めていくらでも再生する。

　背後から激しい重圧を感じ、俺とレイアーソルは同時に振り返った。

「……空間の裂さけ目が、さらに拡ひろがっている……！　あれ以上大きくなったら、俺たちの世界をこの異空間が侵食してしまうぞ!!」

　背後に気を取られた一瞬。パンドラギルディは四本の腕を発射口のように融合させ、こちらにとてつもない大きさの光線を放ってきた。

「うっ……ぐあああああああああっ!!」

「あああああああああっ!!」

　テイルギアと星衣類スタイルが、激しくスパークする。全力を出せないレイアーソルをかばって瞬間的に前に出たつもりだったが、それでも彼女のダメージは甚大だ。

「ツインテールへの憎しみを消滅させるには、さらなるツインテールの輝きが必要だ！　君もそのツインテールをもっと輝かせてくれ、レイアーソル!!」

「できるわけないでしょ何腹筋に力入れろぐらいのノリで言ってくれてんの!?」

　パニックになったレイアーソルは自分のツインテールを摑つかみ、可か愛わいらしく上下させる。いや、それでいいぞ……その調子だ!!

「あいつにはツインテールが特攻なのはわかったけど、私ツインテールとか意識して使ったことないから！　何とかツインテールの使い方教えて、テイルレッド!!」

「わかった……長くなるぞ」

「短く!!」

　今度は数に恃たのみを置いた無数の光弾が飛来し、俺たちは回避と武装による迎げい撃げきを織り交ぜながら、何とか死戦をかい潜くぐる。

〈終わりだ……終わるのだ、ツインテールという遺い物ぶつたち……〉

攻めあぐねている俺を見かねるように、テイルカリバーが発光。

テイルレガリアが分離し、光輝くツインテールの形を取った。

「────観み束つか総そう二じよ」

「！　お前は……」

懐なつかしい声に、思わず俺の口くち許もとがほころぶ。

「そう……私は、お前のツインテールだ」

「久しぶりだな、俺のツインテール!!」

その神こう々ごうしさを前に、パンドラギルディさえも腕を振り上げたまま固まってしまう。

「嘘うそ、何これすごい！　なんかわかんないけどツインテールとしか呼べないわ、これ!!」

まして未知を愛するレイアーソルは、死闘の只ただ中なかにあって子供のように目を輝かせ、食い入るようにツインテールを見ている。

〈不可解な……なぜ身体からだの裡うちからツインテールを出す……お前は引き続きツインテールだというのに……!!〉

「当然だ！　身体からだのツインテールと心のツインテール、俺はそのどちらもが熱く燃え盛っているからな!!」

俺のツインテールは厳おごそかな声こわ音ねを極彩色の空に響かせ、俺を鼓こ舞ぶする。

「観み束つか総そう二じよ、お前は全てのツインテールを結び、アルティメギル首領を倒した……。だが忘れてはならない。ツインテールとは結ぶもの……無限に力を束ね結ぶこともできれば、二人並んで力を合わせることもできる」

ツインテールの助言を受け、俺は力強く頷うなずく。レイアーソ

ルは多分あまりわかっていない感じだったが、雰囲気で何度も首を縦に振っていた。

〈恐ろしい……ツインテールはこれほどまでに奇怪な進化を遂げていたのか……〉

　パンドラギルディは一瞬感じたであろう畏おそれすらも怒りに転化し、力を増大させていく。

〈やはり世界は一つにまとまらなければならない……ツインテールは消え去らなければならない……!!〉

「はっ!?　馬ば鹿かじゃないあんた、こんな面白くて素敵な未知セカイ、たくさんあった方がわくわくするに決まってるじゃない!!」

　ツインテールの言葉はまだよくわからなくても、それを許容し、自らの胸のときめきに変える度量がある。

　レイアーソルは、果てなき憎悪の集積を己の信念を込めて切って捨てた。

「異世界を救うため……互いの力を結ぶのだ、ツインテールたちよ!!」

「ああ！」

「うん!!」

　俺のツインテールの左右の毛先から光が飛び出し、俺とレイアーソルそれぞれの手に降り注ぐ。

「とっておきの魔法をかけてあげるわ、テイルレッド!!」

「なら俺は、とっておきのツインテールを貸すぜ!!」

　創世の世界を凝縮したようにカタチを探す光へとそれぞれの力を注ぎ込み、俺たちはその光を互いに手渡した。

　光は実体を定め、レイアーソルには、ホログラフ状に輝く魔星紙片スターピースが。

「おぉ～、テイルレッドの変身魔星紙片トランススターピースだ

ね！」

　俺の手には、フリル状に輪郭を変えたプログレスバレッターが握られていた。

「……コスモバレッター!!」

　背後では、さらに空間の裂さけ目が巨大化。

　そしてパンドラギルディは、先ほどの極大光線の充じゆう塡てんに入った。

　レイアーソルはコスモチェンジャーを手にすると、あえてもう一度、太陽の変身魔星紙片トランススターピースを差し込む。

　《 Ａｌｌオール Ｓｅｔセツト ， Ｓｏｌソル Ｓｔｙｌｅスタイル．》

　そして挿入口の裏側に、テイルレッドの顔が描かれた変身魔星紙片トランススターピースを装そう塡てんした。

　《 Ｅｃｌｉｐｓｅエクリプス Ｕｐアツプ ， ＴｗｉｎＴａｉｌツインテール Ｓｔｙｌｅスタイル．》

「へー、普通は登録されてない音声はエラーになるのに！　これもこの世界にいる効果かな？」

　……あるいは……その電子音声は、すでにあったのかもしれない。

　いつかツインテールと力を合わせることが、星の魔法で運命づけられていたから。

《Ｓｔａｒｔｉ，ｎスターティン Ｓｔａｒスター Ｅｖｏｌｕｔｉｏｎエヴオリユーシヨン．》

「スターエヴォリューション!!」

レイアーソルが叫ぶと同時、彼女の全身を紅あかき炎が逆巻いていく。

続く俺がコスモバレッターをフォースリヴォンに装着すると、テイルギアが未知の力に脈動し始めた。

「コスモテイルオン!!」

ツインテールに、星の力が流れ込んでくるのを感じる。

しかし、その輝きの根底は同じ。人間の持つ、心の力だ。

君たちの力……確かに受け取った、魔ま星せい少しよう女じよ!!

放たれたパンドラギルディの光線が、俺たち二人のまとった輝きに押し返され、霧む散さんする。

レイアーソルは、テイルレッドのテイルギアのアンダースーツや装そう甲こうの彩いろどりを取り込んだ、真新しい星衣類スタイルをまとい。しかも、ツインテールが伸びている。

俺のテイルギアは、太陽の光を凝縮したような山吹色が眩まばゆい、一風変わった形の装甲へと変化していた。……全身露出面積が、強化前のレイアーソルと同じになっている……！

「レイアーソル・テイルエクリプス……!!」

「テイルレッド・コスモチェイン!!」

二世界を背負って立つ、二人のツインテールが名乗り上げる。

「わー、似合う似合う!!」

俺の姿を見て、レイアーソルがはしゃいだ声を上げる。

「そ、そうか……？　ちょっと露出度上がってるし、女の子女の子

し過ぎな感じが……」

　腰の装甲がスカートみたいな形に変わっている気がするんだけど、気のせいかな……。

「女の子女の子してるんじゃなくて、魔法少女してるの！」

　ほんの一瞬、俺たちが互いの姿を確認し合っている間に、パンドラギルディは周囲に雷を撒まき散らしながらボルテージを上げていった。

〈無駄だ……どれだけツインテールを高めても、吾われの憎しみには及ばぬ!!〉

「はいはい、わかったわかった。悪党ザコの決まり文句ね」

　レイアーソルは涼しい顔で受け流すと、星の欠片かけらを振りまきながら飛ひ翔しようした。

「いくらでも愚ぐ痴ちブチまけりゃいいさ……けどな。お前が何万何億のエレメリアンの怨おん念ねんの集合体だろうと……どれだけ無数の恨みを集合あつめようとも!!」

　そして俺は、眼前に迫っていた巨大な拳こぶしを、鉄拳一つで真っ向から粉砕する。

「俺がツインテールを好きな気持ちの方が、ずっと強い!!」

　レイアーソルは今まで溜たまっていた鬱うつ憤ぷんを晴らすかのように、制動すら面倒だと言わんばかりの無茶苦茶な動きで飛び回る。

「おーっし！　やれるやれる——っ！　全力で焼き尽くしてやるわ、このオバケタコ!!」

　彼女が拳を振るう度たびに大気が燃え盛り、蹴けりを繰り出す度に大地が炎上する。

　レイアーソルは、あたかも「そうだ、あれも使わなきゃ」と思い出したかのように、強化された武装・テイルプロミネンスタッフを装備。めちゃくちゃに振り回し、パンドラギルディの全身に販促という名の星とツインテールの斬ざん痕こんを刻んでいく。



　続けてテイルプロミネンスタッフを、昨日きのうおもちゃで見せたようにアタッチメントモードに変形。脚部に装着し、炎の連蹴げりを叩たたき込んでいった。

　そのことごとくが、インパクトの瞬間にツインテール型の衝撃波を描いている。パンドラギルディにもっともダメージを与える打撃だ。

　これこそが原初の力。全ての惑星、全ての生命いのちは火から生まれ出でたという現実。

　それは施ほどこしの火の神という名の神話、幻想を完かん膚ぷ無きまでに粉砕してゆく。

　あやうく彼女のツインテールに見とれて放心しそうになった俺だが、次は自分のツインテールの輝きを見せる番だと、周囲の炎を突っ切って飛ひ翔しようした。

　手にするは刀身に星の輝きを宿した剣、コスモブレイザーブレイド。

　これまでの戦いで培つちかってきたツインテールの剣けん閃せんの集大成を、パンドラギルディへと余さず叩き込む。

　俺とレイアーソルは、左右から攻撃を放ちながら、それぞれ手にした剣とステッキをパスし合って交換。俺はステッキで打撃を繰り出し、ソルは剣で斬きり付けていく。

〈ツ、ツインテールを……交換するのか……！　何と楽しげな……許しがたい……!!〉

　パンドラギルディは予測不能な攻撃に対処できていない。今が攻め時だ！

　俺の左腕の属性玉変換機構エレメリーションはこの変身によってオミットされているようだが、代わりに両腕の装そう甲こうに等しく搭載された宝玉から光が飛び出し、俺たちを見守っていた俺のツインテールへと向かっていった。

「観み束つか総そう二じよ」「観束総二よ」「観束総二よ」「観束総二よ」「観束総二よ」「観束総二よ」

光り輝くツインテールが、高速で反復横跳びをするかのように横並びに分身。縦横無尽に飛翔を始めた。

〈何っ……テイルレッドのツインテールが……どんどん増えていく!!〉

「これが……ツインテールの魔法か!!」

もはやテイルレガリアに変身するまでもなく、俺のツインテールはそのまま猛然と滑空。

あるツインテールはツインテールそのもので斬りつけ、またあるツインテールはツインテールの毛先からビームを発射。パンドラギルディを追いつめていく。

ツインテールとともに戦うという俺の信念を、魔法の力を借りて実現した光景があれなんだな……!!

「いいツインテールだ、レイアーソル!!」

「君もね、テイルレッド！　ずいぶんはちゃめちゃだけど!!」

これでいいんだ。ただ圧倒的に強大な力でねじ伏せても、怨おん念ねんの集合体であるこいつには効果がない。

ツインテールはこんなにも楽しいのだと。

ツインテールはこんなにも自由なのだと。

憎しみや怒りすら忘れ去るほどのツインテールを見せつけ、歪ゆがんだツインテールへの想いを消し去る。それが、異世界の悪意を打倒するために必要なことだったんだ。

〈ぐわあああっ……や、やめろ……どこを見てもツインテールすぎる……ぬおおおおおお!!〉

ツインテールが乱舞するこの空間は、パンドラギルディにとって

四し面めん楚そ歌か。

　腕を振り回し、フックを飛ばし、光線を放ち──自分自身さえも否定するような猛烈な反撃が、俺たちの攻撃ツインテールと激突する。

　攻撃を終えた俺のツインテールが俺の中に戻った時。パンドラギルディは、受けたダメージをも憎しみに変えて全身から凄すさまじいまでの力を放ち始めた。

〈憎い……憎い！　楽しげなツインテールが！　ツインテールを生み出す世界が！　ツインテールであろうとする異世界が!!〉

　パンドラギルディは咆ほう哮こうし、全身から散弾銃のように無数の光弾を撃ち放ってくる。

　照準すら定めない無軌道な爆撃は、あらゆる異世界を消し去りたいというこいつの癇かん癪しやくそのままの暴風だった。

〈この憎悪は、全てのツインテールを消し去る!!〉

「お前が果てしなくツインテールを否定し続けるというなら……俺は、どこまでもツインテールであり続けるだけだ!!」

　周囲の全てが禍まが々まがしい爆炎に覆おおわれる中、俺とレイアーソルのツインテールはその全てを凌りよう駕がする灼しやく熱ねつを宿した。

「決めるわよ、テイルレッド！」

「ああ……俺たちのツインテールで!!」

　レイアーソルは、コスモチェンジャーに〝大魔星術マキシマギアス〟の魔星紙片スターピースを装そう塡てん。

　《Ｅｘｔｅｎｓｉｏｎエクステンシヨン，Ｍａｘｉｍａｇｉａｓマキシマギアス．》

テイルプロミネンスタッフの太陽の光波剣を巨大化させ、天高く屹きつ立りつさせた。

「完全解放ブレイクレリーズ!!」

そして俺も、コスモブレイザーブレイドを完全解放ブレイクレリーズ。熱く燃え盛る炎の大剣を、果てしなき極彩色の空に掲げる。

やがてツインテールの炎は限界まで凝縮され、パンドラギルディの真上……異空間の空に、小型の太陽を創つくり上げた。

〈ぐ、おおおおおおおお……太陽……ツインテールの……太陽だとおおおおおおお!!〉

太陽という名の原初のオーラピラーが、パンドラギルディをその果てなき憎悪もろとも拘束バインドした。

〈吾われはツインテールに呪のろわれた全てのエレメリアンの怨おん念ねん……！　ツインテールには、いつか必ず終わりが来る……！　吾はいつの日か必ず蘇よみがえり、異世界を……閉ざす……!!〉

すでに滅びを悟りながらも、最後の最期まで抵抗し、呪じゆ詛そを撒まき散らす悪念。

だったらその叫びに、俺が返す言葉は一つだけだ。

「終わりなんてない。俺たちのツインテールは――無限だ!!」

ツインテイルズ、魔ま星せい少しよう女じよ、女神の戦士……それだけではない。

全ての異世界の人々の心の輝きが……お前という終しゆう焉えんを許しはしない。

俺とレイアーソルは星と炎の輝きを螺ら旋せんにまといながら飛ひ翔しようし、同時に剣を振りかぶる。

八の字に振り下ろされた二人の炎えん刃じんが、人の心を狙ねらう怪魔にツインテールの斬ざん痕こんを刻む────!!

「「コスモブレイザ──────────────────────ッ

！！！

」」

全てを呑のみ込もうと肥大化した悪意を、ツインテールが剿そう滅めつする。

怨念という概念そのものをもとろも呑み込み、消し去る創世のツインテール。

パンドラギルディの全身に、夥おびただしいまでの亀き裂れつが走っていく。

〈ぐうううううあああああああ……！　消える……この吾が……うおおおおおお!!〉

お前は自らを事象だと断じた。生物ですらない、ツインテールへの憎しみという概念そのものだと。ならば、それを遥はるか上回る巨大なツインテールの輝きを前に、己を確立でき続けるはずがない。

異世界はツインテールへの想いで満たされ、歪ゆがんだ憎しみの在あるべき隙すき間まなどありはしないのだから。

俺たちの思いを受け止め、少しはツインテールへの価値観が変わることを望んでいたが──あくまでそのまま消えてゆくのかと、俺が悲嘆を噛かみしめた、その時。

〈───ツインテールって、面白おもしれぇんだな……〉

「！　プロメテウスギルディ!!」

消えゆくパンドラギルディの身体からだから、プロメテウスギルディの顔が浮かび上がった。

それはほんの一瞬だったが……まさしく憑つき物が落ちたかのように、穏やかに微ほほ笑えんでいたような気がした。

パンドラギルディは爆発さえ起こさず、文字通り原子の一ひと欠片かけらすら遺のこさずに消滅した。

「浄化完了────」

レイアーソルはステッキで空を切り、星の守護者の矜きよう恃じを極彩色の空間に響かせる。

「ツインテール……!!」

とりあえず、俺も決め台詞ぜりふのように言っておいた。

◇　★　○●

「やりましたね、テイルレッド先輩!!」

黒いスーツの少年と白いドレスの少女は、閉じ始めた異空間の裂さけ目と、その中から飛び出してきた二つの光を見届けた。

二人の手にはすでに武器はなく、周囲にも怪魔は存在の残ざん滓しさえ遺のこされてはいない。

「ツインテールへの怨おん念ねんを利用して無数の異世界を崩壊させる……とんでもない事件もあったものね。まあ、そこそこ楽しめたわ」

「ああ。異世界を救う手助けができた……俺たちにとっては、得難がたい経験だろ!!」

照しよう魔またちは離れた高台に並び立ち、眼下で自分たちを探すように留とどまり、やがて姿を見つけられず去って行くテイルレッドを見届けて、深く頷うなずいた。

これでいい。今回の邂かい逅こうは泡沫うたかたの夢。今はまだ、積極的に関わりを持つべきではないのだ。

　しかしそれはそれとして、憧あこがれる気持ちは止めることはできない。

「テイルレッド先輩、素敵だったなぁ～」

「…………」

　エルヴィナは無言で横っ飛びし、照魔の肩を腕で小突いた。

「何だよ」

　離れて助走距離を設け、さらに勢いを増してもう一度小突いた。

「何だよっ!?」

　エルヴィナはツインテールを解ほどき、髪を掻かき上げてこの世界の風を馴な染じませた。

　ドレスコードの解除。舞踏会場から帰ることを、パートナーに示すように。

「そんなにテイルレッド〝センパイ〟に憧れるなら……もっと強くなることね。そうすればいつか、肩を並べて戦える日が来るかもしれないわよ？」

「……望むところだ!!」

　屈くつ託たくのない笑顔で宣言する照魔に、エルヴィナは不意に冷ややかな眼まな差ざしを送る。

「──ああいうキラキラな共闘なかよしに憧れるのもいいけど……染まらないでね、照魔。私はあなたを利用しているだけなのだから」

「当然だ。俺とお前は敵同士……テイルレッド先輩たちのような清らかな友情で結ばれた仲間じゃない。打算と利害でしか繫つながれない、脆もろい関係だ」

　照魔は、競うように冷たく目を細めた。

「そう、それでいいわ。早くあなたを──して、自由にならないとね……」

　さらなる酷こく薄はくな微ほほ笑えみを返すエルヴィナ。その言

葉の一ひと欠片かけらを、風がさらっていく。

「それはそれとしてお腹なか空いた。帰る前にパンケーキでも食べていこうか、エルヴィナ」

「女子か。戦いの後は肉よ肉。たくさん肉食べて、早く私に身長追いつきなさい」

　肩と腕が触れるか触れないかの距離で並び、二人はいずこかへと歩き去っていった。

　異なる世界を舞台にした、新たな戦いは……すでに始まっている。

◇　★

　激闘の痕を物語る、見渡す限りクレーターだらけになった荒れ地で。

　俺たちツインテイルズと、魔ま星せい少しよう女じよリフレイアは全員変身解除し、互いの健闘を讃たたえ合っていた。安全が確保されたので、ウマちゃんもやって来ている。

　本当は照しよう魔またちもこの場にいてくれたらよかったのだが、俺たちが先ほど彼らと逢あった場所へ戻ると、すでにどこかへ行ってしまっていたようなのだ。

「やったッスね！　さすが先輩は無敵ッス!!」

　遥はるかは陽ひ奈なに抱きついて喜びを表現するが、陽奈は胸を押しつけるなとばかりに引き剝はがそうとしている。

「そんなことないわ、総そう二じくんめっちゃ強かったわよ。強いし、何かツインテールだし……」

　俺にとっては、強いというよりツインテールという方が褒ほめ言葉だ。

異世界からの来訪者。出で逢あったばかりの時はツインテールは別にいらないと言っていたこの子が、ツインテールの可能性を感じてくれた。それは、この異世界交流での一番の収穫ではないだろうか。

「はいはーいせっかくの異世界交流です、みんなで記念撮影しましょう！　陽奈さんたちも一緒に!!」

　トゥアールは自分のトゥアルフォンを空中に飛ばし、離れた場所に固定する。

　いつの間にあんなドローンみたいな機能を追加したんだろうか……。

　俺たちは背の順と陣営とで二列に並び、準備を整えた。

　魔星少女陣営のＵＭＡウーマも、彼女たちの後ろに立ったり浮かんだりして楽しそうにしている。

「ささ、合図をお願いします、総二様!!」

「わかった……。──ツインテール!!」

　目を瞑つむったりとミスがないようにしばらく連写をした後、トゥアルフォンはトゥアールの手に戻った。

「多分合図はそれれだろうと思って、すぐ合わせられるあたしたちもあたしたちよね……」

「観み束つか君の挨あい拶さつは基本、全てツインテールですわ」

　苦笑する愛あい香かと慧え理り那な。頼もしい仲間たちだ……。こんなにも心が通じ合っている。

「それじゃあ早速この写真を公式アカウントにアップして、世界の皆さんに勝利をお伝えしなきゃですね!!」

　うきうきでトゥアルフォンを空にかざすトゥアール。

「僕は特別編の編集素材のチェックだ!!」

　ウマちゃんは今回の戦いの様子を本気で放送するつもりのよう

だ。

　異世界でヒーロー番組デビューか、俺たち……。完パケ見せてもらえないかな。

「ようし、それでは基地に帰って祝勝会じゃ!!」

　イースナの提案に、皆はわっと沸き立った。

　アルティメギルとの最終決戦では俺たちのほとんどが満まん身しん創そう痍いだったため、勝利を祝うどころではなかった。

　今度こそ仲間たちと一緒に、世界を守り抜いた喜びを分かち合える。

　そう思っていたのも、束つかの間ま。

　別れの時は――唐突に訪れた。

「……あ……」

　陽ひ奈ながまず声を上げ、自分の手を見つめる。

　輪郭が薄れ、光の粒子と混ざり合うように、全身が発光する。

　既視感がある。女神ソーラが俺たちとしばしの別れを告げた時のように、この世界から別の場所への帰還を示す現象だった。

「お別れみたい」

　覚悟をしていたのだろう、陽奈は落ち着いている。

　すでに、ガッタくんなどＵＭＡウーマの姿はない。先んじて自分たちの世界に帰還したようだ。

「……そうか。異世界の境界が綻ほころぶ原因が排除された以上、異世界同士の干渉も消える。この世界では異物の僕たちは、あるべき場所に還かえるということだね」

　同じく輪郭が薄れ始めたウマちゃんは冷静に、そして寂しそうに、現状を分析した。

慧え理り那なは皇み月つきに駆け寄り、消えかけている彼女の両手を握る。

「そんな……もっともっと、おもちゃのお話をしたかったですわ……他の皆さんとも、まだまだ話したいこと、たくさんありますのに……!!」

「慧理那さん。この奇跡のような出で逢あいに、私は本当に感謝しています。また、私の動画が混線したら……観てくださいね。私も慧理那さんに届くように祈りながら、動画を撮ります」

「はい！　絶対観ますわ!!」

皇月は俺たちにお辞じ儀ぎをすると、微ほほ笑えみながら消えていった。

「みんな、マナがデビューしたらよろしくねー！」

「ああ。お前さんの小説、けっこう面白かったぜ！　ありゃあ、刺さる奴やつには刺さる！　何度落選しても、ヘコたれねーで応募してみな!!」

「うんっ！　マナの小説褒ほめてくれたの、ひなたん以外じゃゆのゆのが初めてだー!!」

「へへッ、異世界のファン一号様だ！　デビューしたら教えな、書店に行くからよお!!」

唯ゆ乃のの心強い激励を受け、愛まな美みも皇み月つきに続く。

「………………みんな、ありがとう。ところでツインテイルズのおもちゃの版権なんだけ」

めっちゃ溜ためて言おうとしたのが災いし、言葉半ばでウマちゃんは消えてしまった。

「元々雪山で遭難してこうなっただけッスからね。帰ったら晴れてることを祈るッス」

寂しさを隠すように大おお仰ぎように伸びをしながら、転移の瞬間を待つ遥はるか。

　しんみりせずに帰りたかったのだろうが、思った以上に消えるまで時間があった。観念したように吐気を落とし、不思議なほど穏やかな笑顔で俺に振り返った。

「サンキュッス、そうっち。たった一日だけだったけど、めっちゃ楽しかったッスよ」

「ああ。ありがとうな！」

　遥は最後の最後で俺も親愛の渾あだ名なで呼んでくれた。そして、フンッとそっぽを向く。

　面白い子だよな。もっと時間があれば、愛あい香かたちみんなとさらに仲良くなれただろうに……。

「……遥、やっぱり真っ先に男の子に堕おちて……」

「あり得ね――――――ッス私は未み来らい永えい劫ごう先輩ひとす」

　陽ひ奈なに縋すがり付こうとする途中で消える遥。彼女らしい、慌あわただしくて愉快な別れだ。

　皇月と愛美が消え、ウマちゃんが消え。そして、遥も消え。

　俺たちは、最後に残った陽奈を固かた唾ずを呑のんで見守る。

「私たちの世界も、色々問題が残ってるからさ。これからちょっと大変なことになりそうなんだけど……」

　自身に集まる視線をむず痒そうに笑いながら、陽奈は俺たち全員を見つめ返していく。

「しっかり解決して、次はちゃんとゆっくり遊べる時に遊びに来るわ！」

　ようやく異世界の存在を知った彼女たち。それはあるいは、本来は交わるはずのなかった世界同士なのかもしれない。

　けれど、心の力を魔法と操る彼女たちならば……いつかきっと、再び逢あえる。

そして本当の最後に、愛香に近づいて何かを耳打ちしたようだ。

「愛香。この次は……お互い、好きな人とどのぐらい進んだか話し合えたら、素敵だね」

「そうね。せいぜいびっくりされるぐらい仲を深めておくわ」

大きく手を振りながら、陽奈もまた自分の世界へと還かえっていった。

「それじゃ……またね!!」

彼女の守護星、太陽のように眩まぶしい笑顔を浮かべながら。

多くの仲間を集めてきた俺たちは、別れという人間にとって身近なはずの寂しさが、逆に未知の体験のようにさえ感じられた。

完全に光が消え去ったのを確認すると、トゥアールは寂しそうに項うな垂だれた。

「……やはりあの方たちは、正規の方法で異世界を超えてきたわけではなさそうです。つらい話ですけど……元の世界に帰れば、私たちのことを忘れてしまうでしょう……」

そう言って、先ほど撮った写真を見せてきた。

左側にスペースの空あきができてしまっている。魔ま星せい少しよう女じよの姿が、忽こつ然ぜんと消えたからだ。

これが……トゥアールが懸念していた、異世界の修正力っていうやつか。

だけど俺は、前向きに考えることにした。

「俺は陽ひ奈なたちも案外、ちょっとは憶おぼえてくれているんじゃないかって思うよ。少なくても、俺たちはみんな記憶しているんだから」

そして記憶の欠片かけらが少しずつ膨ふくらんで、いつかまた俺たちを思い出してくれるさ。

ほんの少しの好きが大きくなって、ものすごい力になるように。

楽しかった思い出を積み重ねた方が強いって、俺たちは証明したんだからな。

ありがとう、魔星少女。照しよう魔またちも……いつか、また逢あおう。

こうして俺たちの、ひと夏の激闘は幕を下ろした。

他の異世界にも、頼もしい戦士たちがたくさんいる。

その素晴らしい事実を、強く俺のツインテールに抱き締めながら。

ネバーエピローグ　これからも、ツインテール。

　昨日きのうまでと何の変わりもない、いつもの登校風景。

　大きな戦いが終わる度たびに、この光景が大切なものなのだと実感する。

　俺と愛あい香か、トゥアールは通学路を歩みながら、再び訪れた平和を満喫していた。

「久々に暴れたわー……」

　愛香は清すが々すがしく深呼吸しながら、満足そうに胸を張った。

「しばらくは、ゆっくりできるといいな」

「どーせこの分じゃ、また近いうちにめんどいのが出てくるでしょ。もう慣れたわよ」

　そうだな。というか、そのうちどころかこういう時こそ何か出てくるし。

「だけどその前に、夏合宿はいっぱい楽しまなきゃ。週末は一緒に出かけようね、そーじ。新しい水着買いたいから」

「だから愛香さんサイズ一切変わってないんですから、セロファンテープで何冊分か繋つないだラノベの帯を巻いておけば十分ですって」

　そこでトゥアールが飛ぶと思ったのだが、愛あい香かは意外な言葉で俺たちを驚きよう愕がくさせた。

「そうでもないわよ。何か最近、ちょっと胸が大きくなった気がするのよね」

「ゲハハハハハハハハハハやめてください朝から笑いを振りまいて人の腸をねじるのは!!」

　だが、今日の愛香は譲らない。

　自分の胸が大きくなった気がすると断じて憚はばからなかった。

「ねえトゥアール。あたしの今のブラのカップ数、しっかり声に出して言って？」

「未み来らい永えい劫ごう据すえ置きＡＡＡカップでしょうが言わせないでください口にしただけで哀しくなる日本語を!!」

　愛香の静かな迫力に気け圧おされ、トゥアールが劣勢になり始める。何な故ぜか自分の胸を手で揉もんでいるのは、圧倒されまいというまじないのようなものだろうか。

「最近の愛香さんはスナック感覚でボケすぎなんですよ！　立場を再認識してください！　トゥアールちゃんが可か愛わいくボケて愛香さんが野蛮に突っ込むという国際標準規格を安易に崩さないでもらえますか!?」

「絶対大きくなってるから！　何だったら週末の買い物で下着も一緒に見に行こうよ！」

「いやああああああああああああ愛香さんと一緒に下着買いになんて行ったら罪悪感で自律神経が壊滅するうううううううううううううう!!」

　そこでようやくトゥアールを天高く吹き飛ばす愛香。

　トゥアールの定めた国際標準規格が見直される時期に来ているのかもしれない。

「ええいもう、そこまで言うのなら、わかりました！　お見せしましょう、久々に開発再開のアンチアイカシステム二〇号、アイカチチデカクナッタラバクハツスール!!」

「長い」

「愛香さんの胸がほんの少しでも成長したのを確認したら愛香さんもろとも自爆する、自律行動型スキャナーです！　希望と絶望を内包した、悪魔の発明と言っていいでしょう!!」

　途中で愛香も呆あきれていた。トゥアールオーでファイナルに達

してしまったので、ちょっと色々機能を組み合わせすぎて迷走している感があるな、アンチアイカシステム。

「自信がおありなのでしたら、この挑戦、受けますね!?」

「……いいわよ」

　よほど自信があるのだろうか、目の前で装置を起動させることを許可する愛香。

　いやあの、その自信が本物だったらお前自爆させられるんだぞ……。

『ピ、ピーンピピ……ピー……七二。ゲンジョウイジ。ドッカラソノジシンガキタンデスカ』

　大昔のインターネット接続音みたいなレトロな音を響かせてスキャンが完了すると、トゥアールの肉声を合成したらしき電子音声が無慈悲な事実を告げる。

　愛香の平和は守られ、愛香のプライドは侵略された。

「嘘うそよ絶対大きくなってるはずなのにいいいいいいいいいいいいいいいいいいい!!」

「ぐああああああああああああああああ手動で起爆させておくべきだったあああああああ!!」

　アンチアイカシステム二〇号が最初に打ち上げられてその衝撃で空中爆発した後、トゥアールは地面に埋められる。天地双方を侵略する覇王の威容を朝も早よから見せつける愛あい香か。

「そ、総そう二じ様……ちょっと身体からだの回復が追いつかないみたいです……授業の前にちょっと部室でお休みしましょう……そして回復するためには総二様の遺伝子を直接ぉあっ!!」

　俺からトゥアールを引き剝はがし、愛香は頭上でぐるんぐるんと回転させ始める。

「あんたは何でそーいっつもいっつもエロいことばっか考えてんのよ!!」

「メスがオスに発情して何が悪いんですかっ!!」

　ほんと、この二人がじゃれ合っているのを見ると、大きな戦いが終わったって実感するよ。

　校門に近付いたところで、慧え理り那なと桜さくら川がわ先生と合流する。

　イースナには珍しくメガ・ネも付き添っており、唯ゆ乃のも朝から登校。

　またロエルとリルナもしれっと遊びに来たようだった。

　今日は、夏合宿の予定をこのみんなで決めよう──。

　多くの異世界の危機だった今回……それだけ多くの戦士たちが、それぞれの世界を守って戦っている事実をあらためて実感した。

　今回は別世界の戦士たちが駆けつけてくれた形になったが、もし助けを求められたら……その時は、俺たちが駆けつけるさ。異世界の果てまでだってな。

　けれどまずは、しっかりとこの世界を守っていこう。自分たちの世界と、ツインテールを。

　これから先、ずっと。

　何度侵略者が現れようと、何度ツインテールを狙ねらおうと、俺たちは戦い続ける。

　また一つ、俺たちの人生という大きな章に区切りはついた。

　けれどそれは、ピリオドじゃない。これからも、たくさんの物語が紡つむがれていくんだ。

　守り抜いたツインテールの記憶にまた一つずつ、足跡を刻みながら。

　こういう感慨に耽ふけっている時。きっとまたエレメリアンが現れ、侵攻宣言を全世界に中継するのではないかと──ふいに空を仰あ

おいでしまった。

　今度はどんな敵だ？　どんな組織だ？　何でもいいぜ、来るなら来い。

　──などと心中で臨戦態勢を取ったものの、心構えをした時に限って何も起こらない。

　けれどその代わりに、空の青に溶け込むようにして、穏やかな光景を幻視した。

　それはここではない、別の世界。それぞれの日々を営む、異世界の人々なのかもしれない。

　俺はブレスを空にかざして陽光に煌きらめかせながら、その人たちへ言葉をかけた。

　あらゆる世界を超え、時空を超え、ともにすることができる心の輝きを──。

「君は────ツインテールが好きか？」


ツインテールは、
これからも――無限だ。

テイルギア設定資料19

TAILRED COSMO CHAIN RAIERSOL TAIL ECLIPSE

武器：コスモブレイザーブレイド
　　　テイルプロミネンスタッフ
必殺技：コスモブレイザー





ツインテールを憎み、異世界を消し去ろうとする敵へのカウンターシステムとして、異なる二つの世界、二人のツインテールがそれぞれの力を結び合うという希有な強化を果たした姿。ゆえにこの二人がまとっているのはいずれもテイルギアであり、星衣類でもある。ただ戦闘力が増大するだけではなく、ツインテールへの憎悪を浄化するための多彩な魔法のツインテールを行使できるようになった。これまでよりも女の子っぽい装いのため以前の総二ならば使いこなせず暴走する危険性もあったが、最近の総二は人前でうっかりテイルレッドに変身することを繰り返し経験値を高めていたため事なきを得た。

あとツインテールがき

　俺ツイのお祭り巻、読んでいただき感謝します！　水みず沢さわ夢ゆめです。

　物語も、あとツインテールがきも、書くべきことは全て最終一九巻で書き切らせていただきましたので、今回は大々的に愉快な延長戦をやろうという意気込みで執筆しました。

　ラノベではあまりないことかもしれませんが、特撮ヒーローシリーズでは今やお約束ともいえる本編後の戦い、そして別作品の合流。これをどうしてもやってみたいという私の夢の一つを叶かなえていただいた形です。これも、いつも応援してくださる読者の皆様のおかげです！

　この先も総そう二じたちの物語は続いていきますし、総二たちの世界と地続きの異世界で、新たな物語が紡つむがれていきます。その物語にも触れていただければ、本当に幸せです。

　担当の濱はま田だ様、最後まで素敵なイラストの春日かすが様、そして見事にふぉーくーるあふたーをツインテールバースに繋つないでくださったイラストのｂｕｎ１５０ブン様、ありがとうございます！

　ここまで俺ツイを愛してくださった、読者の皆様。次は何年後かにＶシネマ枠の外伝巻、『俺、ツインテールになります。　～テイルブルー＆テイルホワイト～（超仮題）』でお会いしましょう。
きっとブルーとホワイトがスーツ改造っぽい新形態になるぞ。

　そんな見果てぬ目標もまだあるし、今回はあくまでお祭りなので、さようならは言いません。

　それでは、ツインテール!!（万感のあいさつ）

これからも、ツインテール!!

ファンレター、作品のご感想をお待ちしています。

〈あて先〉

〒101-8001
東京都千代田区一ツ橋2-3-1
(株)小学館　第4コミック局
ガガガ文庫編集部
「水沢夢先生」係
「春日歩先生」係
「bun150先生」係

Twitterへの感想の
ツイートもお待ちしています。

ハッシュタグ

#俺ツイ感想
#ore_twi など



水沢　夢

Yume Mizusawa

北国在住のツインテール作家。今回はヒーローもののお約束、「最終回後のお話と戦い」です。お祭りとして楽しんでください！　俺ツイが始まった頃と比べると、現実の世界もどんどん変わってきています。つらい時や落ち込んだ時、人それぞれ何かの心の支えがあると思います。この愉快で熱いヒーローたちが、そんな楽しみの一つに少しでもなれていたら、本当に嬉しいです。願わくば、これから先もずっと……!!

小学館ｅＢｏｏｋｓ

俺、ツインテールになります。20

～ツインテール大戦～

２０２０年12月18日　電子書籍版発行

著　者　水沢　夢

発行人　鳥光　裕

編集人　星野博規

編　集　濱田廣幸

発行所　株式会社　小学館

〒１０１-８００１

東京都千代田区一ツ橋２-３-１

s-ebook@shogakukan.co.jp

底　本　２０２０年12月23日　初版第１刷発行

　ISBN978-4-09-451876-4

※製品版の巻末についている『ガ報』の情報は底本発行日時点のものです。


GAHO
ガ報
No. 164
GAGAGA BUNKO
ガガガ文庫
12月刊
絶賛発売中!!!
定価:本体730円+税
最大最後のツインテール祭り――開幕!!
著者コメント
今回はお祭りです！ 延長戦とバトンタッチ、紡がれ結ばれるツインテールが新たな世界を創っていく……!!
面白い×可愛い
2本攻勢!!!
第二回ツインテール部
合宿計画
長きにわたるアルティメギルとの戦いに終止符を打ち、平和を取り戻したツインテイルズたちの世界。
だがそこへ、怪しい影が忍び寄る――。
「俺ツイ」のアフターストーリーにして最大最後のツインテール祭り、開幕!!
［俺、ツインテールになります。20
～ツインテール大戦～］
著:水沢 夢　イラスト:春日 歩、bun150


昇進リオとの
別れを越えて、
イザヤ『赤道祭り』で
魅せる!!
慈愛の巨乳で乗組員達を
癒やしまくってきた皇家内親王リオが、
超巨大旗艦「村雨」艦長に就任!
艦隊司令官となった皇家第一王女イザヤと
その参謀クロトとのしばしの別れを惜しむ…
そんな暇もなく敵国ガメリアが迫る!
[プロペラオペラ3]
著:犬村小六 イラスト:雫綺一生
定価:本体640円+税
著者コメント
3巻、書くのとても大変でした。


第二章 サブキャラをラブコメ落ちにせよ！
定価:本体690円+税
初鹿野 創
イラスト 椎名くろ
現実でラブコメできないとだれが決めた？
Who decided that I can't do romantic comedy in reality?
2
著者コメント
あの大馬鹿野郎が、再び世界をラブコメにすべく蠢き始めた！ ラブコメがゲシュタルト崩壊するラブコメ第二弾
共犯者・彩乃を『幼馴染』にでっち上げ、なんとか危機を乗り切った。作り上げた友達グループとの親交も順調。だが、クラスが全然ラブコメにノッてくれない！理想のラブコメのため、耕平はサブキャラ攻略に挑む！
［現実でラブコメできないとだれが決めた？2］
著:初鹿野 創 イラスト:椎名くろ


「呪い」と「願い」。過去からの予告状！
定価：本体690円＋税
シュレディンガーの猫探し
Schrödinger no Neko-Sagashi
小林一星
Issei Kobayashi
illustration Hidari 左
2
The case has become foggy
著者コメント
舞台は学校です。高校生探偵と魔女の対決。安楽椅子探偵の登場。令和と弥生の想い。お楽しみください！
文化祭「七夕祭」を直前に控えた東高に、ある予告状が届く。暗号文になっている予告状の署名は「東高五十面相」。それは8年前に令和と弥生の姉、飛鳥が起こした、「ある事件」を模倣しているようで――!?
［シュレディンガーの猫探し2］
著：小林一星　イラスト：左


ウザカワ家庭教師よ
永遠に——!!
定価:本体600円+税
うちの家庭教師がグイグイきすぎて勉強どころじゃない!
2
ハマカズシ
KAZUSHI HAMA
イラスト あやみ
MY HOME TUTOR IS "GUI-GUI" SO I CAN'T STUDY
GAGAGA
著者コメント
家庭教師VS教育実習生の仁義なき戦いが勃発! 今度こそコロちゃんは勉強を教えてもらえるのでしょうか?
隼人のクラスに
教育実習の先生が就任した。
ふとしたことから、隼人は誰に勉強を
教わっているのかを聞かれてしまう。
だけど、あんな家庭教師を見せるわけいくか!
果たして隼人に平和な勉強時間は訪れるのか!
[うちの家庭教師(かていきょうし)がグイグイきすぎて勉強(べんきょう)どころじゃない!2]
著:ハマカズシ イラスト:あやみ



孤立してきたからこそ
たどり着いた、本当の気持ち——
定価:本体600円+税
物理的に孤立している俺の高校生活
My Highschool Life is Physically Isolated.
森田季節
Mika Pikazo
9
著者コメント
物理的に近づけない異能力者ラブコメ、最後までたどりつけました! 最後まで見届けていただければうれしいです!
愛河に告白したが振られてしまった業平。
その理由には高鷺がココロオープンで見せた【好き】が関わっていた。愛河に再告白するため、業平は高鷺の【好き】と決着をつける!
残念系能力者の青春ラブコメ、ついに完結!
[物理的に孤立している俺の高校生活9]
著:森田季節 イラスト:Mika Pikazo


TVアニメ放送記念!!
弱キャラ友崎くん
キャストインタビュー!
主要キャラを演じる皆さんに聞きました。
「演じる上で苦労したところ!」&「一番見て欲しいポイント」は、どこですか?
2021年1月8日
GAME START!
友崎文也役
佐藤　元さん
友崎文也役の佐藤元です。友崎を演じる上で意識したのは、彼の成長度合いです。例えば、友崎が少し成長して新しい会話のスキルを「覚えた」としてもそれを「使いこなせるか」は別です。一つの会話やリアクションをするだけでも姿勢や視線、心理状態などを細かく意識しました。また、成長させすぎず、成長しなさすぎず、という絶妙なラインをキープするために、自分ならこうするけど友崎ならこうするかも、と日常の思考を友崎に置き換え、人間としての成長を感じる役作りを行いました。ぜひ、不器用ながらも真っ直ぐ頑張り続ける友崎くんを愛していただけたら嬉しいです。
日南 葵役
金元寿子さん
周りから完璧と思われている葵ですが、友崎と二人の時は素の自分を見せています。そのギャップと、なぜ沢山の努力をしてそんな風に振る舞っているのか、何に心が動いているのか、原作や台本を読みながら自分なりの考えを持って演じました。あと、葵のチーズ好きな部分は可愛いポイントなので注目して見て欲しいです!
TOKYO MX:1月8日より毎週金曜日22:00～
AT-X:1月8日より毎週金曜日21:00～
【リピート放送】毎週火曜日9:00～／毎週木曜日15:00～
BS11:1月9日より毎週土曜日22:00～
※放送日時は都合により変更になる可能性がございます。
アニメHPはコチラからアクセス!
七海みなみ役
長谷川育美さん
みみみは良くも悪くも笑顔が上手なので、いつものみみみ感を出しつつも、抱えている気持ちが見え隠れする時のさじ加減に苦労しました。みみみとしてはやはり、たまちゃんへの接触!(笑)私自身映像で見られるのを特に楽しみにしているシーンです!
菊池風香役
茅野愛衣さん
原作の風香ちゃんも天使でしたが、アニメのキャラデザで動く姿も、彼女は天使でした…! そんな風香ちゃんのふわふわとした妖精のような雰囲気を壊さないように、柔らか～く優しく、演じさせて頂きました。図書室でのやりとりが可愛らしくてお気に入りなので、是非見て頂きたいです!

GAGAGA headline

ガガガ文庫作品は「本」を飛び出し原作とは異なる魅力を発信中! このコーナーはガガガのメディアミックスニュースを毎月ご紹介!

TVアニメ 弱キャラ友崎くん

1月8日よりTVアニメ放送開始!!!!!

2021年は友崎くんのアニメで年始め! 放送日時の詳細も決定! 見逃さないように今から録画予約しておこう!

TOKYO MX:1月8日より毎週金曜日22:00〜
AT-X:1月8日より毎週金曜日21:00〜
【リピート放送】毎週火曜日9:00〜／毎週木曜日15:00〜
BS11:1月9日より毎週土曜日22:00〜
※放送日時は都合により変更になる可能性がございます。


©屋久ユウキ・小学館／「弱キャラ友崎くん」製作委員会

このラノ 『このライトノベルがすごい!2021』(宝島社)ガガガ作品が1位獲得!

今年はなんと! TOP30に1位を含む6作品がランクイン! ご投票ありがとうございました!



- 『千歳くんはラムネ瓶のなか』1位
- 『弱キャラ友崎くん』7位
- 『プロペラオペラ』9位
- 『妹さえいればいい。』11位
- 『現実でラブコメできないとだれが決めた?』19位
- 『きのうの春で、君を待つ』22位

コミカライズ 現実でラブコメできないとだれが決めた?

「実現するラブコメ」早くもコミカライズ決定!

新作ながら『このラノ』文庫部門にランクインし、今勢いに乗っている異色のラブコメ『現実でラブコメできないとだれが決めた?』がついにコミカライズ! 月刊ビッグガンガン(スクウェア・エニックス)にて連載予定!

漫画:カタケイ　原作:初鹿野 創　キャラクター原案:椎名くろ



TVアニメ やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。



BD&DVD第4巻が12月30日頃発売!!!

TVアニメ「俺ガイル完」のBD&DVD第4巻が発売! 初回限定版には渡 航書き下ろし新作小説やぽんかん⑧描き下ろしスリーブなどなど豪華特典盛りだくさん!

- Blu-ray:本体:定価7800円+税、DVD:本体:定価:6800円+税
- 収録話:第7話〜第8話

【初回限定版特典】①渡 航書き下ろし新作文庫小説「やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。-新-」4
②ぽんかん⑧描き下ろしスリーブ
③田中雄一描き下ろしデジパック仕様
④特典CD
【奉仕部ラジオ&ぼっちラジオ&サウンドトラックコンプリート4】
【映像特典】江口拓也のぼっち○○○〜ぼっちで何が悪い!〜4



「友崎くん」
新作グッズ
発売中!!
GAGAGA SHOP ONLINE
『弱キャラ友崎くん』
エゴサTシャツ
エゴサは呼吸
価格:
本体3300円
(税込)
『弱キャラ友崎くん』
書影キーホルダー
セット
弱キャラ友崎くん Lv.1
屋久ユウキ
フライ
価格:
2750円
(税込)
他にもグッズ盛りだくさん!!!!!
コチラからアクセス!!
https://www.pal-shop.jp/gagagabunko/

ここガ知りたい！ ガガガ特捜部

すっかり寒くなってきたよネ〜。年末の準備で懐まで寒くなってきちゃったヨ… けど大丈夫！ 僕たちには赤い服のあの人がついている！ 怯まずガガガを買いまくろうヨ♪

質問 金欠なんで年末のラノベはサンタさん頼みなんですが、先生達は今年サンタさんに何頼むんですか？（15歳・青っぱなのトナカイ）

●物欲♪……山川 進先生☞今なら断然「PS5」でしょう。最新ガジェットには目がないので…。
猫子先生☞ちょっとお高い枕やクッションが欲しいです。欲しいのですが、自分で買おうと思うと値段程の価値があるかと悩んでしまい、なかなか手が出せないので……。
高岡杉成先生☞ティッシュとかキッチンペーパーとかの、いちいち買うのが面倒な日用品を山ほど。
●闇深い14期……零真似先生☞小説を書くための犠牲にしてしまった人たちと当時の関係性のまま三日間だけ一緒に過ごせるチケットがほしい。
犬君 雀先生☞タバコをくださ……クリスマスを消してください。
●ドリームジャンボ☆……石川博品先生☞10万ドルポンとくれというのは欲張りすぎだと思うので10万ドルポンとくれる出版社を紹介してほしい。
赤城大空先生☞眼精疲労になる可能性0のスマホやゲーム。
●夢を失った大人達……水口敬文先生☞サンタの出納帳もしくは家計簿。サンタのお金のやりくりが気になる。最近の玩具は高いし、案外赤字なんじゃないかなぁ。
shiryu先生☞毎年しっかり来るのであれば、毎年300万ほどもらいたいです。お金？ 夢がない？ むしろこれ以上に夢がある夢を教えて欲しいです。
川岸欧魚先生☞安定的な副業。

質問募集！ 郵便ハガキ、Twitterで先生方に訊いてみたいことを書いて送って下さい。あなたの質問を特捜部が徹底調査致します。
その他の先生方からの回答は、編集部ログ（GAGAGAWIRE）で見られます。

書店員さんとガガガくん

今月の書店員さん

年末年始の準備は済んでますか? お休み中はコタツとミカンとガガガでのんびりすごそうヨ! おっと、まずは書店さんへ文庫を調達しに行かなきゃネ♪

ガガガくん



GAGAGA SUPPORTER SHOP

金沢ビーンズ明文堂書店　前川賢治さん

住所:〒920-8203 石川県金沢市鞍月5丁目158　電話番号:076-239-4400
営業時間:7:00〜22:00 ※営業時間は変更となる場合がございます。 定休日:年中無休
URL:https://kanazawa-beans.com/

金沢ビーンズは県内でも随一の規模を誇る書店で、それを活かしたタイトル数をガガガっと提案しております。

前川さんのオススメ本



『塩対応(しおたいおう)の佐藤(さとう)さんが俺(おれ)にだけ甘(あま)い』

クールに見えて実は…… な佐藤さんと、地味に見えて実は…… な押尾君とのやりとりに、ぜひ悶えてください。

ガガガ文庫のラブコメをたくさん置いてくれてるネ! 僕らもラノベコーナーを埋め尽くすくらいヒット作を出せるように頑張るヨ!!



編集後記

・アニメ俺ガイルが終わり、編集部の引っ越しもし、2021年は新たな再出発の年にしたい。わくわく(☆)
・今年はほんとに、すげー年だったなー。でも、わりと悪くなかった!(湯)
・引っ越しの準備に一年かけたのに全然進んでる気がしない!(濱)
・久々の鯉釣り。知ってる? あいつらめっちゃヌメヌメしてんだぜ…。(岩)
・今年は1年が過ぎていくスピードが速かったですね。(小)
・家にネズミが出て買い置きのパスタが被害に……。干支の癖に年末に来やがって(来なくていいです)(榊)
・新人賞の審査もいよいよ大詰め! 緊張してきたぁ〜!!(米)
・幼稚園の時にアバンストラッシュはマスターしてます。(ベ)

編集部への質問もこちら!!

作家・イラストレーターへのファンレター、感想などは以下の宛先に、作者名を明記のうえ、お送りください。

〒101-8001 東京都千代田区一ツ橋2-3-1 小学館ガガガ文庫編集部○○○(作者名)宛